

Fate/is inferior than Love

葵尋人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしランサーデイルムツドではなく、中華の大英雄の髭がケイネスのサーヴァントだったらという妄想から始まった作品。

2018年1月9日を以て思う所がありタイトル変更。

(旧タイトル：Zeroランサーの人選が虚淵の発言通りだったら)

目次

第一話	召喚失敗	1
第二話	靈器再臨	12
第三話	高襟雲長	21
第四話	渴望何弥	28
第五話	夢幻桃園	39
第六話	蒼天既生	52
第七話	鬪體爆碎	61
第八話	衆道疑惑	69
第九話	作戰會議	76
幕間一	術師現出	85
第十話	青龍艷月	92
第十一話	戰鬥開始	100
幕間二	在りし日の詩	111
第十二話	虞美人草	118
第十三話	魔王勧誘	130
第十四話	黄金乱入	137
第十五話	狂乱暴風	145
第十六話	槍兵敗走	152
第十七話	戰鬥終了	161
第十八話	帰還	170
第十九話	移動要塞	180
第二十話	第七光線	188
第二十一話	黄金劇場	196
第二十二話	正体不明	205

第二十三話	相棒	213
第二十四話	絶望双六	222
第二十五話	存在証明	231
第二十六話	情報整理	239
第二十七話	方針決定	247
第二十八話	父師誤謬	256
第二十九話	酩酊道化	264
幕間三	神の微笑	272
第三十話	人間失格	281
第三十一話	胡蝶之夢	289
第三十二話	少女地獄	299
第三十三話	玉兔之詩	308
第三十四話	少年少女	316
第三十五話	崇信裁決	322
第三十六話	ぼくの、最高の友達	332
第三十七話	少年覚醒	343
第三十八話	君の名は。	353
第三十九話	主役登場	362
第四十話	希望	369
第四十一話	人間人間	380
第四十二話	結界宝具	388
第四十三話	黒黒黒黒	397

第一話 召喚失敗

「——では、始めよう、ソラウ」

水銀を使い、召喚の為の陣を書き終えるとケイネス・エルメロイ・アーチボルトは工房の壁に退屈そうに凭れる自身の婚約者に声を掛けた。

「ええ、分かったわ」

どこまでも冷淡な声色、婚約者——ソラウはケイネスに返した。

余りにも素っ気ないと言って然るべき態度。

だが、それすら見逃せるほどに、女は美しい。譬えるならば、氷で出来た薔薇の一輪。男の心を捉えた儘、思慕の儘で凍てつかせる。

併し、あらゆる分野で成功を収めたロード・エルメロイと称される魔術師はそれを認めようとは決してしない。

「……本当に上手くいくのかしら？」

「なる筈だ……恐らく、屹度」

「期待しているわ」

社交辞令めいた激励に対してすら胸が鳴り、必ずや召喚を成功させねばと奮い立った自分を心の内に見つけ乍ら、尚、である。

「陣に手を翳してくれ」

そこから目を背けるようにケイネスはソラウにそう頼みながら自身もそうした。

今から行われるのは召喚の為の術式。それも、一山いくらの靈魂を降ろすのではない。召喚するのはサーヴァント——神話や歴史に名を刻んだ英雄である。

然も、ただの英雄ではない。数多の栄光に彩られたロード・エルメロイの経歴に“武功”という名の華を添えるべく参加した東洋の小さな島国で行われる聖杯戦争という名の儀式。

それに於いて本来召喚出来る筈のない、東洋の英霊である。

だが、本来そんなことをする必要などなかった。

サーヴァントの召喚は、本来呼び出してみなければ鬼か蛇かすらも分からないブラックボックスであるが、聖遺物という英霊に縁のある

品物——身に付けていたものやその英霊の死因となったものなど——があれば、何が出来るか”を確定させることが出来る。信仰の強さ、畢竟知名度によって持ち得る力が決まるサーヴァントに在って、世界全土に名が知れ渡る大英霊、“征服王イスカンダル”の聖遺物を手に入れる算段をケイネス・エルメロイは付けていたのだ。

だが、彼の手元にそれが来ることは無かった。総ては時計塔——魔術師達の学府——の管財課の失態である。こともあろうに、聖遺物を、十二在る学部の一つを束ねる学部長たるロード・エルメロイへの届け物を一生徒に届けさせるという致命的なミスをやらかした所為だ。

そうしなければ、聖遺物が“大きな誤りを指摘してやった”劣等生のウエイバー・ベルベットに渡ることも無く、彼が小さな復讐心を抱くことも無かつただろうに、とケイネスは追懐する。

とどのつまり、聖遺物を何処かへ隠されてしまったのである……という認識をこの時ケイネスはしていた。

そこで止まれば良かったのだが、更に彼には受難が降り注ぐ。

見よ、陣に設けられた祭壇に置かれた聖遺物を。さる英雄が或る酒宴で使っていたとされる杯である。

併し、悲劇。その英雄の出自も活躍も総て中国。東洋の英霊であった。

『何でもいいから代わりの聖遺物を持ってこい』

そう彼に付き従う魔術師を叱りつけてしまった所為かそんなものが届いてしまったのだ。

だが、稀代の天才と称されるケイネスはそこで諦めはしなかった。

そもそもケイネスは此度の戦に当り、儀式を作り上げた一人である魔術師“マキリ”の契約システムをアレンジし隣に立つ婚約者にサーヴァントが留まるだけの魔力を供給させるという荒業を正立させる理論を編み出したのだ。

ならば西洋の魔術器盤を利用している為、西洋の英霊しか呼び出せないという聖杯戦争のルールにも穴をあける事が出来る筈だ。

否、屹度出来る。出来ねばならぬ。

陣は門だ。別の世界へと通じ、此処とは異なる幽世（かくりよ）へと通ずる。

そして、世界の外側に「座」に召し上げられた、英雄を今世へと引き戻し、瞼をこじ開けるのだ。

「——誓いを此処に。我は此の世総ての善となる者、我は常世総ての悪を敷く者」

それに伴い、ケイネスの肉体に刻まれた九代続く名家の魔術刻印が独自に意思を持ち詠唱を紡ぐ。

目が眩む。そして、眩んだ視界であつてもはつきり分かる程、一帯が輝き白む。

この詠唱の後にある詠唱を加えれば剣士（セイバー）、槍兵（ランサー）、弓兵（アーチャー）、騎兵（ライダー）、暗殺者（アサシン）、魔術師（キヤスター）、狂戦士（バーサーカー）の七クラスのうち狂戦士を確実に引き当てる事が出来る。

だが、それはしない。狂戦士は元々の英霊が持つステータスを底上げする代わりに、サーヴァントの理性を砕き、暴走と魔力の枯渇に因るマスターの死の危険を孕む。

——危険を冒してまで、そこまでする必要はない。

ケイネスはそう判断する。何故なら、今招かれようとしている英霊は、人の身でありながら中国全土で神として崇められ、人としてあつた時は一騎当千、否、万にも比すると謳われた大英雄だ。

狂戦士でなくとも槍兵や騎兵のクラスで充分であろうと判断する。

「——汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

一気に呪文の結びを片付ける。

注がれる魔力は「奔流」と称するほど膨大に膨れ上がり、豪！と爆音を打ち鳴らす。

こうして遂に使者は現れた。眩い光が晴れ、ケイネスが目を開けると、そこには一人の男が立っていた。

「我槍兵の器を纏いて今一度此の世に舞い戻りし者——」

男が口を開いた。

桃の花が描かれた緑色の戦袍。両肩に龍の罫の意匠を施した青銅の肩当て。腰まで伸びた黒髪とそれに匹敵するほど長く蓄えられた髭。見つめられているだけで薫風を感じるような優美な面差し。天を衝くような長軀と服の上からでも感ぜられるほど鍛え抜かれた肉体。

大凡その英霊に抱くようなイメージを目の前に現れたランサーは全て持ち合わせ、それだけなのに、ケイネスとソラウの瞳を奪って離さない。

「故、我は問う。汝が我を招きし者か、と——」

言葉を伝える為に振動する空気そのものが光って見えてしまうようなく通る声で紡がれたその問いに、ケイネスは直ぐに応えることが出来なかった。

圧倒的なその存在感に言葉を失っていたのだ。重い、あまりにも重すぎる沈黙が流れる。

だが——

「H A H A H A！ そう鯨ばるんじゃないよ！ R e l a x（ルイラアックス）、R e l a x（ルイラアックス）！」

それは齎したであろう本人に依って意外にも崩された。

急に気でも違えたような調子でケイネスの肩をバシバシと叩き始めたのだ。

それも顔を恵比寿のように破顔させて。

「はい？」

何かの間違いだと思ったケイネスは、誰に聞くでもなく自答した。

「おお！ 令呪あるじゃん、令呪！ なんだ、君がボクのこと読んだマスターじゃんか。もー早く言っつてよね！ ボク、焦っちゃうじゃんか！」

それをよそに、ランサーはケイネスの手を取って、そこに刻まれた三画の赤黒い痣——令呪を確認して、へらへらと力の抜けた笑みを浮かべた。

最早成すが儘。脳が今起こっていることを認識し切れてすらいない。

傍で見ているソラウもただただ唾然としている。

最早、ケイネスは自分が召喚した者を胡乱じ——

「あの、その、なんだ。つかぬ事を窺うが」

とランサーに問い掛けていた。

「何？」

「貴殿の真名は、関羽雲長で間違いはないのか？」

関羽雲長。

時は三世紀——中国が魏、呉、蜀の三国に別れていた俗に“三国時代”、その時代でも指折りの知名度と武勇を誇る猛将である。

中国に住む人間なら誰でも知っている——その誰からも信頼されたとされる人望と受けた恩を必ず返す義理堅さから商業神として崇められてすらいる大英雄中の大英雄である。

聖杯戦争が行われる日本であつてすら恐らくその名を知らぬ者はおらず、その名と共に、美髯公と称された艶やかな長い髭と青龍偃月刀と呼ばれる大薙刀を携えたその姿を夢想すらしよう。

だからこそ、ケイネスは強く断言する。目の前にいる酔狂でちやらなこの男が、関羽雲長である筈がないと。

だが——

「それ以外に見えるようだったら、キミは両親を呪うべきだ。ちゃんと生んでくれなかった証拠だから」

現実是非情である。

にっこりと燦爛たる笑みを湛えて、ランサーは自分こそが関羽雲長だと示す。

ケイネスにとって無礼に過ぎる毒と共に。

宣言されてしまったては、最早疑う余地などない。

しかも、彼の発言を裏付ける証拠をよりにもよつてケイネス自身で持つてしまつているのだ。

それは英霊と契約し、マスターになった者に与えられる“サーヴァントのステータス”を読み取る透視能力である。

三騎士と呼ばれる、セイバー、ランサー、アーチャーはとりわけ高いステータスを持つサーヴァントであるがその三騎士の一角を担う

関羽はその中であつてすら「高い」と言い切るより他ない力を持つていた。

「そうか。うん、そうか……そう……か……」

覆し難い事実はケイネスの頭に酷い鈍痛を与える。

最早、聖杯戦争など忘れてとつとと自室に戻り、ベッドで今すぐ横になることすら視野に入る程に。

「うおう！」

だが、そんなケイネスの心の悲鳴はきつとランサーに届いてなどい
なかつた。

突如、ランサーは目を丸くし、素っ頓狂な叫び声を上げる。

「今度はなんだ？」

頭を押さえ乍ら、ケイネスはウンザリとした声色で問う。

だが、すぐに頭痛は吹き飛ぶことになった。

ランサーの見つめる先にいたのはソラウ。彼女を映すその瞳は
うっとりとして蕩けている。

「美しい……」

その言葉は讃辞。だが、辺りには不穏な空気が漂う。

何かを察してか、ソラウは恐る恐ると後退る。

併し――

「なんと美しい人だ。ボクはこんなに美しい人を見たことがない！」

ソラウの退路にランサーが既に回り込んでいたのだ！

「どうか受け取って欲しい。ボクの気持ちだ」

「え、あ、ちよ……」

ケイネスは次の瞬間には目を白黒させていた。

さて、一体何が起こったのか。ランサーはまず、ソラウの白い手を
取った。そして、次に彼女の顎を持ち上げ、顔を寄せた。

次の瞬間にはランサーの唇がソラウに触れていたのは言うまでも
ないだろう。

誰がどこからどう見ても、疑いようもなく、「接吻」である。

――ブチリ。

果たして、ケイネスは自分の中に、何かが千切れた音を感じ取った

だろうか？

否、屹度それは在り得ないだろう。

その光景を、愛する女の唇が奪われたその瞬間を目の当たりにしたその刹那には、ケイネスの顔は怒りに歪み、考える間もなく、目は右手の甲に映っていたのだから。

「総ての令呪を以て命ずる！ 自害——」

「ちよちよちよちよちよ!? タンマ、タンマ、タンマ、タンマアアア！」

予想だにせぬ——但し、ケイネスにとっては至極真つ当な——令呪の発動にランサーは慌てて彼の手を取り、そして右拳を彼の口の中に突っ込んで言い掛けられていた言葉を無理矢理止めた。

令呪とはマスターがサーヴァントに対して三回のみ使える “絶対命令権” である。その秘めたる魔力は凄まじく、“ここに行け” と命ずれば時空間を超越してその場へとサーヴァントは転移し、“次の攻撃に全霊を尽くせ” とすれば、サーヴァントが持ち得る力の総てで以て攻撃を仕掛けることになる。

無論、“自害せよ” という命令すら絶対である。

ランサーはクラス特典として持つ “対魔力” というスキルを高いランクで保有している。よって一画分命令くらいならば耐えられるが——それが三画総て費やした命令であれば真正銘の “絶対” と化するのだ。

……だが、屹度、恐らくは、聖杯戦争の歴史のどこを見ようと、こんな寸劇めいた令呪の遣り取りも、此処まで強引に命令を止めた事例も存在しはしないだろう。

「ふぐ、ふぐ(ぐぐ)っ！」

「ああ、コラー！ 痛い、痛い、痛い！ 噛むなっばさー！」

ランサーの手に激痛が走り涙目となる。

耐久力……サーヴァントの肉体の頑丈さを示す値だがランサーのそれは高いといえるランクであった。併し、それであっても尚、痛い。どんな顎力をしているんだとぞつと顔を蒼白させる。

——というかどうかしよう、コレ。マジで痛い。首切られた時くらい痛い。泣きそう。

悩んだ挙句、ランサーは漸く、サーヴァントが霊体化出来るという初歩の初歩に至り、如何にか難を逃れた。

「はあ、はあ、はあ……」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

気が付けばお互い肩で息をしていた。

「ひひゆう……令呪を以て——」

「ヤメロオ！　ねえ、マジでヤメテ！　このままだと無限ループになって埒開かなくなるから！　落ち着こう？　ねえ、落ち着こうよ！

Please(プリーズ)　cool(クール)　down(ダウン)！」

ランサーの言葉で漸く、ケイネスは我に返った。

「貴様！　この痴れ者めが！　私の婚約者に、このケイネス・エルメロイの婚約者に何という狼藉！　無礼極まるぞ！」

「いやいやいや！　知らなかったんだってばホントに！　ほら、なんかアレ！　ほらアレじゃん！　こういう所に連れてくる女の子だからさ！　普通は弟子とか部下とか侍女とかさ！　そんな感じのパティーンだと思っじゃん？」

「知らなかったで済まされると思うか！」

「ああもう！　聖杯取って来るから！　絶対取って来るから！　マジで機嫌治して！」

そうして、ランサーはこの通りと、平伏した。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトという男は尊大であった。

ランサーは中国史に名だたる大英雄中の大英雄。然も、皇帝に名を連ねる劉備玄德の義弟でもあり最も信頼された誉れ高き男であった。

無礼狼藉を働いたという前提があるにしろ、そんな男が自分の前に伏しているという状況。

サーヴァントなどたかが使い魔である——ということすら差し引いても悪い気はしなかった。

「フン。サーヴァント風情が。聖杯を取ってくるなど当然であろうよ」

吐いて出た言葉こそ、これであるが。

「マジっすか？　ボクにチャンスを与えるんですか？」

「ああ、くれてやる。精々、贖罪に身を窶し給え」

「有難う御座います！」

ランサーは此の儘床が掘れてしまうのではないかと疑われかねない程、もつと深く頭を下げた。

「あ、ところでふと気になったんですが。ボクってなんで聖杯戦争に呼ばれてるんですかね？　ボクの中の知識だと、東洋の英霊は原則呼ばれないってことになつとるのですが？」

深く下げていた頭を上げ、ケイネスを見つめる瞳は疑問に溢れ返っていた。

サーヴァントは聖杯から様々な知識を与えられる。現在の世界がどういったものであるか。魔術師という存在。そして、聖杯戦争自体のシステムに関することまで。

ランサーはそれによって自分の召喚がイレギュラーであることに気が付いたのである。

「召喚のシステムを解析し、抜け穴を見つけ出した……それだけだが？」

何気なく返って来た答えに、ランサーは口を半開きにした儘固まっていた。

「お、おい。どうしたランサー」

突然のことにケイネスは僅かに不安を露わにする。すると、

「素晴らしい、Great(ゴウレイト)！　Genius(ツイーニャス)！」

ランサーは勢いよく立ち上がり、力強くケイネスの手を取った。

「そうだったのか！　ボクが再びの生を得、この瞬間にも息つき、しかも万能の願望器にまで挑ませていただける！　それは総て君のお蔭だったんだね！」

「あ、ああ……」

興奮するランサーに、ケイネスは圧倒される。

というより、反応に窮した。

確かにランサーの言う通りなのであるが、此処まではつきり言われると気恥ずかしいものがあつたのだ。

「ボクは感動している！ 君の溢れんばかりの才に！」

敢えて口にされるまでもなく、それはケイネスにも理解出来た。

人の心の機微には疎いと自覚している彼であつても、ランサーの言葉には嘘偽りがなく、ことくらいは。

だからこそ、どう返して良いか分からなかつた。

「どうせならば女の子に生まれたかつた！ そうであつたならば、御婦人の面前という今この瞬間であつても泣きはらすことが出来ただろうに！ 嗚呼——この刹那だけは、ボクに男の肉を与えた父と母とを本気で恨みたい！」

ケイネスの手を離し、ランサーは拳を握り、悔し気に顔を歪めた。讃辞には慣れてる。天才という言葉も聞き慣れてる。

だが、ケイネス・エルメロイの人生に於いて、“此処まで”は無かつた。

蚊帳の外に放り出されたソラウも先ほどの接吻のことなど忘れるほどである。

それだけの衝撃であつた。

「お、お褒めに預かり恐悦至極」

ソラウはその言葉に、ぎよつと目を見開いた。

どんなに褒められようと至極当然として受け止めるケイネスの“感謝の言葉”を初めて聞いたからだ。

……大変に気持ち悪い、という感想を抱いた。

併し、ランサーはそれに対し満足そうな顔でうんうんと何度も頷く。

「うん、恐悦至極、確かに戴いたぜ、マスター……確かケイネス・エルメロイと云つたね。君の芳名に誓つて、生きてた頃以上の武者働き、約束させて貰うよ。Trust (チユルアスト) me (ムウイ)！」
そして、白い歯をニツと見せつけ、グツとサムズアップで誓いを立てた。

第二話 靈器再臨

如何してこうなった？

ランサーを召喚してからケイネスの思考を支配していたのはその一言であつた。

完璧な召喚式。最強最高の英霊。総て総て上手いった。そしてその喜びの儘、明日を迎え、日本へと出立していた筈だった。

併し、実際ランサーを召喚した後日、一体自分は、いや自分達は何をしているだろうか？

ケイネスは自らを取り巻く現状について整理する。

午前の陽だまりに優しく包まれるアーチボルト邸の中庭にいる。

九代続く名門に相応しい美しい青薔薇やラベンダー、ペチュニアが咲き乱れるイングリッシュガーデンだ。使用人に毎日手入れさせている為に、雑草の一本、害虫の一匹、病気の一つ、枯れの一片すらない完璧を誇る。

そこに設けられたアイビーヘデラに彩られた楓材（メイプル）で出来た四阿（ガゼボ）に集まるのは、ケイネスとソラウに、ランサー、そしてメイドやバトラーが数人である。

さてそれでは今から何が行われるか。

「ではこれよりランサー様の断髪式ならぬ断髯式を執り行いたく思います」

女中長が妙に神妙な顔つきで告げた。

「Yeah（イアア）！ ドンドンパフパフ、ドンドンパフパフ！」

エプロンを掛け、長椅子に腰かけるランサーは気が違ったような昂りではやし立てた。

そんなランサーの振る舞いを見てケイネスは胃痛を覚える。

これから何かある度、この素っ頓狂に付き合わなければならぬと思うと先が思いやられる。

尤も、今回に関して言えば彼を有頂天にってしまったのはケイネスに原因があるのだが。

ランサーの髭を剃るべきだと提案したのはケイネスである。とい

うのも、真名が割れる可能性が大きいからだ。

関羽雲長の異名的美髯公というのは、「美しい髭を持つ者」という意味である。蜀の軍師、諸葛孔明は彼の髭を褒め称えたというし、多く人が彼に抱くイメージも「長い髭を蓄えた大男」であろう。

見た目だけで真名の露呈があるというのは問題である。語り継がれる英雄の逸話にはその最後や弱点が鮮明に記録されている場合も多い。

例えばギリシヤの大英雄アキレウスは踵が弱点であったし、ケルト神話に名だたる悪女メイヴはチーズが頭に直撃して死に絶えたという。

詰り、真名が割れる〓そのサーヴァントを打倒することが可能であるということでもあるのだ。

件の関羽の場合その最期は斬首であることから「処刑」という概念が弱点になるかもしれないし、財務の神としての逸話も大きい為、対神宝具ないしは礼装も危険であろう。

そうケイネスから説明されランサーは酷く激昂した。自慢の髭を切るなど、彼にとっては主君たる劉備を愚弄されることに等しいからだ――

『なるほど、なるほど！ 確かにボクといえば髭。寧ろ関羽雲長の宝具といえは髭だろうって感じだしね！ 剃るっていうのは全然ありだ！』

——ということにはなかった。

否、寧ろケイネスのその提案を素晴らしいと激しく褒め称え、彼を気恥ずかしさで殺しかけていた。

余りにあっさり承諾され、流石に驚きを隠せなかったケイネスがランサーに髭に拘りはないのかと訊ねた。

すると、

『ああ、コレ、別に拘りがあったわけじゃないんだ。玄德ニーサンと会う前にね、まあ――色々あって牢屋にぶち込まれてた時期があって。それが結構長かったもんでね、そしたら伸び放題になっちゃってさ。剃るのもめんどかったし、皆褒めるもんだから、「あ、コレアレだわ。

剃れない流れのヤツだわ”って感じで』

と、人々から持て囃された髭の成り立ちについて語った。

畢竟するに、成り行きである。歴史の真など、存外に拍子抜けするようなものであるのかもしれないと、ケイネスはこの時そんな感慨を抱いた。

「H A H A H A！ まさかこの髭を剃る日が来るなんて思わなかったぜ！ 堪んねえな、この巷はー！」

……同時に、髭を剃るだけで無駄に調子を上げている目の前のランサーは英霊としての自覚を持つべきだと思った。

加えて関羽雲長の宝具が髭だと考える人間など此の世にいないとも。いるとすれば、相当に愚鈍といえるだろう。

「さあ、さあ美しいお嬢さん。その白く細い手で以て、バツサリやつちやって下さいな」

剃刀を握る女中長に向かってランサーは澆刺と笑い掛ける。

瞬間、女中長は赤面した。

「こ、こんな地味な女に向かって美しいだなんて。それに私（わたくし）、もうお嬢さんなんて歳でも……」

「自分を卑下するもんじゃないよ、お嬢さん。君は瑞々しく、そしてこの三国一の大英雄と謳われたボクが見惚れてしまう程に美しい。傾城とまで言って良いさ」

「そんな！ ああ……どうしましょう……困ります、困りますわ……」

四十路に差し掛かろうかという年齢の女中長と桃色の固有結界を展開するランサーにケイネスは辟易とした。

「女中長、困っていないでさっさとしてくれ。それにこのランサーは誰に対してもこうだ。真に受けない方が良い」

「ちよ!? 酷くない、Master（ムアスター）!? なんでボクがナインパ野郎みたいな扱いになるんだよう！」

「あの戯れ、軟派でなくてなんと言うんだ」

ケイネスに召喚時のいざこぎを指摘され、ランサーはペロつと舌を出した。

此処でケイネスは確信した。否、確信はなくとも、経験則でそんな

気がしていた。

ところでケイネスは、今まで魔術師として多くの功績を残し、名家の生まれでもある為、それに裏打ちされ自信家でもある。併し、そんな彼であつても、自分の見目がそこまででないことを心の何処かでは自覚している。

故に、だ。手前の見目を武器にするような男を最も毛嫌いしていた。

だから分かる。そういう男が近くに居れば。

そして、ランサーはケイネスの中では“そういった男”であつた。

——自害させるべきだつたか。

ランサーが水だとすれば、自分は水銀。故に混じり合うことはない。ならば、これから相容れることは出来ないだろう。

本当は聖遺物もシャルルマーニュ十二勇士のアストルフオのものなのではないかという疑いすら出ている。このランサーの振る舞いは寧ろ“理性が蒸発している”と評されるかの英雄に対する心象と重なるからだ。

考えれば考える程、頭痛がしてきたケイネスは、

「……さつさとランサーの髭を剃ってくれ」

それを誤魔化す様に女中長を促した。

“序でにランサーを何処か遠いところに隠してくれ”と出掛かった懇願をなんとか呑み込んで。

+

「まあ」

「あらあら」

ソラウや女中長、そして周りの近習達は髭を剃り終えたランサーの顔を見て声を上げた。

存外に若々しく、優美ながらに野性味を感じさせる顔立ちに驚嘆していた——のではない。

驚きが巻き上がったのは次の瞬間であつた。

「おろろ？」

剃り上げた傍からランサーの髭が伸び始めたのだ。

血色の良い褐色の肌は途端に無精髭まみれになり、そして瞬く間の内に胸を超え、腰の高さほどの位置に降りていた。

「どういうことなの？」

ソラウは困惑していた。

魔道の名門に生まれた彼女にしてみても、この現象は不可解であった。

「ふむ、これは……」

ケイネスも感慨深げに顎に手を当てる。

魔術師とはそもそも、*「根源」*と呼ばれる此の世の総ての始まりを解明する為に、神秘を探求する学究である。故に魔術師には並べて、大か小かの違いこそあれど目の前で起こった事象について考察しようとする性を持つ。

ケイネスにとって目の前でランサーに起こった現象は非常に興味深いものであった。

一体どんな可能性が考えられるのか？

そう熟考に入りかけていたその時、

「いやあ。なんかこれ、ボクに対する *i m a g e* (イムエージ) に引っ張られてるみたいだね。ボクに髭が無いことを世界が否定してる的なヤツ」

ランサーがあっさりと答えを齎してしまった。

「……貴様、察するということ覚えろと言われたことはないか？」

「いや、無いけど」

「なら私が直々に指摘しよう。貴様は、場の空気を読むことを覚えるべきだ」

「善処しよう」

ランサーの笑みからは決してその意気込みは伝わってこない。

今後この素っ頓狂は続くだろう。それを思い、ケイネスは苦虫を噛み潰したような顔をした。

「でも、これどうしようね？ 髭の英霊のまんまいく？」

「髭の英霊って……どんな表現よ、それ……」

ケイネスが婚約者の、所謂「ツツコミ」を聞いた瞬間であった。
青天の霹靂である。

「私的には髭を蓄えた殿方は素敵だと思うので、そのまま置いて欲しいのですが……」

「女中長は口を慎みたまえ」

話がこじれかねないのでケイネスは頬を赤らめてフェティシズムを熱く叫ぶ女中長を窘めた。

暫し考え込んだ後――

「仕方ない、私がやろう」

ケイネスは女中長から剃刀を受け取りながら宣言した。

「うい？ Master (ムアスター)、出来るのかい？」

「私を誰だと思っている？ 降霊科(ユリフィス)の一級講師だぞ。この程度、私の霊媒治療術であればなんともなる」

そう豪語するケイネスはランサーの顎に刃を当て、試しにまず数cm剃ってみる。

ケイネスは髭が薄く、髭を剃るという習慣がない為に、最初こそ少しばかりの遣り辛さを感じるが、すぐに慣れてしまった。

数多くの魔術系統に精通するケイネスであるがその中でも錬金術を得意としており、然も趣味で絵画や彫刻もやっている為、手先は器用な方なのである。

暫くケイネスが長い髭と格闘した後、

「うん。新しいボク、debut (デヴュー) だ！」

ランサーはつつがなく新生を果たし、勢いよく座席から立ち上がって景気の良いガッツポーズをした。

何故、此処まで盛り上がれるのか、ケイネスには全く理解が及ばなかった。

「いや……でも、これじゃあまだ新鮮味に欠けるなあ……」

然う悩まし気な顔をしてランサーは腕組をした。そして、うんうん唸ると暫くして、手をぽんと打った。

「お嬢さん、お嬢さん。紐とかないかな？ 髪を結う紐」

「私が使っているものなら……」

女中長はそう言って、肩程の長さには伸びた亜麻色の髪を縛っていた自分の紐をランサーに渡した。

「ありがとね」

と、謝すや否や、ランサーは女中長の唇に自分の唇を重ねた。

刹那、何かが爆裂したような音がして、辺りに熱気が漂った。

何事か。

この場にいる誰しもがそんな疑問を抱く間もなく、女中長は気を絶して倒れていた。

「メイド長オオオ!?!」

「メイド長が、死んでおられるぞオオオ!?!」

「急いで医務室に連れていきましよう」

メイドやバトラーがてんやわんや。

喧しいことこの上ないほど、大騒ぎで屋敷の中へと女中長を担ぎ込んでいった。

「ケイネス、あれ、大丈夫なの?」

「多分駄目だろう……」

頭を押さえ乍らケイネスはソラウに答えた。まさか、長年アーチボルト家に仕えてくれていた女中にこんな面があるとは思っても見なかったからだ。

だが、今の問題はランサーであろう。

どういった意図があるのかケイネスにはまるで掴めなかったが、纏っていた戦袍の上を肌蹴させ袖を腰の位置で巻きつけ、長い髪を頭頂で結い俗に“ポニーテール”と呼ばれるヘアースタイルになっていたのだ。

そして、そこで気が付いたことが三つ。

まず一つ目、意外に線が細いということ。無論、袖の無い鎖帷子の奥には、鍛え抜かれ引き締まった筋肉がある。だが、一般に関羽雲長に対してイメージするような“大柄”という印象は受けなかった。背もよく見ればケイネスよりも少し高い程度である。

九尺……ランサーが生きていた時代の寸法でいけば二m超と言われる一般的に知られる関羽の身長には程遠い。

次に気が付いたことは、

「というより、ランサー。貴方、奇麗な髪してるわね。本当は美髯公じゃなくて美髪公って呼ばれてたんじゃないかってくらい。……羨ましい」

「そうかな？」

ソラウが指摘した通りである。

腰まで伸びた髪は艶やかでいて、とても戦場を駆け抜けていた英傑のそれではなかった。髪を命とする女という生き物ならば、屹度誰もが羨んでしまうような、傷みも汚れも一つない。例えるならば、ブラックオニキスだろうか？

そして、最後の一つ。

見目の麗しき。優し気でいながら力強い眼差し、すつと通った鼻立ち、きめ細やかで傷やくすみのない肌。武人らしさは感じられない。彼の見目を顕す名状は、貴公子や王子といった単語だろう。

故に、ケイネスは懸念を抱く。

そんな男に口づけをされるといふ事実は女にとって何か感じ入るものがあるのではないかと。女中長のように卒倒することはなからうが、心象には何か影響を与えるのではないか。

要するに、自分の婚約者の心をランサーに奪われないかと妬心しているのである。

「そんなことより、新しい自分誕生記念にお酒飲みたい。Peach liqueur（ペイチ ルウィカー）とか。持ってきて、ソラウちゃん」

「ちゃんはやめなさい。あと、ピーチリキュールもないし、私に頼まないで」

このやり取りを見る限りに於いてはその懸念は微塵も感じられないのだが。

——しかし、主のパートナーに対してすらこの不敬……。よく曹操に殺されなかったものだ。

ケイネスは呆れかえるばかりだった。

と、そんなケイネスの肩に腕が回される。

「……なんのつもりだ？」

言うまでもなくランサーである。

彼の逆側ではソラウが同じ状態になり仏頂面をしている。

「一緒に街に繰り出そうぜ、マスター。ソラウさんも一緒にサ」

「理由を聞かせて貰おうか？」

「お酒飲みたい、お洋服欲しい、現代ってヤツを見てみたい。OK
(ブーケー)？」

無論、良いわけがなかった。

その旨を伝えようとしたが、

「よし決まりだ。行こう、すぐ行こう、Let's (ルエツツ) id
le (イヤイドル) away (ワウエイ)！」

ランサーは二人を羽交い絞めにしたまま街へと繰り出してしまっ
た。

第三話 高襟雲長

リバティ。

日本にも支店を広げるロンドンの名だたるデパートの一つである。イギリス国内の名だたるブランドやデザイナーの逸品が揃っており、若者やセレブが特に多く集まる。

ところで、デパートと言われ、日本人が想像するのは屹度、鉄筋コンクリートの無味乾燥な佇まいであろうか。

併し、ロンドンに鎮座するこれはそれとは一線を画する。クラシカルな意匠をしており、一見すると観光客向けに保全された十八世紀ごろの建築物のようにも映る——「お洒落」という言葉にこと敏感な若者の心を掴んで離さないそんな場所なのだ。

ランサーがケイネスとソラウを引つ張って遣つて来たのはそこであった。

今日は休日。当然のように若者たちが行き交い活気に満ち満ちていた。

そんな中をランサーは肩で風を切るように堂々と、鼻歌まで歌いながら歩いていく。一方で、彼の後ろを歩くケイネスとソラウは身内の葬式に参列したかのような落ち込みようだった。

それも其の筈だ。先ほどまで町中を肩組した儘歩かされていたのである。なんとか抵抗を試みる二人であったがサーヴァントの腕力に敵う是非もある筈なく。最早、令呪を使う以外にランサーを止める手立てはなく、それであつても二画くらいならば振り切つて街へと繰り出しかねないほどの勢いであつた為二人は、諦めた。

気が済むまで現代を謳歌させてやろうと——。そして、いい加減街征く人々の目が恥ずかしいから自分で歩こうと——。

そして、現在に至る。

だが全てを諦めたりリバティでも三人に降り注ぐ視線の量は変わらなかつた。

「いやあ、なんかみんなこつちを見てるよ？ 主つてモテるんだねえ」
「貴様を見てるんだ！ それにモテてるのでは断じてない！ 奇異の

目だ、奇異の目！」

いくら「新しい自分」に生まれ変わろうとも、ランサーの服装は古代中華の戦場を疾走するそれである。

一九九五年のイギリスにはまるで似つかわしくないと切り切るより他ない。

「でも、貴方の服装も相当よ？」

「うっ!？」

隣を歩くソラウのじつとりとした温い眼差しに、ケイネスは呻いた。

だが、ソラウの指摘も尤もであった。魔術師としてのケイネスの正装は、群青色の軍服のようなものである。無論、この色は現在のイギリスの陸・海・空どの軍隊の色にも当てはまらない。

軍人が仕事を抜けて遊びに来た、では到底通らないわけである。

この中で唯一、現代に溶け込んでいるのは、一見しただけで素人目にも上等だということが分かる白のブラウスと五分丈の朱色のパンツ、そして胸元を彩る同色のスカートで着飾るソラウだけであった。

そのソラウにしても他の二人が胡乱な恰好をしている所為で、同じく胡乱に映るといふ風評被害に見舞われるわけだが。

故に、彼女は今、実以て不機嫌だった。

「……ランサー、どうせ色々回るなら最初に服を買いなさい。ケイネス、貴方もよ」

「はあーい」

「分かった」

強い語気に対してランサーは明るく返す一方、ケイネスの声は弱弱しかった。

婚約者である段階から既に結婚後の生活の優位が何方になるのか如実に物語っている。

†

さて、デパートという以上、服を買いえる店など吐いて捨てるほどあるわけであるが、一行が選んだのはどちらかといえばカジュアルに

寄ったラインナップの店であった。

何故そうなったかと云えばランサーたつての希望である。

曰く、〃兄さんや益徳と出会った頃の気持ちに戻りたい〃だとか。
「どうだろう？ 似合ってるかな？」

会計を済ませ着替え終わったランサーは同じ店の中で服を見ていたソラウに声を掛けた。

「え？ そうね……」

反応し、頭頂からつま先まで、まじまじとランサーを見た。

さて、幾つか店を回りランサーが選んだのはグレーのフード付きトレーナーと黒のデニムジャケット、モスグリーンのチノパン、そしてハイカットのスニーカーであった。

「悪くないんじゃないかしら？」

全体的に細身なシルエットであり、背が高く線が細いランサーによく似あっていた。

ソラウはほっと息を吐いていた。ランサーが最初に自分で服を選ばれたと言った時。正直心配していた。〃滅法〃という言葉を具現化したようなランサーのことだ。屹度、服装の選び方まで理解不能なものではないかと。

だが、存外までも——否、寧ろセンスがあるとさえ言っても良かった。

「でも、よくもまあ違和感なく現代に溶け込める服を選べるモノね。それも聖杯の知識？」

「いやあ、そこまで聖杯も万能じゃあないよ」

へらへらと緩み切った笑みをランサーは絶やさない。

「ここ通る時、いくらでも〃Modèr（ムオデェル）〃があつたでしょう？ それを参考にしたんだよ」

すれ違う若者のファッションをしっかりと観察していたということである。

ソラウの目にはランサーは浮かれ切ってはしゃいでいたようにしか見えなかったが、その一方では辺りに注意を払っていたというわけだ。

凄まじい洞察力である——完全に無駄遣いであるが。

「ところでソラウちゃん、ソラウちゃん。Master (ムアスター) は如何したの?」

「ちゃん付けはやめなさいと言った筈よ。……ケイネスならまだ服を選んでいるわ。ほら、あそこ」

ソラウは視線で以て、彼の居場所を示した。

その先ではケイネスが百面相をしながら、服を手にとって唸り、また元の場所に戻すという行動を繰り返していた。

「なあ、ソラウさんや。彼はひよつとして優柔不断なのかい? だとすると、I、m (ヤアイム) b o t h e r e d (ヴァザアド)……困っちゃうぜ」

「困る? 如何して?」

「指揮官が幾ら最善策を取ってくれても、あれでもないこれでもない」と遣っているのそれだったらその間にも兵卒はくたばってるよ。動かせる兵がなくて実行出来なきや作戦もクソもありやしないだろう? だったら、悪手であろうと即決の方が良い。奮戦ぶりで行くならもなんとかなるしき。特にボクの場合は」

そう語るランサーの顔つきを見て、ソラウは全身の血の気が引くのを感じた。

召喚時から向こう初めて見せる戦士の面差し。声色にも刺すような冷たさが籠っている。

現世を満喫している今この瞬間にも彼の目は迫る戦場が映っているのだ。

「貴方の心配は分かったわ。でもケイネスのあれは優柔不断とかではないから。寧ろ即決は得意中の得意と言っているわ。安心なさい」

「じゃあ、アレはなんなの?」

ランサーは失礼にも主を指差した。

最早、この男がこういう人間——基、こういうサーヴァントだということが分かってきた為、ソラウはそれを窘めようとはしない。

代わりに思い切り笑顔を作って、

「単にファクションに疎いだけ」

と答えた。

「なるへそ」

これ以上なく納得のいく理由であった。

「まあ、ケイネスに限らず、名家と言われるような生まれの魔術師は大抵そうよ。私の兄なんてそれは酷いもの」

「あ、ソラウさんも魔術師の家の生まれなのね」

なんとなく、そうなのではないかと、ランサーは想像だけはしていた。

「そうね。ソフィア家……まあ、名家というかそういう生まれにはなるのかしら」

「ひよつとしてあそこの主とは政略結婚ってヤツかい？」

「貴方、本当に言葉を選ぶってことを知らないのね。私が劉備なら首を撥ねてるわよ」

「玄德ニーサンがそういう人じゃなかったからどっこい生きてたんだけどね。実際首撥ねたのは孫権のおじさんだし」

H A H A H A と関羽は磊落な笑い声を上げる。

「……まあでも、ボクの言ったことは E x a c t l y (ウイグザクチュリー) だろう？」

「厭な性格してるわね、貴方。まあ、実際その通りだけれど」

「だから主には不満がある？」

「ないわよ。結婚にも納得している。だからドロドロの愛憎劇とかは期待しないことね」

「ちよ!? 酷くない!? ボク、そんなの期待するようないやツに見えるの?!」

「正直胡散臭くはあるわ」

溢れんばかりのスマイルで言い切るソラウにランサーは項垂れる。

「マジかあ…… Shock (シヨオク) だわあ……」

ぶつぶつと叫ぶ一方で更に一言、

「……全く、厭な温度差の Couple (クアポー) だぜ」

ランサーは小声で独り言っ。

「何か言った？」

「イヤ、何も。それより問題はMaster（ムアスター）だよ、Master（ムアスター）」

ランサーは顔を上げると、ソラウに吐いて出てしまった言葉を、その意味を詮索されないように話題をケイネスへと移した。

まだ服選びを続けている。ところで手に持っているのは、黄土色のネルシャツである。着こなすには困ること極まる一品であるが、それを買う気かとランサーは小一時間問い詰めたい思いにも駆られている。

「あれはボクから見ても悲惨だよ。もう、ソラウさんが選んで上げてよ。婚約者でしよう？」

「無理ね。前にもそうしようと思つて断られたもの」

ソラウの言葉にランサーははあと溜息を吐いた。

理由はなんとなく辺りが付いた。恐らく自分に出来ないことがあつてはならないという使命感であろう、と。

西洋圏の英霊に限定される今回の聖杯戦争に関羽雲長（白分）を呼ぶだけの技量を持った魔術師であるケイネスのことだ。屹度天才だと言われ続け、それが当たり前であることに依つて起こる呪縛。

それは屹度、万人が詰まらない、小さいと思うことに対してすら向かう。

今この時のように。

もう一度、はあと溜息を吐くとランサーは

「主いー、主い」

と呼びかけながら近づき、肩を回した。

「なんだ？」

「はいこれ」

そういつてランサーが持ってきたのはワンポイント董の柄が刻まれた白いVネックのTシャツと、グレーのテラードジャケット、ターコイズカラーの細身のパンツであった。

「……サーヴァント風情が私を馬鹿にしているのか。服くらい自分で」

「選べるごとくくらいは分かっているさ。ボクが言いたいのはそのう

ことじやあない」

ランサーの言葉にケイネスは洩面を浮かべていた。

「この一式ボクの見立てではお洒落最上級者の装備と見た。君ならば必ず着こなせる」

「ハッ、下らない」

ランサーの言葉を一笑に付し、ケイネスは再び洋服選びに戻ろうとするのだが、

「逃げる気か」

その一言で彼の手は止まる。

「我が主、ケイネス・エルメロイともあろうものが。臆したのか？ 着こなせないかもという恐怖の前に」

ランサーから出ていたのは餓鬼の喧嘩も良いところな、売り言葉であつた。

これを買うなど、余程の——言葉を選ばなければ馬鹿も良いところである。

併し——

「臆したただと？ この私が？ 口を慎めよ、ランサー。それを寄越せ。会計を済ませる。着てやろうではないか！」

ケイネスはいともたやすくそれを買ってしまい、ランサーの言葉を待たずして、手に在った服をひったくって会計へと向かった。

遠目に、その様子を眺めていたソラウはポカンと口を半開きにしていた。

——何、アレ。激チヨロじゃない。

ケイネスに対してそんな感情を抱きながら。

第四話 渴望何弥

既に店にあるものを粗方見終わった為に愈々暇になり、ソラウは店から出た。

その直ぐに突き当たった柱にソラウは背を凭れ、溜息を吐く。

——遅い。

心中でソラウは独り言つ。ランサーが選んだ服の買物物を済ませず、ケイネスは試着室に向かい着替えを始めた。しかし、それにしては少しばかり時間が掛り過ぎているような気がしてならなかった。ポケットにしまっていた懐中時計を取り出すと、如何やらケイネスが着替え始めて十五分が経過しようとしているらしいことが分かった。

ウンザリと、ソラウが溜息を吐こうとしたその時、

「お待たせ、お待たせー」

人で込み合っている場所だということをまるで気にも留めず、大声で呼びかけるランサーに矢張りうんざりして溜息を吐いた。

「遅い」

口調に苛立ちを滲ませながらソラウがランサーの方に目を遣ると一体何が楽しいのか、頭上で大手を振っている。

途端に舌打ちをしたくなる衝動に駆られ、なんとかそれを呑み込むと、

「あらっ？」

ソラウは声を上げた。ランサーの隣に気が付いて。

人が立っていた。ソラウにとっては見知らぬ人物であった。男性である。歳の頃は大体二十代の後半程。ブロンドの髪で、長い前髪を右側に流している。切れ長の目に、はっきりとした鼻立ち。そして、かなり疲れ切った顔をしている。

大方、ランサーに絡まれて疲弊したといったところであろうか。

「ちよつとランサー。何処のどちら様か知らないけれど、何勝手に連れて来てるのよ。迷惑でしょう？」

ソラウが窘めると、ランサーは酷くにやついた顔をした。

ムツと顔を顰め、ランサーを自分の元に引つ張つてくるとソラウは咳ばらいをし、見知らぬ男性に向き直り、考え得る限り最も淑女的な微笑みを浮かべる。

「ごめんなさい。私の友人がご迷惑を。ランサー……あつ、此方、ランサー・ロングクラウドというのですけれど。遊学で長らく中国にいたので、久々のロンドンに羽目を外し過ぎてしまいました。本当に申し訳ございません」

首を浅く垂れるソラウを見て、ランサーはクツクツと含み笑いを上げる。

流石に不愉快に思い、ソラウはランサーを睨み、人差し指を突き付ける。

「ちよつと！ 貴方の所為でこうなってるんだから笑うんじゃないの！ 一緒に謝んなさいよ！」

「あの……」

「あ、すみません。今取り込み中で」

「ソラウ、私だ」

見知らぬ男に自分の名前を呼ばれ、一瞬ソラウは固まった。

何度も瞬きをし、目を擦り、もう一度目の前に立つ男の顔をまじまじと見つめる。

「ケイ……ネス……？」

半信半疑だった。

そもそも元のケイネスの顔をあまりよく観察したことが無い為、今の顔と比べようがなかった。

そして、ソラウは迷った。コクリと男が頷いた以上信じるべきか、ランサーが腹を抱え咽乍ら大笑いしている以上疑うべきか。

「……紛うことなくケイネス・エルメロイだ。ほら」

そう言つて、男は前髪をかき上げる。

少しばかり広いことが否めない凸が頭になって、

「本当ね！ ケイネスだわ！」

ソラウは漸く彼を認識できた。

そして、此処でよくよく見れば、彼が着ている服の一式が、ランサー

の選んだものと全く同じことにも思い至る。

とんだ赤っ恥。ソラウは自分の顔が熱くなるのを感じた。

「FUHHHHA!・GYAHA!・ゲホツ、ゴホツ!」

ランサーはそれがきつかけになつたのか、愈々耐え切れなくなり、床に蹲つて、何度も拳を打ち付けていた。

ケイネスの着替えの最中に悪戯でセットしている髪を乱してみた所、別人にしか見えず、それがランサーのツボに入りソラウにも見せてやりたくなり、現在に至つたわけであるが——まさか此処までソラウが鈍感だとはランサーにとつても想定外だつたのだ。

捧腹絶倒。のたうち回るランサー。

歩いていた人々は足を止め、彼の奇行に目を丸くする。

「笑い過ぎだ、たわけ」

「ひんぎゃー!」

羞恥心からケイネスはランサーを叱りつけつつ、蹴り飛ばした。

「いてて、ひつどいなあ、もう」

蹴られた頭を労わり乍ら、ランサーは兎が跳ねるような勢いで立ち上がった。

「五月蠅い。どうせあまり効いてないだろう」

ランサーの耐久はBランクという高い値を示している。これと云つて格闘技に心得の無いケイネスが蹴つたところでびくともしないのである。

それに忌々しきを感じ、ケイネスは辺りに響く程舌を打つと、今度はソラウの方に向き直る。

「大体、君も君もだ、ソラウ。髪を下ろしたただけだぞ? 何故気が付かない?」

「仕方ないじゃない! 貴方が髪下ろした所なんて見たことなかったんだから!」

その言い分に、ケイネスはショックを受ける。

言葉の裏にある、婚約者が自分の顔をよく見たことすらないという事実を読み取ってしまったからである。

怒つて当然のことであるが、ケイネスは言い返すことすら出来な

い。惚れた弱みとは、斯くも男から力を奪うのだ。
やれることは只一つ。

「……君をからうようなことをして申し訳なかった。直して来るから少し待っていてくれ」

拗ねるように謝るだけ。

ランサーの茶番に無理矢理つき合わされ、何故自分が謝らねばならないかと腹立たしく思うが、それすら曖昧模糊になるほど、ケイネスという男はソラウという女に弱かった。

その気持ちすら生まれてから現在までに培われてきた自尊心が否定しにかかるのだから、度し難いと云うしかあるまい。

はあと、溜息を吐いて、ケイネスが着替えようとトイレに向かおうとしたその時、

「良いわよ、別に。直さなくて」

ソラウが制止した。

一体何事かと、ランサーとケイネスが注意していると、

「私、そっちの方が好きだから。そのまままでお願い」

——何気ない口調で、途轍もない爆弾が投下された。

その威力たるや筆舌に尽くし難かった。ケイネスは顔を真っ赤にしていた。

ランサーは口をあんぐりと開け、そんなケイネスから目が離せない。

一方でソラウは首を傾げていた。

——おいコラ、何、ッアレ？ 私、変なこと言った？”みたいな顔してんだよ!? え？ なんなん？ 此の娘、おたんちんか？ おたんちんなんかワリヤア……。

ランサーは心中で激しくソラウの、鈍感というより他ない不用意な発言を責め立てる。

そして、ランサーの目はもう一度ケイネスへと映る。

——君も君だよ!? 何、そのReaction(ルリアクション)!? 思春期か!? 己、思春期なんかア!?

ヒートアップするランサーの思考とは裏腹に、三人の中には沈黙が

存在するのみ。

照れるやら、恥ずかしいやらで、完全に言葉を失うケイネス。心底不思議そうな顔をするばかりのソラウ。

そんな二人を暫し見ていて、ランサーは、

「いやあ、お腹空いたねえ！ 服も買ったし！ そろそろLaunch (ルアンチ) time (タイム)！ ご飯にしようよ！」

遂に妙な空気感に根を上げた。

二人の肩を抱き寄せて、空元気で以てすっ飛ばす。

「おい!? 何をするランサー!?!」

「この癖何とかしなさいよ！ セクハラっていうのよ、コレ！」

ケイネスとソラウは甚く不愉快そうな顔をしていたがランサーは気にしなかった。

——この小恥ずかしさが終わるのならば、と。

†

結局ランサーに羽交い絞めにされたまま、ソラウとケイネスはデザート内のレストランに連行された。

「お客様、失礼ですが何名ですか？」

まだ十代と思われるウェイトレスは良い歳をした男女三人が肩を組んで来店するというエキセントリックな状況に困惑しながら訊ねる。

「三名様だよ、My (ムアイ) kitty (キツイー) ——ボクの子猫ちゃん」

ランサーは人の良さそうな笑みを湛え、手を振りながら答えた。

「あ……えっと、では此方の席へお願いします」

気恥ずかし気に顔を赤らめながら、ウェイトレスは店の一番奥の四人掛けのテーブルへと案内した。

「何だ、あの態度は。顔なのか、矢張り顔なのか……」

その間にもケイネスがぶつぶつと小さな怒りをウイスパーさせていたのは、屹度、極めて余談であろう。

「何頼む? 何でも頼んで良いよ」

席に着くと早速ランサーはメニュー表を楽し気に捲り始めた。

「金を出すのは私だ」

聊か苛立ちながら、ケイネスもメニュー表を取った。

ソラウはその隣でデザートの表を見ている。

「いやあ、結構おいしそうだねえ。何にしようか迷うよ」

顔を綻ばせ乍ら、ランサーの目は色々な料理に目移りしていた。

ケイネスは思った。

——正史に於いても、それを原案とした創作物でも語られていないことだが、ひよつとして関羽雲長という人物は美食家なのかもしれないと。

だが、ケイネスはそれを聞くようなことはしなかった。

英霊と云えども目の前にいるのはそれそのものではなく、そこからある側面を抽出して形作られたサーヴァントである。凡百の使い魔と変わりはない。そこに人格を求めるなど言語道断である。

そもそも、

「ボク、これでも料理には五月蠅いんだ、蜀漢の人だからね」

ランサーの場合は勝手に語り出す為聞く必要などないのだ。

蜀漢の人だからという理屈には、ケイネスは首を傾げるしかなかったが、深くは追及しなかった。

「ところで、ボク、結構食べる方なんだけど。一杯注文しても良いかな？」

「別に構わないが、私の金だということを忘れるなよ」

「Y a h (イアー)」

ランサーはおどけるように答えて、ウェイターを大声で呼んだ。

「ご注文お決まりでしょうか？」

「うん。ボクはこの蟹ピラフとミートドリア、コーンスープとあとこのハンバーグ。ソースはデミグラスソースってヤツで。それからフィッシュ&チップス、一番大きいサイズでお願いね」

ケイネスとソラウは絶句した。

一杯頼むとは聞いたが、まさか本当に一杯頼むなどとは思わない。そもそも常人なら胸焼けするような量である。

「ケイネスとソラウさんはどうする？」

絶句のあまりに呆けていたケイネスは慌ててメニューと向き合い、

「ライ麦パンとチキンステーキ。あと珈琲を載きたい」

即決でメニューを決めた。

「君は？」

「克蘭ベリーのスコーンと紅茶を」

ソラウもメニューを決めるのは速かった。

「では、ご注文以上で宜しいですか？」

「あ、あと、Peach（ペイチ）liqueur（ルイカー）と白桃ソースのパンナコッタつてやつも」

この後に及んで酒とデザートまで戴こうという厚かましさをケイネスは最早咎めようとはしなかった。

このランサーはこれが平常運転だと諦めることにしたのだ。だが、

「あ、あとこの二人がさつき頼んだ飲み物キャンセルで。この『ラブラブ☆ズツキункリームソーダ』ってヤツお願いします。この二人に」

すぐにその考えは撤回されることになる。

「おいコラ、ちよつと待って」

不穩過ぎるネーミングにケイネスは自然と口調が崩れていた。

「飲み物は全部、食前で頼むぜ、Kitty（キツイー）ちゃん」

「はい、分かりました！ それではすぐにお持ちいたしますね！」

妙に気合の入った返事をしウェイターは厨房へと駆けていく。

「あ、ちよ、待……」

ケイネスの引き留める声は、空しくも届かない。

「何故、こうなるー！」

ケイネスは声を荒げた。

一体どうして、ランサーの言葉をほいほいとウェイターは聞き入れ早急に動いたのか。それは、ランサーの持つスキルが関係していた。

「関聖帝君」。彼の持つ商業神としての神号であり、この中には通常の神性スキル以外にも財を象徴する黄金律などのスキルが複合されている。その中にはカリスマスキルも含まれていた。

集団の長となるべき資質——王の器を持つサーヴァントが保持するスキルであり、通常は軍団を率いる時に機能する。だが、このスキルには戦闘時以外に発揮する別の能力が存在する。

それは「言葉に重みを付与すること」。他人には説明が辛い所謂神のお告げを信じさせる、壊してしまつた建物を直すという発言に漠然とした真実味が含まれるなど——。カリスマスキルの持ち主は、言葉の上で優位を得やすいのである。

この時ランサーは無意識のうちにカリスマスキルの機能を使つていたのだ。

完全な無駄遣いであるが。

†

ウェイターが飲み物を運んでくるのは空恐ろしいというしかないほど速かつた。

自分の前にグラスとボトルが置かれると早速ランサーは注ぎ始める。

そして、並々注がれた淡い桃色の酒に、

「Wow（ヲアオ）！」

とランサーはまず感嘆の声を上げた。

そして、グラスを傾け、口を付けると、

「美味い！ ボクが生きていた中華にはこんなお酒は無かつた！」

ランサーは今までにない味に歓喜する。

「Master（ムアスター）」とソラウさんも早く飲んだら？」

その喜びの儘に、彼はケイネスにも頼んだ飲み物を飲むように促すと、

「貴様、正気で言ってるのか！」

怒りが返って来た。

だが併し、なんら理不尽ではない。ケイネスが怒鳴るのも無理はないのだ。

彼と、そしてソラウの眼前にあるもの。

しゅわしゅわと景気よく泡を吹くメロンソーダ。その上に浮かぶ少しだけ蕩けたバナライイス。突き刺さるハートマークを象つたピ

ンク色のストロー。

付き合いたてで有頂天になったカップルが調子に乗って頼む典型例のような飲み物である。

誰が、況してケイネス・エルメロイが飲めるといえるか。

「そうね。貴方につき合わされた所為でからからだわ」

「飲むのか！」

途端にケイネスは赤面し、顔を伏せる。

これを飲むということは、それ即ち、ソラウとケイネスの唾液を交換するということである。所謂間接キス。

愛する者と「間接」ということを前提としても接吻をするという事実にケイネスの興奮は頂点に達していた。

だが、愛するが故のジレンマ。したいのではある。

併し、したいだけで出来るならば、もうとつくの昔にしているのだ。要するに勇気がない。して良いという免罪符すら考えつかない。

ならばいいっその状況に身を委ねるのも……などとケイネスが考える傍らで、

「……初めて飲んだけど、悪くないわね」

ソラウは一人でクリームソーダを飲んでた。

ケイネスは口を半開きにしてそれを見つめている。

「でもどうして飲み口が二つも付いてるのかしらっ？」

ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリという女性は、時計塔の学科の一つ降霊科を総べる君主（ロード）の家系に生まれた。

後継者となる子供の子供の身に何かが起こってしまった時のスペアとして、である。

結局その子供はつつがなく成長し、今度は政略結婚の道具として生きることになるのだが——平たく言ってしまうば。とても育ちの良なお嬢様なのである。

元々魔術師という生き物が近代文明や俗世間を嫌うということも手伝って、ソラウは俗世間というものに対して疎いところがあった。

故に阿呆丸出しのカップル専用クリームソーダなど知っている筈もないのである。

一人で興奮し切っていたケイネスが完全に間抜けだったという結果に終り、ランサーはクツクツと笑っていた。

「この犬畜生めが！」

「そこまでいうなよお」

へらへらと、ランサーはとても大英雄がすべきではないような崩れた笑みで返し、グラスを傾けた。

そして、一杯目を飲み終えて、またグラスに酒を注ぐ。

その時、ランサーはハタとあることを思い出し、

「そういえばさ、ボク、まだ聞いてなかったよね？」

ケイネスにそう語りかけた。

「まだ聞いてない？ 何のことだ？」

「聖杯を求める理由」

さらりとランサーから放たれた言葉に、ケイネスは慌てて辺りを見渡した。

秘匿性を重視するという魔術師の習性から。

「大丈夫。みんな聞いちゃいない。それにもし聞こえたとしても、何を言っているかすら分からない」

その一方でランサーは、あっけらかんとして酒を啜っていた。

本当に大丈夫だろうかと、ケイネスは心中で疑りながら、ランサーを睨み付ける。

何もこの場という話題ではないのである。

だが、それを踏まえた上でも、早めに話しておかなければならない話であるのも確かであった。

聖杯とは万能の願望器である。故に英霊は聖杯戦争に招かれ、そして臨む。度し難き渴望を埋めるだけの力がそこにはあるからだ。

そして、マスターにもそれを求めるだけの理由がある。これは必定だ。

よって、聖杯戦争に於いてサーヴァントとマスターは互いの望みを話し合うことになる。

目的を確認し合わなければ信頼関係など有り得ない。また互いの目的が明後日の方向を向いていれば、剣をとることすら適わない。

この問答が以降の戦いを左右すると言っている。一致しなければその瞬間にも戦いは終了という可能性すらある。

だが、ケイネスはそれをつい先ほどまで忘れていた。ランサーによって調子を乱され、それを問うタイミングを逃して有耶無耶になってしまっていた。

「——で、だ。It's (ウイツ) a (ワ) question (コウエクション) time (ターム)！ 一体君は如何して聖杯を求める？」

ランサーもそれを求めている。

まるでそれを聞く場ではないが、構わないだろうと、ケイネスは考え、そして答える。

「聖杯を求める理由はない。ただ勝利を求める」

ありのままを。

「勝利？」

「武功だよ、武功。貴様のような人種が最も好む、な」

その回答にランサーは、

「H A H A H A！」

手に持った杯を落しそうな勢いで笑った。

「成程、成程！ 至極明快分かり易い！ “諂曲なるが人の性”と玄徳ニーサンはよくボクらに言っただけのものだが、まさしくその通りだ！

実に人らしい！ ボクは好きだが、そういうの！」

膝を叩いて武功を欲するその様に、嬉しさを露わにする姿は、腐つてもランサーが三国に武勇を広く知らしめた武将であることを物語る。

「茶化していないで貴様も答えろ。何故聖杯を求める？」

その質問にランサーはグラスに残っていた酒を一気に飲み干して、ケイネスを真っ直ぐ見つめた。

少しだけ間が空いて、ランサーは口を開く。

「ボクが、聖杯を求める、理由は……」

第五話 夢幻桃園

見渡す限り薄紅色。甘く香しい香りが辺りを包み、光る様な優しい風が木々を揺らし、花卉を慈雨のように散らした。

此処は桃の花が咲き誇る園。

空は鋼のような厚い雲に覆われ、蒼を失っている。なのに、そこは輝いて見えた。玻璃を砕いて散りばめたかのように。

花園は特別な場所のようでそこにいるのはたったの三人である。

一人は、人ほどの体長を持つ一見銅像にも見える蟒蛇を侍らせた偉丈夫。無造作に伸ばされた白髪の手、爛々と輝く黒目がちな双眸、鋸のような歯を覗かせる口元、顔面を斜めに走る大きな傷と、持っている記号の総てが男に「怪人」という呼称を与える。纏っている蛇の皮衣は大きく胸元が開き、鍛え抜き鎧のように頑強な筋肉をありありと見せつける。

もう一人は、少女と見紛うような美しい青年であった。襟褸切れと空目するような酷い衣服だというのに、気品を漂わせる美貌は陰ることはなく、燦然としている。夕焼けのように赤い髪と、少し目尻の下がった人の良さそうな同じ色の瞳は、けれど、開けない夜に差し込んだ曙光のような力強い生命を放ち、見つめられている者に希望や勇気を与える。

そして、もう一人は――。

そこまで思い至り、漸くこの光景を見ていたケイネス・エルメロイ・アーチボルトは気が付く。

今、自分が見ているのは確かにこの二人だけであった。

なのに、自分は三人だと思った。これは一体どういうことか？

今、ケイネスの目の前にいる二人は莫塵に腰を下ろし、花を見ながら酒を飲んでいる。赤髪の青年はあまり強くないのか少しずつ、傷の大男は余程の蟒蛇なのか口の端からも零すほど豪快に。

「本当に宜しいのですか？」

そんな中、赤髪の男が口を開いた。

優しい気でいて風にも書きされてしまいそうなか細い声だった。け

れども不思議と耳に残る、そんな響きを持った声でもある。

「……何がだ？」

と傷の男は聞き返した。

「確かに、私は悪逆の限りを尽くす賊を討ち、人々に笑顔を取り戻すと決めました」

「ああ、決めたな」

「ですが、それは私の意思です。私の——身勝手です。だから、私がそれで死ぬのは構わない」

「……何が言いたい？」

小さな苛立ちを滲ませながら、傷の男が問うと、赤髪の男はそつと目を閉じた。

「私を見捨て、引き返すならば今だ、ということ、ですよ、益徳」

そして、毅然とした顔で赤髪の男は——後に蜀の皇帝となる劉備玄德は張飛益徳に諭した。

張飛はびくりと眉を吊り上げつつも酒を煽った。

「この戦いは恐らく激しいものになります。そして、私は何も無い、ただの人です。こんな男の元で死んだとあつては名誉も何もあつたものではありません」

ケイネスも、否、ケイネスが成っている男も黙ってそれを聞いている。

「張飛、貴方は世に知れ渡るべき豪傑だ。そんな死に方は相応しくない。そんな死に方をしてしまったら私は——悔やんでも悔やみきれなくなる」

沈痛な面持ちで劉備は振り絞るように言った。

だが、張飛は、

「下らん」

と一笑に伏した。フツとケイネスからも笑い声が上がった。

「何を言つて——」

「冗談じゃない。俺を殺せるものなどいるものか。仙人から賜ったこの拳で、人を喰らうと怖れられた青銅の蛇すら下したこの俺を」

なあ、と同意を求めるように張飛は傍らの蛇の頭を撫でた。喜色を

頭す様に蛇は目を細める。

「ですが、蛇退治と戦は別物。もしかしたらということも——」

「そのもしかしたらが起こったのならば、だ。玄德、貴様悔やむことすら出来んぞ？ 俺が死ぬんだ。何も出来ない貴様も屹度死んでいる」

張飛に凶星を付かれ、劉備は顔を赤らめた。

それを見てにやつくと、張飛は壺から杯に酒を注ぎ、もう一度思い切り煽った。

「第一にだ、玄德。俺はそれで死んでも悔いはない。俺は貴様が王に相応しいと判断した。天地に轟くべき、この俺の力を振るうだけの王だと俺が決めた。それは他でもなく、俺の意思だ」

だからと一呼吸おいて、張飛は伝える。

「俺を連れていけ、玄德。憂苦なく俺を使い尽くせ。何も出来ない貴様の代わりに俺が貴様の敵を打ち潰し、引き筆つて御前にくれてやる。貴様の願いを叶えよう」

彼なりの忠心を。赤き龍の末裔、劉備玄德の思いに打たれ、存在に打ちのめされ一生着いていくという、狂気すら孕んだ熱烈なる決意を。

「益徳……」

「貴様は如何なんだ、兄者」

張飛に訊ねられると、

「ん？ そうだねえ……」

とケイネスの内側から声が返って来た。

最早、ケイネスにとっては聞き慣れた、憎たらしい程よく通る綺麗な男の声だ。

そして、男は杯を傾ける。

「益徳からは聞いてたけど、よく分かったよ。君は駄目だ。どうしようもない甘ったれだ」

矢張り誰にでも毒を吐く男のようだった。

「——だが、その甘ったれが苦しんでる人を救うという。正直それが見て見たくなった。でも、此のまま戦場に向かわせるなんて心配でない。ボクが行ってやんなくちゃコイツは駄目だ」

駄目を繰り返しながら、けれど男の声は弾んでいた。

「——だから、益徳と一緒にボクも連れていけ。最強のボクは君みたいな王様にこそ相応しい」

そして、杯を掲げた。

天高く、既に死んでしまつて蒼さを失くした空の、一点の残つた蒼を衝き穿つように。

「此の鉄（くろがね）の空に誓おう！ この身、我が王、劉備玄德とは生まれし時と場所を違（たが）う。されど我が王の死する時、そして場所は我が死であると！」

フツと微笑し、張飛も杯を天に翳した。

「……同じく。俺の死に場所は、赤龍の亡骸であらんと」

劉備は二人の決意に涙し、同じく杯を掲げた。

「共に生き、共に死にましよう！」

渺——。

その時、一陣の風が吹いた。

蒼天は、この時、既に蘇った。

†

ケイネスが目を覚ますと、其処は自室のベッドの上だった。

だが、ケイネスには目を覚ましたという感覚は無かった。眠つていたという実感すらないのである、目覚めようがないのである。

「……今のは、ランサーの記憶？」

夢のようでありながら、あまりに現実感が強すぎる先程の光景に未だにケイネスは困惑していた。

英霊の記憶の遂体験。サーヴァントと契約したマスターが見るという夢であった。

そういう現象が起こることを、ケイネスは知っていた。自分が召喚するであろう英霊の伝承も、無論把握していた。

だが、その真実に最も近いモノを見るとは思っても見なかった。

「桃園の誓い」——。

劉備玄德、張飛益徳、そして関羽雲長。その三人が義兄弟の契りを

交わす、群雄割拠の時代の狼煙。三國志の幕開け。

この後三人は各地で狼藉を働いていた黄巾族を排する為の義勇兵となり、その名を上げ、国を築くのである。

ケイネスがさっきまで見ていたのは、まさしくそれであった。

だが、どうしてこんな夢を見てしまったのだろうか？

それは昼間の問答の所為だとケイネスは確信した。

「ボクのMemory(ムエムリー)を見てしまったか……一体どの場面を見たんだい？」

「——桃園の誓いだ」

そう、総ては今自分の隣で眠るランサーの所為。

自分の、隣で、眠る……？

「ぎゃあああああああ！」

ケイネスは悲鳴を上げ乍ら飛び起き、部屋の隅へと逃げた。

自分の肛門を両手で覆って。

貞操の危機を感じた。閨に入られるということは詰りそういうことだと思っただからだ。

「いやいや、待ってくれ。益徳じゃないんだから。ボクにそういう趣味はない」

ランサーは苦笑しながら部屋の明かりを点け、身の潔白を示した。

「ならば、何故私のベッドに入った！」

「寝起きドツキリ？　かな？」

だとするならば、質が悪いと言うより他ない。

「というかだ、何故ボクが君に夜這いをしなければならぬ？　やるならメイド長さんにするよ。次点でソラウさんだ」

「ソラウが下なのはどういう見だ！」

「正直言うただね、苦手なんだ。Looks(ルークス)がぎ、トン姐に似ててね」

にも関わらず、接吻に及んだのかとケイネスはランサーの軽すぎる行動に呆れた。

そして、ここで疑問が一つ。

「『トン姐』というのは、若しかして、夏侯惇元讓のことか？」

夏侯惇元讓。

三国時代、魏の皇帝曹操に仕えた名将である。

勇猛にして苛烈な人物であり戦場で敵兵に目を射られた際には、自らそれを引き抜き食したとされる。

曹操からの信頼も厚く、数いる臣のうち、唯一彼の部屋に入ることが許されたとされている。

無論、ケイネスが知るその人は男性であるのだが――。

「その口ぶりではまるで女性だと言っているようだが……」

「女だよ。あの曹操が野郎を寝所に招き入れたりするものか」

そう言つてランサーは、ベッドに勢いよく腰を下ろすと、昼間の買物の時に仕入れた煙草を呑み始めた。

細身で長く、薄茶色の巻紙を使った、何処か女性的な印象を受ける手巻の煙草である。

如何やら、聖杯の知識で得た“煙草”というものにランサーは興味を示したようだった。出来合いの紙巻煙草が主流のこのご時世にあつて、刻み煙草を敢えて選ぶという辺りが少し気障つたらしいとランサーのチョイスに辛辣な評価を心の内で下していた。

一息、ランサーは紫煙を吐いた。

余程美味しいのか、満足そうに顔を綻ばせている。

「そんなに良いものか？」

一度だけ、知り合いの人形師に煙草を恵んでもらったことのあるケイネスは胡乱じていた。

あの味は二度と忘れる事が出来ない。強烈に不味かつた。口に煙を入れた瞬間には、甲虫のような臭いが鼻を突き抜け、ゴムを齧つたような苦味が味蕾を破壊しつくしていた。

元々喫煙者ではなかったケイネスはそれ以降、煙草は絶対に吸わないと誓つたのである。

「美味いぜ。喉と舌を焼く辛さと苦さが堪らない」

と、ランサーは自身の煙草について感想を一言。

ところでランサーの煙草の葉は、銘を“ドミンゴ”といい所謂“黒煙草”というカテゴライズされているものである。

この黒煙草の特徴としては、ことに苦いことだろう。基本的に「苦い」煙草の味にあつてすら特段に苦くまた辛味も伴う。そして、鼻を突き抜ける、よく熟した堆肥のような臭みが好む人間を限定するのだ。

台湾製の不味い煙草の所為で、煙草を味わうということすらないケイネスにとつては一生分からぬことである。

「というか、話は戻るが。夏侯惇は本当に女なのか？」

「女も女。曹操一の将にして、最も重宝された夜伽さね」

主と性的な関係すらあつたことにケイネスは驚いたが、同時に納得もした。

曹操は無類の女好きとして知られていたし、自分の部屋には女しか入れなかつたと言われている。ならば、彼の部屋に臣の中で唯一入ることが出来た夏侯惇が女であることになんら不思議はない。

それに、夏侯惇は隻眼となつた自分の顔が気に入らず、よく鏡を叩き割っていたらしい。極めて女性的な行動ではある。

「……ということは、張飛も、その、なんだ。男色家なのか？」

ランサーの言ったことをそのまま真に受けるならそういうことになる。

が、それに対しては、

「Not (ナアト)！ それは違うよMaster (ムアスター)」

ランサーははつきりと否定した。

良かったと、ホツとケイネスが胸を撫で下ろしたのも束の間――

「アイツはね、ガチ両刀で、Pedophilia (ペッドフェイリア)で、Sadist (サーヂスト)で、戦闘狂な、モリモリマツチヨマンの変態だよ」

より酷い真実が伝えられる。

現実是非情である。

というよりも、夢で見た白髪の魁偉が「それ」だというのは、聊かキツイものがある。

ケイネスとしては知りたくなかつた真実だ。三國志というものが彼の中でドンドン崩壊していく。

頭痛を覚えてケイネスは頭を押さえた。

「諸葛孔明が、実は培養器の中に浮いた巨大な脳味噌だった……とか言わんよな？」

研究者の性であるのか、元来疑り深い性質であるケイネスは三國志に対して疑心暗鬼に駆られ、とんでもないことを口走っていた。

「H A H A H A！ めっちゃカッコいいな、それ！」

何処かSFのような趣のケイネスが示した孔明像を、ランサーは半ば興奮気味に囁し立てる。

ケイネスにしてみれば、それが逆に自分の突拍子のない推察を肯定しているようにすら感じられより疑いを深める結果にしかならない。

「というか、貴様、与太話と悪戯をしに此処に来たのか？ ならささつと部屋に戻ってくれ」

……これ以上、三國志談義を続けていれば自分の精神が崩壊しかない。
故にケイネスはランサーを追い返すことにした。

「まさかあ。勿論、用があつて来たのさ」

ランサーは吸い終った煙草を腰に閉まっていた化粧のコンパクトのようにも見える携帯灰皿の中へと放り、布団の中から、ケイネスが偶々日本を訪れた時に見かけた「京極何某」とかいう作家が執筆した煉瓦と見紛う程の本と同じくらいの厚さはあるうかという冊子を取り出し、ほらと、ケイネスに投げ渡した。

プリンタ用紙に、黒のインキで綴られた無機質な文字の羅列。魔術師という現代文明から離れた幽世の存在が、普段は絶対に目にしないものだった。

「これは？」

「日本の総ての航空会社の入国記録。君が買ってくれた『秘密兵器』を使つて手に入れた。過去半年分くらいはある」

ケイネスは目を丸くした。

日本の入国記録を調べたことに対して？ 確かにそうだ。

半年という膨大な量に？ 否定はしない。

だが、それ以上に驚いたのは、ケイネスがランサーに買い与えたア

レをその日のうちに使いこなしたということである。

何もランサーがケイネスに買わせたのは煙草だけではない。

ロンドンを歩いてく中で、ランサーの目はあるものに止まった。

——「パソコン」である。

『これは凄い！ 一家に一台諸葛亮、誰でも簡単司馬仲達。人間の文明が此処まで来ていたなんて！ 是非ともコイツを手に入れたい！』
街角でそれを見た時のランサーの高ぶりようは、短い間にも散々見ていたであろう素つ頓狂ぶりに輪を掛けての酷さであった。

魔術師が現代技術に頼るなど言語道断。ケイネスとしては無論断りたいところであったが、

『買ってよDaddy(ダデー)！ 買って買ってえー！』

大英雄としての恥も外聞もなく、子供のように喚き散らした為、泣く泣く買わざるを得なくなってしまったのだ。

そして、自宅に帰るとケイネスが戯れで作った発電機「鉄歯電人(ガルバニー・アルトアイゼン)」を使いパソコンを起動。

ネット回線が通っていないと分かれば、どういわけか侍従長がそれを聞きつけ、星が瞬くような速さで以て回線も設置。

そして、現在に至るわけだが……。

ケイネスはランサーを侮っていた。殆どの魔術師が蔑視していて、それと同時に使いこなせない最先端の電子機器。まさか、三世紀を生きた中華の英雄が、こんなにも早く使いこなせるなどとは思ってもしなかつたのだ。

「それと、もう一つ。その中に「ウェイバー・ベルベット」の名前を見つけた」

「何？」

征服王の触媒を奪った、まさにその人物の名を聞き、ケイネスは眉を吊り上げた。

「ケイネスは昼間、ソイツが小さなRetailiate(リタールイイト)の為に、聖遺物を隠したと言った。でも、何故それがよりにも依って日本なんだ？」

ランサーが言わんとしていることはケイネスにも分かった。

詰り、ウェイバー・ベルベツトは身の程知らずにも、聖杯戦争に参加しようとしている。そういうことである。

「……ま、君の話を聞く限り、大きな脅威ではない。一先ずそれは頭の片隅にでも置いておいてくれ。問題は次だ」

ランサーはクラシカルな意匠の金色のオイルライターで再び煙草に火を点けた。

「この中に聖杯戦争に参加しそうな魔術師で、脅威になりそうな名が無いか……ということだな？」

「流石、我が主。話が早い」

ケイネスの物わかりの良さをランサーは喜びつつ、紫煙を吐く。

「まあ、少し量が多くて大変だとは思うが……一時間で確認して欲しい」

「ぬかせ。誰にものを言っている。十分で良い」

教師として学生のレポートの添削を腐る程やって来たケイネスにとっては楽な作業だ。

それをさえランサーは軽快な口笛と共に讃える。

「頼もしい」

と。

早速、ケイネスの目はランサーが調べた記録に向かっていた。

怒濤の速さで頁（ページ）が捲られていく。

その傍らでランサーは煙草を吹かす。

「——そうだ。もう一つ聞きたいことがあった。そのまま作業をしなからで良いから答えてくれないだろうか？」

「なんだ？」

「君の、聖杯を求める理由についてだ」

「それがどうした？」

ケイネスはランサーを一瞥すらせず言葉を返す。

「武功を求めて——と君は言ったがそれは本当かい？」

「……何か願いを持っている。それが到底貴様には話せないものだから嘘を吐いた、と。そう言いたいのか？」

ケラケラとランサーは愉快そうに笑う。

「そうじゃない。君に願いなんてないことにやなんの疑いもないさ」

「では何だ？ 私は何を求めて戦うという？」

「好きな女の前で恰好付ける」

ぴくりと、ケイネスの手が止まった。

「……やっぱりか」

「何をしたり顔で言っている？ そんなことは……」

「じゃあ、なんで敢えてソラウさんを連れていくんだ」

自分を睨むケイネスにランサーは言い返した。

「貴様にも説明しただろう。召喚術式の話」

「魔力の分割だろう？ だが、ソラウさんじゃなくても良い。如何に優秀な魔力を持つていようと精々がトーシロに毛が生えた程度だ。第一、君は魔術の先生。戦力としても有効な学生が沢山いるだろう。何故それを使わない？」

ケイネスに対する尊敬の念から、或いはその権力を利用したいという邪な考えから着いて来る人間は山のようにいる筈。

然も、実践にとっても投入できないソラウと違い、ある程度は戦闘も出来る人材は星の数ほどあるだろう。

確かにソラウは優秀な回路の持ち主であるが、それに匹敵する学生や彼の部下だっている。

計略に嵌められ、背中を刃で刺されることを恐れて許嫁を選んだのだろうか？

否、裏切る時は許嫁だろうが、恋人だろうが屹度裏切る。それでも敢えてソラウを選んだ理由。

「ソラウさんに、唇を奪った相手を絶対に殺したくなるほど愛しているソラウさんに良いところを見せたかったんだらう？」

それは屹度、ランサーが言った通りの理由。

けれど、ケイネスはそれを認められず——押し黙った。

そして、代わりに、

「若しかして、貴様が召喚されて直ぐにソラウに接吻をしたのはそれを確かめる為か？」

と聞いていた。

ランサーはにこやかに笑って、小さく首を振る。

「それは違う。ボクは孔明じゃない。そこまで先を読んじやあいな
い」

「では如何して……」

「確かめたかったんだ」

ランサーはまた、紫煙を一呑みする。

「ボクの主にとって守るべき人なのかどうかを」

——たったそれだけの理由だった。

「あんな方法でか？」

「だから、ボクは孔明じゃないんだ。咄嗟だったから。あんな方法し
か思いっかなかった」

「それで自害を命じられたぞ？」

「嗚呼——正直驚いた」

ランサーはあっけらかんとしている。

再びの生を直ぐに終えてしまう危険すらあったのに。

「如何して……」

「うん？」

「如何して其処まで私に対して献身的になる！ 何故もつと欲望を持
たない！」

ケイネスは声を荒げていた。

気があまり長い性分ではない彼であったが、多分、そんな彼を知つ
ている人々でさえもこの態度には驚いたであろう。

併し、ランサーはH A H A H A！といつも通り笑うだけだった。

「欲望なら一杯見せたじやないか。素敵な服に、美味しい食べ物やお
酒、煙草にパソコン。いっぱい、いっぱいだ。さらに言ったらメイ
ド長さんをボクのお嫁さんにしたいなんて考えて……」

「違う！」

ランサーの言葉をケイネスは遮った。

遂にランサーの普段通りのひょうきんは影に隠れてしまった。

「そんな小さな欲望のことではない！ 聖杯に懸けるべき大望だ！」
ケイネスは苛立っていた。

ランサーの願いに。今一度の生を得てまでの願いに。

「〃また皆で桃園に行きたい〃——如何してこんな願いしか持たないのだ！」

関羽雲長という人間の伝承を知っていれば、あまりに小さいとしか言えない願いだった。

——そして、そんな願いですら、ランサーは叶う筈がないと断じ、ケイネスに聖杯をくれてやると言ったのだ。

願いを考えておくと、傲慢にも命じて。

第六話 蒼天既生

黙っていたランサーはふと手元に目を遣った。吸っていた煙草の種火がすっかり消えてしまっていた。

「スローバーニングの巻紙って、長く燃えるとかって聞いたんだけどね」

ランサーは煙草を無駄にしまったことを惜しみながら、吸殻を携帯灰皿へと投じた。

市販されている「シガレット」——所謂、広く一般的に「タバコ」と呼ばれるものに使われている巻紙は通常フリーバーニングと呼ばれる。それらは巻紙に燃焼剤が含まれており燃えやすいのである。煙草というのはただ火を点けただけで燃えていくというわけではない。空気を循環させる、詰り吸わないと燃えていけないのだ。詰り燃焼剤は煙草に火が付きやすくするために入れてあるのである。

併し、刻み煙草（シヤグ）を巻く為に使う数十種類ある巻紙の中にはスローバーニングと言われ、燃焼剤が含まれていないものもある。紙に使用される植物の種類にもよりけるが、ランサーが言った通り基本的にフリーバーニングの紙を使うよりも長く煙を楽しむことができるのだ。

だが、吸わずに放っておくと消えてしまう場合があるのである。洩々ランサーは吸い掛けの煙草に火を点ける。

「……で、ボクが桃園に行きたいと思うのが如何悪いんだい？」

ランサーは紫煙を燻らせながら、ケイネスに訊ねる。「Master（ムアスター）はボクの記憶を、あの桃園を夢で見ている筈だ」

手前勝手なペースでしか話さない癖にこういう所は耳ざといと、ケイネスはランサーにそんな感想を抱いた。

「ああ、そう言ったが……」

「君の目にはどう映った？」

ケイネスが夢で見た、薄紅色の花弁が降りしきる桃園。

鉛のような暗く厚い雲に覆われた既に死んだ蒼天の下で、鮮やかな

色を持っていた場所。

義兄（あに）と義弟（おとうと）と共に同じ死を分かち合うと決めたランサーにとつての総ての起端はケイネスの目にも輝いて見えた。

こんなことを感じるなど柄ではないとケイネスは思った。他人の心を解さないと噂されていたことにケイネスは気が付いていたし、また他人に興味はないという自負もあった。

「……まあ、良い場所ではあった」

徹頭徹尾自分で生きてきたケイネスにとっては、他人が価値を見出しているもの——広く人々に価値を認められているものを除いて——を認め、況して褒めるなどということは特に珍しいことだった。

彼の生徒が若しこの場にいたならば、一同引つ繰り返ること請け合いだらう。

けれど、ランサーは別段それを気に留めるでもなく、ケイネスの答えに嬉しそうに顔を崩し、煙を吐いた。

「なら、あれを求めるというのも理解出来る筈だろう？　なんてっ たってSo（スオ） beautiful（ビテフォー）だ」

確かに理屈は通る。

求めるというのも理解は出来る。

「だが、それ以上に叶えたい願いだってある筈だろう？」

それにも関わらず、こんな考え方になってしまふのは、ケイネスが関羽雲長という英霊に纏わる伝承を知っているから。

劉備玄德がまだ百姓の寄せ集めの義勇兵の長にしか過ぎなかった頃から彼に仕え、打ち立てた武功は数知れず。群雄割拠の世に在つて、誰もが美髯公を恐れ、魏の曹操は彼を自分の配下にこそ置きたいとすら考えていた程だ。武人で在りながら智慧に富み、そして主を立てる忠臣であり、そんな有様が後世神として崇められる所以となつた。

其処には多くの栄光があり、それに付随して転落もあった。

「What（ワーツ）？　それ以上に叶えたい願ひ？」

「過去の栄光に戻りたいだとか、滅亡という結末で終わってしまった国の運命を変えたいだとか、義兄弟同士で交わした約束を守りたいだ

とか、お前には色々あるだろう！ ある筈だ」

結局、蜀は滅亡した。関羽雲長もある戦で敵に囲まれ、援軍を出しても断られ、そして斬首という結末を迎えた。死ぬときと、その場所が同じであると誓った義兄弟を残して。

そんな二人も関羽の仇を取ろうと奮戦して、その最中に死亡した。

そして、それが原因で蜀は加速度的に衰退していった。

変えたいと思うのが心情だ。何か一つでも違っていれば——そうすればもつと——。ケイネスだったらそう考える。

「いや、そんな願い、毛ほども無い」

併し、当事者の頭にはその発想すらなかったようだ。

寧ろ、煙草の味以上の関心事ではないと言っている様にもケイネスには映った。

「何故だ？」

「ええー、何故って言われてもー」

ランサーは困っているのかお道化ているのかよく分からないような顔をし、吸い終った煙草を携帯灰皿の中へと投じる。

そして、再び煙草に火を点け、一服すると、ランサーの顔から笑顔が消えていた。

「……ボクは人生たった一回だと思ってた。そのたった一回の人生を一人の王様に連れ添って、全力で生きてきた。王様も、義弟（おとうと）も……超雲も、関平も、孔明も、みんなみんなそれは屹度変わらんだろうさ。それをね、万能の願望器とやらで全部変えちゃうなんてのは、あの頃のボクらの全力全開ってヤツを馬鹿にすることだ。それだけはやっちゃいけない。絶対だ」

強い口調で、ランサーはそう断じる。

其処に、一切の剽軽は無く、らしくないとケイネスが感じてしまうほど、真剣そのものであった。

「お前には、後悔はないのか？」

「買いかぶり過ぎだよ、主。ボクは、関羽雲長っていう男はそんな立派なもんじゃあないんだ」

ランサーは自嘲を含んだ無理くりな笑みでケイネスの問いに返し

た。

吐き出す、白い息も、べったりとしていて重々しい。

「――後悔だらけの人生だったさ。だからボクは此処にいる。君が言うようにね、ホントは義兄弟（きょうだい）一緒に死にたかった。出来る事なら、玄德を中華一の王にしてやりたかった」

それに、と続いて、ランサーは酷く辛そうな顔になる。

「劉封にボクのことを殺させたくなかった」

それはランサーにとっては酷い心傷体験（トラウマ）だった。

劉封とは、劉備玄德の養子である。四十も差し掛かり、それでも子供が出来なかった劉備が自分の後継者に据える為に貰って来た子供であり、勇猛果敢で見目麗しく、将として優れていた若者であったとされる。けれど、後に劉備に阿斗――後に二代目蜀皇帝となる劉禪が生まれてしまった為に跡目を結局受け継ぐことが出来なかった不遇の子でもあり。

そして、ランサーにとっては自分の死因と言えるかもしれない男だった。

呉と魏を揃って敵に回した関羽は在る戦いで窮地に陥り、その中で援軍を求めたのが劉封であった。けれど劉封はこれを拒否した。状況的に援軍を向かわせるのは不可能だったともされる。関羽の傲慢な人格を嫌っていたとも言われる。兎に角、関羽の元に援軍が到着することはなく、斬首という最期を迎えた。

「恨んでいないのか？」

ケイネスは驚きを隠せず、そう口にしていた。

彼にしてみれば呪っても良い相手だ。なのに、それを気にかけるような言葉を口にしたから。

「アイツは、王の器だったよ」

それどころか懐かしむようにしてランサーの口から吐いて出たのは讃辞であった。

「……でも、養子だったから。王にはなれなかった。ボクが阿斗を殺さなかった所為で。アレが玄德の後を継げるわけがないなんてのは分かってたのにさ。ボクは殺せなかったんだ。それが蜀と玄德の為

にも、劉封の為にもなるって分かってた筈なのに。出来なかった、玄徳の悲しむ顔が浮かんで」

弱弱しくランサーは笑っていた。

「その所為で、劉封は死んじやうし。死んでからもさ、もつと辛い目に遭うし。最悪だよ」

それは、自分自身を嘲っている様に、ケイネスは思えてならなかった。関羽の死の責任を取るといふ形で劉備に斬首を命ぜられ、三十歳という短い生涯を終える。

それだけでも悲劇としては充分であるとも言えるが、併し彼がもつと苦しみを味わうことになったのは三国時代が終わり幾星霜、関羽雲長が中国国民に信仰されるようになった頃だった。

所謂三國志創作に於いて、多くの文筆家がこぞって劉封のことを、英雄を殺した悪魔に仕立て上げ屑と罵った。

それを讀んだ民衆の反応はどうだろう？

屹度、彼のことを悪だと皆が思ったであろうし、現に今広く一般に知られる劉封のイメージとはそういうものだ。

「汚名を雪(すす)いでやろうとは思わんのか？」

それ程強い悲しみになるものならば、それこそが聖杯に懸けるべき願いになるのではないかとケイネスは考えた。

けれど、ランサーは小さく首を振る。

「アイツは気高い男だった。手前の所為で死んだかもしれないヤツに助けられたとあっちゃあ、そりやもう、怒る」

「そうか……」

ケイネスはランサーが何を言わんとしているかを理解する。

要するに、自分が心を痛める程の男の誇りを傷つけたくないのだ。もう十分というほど踏み躪られた劉封の生き様に、これ以上泥を与えらるという選択は関羽雲長の中には無かった。

こういう男だからこそ、彼は信頼され、蜀漢一の将と謳われていたのかも知れない。

そして、そういう男だからこそ理想の王に相応しい——ケイネスはそんな考えを抱いた。

「——もうこうなったら、叶えようと出来る願いなんて、桃園に行くことくらいだろう。みんなでどんちゃん騒いで、あん時はこうしときゃ良かった、ああしときゃ良かったと、あいのかいの言いながら美味しいもの食べて、美味しいお酒飲んで。たったそれだけさ」

理想の王の、理想の勇士は、たったそれだけの願いを求める。

満面に笑ってそう言つてのける。

「でも、屹度、それは叶わない。だから、聖杯はケイネス・エルメロイ・アーチボルト、君にくれてやる」

その笑顔の儘、それさえ捨てると言つてしまう。

「……何故、叶わないと思つて？」

知らず知らずのうちに、ケイネスはそう訊ねていた。

ランサーは煙草を一度吹かしてから——

「蜀が滅んだのはボクの所為……だからかな？」

と答えた。

蜀の滅亡の原因というのは諸説ある。三兄弟も、稀代の軍師と謳われた孔明も、いなくなつた蜀。勇んだ姜維が無謀な戦をしたせいとする説がある。それを止められなかった劉禅の、王としての資質に問題があるという考え方も出来る。

けれどそれらを辿っていくとある所に行きついてしまう。

然う、他ならぬ関羽だ。

「どの面下げて会つたら良いか分からないんだ」

けれど、実際誰が悪いという話ではない。歴史がそうさせたとしても言い切れない。けれど、ランサーはそこに責任を感じているようだ。た。

図々しいという言葉を擬人化させたような男にあまりに似つかわしくない程、今この瞬間、ランサーは迷いに満ちた顔をしている。

——それがケイネスにとっては気に食わなかった。

「フン、下らない」

だから、鼻で笑つてやった。

「召喚から早々あれこれ人に要求しておきながらよくも殊勝な振る舞いが出来るものだ。臍が茶を沸かす」

ランサーは啞然とした顔をしていた。立ち上がり、手振りを交えて憎らし気にほくそ笑むケイネスに。

「この私にすら厚かましいんだ。よく気が知れた劉備にだってそのように振る舞いたまえよ。それがお前には似合いだ」

最早口は回り出して止まらない。元来、ケイネスという男は寡黙や冷静などという言葉とは縁が遠い。激情に駆られやすく、それでいて饒舌だ。

話し出したら止まらない性質でもある。そもそも今は自分で止める気すらない。

この際、ランサーの発言で最も気に入らない所を指摘してやろうと逸る。

「それとも何かね？ お前は自分の王がそんなことも許せない器だと宣う気か？」

ランサーが自身の王すら過少に評価する男だという一点。

そんな程度が、自分のサーヴァントなどケイネスは許せない。それであつてはロード・エルメロイに相応しくない。

痛いところを付いてやつたと、ケイネスは内心で高笑いを上げていた。

だが――

「有難う」

ランサーは安心したと言わんばかりの笑みを浮かべていた。

「……そして、御免。やっぱりボクはボクの願いを叶えることにするよ」

「フーン！」

ケイネスは鼻を鳴らした。

だったら最初からいらぬなどと言うなど、ランサーを思い切り睨み付け――ついにケイネスは忌々しさを高々積み上げた。ケイネスはそれを逸らそうとランサーの隣に腰かけ、再び冊子に集中した。

ぱら、ぱら、ぱら――。

ケイネスは暫く頁をめくり、

「むっ？」

ある頁で手が止まった。

「What (ワート) find (ファインドウ)?」

本日何本目になるかも分からない煙草に手を伸ばしつつ、ランサーはケイネスに問い掛ける。

庭先の美しい花を触っていたら毛虫を見つけてしまったような、厭な顔をしていたから。

ランサーは気になった。

「『キリツグ・エミヤ』」

「誰だいそれは?」

「キリング・マシーン、魔術師殺し……と、忌みされているようだが、何のことは無い。ただの金に群がる蠅だ」

然うケイネスはその男を称した。

ケイネスが所属する時計塔に於いて、その悪名を知らぬ者はいない。

フリーランスの殺し屋。魔術師であるが故に、魔術師を知り尽くし、最も悪辣な方法で殺す外道。金の為ならなんだってやる人非人。知り得る限りケイネスは論った。

それを聞いてランサーはけれど神妙な面持ちになる。

「如何した?」

「……経験則から言わせて貰うけれど、欲望最優先で動く人間ってのは危険だ。その手の奴はなんだってやる。裏切りだって、命乞いだって、本当に何でもだ」

「呂布奉先か?」

ランサーは頷いた。

五関突破千里行など武勇には枚挙にいとまがない関羽雲長が、三兄弟総出で相手だってそれですら倒せなかった男がいる。

それが呂布奉先だ。人中に呂布在りと讃えられる無敵の武人であり、矛に秀で、弓に秀でそれでいながら、策もあつた恐ろしい男だ。

だが真の恐ろしさは、自身の欲望を叶える為に多くの人間を裏切り、窮地に陥るや否や命乞いを出す卑劣極まるその精神性。

「思い出すのも厭なヤツだよ」

ランサーにとつては忘れ去りたい人物でもある。
自身の主をこつ酷く扱き下ろした一人であるから。

「魔術師殺しも、呂布と同じだと言いたいのか？」

「完璧にボクの勘になってしまつて申し訳ないけど……多分、方向性は似ている。警戒はしておくべきだ」

——勿論、Master（ムアスター）が負けるわけではないと思うけど。

そう付け加えられたランサーの意見に、ケイネスはふうむ、と唸つた。

顎に手を当て暫し考え込む。

「……ヤツの資料を集めておくか」

ケイネスはランサーの進言に従うことを決める。

こんなのではあるが、将としての目は確かだろう、と。だが、それで足りるだろうか？

警戒に警戒を重ねたケイネスはある人物に思い至つた。

「——それと冬木の地に向かう前に寄つておきたい場所がある」

「何処？」

さて、今それが果たして何処なのかケイネスには分からない。

探すのは簡単だろうが、根城をすぐに代えてしまうから。

故に、こう答えるしかないだろう。

「とても不味い煙草を吸える場所だ」

と——。

第七話 髑髏爆砕

聖杯戦争は既に始まっていた――。

闇夜の中、小高い丘、浮かび上がる真っ白い髑髏が一つ。

否、そう見える人であった。

細身でありながら筋肉質な五体は、黒いローブに覆われていて闇に溶ける。その所為で被っている仮面のみが浮遊している様に見えるのである。

彼、名をハサン・サツバーハ。第三次十字軍遠征によりヨーロッパに持ち帰られた“山の翁伝説”の正体。イスラム教ニザール派、通称“暗殺教団”の長に代々受け継がれる名前を持つ英霊である。

“地獄の天使（マリク）”に追従する“殺戮の天使（サバーニーヤ）”が十九柱であったように、ハサンは十九人。

丘からすぐ麓の屋敷を見下ろすこの男は、その一人である。

さて、このハサン――アサシンのクラスのサーヴァントであるが、主の言峰綺礼からある指示を受けていた。

「“遠坂邸に侵入し、遠坂時臣を速やかに殺害せよ”――か」

アサシンは言峰からの命令（オーダー）を独り言つ。

遠坂邸とは、今彼の目前に見えているものである。遠坂時臣とは、アサシンのマスターたる言峰にとつては魔術の師であり、この聖杯戦争に於いては協力関係にあった人物である。

それがどうして瓦解したのか。アサシンは考える。

そして、綺礼の言葉がはたと思い浮かぶ。

『恐れることは何もない』

それは遠坂の召喚したアーチャーのクラスのサーヴァントに対する評価であった。

アサシンのサーヴァントは気配遮断というスキルをクラス特典として持っており、その名が示す通り、マスターを殺すことに関しては全七つのクラスの内随一を誇る。併し半面、サーヴァント同士の直接対決に於いては余りにも脆い。聖杯戦争中でも最弱と言って良いだろう。

対して、アーチャーのクラスは三騎士と呼ばれる、とりわけ高い能力を持つクラスのサーヴァントの一角を担う存在だ。普通は敵わない。

けれど、言峰が下した判断は「恐るるに足らず」。

恐らく余程弱小の英霊が宛がわれてしまったのだろう、とアサシンは考える。いくら強いクラスといえども、元になる英霊が弱いという事実は覆せないのだから。

そして、それが故に主は、同盟者を裏切ることになったのではないのだろうか。勝ちが望めない相手と組んでいては、利益など何もないのだから。

其処まで考えて、アサシンは口角を吊り上げた。

「だが、マスター。別にサーヴァントも斃してしまつて構わんのだろう?」

と、豪語しつつ。

ハサンは嗤う。最弱と定義付けられる自分が直接の戦闘で敵を倒せるという事実に。暗殺者という職業柄、ハサンは生前から戦の誉れなどというものとは縁が遠かった。

自分には永遠に訪れないものであるとも、諦めていた。

だが、聖杯戦争というのは喜劇だ。暗殺者では味わえないであろう栄光までハサン・サツバーハに届けようというのだから。

愈々、アサシンの昂りは頂点に達した。大振りの曲短剣——アラブの短剣「ジャラビヤ」を逆手に持つ。そして、極端な前傾姿勢からアサシンは、

「——では、赴こう」

疾走を始めた。

丘を飛ぶように駆け下り、星のような速さで駆け抜ける。

途中、鴉とすれ違った。他のマスターが監視目的で放った使い魔であろう。聖杯戦争を作り上げた御三家の内の一つである遠坂は聖杯奪取において、大きな障害になることは明々白々。

アサシンはそれを見て、殊更に喜んだ。

我が勝利を見届ける観客がいるというのは、途轍もなく愉悦であつ

た。

——さあ、見ている。このハサンの透遁を！

愈々、遠坂邸が間近に迫り、ハサンは自身の気配を経った。

館の敷地内に張り巡らされた何重もの結界を通り抜ける為だ。

無論、ただ、それだけで誤魔化しきれるとも思わない。

併し、アサシンにはこの結界を通り抜ける確固たる自信があった。

元々、言峰綺礼と遠坂時臣は協力関係にあった。詰り、この遠坂邸にも出入りがあったということである。ハサンは幾度と無く、遠坂の警護を請け負ってきた。それ故に屋敷中の索敵、罨（トラップ）の類の位置やその性能、また盲点すらも完璧に把握しているのだ。

警報結界の間をハサンは見事な体捌きで通り抜ける。

「——他愛なし」

それは舞うような、踊るような、洗礼された動きであった。

結界破りなど、暗殺者にとってみれば息を吸う程度に簡単なことではない。

見惚れてしまうような美しい舞踊で以て、どんどん結界を躲し、アサシンは遂に中庭へと足を踏み入れる。

風穴はこれで終いだ。ここから先は、結界を定礎している宝玉を物理的な手段で以て崩し、結界を崩しながら進むしかない。

それをしたならば、警報が作動するようなプログラムも組まれているのかもしれない。

だが、

「笑止千万」

ハサンは吐き捨てた。

侵入と結界破りに関して言えば歴代のハサンの中でも随一という自負がある。故に、そんなものが動く前に壊す自信も、方法も彼の手にはあるのだ。

ハサンは手を伸ばす。結界に。

——そういえば、アーチャーには出会わなかったな。臆病風に吹かれたか？

そんなことを考えながら。

「あ……れ……う？」

併し——アサシンが伸ばしていた筈の手は無くなっていった。

「ムグッ……!？」

瞬間走る、激痛。脳内は混沌した。

何が起こった？ そう考える彼のすぐ手前の地面には、眩い輝きを放つ槍が突き刺さっていた。投擲だ。何処からかこれをアサシンに向けて放った者がいる。

ではそれは何処にいる？ 槍の刺さっている角度から類推される方向をアサシンは見極め、其方を向く。

なんと、射手は遠坂邸の切妻屋根の頂にいた。

「なっ!？」

そして、驚愕たるはその姿。黄金の髪、黄金の鎧、傲岸なる赤い眼差し、体軀から滲み出る王気。

月も出ている、星も出ている。遍く天体は、遠い夜空を彩っている。だが、この瞬間、それら総て砕け散った。

この黄金の男の輝きを前にすれば、あらゆる光は闇も同然である。アサシンは腕を失った悲しみも、怒りも、その痛みですらも忘れ去っていた。

ただ、目の前の圧倒的な存在感を恐れ、愕然としていた。

「は、はははは……」

アサシンは乾いた笑声を上げていた。

——恐れる必要はない？ ふぎけるなよ、あんなものに勝てるわけがない。

そう思つて、傍とアサシンは気が付いた。綺礼の言葉の意味に。そして、彼の真の狙いに。

真実に至つてアサシンは、

「あの男！ 言峰綺礼エ！ 謀つたなア！」

怒号を上げた。

「畜生めエエエエ！」

手に持つ短刀を無茶苦茶に振り上げ、アサシンは盲滅法に黄金へと突撃を仕掛ける。

玉碎覚悟——とは違う。怒りに我を忘れていたのだ。

この瞬間、アサシンの頭には何も無かった。目の前の、アーチャーのサーヴァントが圧倒的だという事実ですらも。

「天に立つ我（オレ）に唾をかけるか。万死に値するぞ？」

黄金のアーチャーの周りに無数の輝きが湧き上がった。彼の周りの空間から滲み出たそれは、剣であり、矛であり、一つとして同じ意匠はない、けれど絢爛たる無数の武器であった。

その切っ先の全てがアサシンに向く。

「疾く死ねエー！」

アーチャーの言葉と共に、輝く武具が甚雨の如くざんざんと降り注いだ。

まず髑髏の仮面が破碎し、その光景がはつきり焼き付く間もなく、アサシンは細切れですらない肉飛沫となり、死んだ。

絶命の瞬間、アサシンが思ったのは、黄金のアーチャーのことでも、主の言峰綺礼のことでもなかった。

思考が及んだのは使い魔越しにこれを眺めている他のマスター達に対してであった。

——嗚呼、見られてしまった。栄光では決してない、この醜態を。最期に残ったのは無念だけだった。

†

魔術師の戦いの基本に、工房を作るといふものがある。

工房とは名ばかりであり——無論、魔術的なアイテムを製造したりその調整を行ったりもするが——その実は要塞だ。

遠坂邸のように防御及び索敵用の結界に守られ、使い魔が跋扈し、いざ中に踏み込めば空気ですらその主以外には毒となつている場合もある。

兎に角、そこにいる限り魔術師は戦いを有利に進められるのである。

さて、この冬木の第四次聖杯戦争にはそんな魔術師のセオリーに則

らずに戦う者がいた。否、出来なかったというべきか。

魔術は兎に角金食い虫であり、工房を築くにも莫大な資金が欲しくなる。

金が無いものには悲しいかな、工房は夢のまた夢であった。

仕方なしに、その哀れな魔術師は神秘とは無縁の一般家庭の老夫婦を催眠にかけ、彼等の孫となることで家に住み着きそこを拠点とすることにした。

その魔術師、名をウェイバー・ベルベット。ケイネス・エルメロイの生徒にして、彼から征服王の聖遺物を奪った張本人である。

彼は今、老夫婦の二階部屋で召喚した征服王イスカンドル——アレクサンドロス三世と共にアサシンの敗退を見届けていた。

共にと言っても、イスカンドルはテレビで放映中のビル・クリントンの演説にご執心であったが。ウェイバーがその理由を尋ねると、世界征服をするに当たって当面の敵になるからとさも当然のように答えた。

世界をその手に収めかけた王は、伝承で語られている姿とは打って変わり天を衝くような巖の如き錆色の鎧を纏った大男であり、伝承通りに征服者であった。彼は未だ世界の総てを手に入れる事を諦めていなかったようである。

「——で、アサシンはどうやられた？」

アサシンが斃されたことをウェイバーが伝えるとイスカンドル——ライダーのクラスのサーヴァントは逆にウェイバーに問い掛けた。

「え？」

「アサシンを倒したサーヴァント。どんな戦い方をして、どうやって倒したのか。見ていたのであろう？」

ウェイバーはしどろもどろになった。矮躯である所為でその姿はとても見苦しく映った。

正直なところ、無数の輝きの後にアサシンが倒されていたというのが事実であり、それがなんの参考になるのかと疑問に思った。

結局、ありのままを伝えるとライダーはふむと唸った。

「……実物を見ないことにはまるで分からんな」

当たり前の結論である。

「まあ良い。寧ろ心が躍る」

磊落に笑ってライダーは突如として立ち上がった。

狭い部屋にあつては頭がつかえそうであった。

「いきなりどうしたんだよ？」

「出陣だ。支度をせい」

「出陣って……何処へだよ？」

「そこいらへ」

「ふざけるなよ！」

ウエイバーは怒鳴った。けれど、凄んで見せても彼の顔立ちは「恐さ」からはほど遠く、ライダーは見下ろしたまま微笑むばかりだった。

「アサシンの死を見ていたのは貴様だけではあるまい。これで闇討ちを警戒していた連中が行動を起こすやもしれん。見つけ次第、狩っていく」

「それは策か！ 簡単に言うけど……」

「余には他のサーヴァントにはない脚があるろう？ 優位には立っていないと思うぞ？」

そう言うなり、腰に帯びた剣を鞘から抜き出そうとする。

「待て待て！ ヤメロ！ ここであれは出すな！」

ウエイバーはライダーを慌てて止めた。

ライダーというのは騎兵だ。何かに騎乗する逸話を持つ英霊に宛がわれるクラスであり、全七クラスの内でも強力な宝具を複数持つという特徴がある。

宝具というのは英雄の逸話や武具、技の具現化である。例えば、日本の始まりの王、神武天皇は山神である大熊を鎮めた「布津御霊」という剣を持っておりそれが宝具になり得、また大軍に向けて放った矢に黄金の鳶が止まり光を放ったという逸話が宝具となるかもしれない。

イスカンダルの場合は「ゴルディアスの縄目を解く」ことが宝具であった。ゴルディアス王がゼウスに献上する戦車に繋がれた牛を

繋いでいた縄目を剣で斬って持ち出した逸話である。

二頭の牛に引かれた戦車。ギリシヤの全能神ゼウスに由来する雷を纏い、疾走すればあらゆるものを灰塵と化す無双の戦車である。名を『神威の戦車（ゴルディアス・ホイール）』。走ることに即ちが、あらゆる難題を無理矢理踏破するまさに『ゴルディアスの縄目を解く』必殺の一撃である。

無論、それは、この老夫婦の家も例外ではない。出した瞬間消し炭になる。

「……では何処で出せば良い？」

「何処か遠いところだ！」

恍けたようなライダーの問いにウェイバーは怒鳴り声を上げた。

「全く小さい男だのお」

と、文句を言いながら、ライダーはしぶしぶ窓から身を乗り出し表に出た。

ウェイバーもそれに続く——わけはなく、一度玄関から表に回ることにした。老夫婦に言い訳を告げて。

そして、下まで降りて、道端の縁石に腰を掛けホメロスを読みふけるライダーを見かけ、そこでふと疑問を思い出した。

それをライダーに言おうか如何か悩んで

「——で、何処から行くんだ。ライダー」

矢張りやめた。

とても小さいことだったから。

ウェイバーが使い魔として使役していた百舌鳥。

それを妨害するように何故か、ラジコンヘリが近くに飛んでいた。屹度、近所の子供の悪戯か何かだろうと、ウェイバーは結論付けた。

第八話 衆道疑惑

聖杯戦争の下準備を済ませた後、冬木に降り立ってまず、初日。ケイネスが活動の拠点の為に作り上げた魔術工房は完璧と言える出来であった。

工房の外壁を覆う十重に張られた結界に、周囲に取り付けられた索敵装置と迎撃装置によりまず敵を寄せ付けない。よしんば工房内に足を入れられたとしても番犬代わりに放った無数の魍魎と怨霊が襲い掛かる。

——手練れの魔術師ならばそれも退けるだろう。だが、併し、それは尋常な環境下でならばだ。ケイネスの魔術工房は大部分が異界化し、主のケイネスと彼が出入りを認めた者以外にとつては、神話に語られるミノス島のラビュリユントスにも比する大迷宮となる。当然、至る所に罠が仕掛けられた剣呑な空間であることは言うまでも無く、その状況下に置かれ続ける魔術師は精神をすり減らし続けることとなる。戦い続ける疲労は想像を絶するものとなる。そして、漸くそれを抜けても、時計塔にその人在りと謳われる鬼子、ケイネス・エルメロイが必殺の魔術礼装を数多携えて待ち構えている。

穴の無い布陣である。他の魔術師達はまず敵ではない。魔術師殺しと謳われ、近代兵器を使いこなす衛宮切嗣であろうと、戦闘機や戦車でも引っ張てこなければ突破することは不可能だろう。

尤も、この工房は見つけることすら困難なのだ。

その工房の最深部——ベッドやキッチンなどが備え付けられた庶民的でありまた今めかしくもある部屋。屹度、新築のマンションの一室だと言われれば誰もが信じたであろう部屋は、ランサー陣営の実質の生活スペースであった。

ケイネスはそこで、ソファに腰かけ遠坂と間桐の邸宅を使い魔越しに監視していた。

凶相と言つて良い程に不機嫌な顔で。

アサシンが敗退した光景を見ても尚、その顔色は変わらない。

原因は二つ。

一つは「魔術師殺し殺し」とも言えるこの工房にある。ランサーの提案——という名を被った我儘のお蔭で衛宮切嗣など問題ではなくなつたのだが、その代償に魔術師であるケイネスにとって由々しき欠陥を抱えることになってしまった。

そして、もう一つ。

「あのランサーは何処に行ったのだ！」

これが最大の原因である。

日本に来てからもランサーの奔放な振る舞いはまるで変わらなかつたのだ。流石に一日中工房から姿を消しているというわけではないが、ふと気が付くと何処かへ消えている。

パチンコに興じていたり、競馬に熱狂したり、そこで得た金を元手に——ランサーは黄金律としても扱われる閑聖帝君のスキルによつてギャンブル関係はほぼ大勝する——飲み歩いたり、その理由は様々だが、兎に角突然いなくなるのだ。

「クソウ！ よりにもよつて漸く戦局が動こうという場面で！」

尤も、ケイネスが今回苛立つているのはランサーの遣りたい放題にではない。そんなものはいい加減慣れてきた。

苛立ちの原因はもっと単純。ランサーの間の悪さ。その一点だけだ。

「騒がしいわね、ケイネス。そんなにランサーがいないのが問題なの？」

四人掛けの食卓の上で何やら物書きをしていたソラウが荒ぶるケイネスに声を掛けた。

「問題だ。ヤツがいないと方針が決まらない」

ケイネスはそう断じた。

こと人格についてだけ語れば最低ランクのランサーであるが、将としての能力は別だ。ウェイバー・ベルベットと衛宮切嗣の参加を予測し、工房についても助言をし——冬木に着くなり彼はケイネスとソラウの命を救うという活躍を果たした。

そんな彼の戦術眼は——ケイネスにとつてしてみれば口惜しいと言わざるを得ないが——頼りになると認めるしかなかった。

黄金サーヴァントの戦い方から推察される真名とクラスは？ ア
サシンは本当に死んだのか？ その上で一体どのように動くか？

魔術師として優秀であり、こと決闘に於いては負け知らずであるケ
イネスであっても戦略と戦術については素人も同然だ。これらを見
誤るということも十分に在り得た。

故に判断材料としてランサーの——戦の玄人の眼と感覚は必要に
なる。

ケイネスの中にあつたのはそういった合理的な考えだった。

併し、そんな彼を見て婚約者は、

「ランサーが優秀なのは分かるけれども。貴方、なんだか恋する乙女
みたいよ」

と、あまりにもぞつとするようなことを口にする。

「と、突然気持ちの悪いことを言わないでくれ」

「でも、同じ布団で寝たのよね？ それってつまりそういうことじゃ
ないのかしら？」

蒼白のケイネス。赤面するソラウ。

美しいコントラストであった。会話の内容に目を瞑りさえすれば。

「おい、どうして君がそれを知っている？」

「別に良いわよ。貴方のセクシヤリテイがそうであっても。どうせ私
とは望んで結婚するわけじゃないのでしょし」

「分かった、あの関羽（ドたわけ）だな！ 君におかしなことを吹き込
んだヤツは」

眉間に皺をよせ、歯茎を剥き出し、ケイネスは拳を握りしめた。

うっかり自害の命令を出してしまいそうだった。

「誤解しないで。私が彼から聞いたのはベッドに入ったということだ
けだから」

だが、ソラウはケイネスが至った“真相”を否定する。

「じゃあ、何故？」

「シヨップピングからずっと髪降ろしているから。彼の趣味に合わせて
いるのかな、と」

曇りのない笑みで、ソラウが齎した言葉はケイネスにとって、世界

の終焉を思わせるおぞましい言葉であった。

確かに、ケイネスは今現在、髪を下ろし、ランサーが選んだジャケットを着ている。併し、それは決してランサーの趣味に合わせているわけではない。

ソラウが「そっちの方が好き」と言ったからそうしているのである。畢竟、今のケイネスはソラウの趣味に合わせている状態なのだ。

「いや、ソラウ違うんだ」

ケイネスはソラウにそれを伝えようとした。

併し、出来るわけがない。今まで自分の中ですら、ソラウへの気持ちを否定していたケイネスだ。

実質の告白。羞恥と、もし否定された時の恐怖でケイネスの口はそこで止まり、赤面した。

「変なケイネスね」

その様を、何も知らないソラウは心底不思議そうな顔でそう評した。

そして、話をランサーへと戻す。

「そういえば、彼ならツーリングに出掛けたわよ。ミス・アオザキからいただいたバイクの性能を試すんですって」

アオザキというのはケイネスが聖杯戦争前の下準備で尋ねた魔術師の名である。

人形工学（ドールエンジニアリング）の分野ではかなり名の知れた人物で、生体人形——詰りは義手や義肢の職人である。

因みに魔術師としては、かなりの異端者でもあり、工房にしている建物には当然のように車やバイクといった近代技術の産物が陳列してあった。

ランサーはそれらを甚く気に入り、幾つか特に気に入ったものを貰ったのである。勿論、彼はアオザキに対して「実験される」という対価を払ったわけであるが。

「出かける前にこれを渡されたわ」

そう言ってソラウがズボンのポケットから出したのは携帯電話であった。

時は一九九四年。携帯電話は表を生きる人間にとっても珍しいものであった。況や魔術師をや、である。

「……いつの間にかこんなものを」

そうは言いつつも、ランサーのフットワークの軽さと順応の速さにはケイネスはとつくに慣れていた。

そして、ソラウから携帯を受け取ると、ケイネスは固まった。

「……どうやって使えば良いんだ？」

古く続く家系の魔術師であればあるほど、近代技術には不慣れなものである。況して携帯電話など、現代社会を生きる人々の中で手こずる者がちらほら出るような代物。

使いこなせる道理などない。

途方に暮れて、ケイネスは溜息。そして、

「ソラウ、知っていたらで良い。これの使い方を見せて欲しいのだが……」

さっさと諦めて、ソラウに助け舟を求めていた。

「え!？」

ソラウは驚き、声を上げていた。

「何を意外そうな顔をしている。君しか近くにいないんだから、君に頼るしかないだろう」

いや、ソラウからすれば、「頼る」という言葉をケイネスから聞くことが既に驚愕に値する。

天才と持て囃された人生を歩んできたケイネスはまさに天才であり完璧であった。そんな状態で形成される人格は、尊大であり自分が完成されていることを疑わないプライドの塊となる。

「頼る」ということは即ち、完璧主義者にとっての敗北だ。自分の欠陥を認めることに他ならない。

何かケイネスの中で変わろうとしているのかもしれない——ソラウはそのように感じた。

「如何した? もしかして君も分からないのか?」

不安気に訊ねるケイネスを見てソラウは柔らかく笑った。

「いえ、大丈夫。ランサーから使い方は教えてもらったから」

そう言つてソラウは携帯の使い方を説明した。

今この瞬間を生きる若い二人よりも、三世紀の中国を生きたランサーの方が機械に慣れるのが早いという事実はどこか面妖に感じ乍らもケイネスは携帯の操作方法を確認する。

そして、早速、ランサーの携帯へと発信する。

ツーコールでランサーは出た。

『もしもしヨロシ。ランサーアルヨー』

素っ頓狂は、電話にあつてすら素っ頓狂であつた。

「……なんだその喋り方は」

『いやあ、なんかボクの research (ルイスアツイ) に依るとね。中国人はこう話すのが right (ルアウイトウ) らしくてね』

「その調査は恐らく間違つている」

ケイネスは断言した。

恐らく日本人特有の、外国人を属性付けして捉えがちな、悪癖によるものだろうと当りを付けた上で。

『そうなの？ だとしたらボクは倭人に一杯食わされたわけか』

「それは残念だったな。で、早速本題に入らせて貰うが」

話の主導権を握らないと何時までも馬鹿話をするに違いないと考えたケイネスは無理矢理話を進めることにした。

が、

『アサシンが敗退した、だろ？』

結局それは、徒花に終わる。

「何故それを？」

『当ててみて』

ミキッ！

ケイネスは自身の額に青筋が立つ音を確認に聞いた。

「……遠坂邸にいるからか？」

『Not (ナアト)。ボクがいるのは廃工場さ』

一応、クイズに乗ってみたが、ランサーのお道化た返しが、逆にケイネスを苛立たせた。

そんな自分を落ち着かせようと一呼吸置き、

「……廃工場？」

ケイネスはランサーの発したその言葉に引つ掛かるものを覚えた。

「何故そんな所にいる？」

『人を殺しているんだ——否、いたといふべきかな？　もう殺してしまつたよ』

返つてきたのは意外な回答であつた。

併し、驚愕はしなかつた。人の血を見る事が当たり前な魔術師にとっては、何処にでも転がっている日常であるから。

「それはマスターか？」

『それは多分Not（ナアト）。全然、無関係なヤツだと思う』

そして、一寸待つてねという声の後、電話口から何かを漁る様な、ごそごそとした雑音が聞こえてきた。

『あ、今死体から身分証を見つけた。それによるとだね……』

そして、ランサーは名前を告げる。

『“雨生龍之介”——だそうだ』

ケイネスには覚えのない名前であつた。

第九話 作戦会議

世間を騒がせている殺人鬼。

ランサーがその噂を聞いたのは冬木に来てすぐ。

ランサーとケイネスが来日したのは他のマスターよりも遅れていたとはいえ、聖杯戦争は未だ大きな動きを見せてはいなかった。回らない風車を回すには息を吹きかけ風を起こせば良い——が、そうすることはあまりに短慮に感じられ、ランサーは風が吹くまで待つことを決めた。

尤も、ランサーは果報を寝て待てるほどのんびりとした性質ではない。

時間があればやるべきことと自分のやりたいことをやりたい。そして、やるべきこと——拠点を決め根城を築くことはもうその時点では終わっている。となれば、あとはやりたいことをやるだけだ。

思い立ったが吉日。ランサーは冬木の街に繰り出した。無論サーヴァントとしてやるべき仕事は全てこなしながら、合間にこつそりと抜け出すという体で。

そんな毎日を繰り返した或る日。ウイスキーをメインに扱うどころかといえど成熟した男女が集うようなバーであった。偶々一緒に飲んだ淑女が、世間話として近頃の冬木の治安の悪さについて論じた。

なんでも血を抜かれた奇妙な遺体が見つかるだとか。春売りの女、浮浪者、果ては塾帰りの子供まで年齢も性別もばらばらで、犠牲者に関係性もない。

巷では吸血鬼の仕業だのと、騒がれている猟奇殺人事件。

淑女はそんな話をしながら、何処かに守って下さる殿方はいないのかしらとランサーに抱き付いたもので、ランサーもこの一夜に限れば騎士になることも吝かではないと答えはした。

併し、女の閨にあつても、ランサーは女の渴きを満たすことに集中できなかつた。

男としては実以て恥ずべきことなのかはしれないが、ランサーの頭

にあつたのは殺人鬼のことだ。

生前、善を貴ぶ王に仕えていた所為であろうか。どちらかといえば、中庸と定義されているランサーの性質は善性に依っていた。戦に於いて、民を巻き込もうとする者が許せぬ程には。徒に命を弄ぼうとする行為に義憤を覚える程には。

次の日の夜には、ランサーは魔術師アオザキから賜ったバイクを乗り回し、冬木中を見回った。

僥倖なことに、件の殺人鬼はいとも容易く見つかった。

さらに僥倖は今まさに、一人の十代も半ばになろうかという年頃の乙女に手を掛けんとする場面に間に合うことが出来たことだろう。

殊更に僥倖だったのは、乗っていたバイクがエンジン音を極力弱めるような改造を施してあつたことだろう。

ランサーは犯行現場の廃工場に侵入すると、有らん限りの速力で以て、殺人鬼雨生龍之介に迫り、腰に隠し持った匕首で首を撥ねた。

自分で自分を褒めてやりたくなる。ランサーはその手際について、そう述懐した。

かの始皇帝も荊軻ではなく、自分がやっていたならば暗殺に成功していただろうとも強く自信すら抱いた。

併し、一つ問題が起こった。暗殺とは撤退するまでが暗殺だ。対象を殺した後によしんば捕まりでもし、口を割ってしまった場合にはその首謀者に危険が及ぶ。故に成し終えたら、音も立てず、髪の毛一本、纏う衣服の糸屑すら残さず、即座に退散しなければならぬ。

無論、ランサーもそうしようとしたが——刹那、獲物にされかかっていた少女が倒れてしまった。極度の緊張と、それに因る疲労からだろう。

ランサーは途方に暮れた。夜も深まっている。そんな中、年頃の娘を一人放つていくわけにもいかない。

起きるまで、ランサーはラジコンに興じることにした。これもアオザキから貰ったもので、ビデオカメラが内蔵され、コントローラーに備えられたモニターと連動し、飛行中の映像を見る事が出来るといった代物である。

——暇つぶしにはなるだろうと、遊んでいたら遠坂邸に丁度差し掛かり、そこでアサシン脱落の瞬間を目撃した。

このような内容を、ランサーは電話口に向かって説明する。

『——それで本題だが』

「アサシンの脱落は *ruth* (トウース) か。アーチャーの正体は？

これからどう出ようか？ だろう？」

『こういう時のお前は、本当に話が早いな』

「そりやまあ、ランサーのサーヴァントだからね。速さには自信あるよ」

ランサーは、相手が見えていないにも関わらず口角を吊り上げてみせた。

ところで槍兵のサーヴァントは確かに、聖杯戦争の七騎のクラスに於いては、速さが最高値であることが適正となるが、物事の理解の速さはまるで関係のない概念である。

『冗談は良い。本題に移ろうか。まず、アサシンだ』

「Master (マスター) はどう思うのさ？」

ほんの少し間が開いて、

『ムシが良すぎる——というのが正直な感想だな』

と、ケイネスが考えを述べる。

「確かに呆気ない最期だったね。あのアーチャーがいくら強そうだとしても、一寸簡単にやられ過ぎだ」

『お前の目から見て、一矢報いる——詰り宝具を使う暇はあの戦いにあったと思うか？』

「アサシンの最後っ屁のチャンス？ あのアサシンの技量がどれほどか見た映像だけじゃ分からないからアレだけど……あつたんじやないかな？ まあ、持つてる宝具の使い所が限定されてて使えなかったという場合も考えられるけど」

フムと、ケイネスが短く理解を示した。

そして、熟考に映ったのか、暫く受話器が沈黙する。

『私はあのアサシンをフェイクなのではないかと考えているが……どう思う？』

「その可能性はあり得るよ。でも、そのフェイクというのはどうやって作り出したと思う？」

『そこが問題だ。あのアサシン、低いながらもしつかりとステータスが見えていた。そう考えると本物なのだが……』

例えば、何らかの魔術でサーヴァントの偽物を作り出し、幻覚に依ってステータスを見せるといふ手段もなくはない。だが、その偽物を作るには、高度な降霊術が——それも降霊術の達人であるケイネスにも匹敵する技量が必要になる。幻惑も同様のことだ。

まだ、参加者全員の顔が明らかになつたわけではないが、少なくともケイネスとランサーが知る限りそれが出来る魔術師の参戦は確認できない。

『可能性としてはアサシンとキャスターのマスターが手を組んでいた、か』

キャスターとは、魔術師のサーヴァントである。魔力の高いサーヴァント、魔術を扱う逸話のあるサーヴァントなどが該当するクラスであり、そこに嵌る様な英霊であれば、成程ケイネスの考え通りのことは遣つて退けられるだろう。

「或いは元々アサシンがそういうスキルなり宝具なりを持っているかだね」

と、ここでランサーはある英霊の可能性を示唆した。

「『ラシード・ウツデイン・スイナーン』って分かるかい？」

『確か暗殺教団の指導者の一人であつたな。それが如何した？』

「そうだ。そして大麻（ハシン）を使い、多くの暗殺者を育て上げ、山の翁」と呼ばれてしまった男だ」

山の翁伝説の大凡はこうだ。

ある山に楽園を築く老人がいて、下界の若者たちを連れ去り、麻薬を用いて彼等をもてなす。その薬の虜になつた若者たちはさらに薬を欲し、老人の言葉に従うようになり、十字軍の主だった将たちを暗殺する為の手駒となる。

山の翁は無論、暗殺教団の歴代の長達に受け継がれる名前、ハサン・サツバーハを指す。

併しながら、それ以外にも山の翁と称された者がいるのだ。それがラシードである。

『……成程。この聖杯戦争のルールのアサシンは“ハサン以外は呼べない”となっているが正確には“山の翁以外は呼べない”なのだと、そう言いたいわけか』

「Exactly（イグザツチュリー）。で、恐らく山の翁伝説そのものを宝具として持ってきてるのではないかとね」

『無限にアサシンを生み出す宝具ということか。もしそうなら厄介なぞという問題ではないな』

聖杯戦争が進めば進むほど町にアサシンが跋扈することになる。

然も麻薬で熱狂させた多くの若者たちを使い、十字軍と徹底抗戦したと言われるラシード・ウツデインであるが個人の技量に於いても相当優れていたと思われる。

何しろ当時のイスラーム王、サラデインの邸宅に忍び込み枕元に毒短剣と警告文を置いて誰にも悟られずに帰っていたという逸話を持っている。王の寝所に――ましてイスラーム至上最大の英雄とも言われるサラデインの閨に忍び込むことが容易い事ではないのは言うまでもないだろう。

「――まあ、どんな事実にしる警戒を怠らない方が良いね。表に出る時は幻惑と自動防御の術式を忘れずに」

『無論そのつもりだ。……魔術殺しのこともある』

ケイネスは衛宮切嗣が殺した魔術師について過去七年まで遡って調べていた。その中で遠くからの狙撃で仕留められた者を見つるのは至極簡単であった。

『それで次は黄金のサーヴァントだ。お前はアレをどう見る？』

「Strong（ストロング）だ、と。それで宝具一杯持つてるなと思って」

『子供のような感想だな』

「子供みただいだというのは自覚している。で、実際、アレは強かったのかい？」

ケイネスが詳しいステータスを確認しただろうと思い、ランサーは

訊ねた。

『総合値で言えばお前と同等だった』

「成程。なら問題はあの大量の宝具ってワケだ」

『……真名に当りは？』

「あのぞんざいな扱いから察するに余程多くの宝物を手にした英雄だろうね。竜を倒して宝を得たシグルドだとか、それと同一視されるジークフリートだとか」

そして英雄の名を列挙していき、ランサーはある名前に当たる。

「——総て見たる人（ギルガメツシュ）」だとか」

その名を聞き、ケイネスの声が上ずった。

この世の総ての財宝を有したとされる古の王。総ての英雄の原点とも言われる、最強最古の存在だ。

若しランサーの言葉通りの者が出てきてしまっているならば勝ち目などあるわけがない。

「Reiax（ルイラアックス）、Reiax（ルイラアックス）。まだ慌てるんじゃない、Master（ムアスター）。もし仮にギルガメツシュだとしても勝ち目はZero（ズエロ）じゃないし。それにこの関羽雲長にしてみれば、砂漠の砂粒一つほどでも可能性があるなら、それは最早勝ったも同然だからさ」

ランサーは自信を以て笑い、見えていないケイネスに向かってサムズアップした。

虚勢ではない。況して優しい嘘でもありはしない。

中華一の英雄「関羽雲長」として、生き抜いたという自負が、唯一絶対の自信となっているのだ。

『ああ、頼もしい限りだな。偃月刀の閃き、存分に見せて貰うぞ』

何処か嫌味な言い回しであるが、ケイネスなりの精一杯の激励だろうとランサーは胸を叩いた。

「任せてくれ！」と。

『だが、これからどう動く？』

「明日から街を徘徊して手当たり次第サーヴァントと戦う。恐らくア

サシンが殺られたことで表立って活動する連中も出てくるだろう。それを狙う奴もいると思う。で、その内一つでもこつち側に引き入れる」

『同盟を組むということか?』

「Certainly(サトントリー)。あの黄金のサーヴァント兎に角得体が知れない。有利に出られるヤツがもし一騎でもいたならば、ソイツと一緒に戦いたい」

『同盟を結べなかつた時は?』

「ソイツと金ぴかが戦うまで逃げ回る。戦った所で疲弊しきつた隙を見て横合いから殴りかかれれば一網打尽に出来る筈だ。でも、Bett er(ヴェトウアー)なのは、仲間にする事だと思う」

『そうか……ならばそうしよう』

と、気のないように納得しながら、それでいてケイネスはランサーの案を気に入った。

誇りや矜持など微塵も入る余地のない貪欲なまでに勝ちを狙う姿勢も雇われの狩人として悪くない心構えである。

だが、故にケイネスにとって一点、気に入らないことがあった。

『ところで、貴様、何故勝手に殺人などした? 私の許可も無く』

ランサーが自分の意思で勝手に人の命に手を掛けたことである。

それを指摘されランサーは意外そうに眼を丸くした。

「堅気に手を掛けるのが気に入らないかい? それともボクの行為が偽善だとも?」

『そうじゃない。一言声を掛けろと言ったんだ。神秘を流出に気を払った殺しならばいくらだって許可してやった』

魔術師は元来、非魔術師を見下す傾向にある。

ケイネスもその例に漏れない。その辺に転がっている人間が一人死のうが、一億人死のうが知ったことではない。その所為で神秘が諸人に知れ渡り、その持つ力が弱まったとあつては魔術師として由々しき事態であるが、そうでないなら如何でも良い。

それよりも、ランサーが「主従」をないがしろにしたことが少しだけ気に食わなかつたのだ。

ランサーはそれに思い至って苦笑する。

「ごめん。ボクが鬱陶しく思ってる蚤一匹蹴散らすのに、主の許可がいるとは思っていなかったんだ。今度からは気を付けるよ」

『蚤と勘違いしたなら仕方はないが、一応人だ。気を払ってくれたまえ』

尋常な感性の人間が聞けば、ブラックジョークにしても性質が悪いと思っただろう。

併し、それを指摘する人間は誰もいなかった。

『ところで、お前が助けたとかいう少女はまだ起きないのか？』

「帰りが待ち遠しいかい？」

『突然、気持ち悪いことを言わんでくれ』

「ええ……」

辛辣なケイネスの物言いに涙目になっていると、噂の少女は目を覚ました。

寝ぼけたように眼を擦っている。

そして、胴と頭が離れた雨生龍之介を見つけ、

「ひっ……い！」

短く悲鳴を上げた。

ランサーは笑顔を作り少女に歩み寄ろうとした。

併し、少女は後退る。自分も殺されると思っっているのだろうか？

そう考えたランサーは、

「安心してくれ。君を傷つけようとした不屈きな輩はボクがこの手で始末した。速くお家に帰ると良い」

と声を掛ける。すると、少しだけ顔から緊張が抜けた。

『……またナンパか？』

その様子を電話越しに効いていたケイネスが一言。

「君は主といえども、本当に無礼だね。違うってばさ」

『ならさっさと帰ってこい。ソラウが肉まんを欲している』

「おいおい、今何時だと思ってるんだよ？ 太るぜ？」

『……それを帰ったら言ってやってくれ』

人間の体というものは、基本的に昼間は動き、夜は休むことを想定

して作られている。故に、夜に摂取したカロリーは蓄積されやすい。おまけにも肉まんである。

女性のソラウにとっては大きな問題だろう。

ケイネスもそれに気を遣れぬほど、女というものを知らないわけではない。だが、相手がソラウである為、強く出られなかったのだ。

ランサーは深く溜息をついた。

「分かった、すぐ帰る」

そう返して、ランサーは携帯の通話を切った。

そして、少女に背を向けて、何事もなかったかのように、廃工場を後にした。

幕間一 術師現出

ランサーは一つ大きなミスをしていた。

少女を、見逃してしまったことだ。

雨生龍之介に殺されかけた少女は、名前を右京薫といった。

精気が感じられないほどに青白い肌と、それであっても怪しく映えるアンニュイな美貌以外は取り立て言うべきところのないように見えるただの女子高生であった。

少なくとも、ランサーの目にはそう映った筈だった。

併し、少女は驚くべき行動に出た。ランサーが立ち去ってからおもむろに、龍之介の死体を探り出したのだ。

理由は単純であった。何か面白そうなものがないか、好奇心が湧いたからだ。

これが千年ほど昔であったならば、ただ卑しいだけの行為であったが、今は二十世紀。移ろい行く常識は、彼女を異常と定義するだろう。そして、彼女は一冊の和綴じの本を見つける。慶応二年と書かれた奥付からして、相当な古書であり、捲ってみると実際、蚯蚓がのたつたような墨文字に満たされた中身であった。

右京薫にとってそれを読み解くことは容易かった。高校生である薫にとって漢文や古文は常に触れているものであったし、それに関していえば高校生の枠で考えると持ち過ぎているほどに知識があった。

だが、内容は別だ。そこに書かれていたのはあまりに胡乱で奇々怪々。理解をしろという方が難儀であった。

所謂、降霊術。どうも、神話や歴史に生きた人物を式神とする術式なのだとか。畢竟するにオカルトであった。

霊脈や、魔力、抑止力の使者が云々と、怪しげな専門用語が連なっているが、

——恐山のイタコみたいなものだろうか？

と、薫は結論した。

そう考えて薫はハッと腕時計を見た。ポニーテールの背の高い美人——と薫が思った人物がいなくなつて大分時間が経っていた。そ

れだけに本の内容に魅了されてしまっていたのだ。

「……どうせなら、行く所まで行ってみようか」

薫は近所のアパートで一人暮らしをする気ままな女子高生であり、門限も、帰りを待つ家族もいなかった。

気にするものは何も無し。

そう考えてすぐに、薫はまた死体を漁り、そこから刷毛を見つけ出す。

自分を殺そうとした目的はこれだったのか、と薫は腑に落ちると、切断された首から「絵具」を絞り出す。

そして、刷毛を真つ赤に染めると、本にあった通りの魔法陣を書き始めた。

「……退去の陣を四つ刻み召喚の陣で囲む」

陣の書かれたページの走り書きの文言をぶつぶつと口ずさみながら、少女は陣を書き上げていく。

そうして出来上がったものはあまり綺麗なものではなかった。彼方の方が歪み、所々線が掠れてしまっている。

けれど、一応は形になっている。

あとは詠唱するだけだ。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公——」

一言目を唱えると変化はすぐに起きた。

血で描いた筈の陣を作る線が青白く輝き出したのだ。その瞬間、右手の平に痛みが走った。ふと見ると、其処には、星を思わせる痣が現れていた。

本に書かれた内容が丸きり嘘ではないという確信を得て、薫は唄を紡ぎ出す。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

全身の骨を締め上げられるような妙な痛みを覚えながら、薫は気にせず、儀式を続ける。

「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。繰り返すつどに五度。ただ満たされる時を

破却する」

何かが——どろっとした何かが自分の中に入ってくるような感覚を受けた。まるで、ウイスキーを大瓶一本飲み干した時のような、体内を逆流する気持ち悪さ。

併し、薫はそれに頓着しなかった。

「——定礎（せつと）。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯のよるべに従いこの意この理に従うならば答えよ」

薫は、ただの高校生であった。もしかしたら、先祖が魔道の者であったのかもしれない。けれど、薫自身はただ普通の高校生であった。

だのに、まるで薫は何年も魔術の修業を積んでいるかのように、あつさりと五体を蹂躪する魔力の奔流に耐えている。

「誓いを此処に。我は常世総ての善となる者、我は常世総ての悪を敷く者」

愈々、超常現象は占め捲りを迎える。

光は辺り一帯を白く染める程輝き、風は金切り声を上げながら、嵐のように渦巻いている。

おおと、感嘆の声を上げそうになったのを、薫は寸での所で呑み込んだ。

最後の最後で総てを台無しにするわけにはいかない。此処まで来たんだ。絶対に最後までやり遂げたい。

「——汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

そういつた思いから一気に最後の一小節を言い終えると——
「うわあああああー！」

突然、爆風が巻き起こり、薫の体は工場の柱に打ち付けられた。

一面を覆うほどの粉塵。何が起こったのか、薫には見当も付かない。というよりも、背中の痛みが尋常ではなく、それに気を払う余裕すらない。訳の分からない儀式などやるものじゃないと、深く反省した。

「……やれやれ、酷い召喚だ。そもそも僕は聖杯戦争に呼ばれない筈

なのだけど。この召喚の所為か？」

土煙の中に一つの人影があつて、ぶつぶつと何かを呟いていた。そして、漸く辺りが見えるようになって、薫の目に留まったのは魔法陣の辺りに出来たクレーターのような大穴。そして、その中央に立つ少年であつた。

「綺麗……」

薫は自然と少年を見てそう呟いていた。

一点の穢れなき、白い肌。蒼穹のように澄んだ碧眼。絹を思わせる美しいブロンドの髪。

薫には、十歳から十二歳ほどの子供に見えた。

白いYシャツに留め具が金で出来たタイをしており、濃紺のハーフパンツを履いている。靴は鱧皮で、ソックスには本物の金で刺繍をしてある。一見すると、ヨーロッパの王室育ちのようにすら見えるが、明らかに体に合っていないフード付きの浅葱鼠色のローブを羽織つた姿が怪しげな雰囲気醸し出す。

「ねえ」

「ひやつ?! な、何?!」

ふと少年に声を掛けられると、薫はあからさまに慌てた。

見つめ過ぎて、不愉快に思われてしまったのではないかと。

だが、それは杞憂に終わる。

「君が僕を呼んだの？」

失礼だとか、喧嘩を売っているのかといった、言葉が遣って来ると、身構えていた薫は拍子抜けする。

「多分そうだと思う」

状況から薫はそうであろうと判断した。

「そうか、なら僕が君のキャスターだ。必ず君に聖杯を齎すことを約束しよう」

そう言つて小さく頭を垂れる。

だが、ここで薫は疑問を抱く。

「聖杯って何? この本にも書いてあつただけけれど。キリスト教?」

「知らずに召喚したのか……」

本を見せ、まさかの問いを投げかけるマスターにキャスターは唾然とする。

そして、悟る。少女は何も知らないのだと。

キャスターは頭を抱えた。

「――成程。そうと分かれば仕方ない。何処か落ち着ける所に行こう、総て話す。えっと……」

「右京薫です」

「では、薫、行こうか。君の都合の良いところで構わない。案内してくれ」

そう言いながらキャスターは身を翻し、歩き出した。

「あ」

その時、薫は声を上げた。

背中のローブに大きく刻まれた五芒星を見て。

「五芒星……君、安倍晴明なの？」

そう声を掛けられて、キャスターは足を止め、振り返った。

「何も知らないんだと勝手に決めつけたけれども。成程、召喚されるモノがどういう存在か理解はしているのか」

「本に書いてあったから」

「応用力があるね」

キャスターは笑って、薫を褒めた。

それを見ると、トクンと胸が鳴る。

「でも、残念ながら僕はハルアキラじゃないよ。これは、ハルアキラの星じゃない」

彼の言葉で、薫は我に返る。

そして、そこで漸く、自分の意識が浮遊していたことに気が付いた。

「じゃあ、何なの、それ？」

不自然がないように、薫は話を繋げる。

「この星は……僕の友であり、師匠でもある、偉大な魔術師の紋章。絶対に忘れてはいけないものだ」

キャスターは何処か嬉し気に、そして誇らしげに、だが痛ましい顔

で語った。

故に薫は気になった。

「ねえ、教えてくれない？ 貴方の名前は？」

彼の名前が。

「――」

その名を聞き薫が抱いた感想は、

「パン屋さんみたいな名前だね」

と、いうものだった。

――斯くて、最後のサーヴァントが現れ、聖杯戦争は本格始動する。併し、この戦争に関わる誰も知らない。このキャスターが至上最悪のサーヴァントであるといふことを。

†

【CLASS】キャスター

【マスター】右京薫

【真名】??? (パン屋さんみたいな名前)

【性別】男

【身長・体重】148cm・52kg

【イメージカラー】アイズグレー

【特技】大体全て

【好きなもの】友達、出会い

【苦手なもの】別れ、独りぼっち

【天敵】神の子にしてユダヤ人の王

【属性】中立・中庸

【ステータス】筋力B 耐久B 敏捷B 魔力EX 幸運B 宝具E

X

【クラス別スキル】道具作成EX・魔力を帯びた器具を作成出来る。規格外を示す彼の道具作成は魔術師として頂点に立っている。

陣地作成―：とある理由によって彼は陣地作成のスキルを持たない。

【固有スキル】???

【宝具】???

【Weapon】???

【解説】連続殺人鬼、雨生龍之介の獲物だった少女、右京薫が気紛れで行った儀式によって現れた最後のサーヴァント。本来は聖杯戦争に呼ばれる訳がない存在らしい。五芒星の描かれたローブを羽織り、最も偉大な魔術師が師であり、友であると語る。

第十話 青龍艶月

「冬木大橋」という名の川に掛った大きな鉄橋を渡るとそこには公園があつた。

海が近くに見える。星を帯びた濃紺の夜空が水面まで降りて、まるで天と海が結ばれているよう。

ケイネスとランサーがそこまでたどり着くと、塩の匂いを含んだ風が、肌を撫でる程度の穏やかな寒さを連れてきた。

そこでケイネスはホットのブラック珈琲を、ランサーはピーチネクターを購入し、今度はベンチを探す。

海がよく見えるような位置にそれを見つけ、

「ふう」

「ふひい」

二人して息を吐き乍ら、腰を下ろす。

海を見ながらだらしなくベンチに背を凭れながら、缶ジュースを飲む姿は脱力しており、仕事帰りの労働者と見紛う程あつた。

「捕まらないな」

「捕まらないねえ……」

実際、彼等は、労働でこそないものの一日動き詰めで、疲れてはいた。

戦い方を決め翌日、朝夕問わず、冬木中を探索したが、一騎のサーヴァントとも巡り会わない。

手当たり次第に戦う筈が、その手当たりすら出来ない有様であり、流石にランサーもケイネスも、消沈し始めたのである。

「実はね、今日一日、ずっと一騎のサーヴァントを追いかけ回してたんだよ」

ブクブクと泡を立てるように、ネクターを飲みながら、ランサーがそんなことを話始めた。

「そうなのか？」

ケイネスは聞き返した。

サーヴァントの基本能力として、実体・霊体化に問わずお互いの気

配をある程度探知できるといふ能力がある。ランサーの場合は周囲四〇〇〜五〇〇mほどであり、ケイネスは主にその能力を頼りに今まで探索を続けていた為、一騎に絞って行動していたことを知らなかった。

「悪い。こういう大事なことは先に言わなきや駄目だったね」

缶を銜え乍ら、ランサーは煙草に火を点ける。

そして、缶を口から離して、まず一呑みする。

「奇襲を掛けようと一気に近づくと、向こうも遠ざかる。それを繰り返してたんだ」

「だが、何故その一騎に絞ったんだ？」

他に仕掛けに行くという発想もあった筈である。

それに対しランサーは答える。

「気配の質から言つて、実体化中なのは明々白々だった。それで戦いたくたてしようがないヤツなんではないかと思つてね」

「単純だな。だが、実際逃げられたのに、どうして追い続けた？」

「そりゃ、相手のクラスや能力を確かめる為」

吸い込んだ紫煙をジュースで流し込みながら、ランサーは答えた。

「『逃げられた』と、一口に言つても色々だろ？ 例えば突然、点と点で気配が移る様なことがあれば、高度な魔術を扱うキャスタークラスのサーヴァントか瞬間移動に類する宝具なりスキルなりを持ったサーヴァントだ。それ以外の場合——まあvector（ベクトル）性を持った線の移動だね。その速度で以て、騎乗か徒歩（かち）かが判断出来る……まあ、ギリシヤのアクレウスみたいな特別速いやツが相手だったら、見誤るだろうけど」

なるほどと、ケイネスは感心した。

「それで、相手のクラスは分かったのか？」

その問いにランサーはまず、ジュースを啜った。

「恐らく、ライダーだね。しかも、天馬みたいな魔獣よりも上の幻想種にCategorize（キャテゴルアイズ）される生き物か——若しくはそれ並の性能が出る船か戦車かの持ち主だと思う。加えて言えば、それには飛行能力がある」

幻想種というのは、不死鳥や竜のような所謂伝説上の獣のことである。『魔獣』というのはその幻想種の最下層の呼び名であり、その上に『幻獣』さらには『神獣』と続く。

ランサーは追っている中で気配が弱まっていく方向とその速度でいて、飛行能力を持つ『幻獣』以上の生き物か、それに匹敵するような能力を持った乗り物と判断したのだろう。

それは間違いなく宝具であると言え、また、持ち得るクラスはライダー以外では普通は在り得ない。

「いやあ、ココが中国ならボクも『愛紗』を呼び出して、追いつけたんだが。こればかりは知名度補正の問題だからしょうがない」

英霊の強さは呼び出される地域の知名度に左右され、その際に宝具や一部スキルを失ったり逆に追加されたりする場合がある。

ランサー、関羽雲長の場合、それは、

「あ、愛紗ってボクの馬のことね」

日本での召喚では、失うことになる愛馬のことを指す。

「お前の馬というと、赤兎馬のことか？」

関羽雲長は、魏に召し抱えられた時、曹操から多くの贈り物を授かった。

その一つが赤兎馬という名馬である。三国志最強とも言われる呂布奉先が乗っていた、血汗馬と称される赤い馬で、一日に千里を駆け抜けるとも、兎が跳ねるような速さで走るとも讃えられた駿馬の中の駿馬だ。

確かにそれがもし、この場になれば機動力は申し分なくなるだろう。だが、ケイネスの中には疑問が生じる。

「それで幻獣だの神獣だのに追い着けるのか？」

「出来る！ ボクの愛紗はね、羽が生えてて飛べるんだ！ しかも神獣だし、超高速で禹歩とか出来る！」

……それは本当に馬と呼んで良いのだろうか、ケイネスは疑問を抱く。

因みに、『禹歩』というのは中国の呪術の一つ『道（タオ）』の秘伝書、『抱朴子』に刻まれた歩行法である。『歩く』こと自体が詠唱

となり、魔除けや清めの靈験を示すといったものだ。

尤も、不世出の魔術師たるケイネスであつても知っていることはそこまでである。魔術師とは研究者であり、時計塔に於いて呪術は、学問として研究する価値のないものと軽視されている為、ケイネスもこれまで学ぶ機会はなかったのだ。

「——と、話を変えるが一つ良いかな、Master（ムアスター）」
「閑話休題か。構わん、何だランサー？」

聞きながらケイネスは珈琲を飲もうとした。

だが、それがいけなかった。

「さつきから件のライダーに、逆に監視されてる。鉄橋の辺りから」
ケイネスは珈琲を嘔き出すことと相成った。

「さつきも言ったと思うけど、向こうは乗り物持ち。こっちは頼りの愛紗がご生憎とない始末でありまして。H A H A H A！ 控えめに言つて、割と不味い」

「切羽詰まり過ぎだろうー！」

ケイネスは声を張り上げた勢いで立ち上がった。

まさか知らず知らずのうちに窮地に陥っているなどとは思ってもよらない。

「まあ、まあ、Relax（ルイラアックス）。ちよつと冷静になろうぜ」

ランサーはへらへらと笑いながら、ジュースを飲み干し、缶に吸い終った煙草を入れ後ろ手に放る。

「これが冷静でいられるか！」

ケイネスは怒鳴る。

不安を煽つたのは果たして誰であつたか。

その張本人は、自らの言葉通り至つて冷静になり、煙草に火を点け、また吸い出していた。

「……疑問に思わないか？ Master（ムアスター）」
「疑問？」

「どうしてライダーは攻めて来ない？ こっちは見るからに気が緩みまくつてるといふのに」

その指摘に因ってケイネスはハツとした。

そう、仕掛けるタイミングはいくらでもあった。

然も、辺りを見渡せば人もいない。これを好機と言わずなんというか。

それでも、攻撃を仕掛けて来ないのは――

「もしかしたら、ライダーは此方が他と戦うのを待っているのではないか？」

ケイネスはそう考えた。

そうだねと、ランサーは微笑み、煙を吐きながら同意する。

「――ボクもそうだと思う。でも何で待つてるのかな？」

「それは……戦いの後、疲弊した状態を襲う方が効率的だからだろう？ 常道だ」

「と、ボクも思いたい。その方が遥かに楽だ」

ランサーは別の可能性も視野に入れているようであった。

「それ以外に何かあるという？」

ケイネスの問いに、ランサーは苦々し気に顔を歪めていた。

「この世にはね、予想だにしない馬鹿に出るヤツつてのがいる。そういうヤツは厄介だ。次の動きがまるで読めない」

はあと、ランサーは溜息を吐いた。

「……これは完全にボクの予想なんだが。鉄橋にいらつしやるライダーは恐らくその馬鹿だ」

「お前の予感は何ほど当たる？」

「劉封に援軍を出す時、出しながら来ないと思った」

「それは凄い」

ケイネスはまるで無表情であった。

「いつそのこと、何か変化があれば……」

そう言いかけて、ランサーは煙草をポトリと落とした。

そして、突然立ち上がると、五体から魔力を流出させ戦袍姿となる。

サーヴァントの衣服や鎧は魔力を編んで作られている為、現世の服を着ている状態からでもすぐに戦闘へと移ることが可能なのだ。

……余談ではあるが、上を肌蹴、鎖帷子だけとなった。新しい自分

“スタイルに調節している辺り、ランサーの芸は細かい方だと言えた。

「——変化があつたようだな」

「ああ、こつちに一騎、実体化状態で近づいて来てる」

「死合うか？」

「そうすれば、ライダーも出てくると思う」

“正体の掴めない敵”というのは、それだけで精神衛生上良いものではない。

いつそ、危険を冒してでも正体を暴いてしまった方が賢明——ランサーはそう判断した。

そして、万が一窮地に陥った場合の退路を確保する策も、ランサーの手札の中にはあつた。

「そういうわけだ、Master（ムアスター）。人払いと、自身の防御術式の準備をしてくれ」

そう頼みつつ、ランサーはその手に魔力を集中させる。光の奔流が渦巻、現れたのは自身の背丈よりも大きな薙刀であつた。

その刃の異様たるや凄まじい。

まず、刃渡りが人間の片腕ほどもあり、柄が短ければ大剣と言つてすら通じるほどの巨大さ。

その形と、極限まで磨き抜かれた銀（しろかね）の輝きは、白月を連想させる。

そして、そこに在るだけで辺りの冬の冷気が、さらに下がったような錯覚を覚える圧倒的な魔力と存在感。

これぞ、関羽雲長の愛器。

種別は大刀、通称を冷艶鋸、そして真名をば——

「『青龍艶月（チンロングアンドンダオ）』」

ランサーは宝具の名を口ずさむ。

†

全長六六五m、アーチの高さ五〇m——未戸川に掛る、三径間連続中路のアーチ状の鉄橋。名を冬木大橋。

その橋のよりにもよって、アーチの頂。陣取り、海浜公園を物見する影が二つあった。

「ライダー、ライダー！」

その影の一つが、風に振り落とされまいとアーチを構成する鉄骨にしがみつきながらも、海浜公園の方を指差し必死に声を張り上げていた。

ウェイバー・ベルベットである。

「叫んでも分かっておるわ、たわけ」

そんな必死のウェイバーの凸に、容赦なく指を叩き込んだのは、その隣に悠然と腰かける巖のような巨大な影であった。

無論、ライダーのサーヴァント、征服王イスカンダルである。

「ぎゃあああつー！」

所謂、*「デコピン」*の威力に因って、ウェイバーは叫び声を上げていた。

途轍もない痛みであるのは予想出来ただろうに、ウェイバーは躲すことすらしなかった。

何しろ、鉄橋の高さは五〇m、人であるウェイバーは、落ちれば即死という状況である。防ごうにも躲そうにも、手を離さなければならず、それが即ち死へのダイブへと繋がる。

では、何故、そんな状況にも関わらず、ウェイバーが片手を外し、海浜公園を指差したのか。

今まさに、それを忘れるようなことが海浜公園で起きていたからだ。

「……ふむ。霧が出てきたな」

ライダーの言葉の通り、先ほどまではつきりと見えていた筈の海浜公園に深い深い霧が立ち込め、遂には見えなくなってしまったのである。

「あれはお前を追いかけ回していたヤツの宝具か？」

「多分、そうであろうな」

この一日、ウェイバーとライダーに奇襲を仕掛けようとずっと着いて来たサーヴァントがいた。

如何にかそれを振り払うことが出来、ウェイバーがほつと胸を撫で下ろしたのも束の間。今度は逆に、ライダーが追つての監視を——よりもよって鉄橋の上でし始めるといふ理解し難い行動に出て暫く経った頃である。

何とかウェイバーも耐え忍んだ甲斐あつて漸く、動きがあつたのだ。

「だけど、一体如何して宝具を解放したんだ？」

「決まっておろう。敵に先制を掛ける為よ」

ライダーが豪快に笑つて答えた。

「この征服王も、今し方気が付いたが、如何やらヤツの傍にもう一人別のサーヴァントが近づいて来たようだ」

「じゃ、じゃあ——」

「二戦、間違いなくやらかすと見てよかろう。しかも我が追つていた方の真の狙いは、余を戦場へと焙り出すことにあるようだ」

ライダーはいかにも愉快そうに、併し、瞳には獣の如き眼光を宿し笑つた。

「——面白い！」

ぞくりと、ウェイバーは身震いする。敵の挑発か、それとも罠か。だが、それは英霊イスカンドルの魂の、それも決定的な部分に火を点けた。

——だが、それより何より、ウェイバーにとっては、現在の身動きが出来ない状況の方が優先事項であつた。

もしたつた一つ、聖杯に掛けても良い願ひがあるのならば、すぐさま地上に下ろしてほしいということ。

そう言い切つてしまつても、今のウェイバーには嘘ではなかつた。

第十一話 戦闘開始

女の話をしよう。

生まれ落ちたその瞬間、女がいたのは瓶の中。

やがてと言う間はまるでなく、刹那で女は立派な淑女。

恋をする。一人の男に。

恋をする。その優しい夢に。

さあ、愛しい王子が連れてきたるは、救国求めておつ死（ち）んだ、

希望を被った騎士王様（おんなのこ）。

初めて触れる巷の景色、瞳を奪われ、袖引かれ、迷い迷って霧の中。

そこにいるのは化け物（えいゆう）だ。

そこにいるのは閔帝（かみさま）だ。

悪い冗談、怖い夢。この先一体どうなるの？

……え？ なんのつもりかって？

毒舌家な友人の真似さ。

†

海に行こうなどと言うんじゃない。初めて見る外の世界にはしやぎ過ぎた。

女は震えながら後悔し、本来紅玉のような輝きを放つ瞳からは、一切の光が失せる。

がちがちと歯が何度も打ち鳴らされて、白銀の髪をひたすらに掻き
毟る。

怖い、怖い、怖いコワイコワイコワイコワイ——！

女の頭の中をひたすら「死の恐怖」が蹂躪する。

最もそこからは遠い存在なのに、と合点を見つけないことが出来ない
儘に。

女は御三家の一つ、アインツベルンが作り上げたホムンクルス——
畢竟、鑄造された人間であり名をアイリスフィールという。

アイリスフィールは聖杯を成立させるための器であった。「聖杯

“はそれ単体では願望器として成立しない。サーヴァントという高濃度の魂をくべ、初めて万能の釜となる。

そんな出自である為に九年前、ある男に出会うまで感情というものが殆ど無かった。その頃に戻れたならば、一体どれほど良いだろうか。アイリスフィールは思ってはいけないと分かっているとしてもそんなことを考えてしまう。

目先一寸すら、隣に伴っていた少女の顔すら見えない程の魔力を伴った濃霧。それにも況して辺り一帯を氾濫する、背筋が凍るようなおぞましい殺意。それらが、アイリスフィールから希望を合切奪おうとしているのだ。

——只の“殺意”だけでこれだけならば、“実体”が現れてしまつたら……。

アイリスフィールが愈々、袋小路に立たされようとしていたその時だった。

「落ちついて下さい、アイリスフィール。これはただのこけ脅しです。大丈夫、私が付いています」

彼女の隣に立つ、ダークスーツを纏う金髪翠眼の少女の言葉によりそこから引き戻される。

途端にアイリスフィールの中に勇気が戻る。

愛する男が召喚したサーヴァント——セイバーは殊に頼りになると、アイリスフィールは強く感じた。

セイバーのサーヴァントは“剣”という多く神話や英雄譚に於いて花形として扱われる武器に縁のある英雄に宛がわれるクラスであり、それ故に、七つのクラスの中でも最優のステータスを持つ。

そして、この少女は、その剣士の英霊の中に在っても最大の信仰と最強の武装を持つ、最高のサーヴァントであった。

あらゆる人々に尊ばれ、愛される騎士道物語に語られる理想の王、理想の騎士。

——併し、そんなセイバーをしても、この殺気の只中は経験したことがない種類のものではあった。

まだ少女が在りし日に、幾度と無く彼女の国を強襲した海の間こう

の蛮族達。彼等でさえも、こんな殺気は放っていないかったと、セイバー思い返す。

そして、尚恐ろしいのは、恐らくこれを理論に基づき計算づくでやっていることである。

霧で視覚を封じた上、辺りに放った濃密な魔力と殺気が放たれている為に、襲い掛かってくるであろう敵の実態も所在も兎に角分かり辛い。畢竟、気配遮断のような役割をしているのだ。

——何処から来る？

セイバーは目を凝らし、そして感覚を研ぎ澄ませる。

——如何攻めてくる？

瞬間、セイバーは気配と魔力が一際濃厚な一点を見つける。

そして、

「危ない！」

咄嗟にアイリスフィールを抱きかかえ、有らん限り飛んだ。

その後、刹那、セイバーとアイリスフィールの居た場所の地面が、大きく抉り取られる。

巻き上がる砂礫、打ち鳴らされる轟音。

自ら作った霧にすら切れ間が出来て、襲撃者の姿が少しだけ顕になった。

薙刀を手にした長躯の男であった。

「Shit（スウィット）, Go（ギョウ） Wrong（ルオング）

……仕損じた、か」

強襲に失敗した敵は、けれどお道化た口調でそう言い、セイバーとアイリスフィールに向き直った。

霧が晴れる。否、襲撃者が自ら作り上げた霧を排除したのだ。

そして、優美な面差しと細身乍ら鍛え抜かれた肉体を兼ねる、大刀を携えた男が現れた。

セイバーはまずその姿に違和感を覚える。武器や戦袍が、いかにも東洋風であり、彼が東洋の英霊であることを示している。セイバーの持つ聖杯からの知識は東洋の英霊はこの冬木の聖杯戦争に於いては原則呼ばれないということになっている。

——では目の前の男は一体……？

男が口を開く。

「見事、見事。ボクの一撃を躲すとは、さぞ名のある英雄と見たぜ」
手を打ち鳴らしながらの讃辞には、けれどまるで心が籠っていない
上っ面だけのものであった。

「……そして、その鬨気の質。セイバーのサーヴァントと見ているが
如何だろうか？」

笑みを湛え乍らも淡々と大刀の男は少女に訊ねる。

少女は魔力で鎧を編み、ダークスーツの上にそれを纏いつつ、

「如何にも」

とセイバーは答える。

そして、手に握った見えない剣の切っ先を緑衣の男に突き付け、訊
ね返す。

「そういう貴方はランサーだな？」
と。

併し、男は首を振った。

質問ですらない質問。ランサーのクラスであることは明々白々で
あるのに、だ。

「いんや、ボクはアサシンのクラスのサーヴァントだよ？ どの世
界に霧に紛れていきなり不意打ちを掛ける槍兵がいるんだよおう？」

あからさまな嘘を吐いてランサーはへらへらと笑う。

その礼を弁えない態度がセイバーの逆鱗に触れた。

先ほどの攻撃が明らかにアイリスフィールを狙ったものであった
ことも手伝って、セイバーの怒りを買うには十分に過ぎたのだ。

セイバーは激烈な踏み込みを以てランサーに迫り、顔面を薙ぎに
掛った。

「うわああー！」

悲鳴を上げ乍ら、ランサーは咄嗟に身を仰け反らせつつ、セイバー
と距離を取る。

「もう！ 危ないなあ！ いきなり切りかかることないだろう！ 君
には騎士道とか武士道とかそういうの無いの!？」

ランサーは鼻を抑え、涙目になってセイバーに訴える。

鼻梁がぎつくりと大きく裂けていた。

「黙れ！ 貴方のような輩に聞かせてやれる騎士道などあるものか！」

見えざる剣を突き付けながら、セイバーが怒鳴る。

その間にもランサーは顔を覆い痛みながら、けれど一瞬ほくそ笑んだのを、幻惑の術式で隠匿し傍で見守る彼の主は見逃さなかった。

これはヤツが仕掛けた罠だ——治癒の術をランサーに飛ばしながらケイネスはそう考える。

ランサーの不意打ちは恐らく、それだけで完結しているものではなかった。その真意は、「ペース作り」だ。実体化した状態で街を歩いているのだから余程誇り高いか、ただの馬鹿かのどちらかと踏んだのであろう。そして、そういった人物というのは得てして、「卑怯」を何より嫌う。

ランサーはまず、それに因って「義憤」を買った。

更に、相手の得物が不可視の剣だと見るや否や、それをさらに煽る様な態度を取って、相手に先手を打たせた。ワザと皮一枚当たるように身を躲し、その傷の深さと、具に観察していたセイバーの踏み込み、そしてケイネスから贈られるセイバーのステータス等を元に、剣の実際の長さを計算。「間合いが読み辛い」という相手の武装の利を殺した。

そして、極め付けとばかりにその状態から貴様に騎士道は無いのかと、自分の行為を棚上げして相手を非難する。これに反応してしまつた所為で、セイバー自ら騎士という出自を明らかにしてしまった。ただ英雄ではなく、騎士。それに相当する英雄でランサーの一撃を躲せる者などごく限られてくる。畢竟、ある程度の真名の絞り込みも出来たわけである。

だが、ケイネスは内心で肝を冷やしていた。

ランサーの立てたこの策は綱渡りも良いところな代物で、欠陥も多かった。例えば、剣が見えないだけでなく呪いや毒が仕込まれていた場合、態と当たりに行くなど愚かではない。

一体若しそうだったならばどうするつもりだったんだと、ケイネスは非難するようにランサーを睨む。

だが、ランサーはそれに対し、笑顔を返した。

——君がいるから大丈夫だろう？

と、その笑顔は暗にそんなことをケイネスに伝える。

そう、ランサーはこれまでケイネスの魔力の技量に幾度と無く触れてきた。呪いや毒であれば大抵は解体出来ると踏んだのだろう。

裏を返せば、ランサーがそれだけケイネスを信頼していることの証明に他ならない。

主としては嬉しい限りだ。

だが、それに対して一体何がしてやれるだろう？

ケイネスは考えた末——

『それで終いか、ランサー』

そうランサーに語り掛けていた。

男とも女とも似つかず、老いも若きも判然としない、声が辺りに響き、セイバーのマスター——と思われる女性が辺りを凝然と見渡す。

サーヴァント相手ならばいざ知らず、ケイネス・エルメロイの認識妨害の術式を敗れる魔術師などそうはいない。

当然の結果——ケイネスは涼しく受け入れ、言葉を紡ぎ続ける。

『私はまだお前の力を見ていないのだがね。それともそれがお前の総てか？』

煽り立てるような言葉遣い。

けれど、これは鼓舞だ。ケイネスにとっての精一杯の声援ある。

——私のサーヴァントはこの程度ではない筈だ。

そういった捻くれた信頼の証。

ランサーはそれを受けて、

「勿論、そんなことはないさ。これからそこのお嬢ちゃんの首を撥ねてみせよう」

と豪快に“青龍艶月”を振り回し後ろ手に構え、前傾した姿勢になる。

獣を彷彿させるその構えは、ランサーの、中華の大英雄の戦闘態勢

であった。

セイバーは警戒する。先程の戯れは一切ない。薫風を思わせる爽やかな笑みを湛え乍ら、その中身には、どす黒い殺意が渦巻いている。

「……見えない剣とはやってくれた。But(バート)！ 物珍しいモン持つてるからつて調子に乗るなよお！」

ランサーの啖呵に呼応するように、その手の中に在る “青龍艶月” に魔力が集中する。

それは、凜烈な冷気となって迸り、

「なっ!？」

その直ぐ後、セイバーは驚愕することになる。

「ソイツあ君だけの専売特許じゃないんだ」

ランサーの手の中の偃月刀が揺らめき、出したのである。

†

遂に始まった戦いは凄まじいの一言に尽きた。

ケイネスも、アイリスフィールも、それに驚愕し息を呑んでいた。例えるならば嵐であった。

「オラアッ！」

ランサーはけたたましい絶叫と共に、偃月刀を振り下ろす。

「くっ！」

セイバー身を引いて躲す。

その威力に因って、地面に大穴が穿たれ、ベンチが散開し乍ら宙を舞った。

「きやあ！」

アイリスフィールのすぐ隣に、ベンチを形成していた板が突き刺さる。

「ちっ！」

ケイネスの頭上にも、礫が霰の如く降り注ぎ、用意していた自在に変形する水銀の礼装 “月霊髓液 (ヴォールメン・ハイドラグラム)” で防御する。

『防御術式を用意しておけ』……ランサーが戦闘の前に語った言葉

の意味をケイネスは漸く理解した。ケイネスは最初、これは敵のマスター及び、何処かで自分達を見ているかもしれない衛宮切嗣を警戒しろという意味だと思っていた。

だが、それは違った。

“自分の攻撃に巻き込まれないようにしろ”——ランサーの真意はこれであった。

思い返せば、関羽雲長にはこのような逸話があった。曰く、万の兵にも比する武勇を持ちながら、戦では率いた兵を半数にまで減らすこともあった、と。だが、ケイネスといえど、まさかその真実がランサーの嵐の如き戦い方に巻き込まれてのものだとは思わない。

忌々し気に、ケイネスは戦いを見つめる。

セイバーは斬撃を返そうと踏み込もうとする。

併し、瞬間ランサーが驚くべき行動に出た。巻き上げた砂礫の中から、人の頭ほどはある礫を見出し、蹴り込んだのだ。セイバーは咄嗟に身を屈める。

後方で轟音が鳴った。ランサーが放った岩石の弾丸が公園のトイレを木っ端微塵に粉碎した音である。

身を屈めたことに依って出来るタイムラグをランサーは見逃さない。

ランサーは唐竹を放ちセイバーの脳天へと刃を落す。

セイバーはそれを剣で受け止めた。

だが、その重量たるや筆舌。小柄ながらも大剣を軽々振り回すパワーファイターであるセイバーであっても、“魔力放出”——魔力を四肢に集中させ爆発させることにより臂力を強化するスキル——を使い、やつと互角の鏝迫り合いが成立するほど。恐らく英霊として、その腕力は極限域にあるだろう。加えて、その手に握る長竿の超質量。“一撃の重さ”に於いて、ランサーはセイバーを上回っていると言えた。

なんとか押し返そうとさらに魔力を集中したその時、急に体が泳いだ。

ランサーが虚をつく行動に出た。突然、手にした大刀手放したので

ある。

「なっ!？」

その隙を付いて、ランサーは腰に差した匕首を引き抜き、身を屈めセイバーの首を狙う。

セイバーは足に魔力を集中させて思い切り後退する。

にいとランサーは口角を吊り上げ、大刀を拾う。そして、セイバーを追う……ではなく、刃で地面を掬い上げ、それを傍で見つめるアイリスフィールに向かい投げつけた。

超高速ではじき出されたそれは、ライフル弾並みの威力を以てアイリスフィールに迫る。

セイバーはギリと音が出る程、歯を食いしばり、その間に入り、盾となる。

その行動を読んでいたランサーは次の瞬間にはセイバーの近くまで踏み込み、思い切り胴を薙ぎに掛った。

なんとか、それを剣で以て防ぐが、その暴威に体ごと吹き飛ばされ、セイバーは近くの樹木に打ち付けられた。

「ぐはっ……」

セイバーは空気を肺から有らん限り吐き出し、瞬間、着弾点を境にし、樹木が折れ倒された。

——なんとこの強さだ……。

セイバーはなんとか立ち上がりながらも、目の前のランサーに畏怖を覚える。

揺らめき、見かけ上の長さを変える不可思議な力を持った偃月刀は間合いが凶り辛い上に、見えている分だけ、そちらに釣られてしまう。武器が冷気を伴っていることから察するにその真実は温度差が齎す屈折現象——詰りは「蜃気楼」であろう。

セイバーの持つ「見えない剣」の正体は魔術に因って屈折率に直接干渉をし、それを纏わせた空気の鞘だ。ランサーが起こしているそれよりも高度な現象が起こっている為にそのランクはランサーの武器が起こすものより高いだろう。だが、戦闘に於いて齎す成果は、ランサーのものの方が上であった。

更にその卑劣極まりない戦い方。隙を見つければアイリスフィールの方へと矛を移す為、守りながら戦わねばならない。

そして、何より厄介なのはランサーの戦闘技術だ。絶大な威力を持つ大刀の振りは、それだけならば対処のしようもあるが、暴虐的であり精錬さからはほど遠いのに、其処には深淵な理性と叡智が多分に感ぜられた。そして、長竿だけでなく、短刀、徒手空拳、更には土砂や木々などの周りの環境すら利用しての戦い方は叛逆の騎士と似通う。

併し、完全にそれというわけではない。彼女が、暴力と技巧をせめぎ合わせ融合させたものならば、ランサーのそれは純粹な暴力を知性で操縦して技巧のようなものに見せていると言えた。

術理などはない。誰かや何かに習ったのではない、我流の殺傷術だ。

その上この男の頭脳は極めて危険だ。見えない剣をまるで恐れないう。斬られることにまるで躊躇いが無いのか、それともとつくに間合いを見極めているのか。前者であれば狂気であり、後者であれば狂氣的なまでの理性だ。いずれにせよ恐ろしいことこの上ない。

——そうだ、あの男に似ている。

この時、セイバーが思い浮かべたのはある一人の男であった。それはまだ栄光の騎士達が円卓を囲む以前の話。最強と呼ばれた勇士がいた。その男は剣に選ばれたわけでもないのに、“ダビデ王の剣”を無理矢理引き抜き、呪いを受けた男。愛する弟と争う運命を受け、最後は聖槍の一撃で城を破壊し、その瓦礫で生き埋めになるという壮絶な最期を遂げた悲運の騎士。

——“野蛮な男”に。“ベイリン卿”に。

セイバーはランサーをその男に準え、ひたすらに驚愕した。

ランサーもランサーで、セイバーの力には驚いている。

先ほどから一方的に攻め、じり貧にまでセイバーを追い込んでこそいる。見えない剣も恐るるに足らず。それでも依然、ランサーの攻撃はセイバーの芯を捉えてはいない。本気でやっている。凡百のサーヴァントならばとつくに粗挽きの肉団子になっていると思うほどには。

屹度、最高峰のサーヴァントなのだろうと、ランサーは想像した。若しこれが、騎士道物語の本場、欧羅巴であつたならば、こうして敵を見下ろしていたのは逆であつただろうと想定する。

——此処が日本で本当に良かったと思うよ。

ランサーは心の中でそう呟いて、ケイネスの方を見る。

彼が何を伝えんとしているか、ケイネスも察する。

戦いを徒に長引かせれば、いくらランサーであろうと消耗する。その後にライダーと見えるのは聊か拙い。

何より、このセイバーを今後生き残らせてしまえばこの後の聖杯戦争にどう影響するか分からない。

故にケイネスは決断する。

『早急に止めを刺せ。宝具の開帳を』

その言葉に、ランサーはにっかりと笑みを零す。

「ならば御覧に入れよう」

ランサーは“青龍艶月”を舞踊のように振り回し、今度は両手で構える。

「そんじゃ、皆々様ア！ 七竅かつ開けエ！ 項羽ですらも死に絶える、虞美人草の紅い花ア、屍（かばね）に咲かせてみせようか！」

魔力が、“青龍艶月”に、否、その刃へと集中する。

すると瞬間、刃に龍が現れた。

翡翠のような鱗を持つ、美しき龍——相克の石柱、東方の守護神“青龍”である。

「美塵葬・大紅蓮（チンロン・ユーメイレン）”！」

次の瞬間、刃から眩いばかりの翠色の光が生じ、その周りが硝子細工のように煌めく。

この場に居合わせた総ての人間は辺り一帯の冬の冷気が肉を突き刺すようなものに、変貌したかのような錯覚を受けた。

幕間二 在りし日の詩

後漢末期。その時分は、並み一通りの人間が考えつくような、地獄が広がっていた。時の朝廷の重臣達の政治腐敗による世の退廃。それに端を発する、張角指導の下、中国全土で勃発した黄巾の乱。疲弊し、明日に希望を持ってぬま、今という瞬間をただ生きるだけがやつの人々から、財を、食糧を、家を、家族を奪って飛蝗の雨のように黄夫が去っていく。

それがこの時代の中華の日常であった。

さて、此処、『青州城』もまたそんな日常の一端にあった。

この城を黄巾賊が攻め、兵士や民の死屍累々。肉を啄む鳥が鋼の空には海の砂粒程も埋め尽くす。黄夫達の猛攻は凄まじく、青州城は包囲され、今や陥落寸前であった。

そんな状況に青州の太守は幽州の太守に援軍を要請。

その中に劉備玄德、張飛益徳——そして、関羽雲長の三兄弟の姿もあった。

彼等と同じく世の行く末を案ずる百姓達を募り集まった義勇軍を率いる三人は、幽州の正規軍にも況して強く、また勇敢であった。

だが、それも終いだ。

「フツ……ここが潮か」

敵兵に囲まれながら、張飛は短く笑声を零す。

徒歩の張飛たった一人を、数百の騎馬と歩兵が取り囲む。

張飛の傍に仲間はいない。彼が率いていた兵はほぼ壊滅状態に近かった。生き残った兵も、張飛が逃がした為、真実一人きりである。

果たして、今二人の義兄達はどうかしているのかと張飛が考えていると、

「何を余裕かましてやがる！」

「死ぬんだぞ?! 殺されるんだぞ?! もっと怯えんか！」

そんな上の空の態度が黄夫達の癩に障った。

途端に喧噪が巻き起こる。

だが、併し——

「クツクツク……」

張飛は腹を抱えて笑った。

「何が可笑しい！」

黄巾賊の一人が怒鳴る。

張飛は顔を覆って答える。

「否、逆に聞くがな、これが笑わずにいられるかよ？　俺が死ぬ？　貴様等程度で？　この俺が？」

その手に携える、蛇の如くうねる刃を持つ矛——蛇矛の柄で以て張飛は地面を打ち鳴らした。

剛！

と、地面が大きく揺れ、懺！と風が吹き荒ぶ。

色で例えれば赤黒く、そして総てを丸呑みするような殺意が入り混じる鬨気が張飛から溢れ出たのだ。

「成程、笑止だ。俺の死を決められる程、何時の間にか貴様らが力を得たなどと、冗談にしても大それている」

蛇のような双眸が爛々と光り、総てが牙になったような異様な歯を見せつけて、張飛は口角を吊り上げる。

「ひいひいひい……」

一斉に黄巾賊たちは悲鳴を上げた。

怪物だ。敵に回してはいけない人間を敵に回してしまった。今すぐ武器も鎧も捨てて逃げ出そう。

そう考えて彼等は一斉に行動を開始する。

だが、

「逃がさん」

他ならぬ張飛がそれを許さない。

彼の殺意に呼応し、

「ぴぎやああああー」

携える蛇矛が突如として悲鳴を上げる。

その時、黄巾賊達にとってはあまりにも不可思議なことが起こった。

張飛の手に握られていた蛇矛が突然、どろどろと溶解し、人間一人

は一飲みで食い殺せそうな程の巨大な蟒蛇へと変貌する。

「うわああああ!!」

愈々、恐慌は最高潮に達し、皆が我先にと、味方だった筈のものを押しつけ、或いは蹴飛ばし、逃げ惑う。

「死ね」

だが無情。

張飛のその一言で総ては完結する。

「しやあああー!」

蟒蛇が鎌首を擡げ、口から赤黒い霧を吐き出した。

血のような色のそれの中には、生きた虻や飛蝗や蛙が入り混じり、高濃度の呪詛と毒素が編み込まれていた。

「ア……ガッ……」

黄巾賊の人間たちは疔や蕁麻疹、紫斑や発疹が体中の至る所で起こり、目は白目を向いて何倍にも膨れ上がり、体がぶくぶくと膨張し、鼻血と吐血を繰り返し、最後は真っ赤な泡を噴き、息絶えた。

その中でも運よく、馬に乗っていた一人がなんとか生き残り、逃げ延びる事に成功した。

振り返らない。後ろで起こっている阿鼻叫喚が、一体自分と同じ黄夫がどんな目に遭っているかを伝えているから。

併し、張飛はその一人すら見逃さない。

塵殺(おうさつ)する。有象無象の区別なく、張飛益徳の怒りを買ったものは朽ち果てるのである。

「食らえー!」

張飛は身を翻しふわりと宙を舞う。

そして、蟒蛇の罅の位置まで体が落ちると、

「しやあああああー!」

蟒蛇が再び毒霧を吐いた。

その勢いにより、張飛の体が、流星のような速度と威力ではじき出される。

刹那も掛らず、生き残りに迫い着くと、まず蹴りを一発。

「あがつ……」

背に一撃を受け、男は吐血、鎧も砕け散り、しめやかに絶命。それでも飽き足らず、張飛は、二度、三度と連続で蹴りを放つ。馬から投げ出された男の体は、張飛の蹴りの威力に因って、空中分解。

鮮血と肉飛沫をまき散らしながら四散した。

「クツハツハツハツハ。思い知ったか。これが張飛益徳よ。俺を敵に回した者どもは、皆無惨な屍（かばね）を晒すのさ！」

降りしきる朱の雨を浴びながら、張飛は髪をかき上げにたりと笑う。

その面容には、一切の人間味が存在していなかった。

そんな彼の元にしゆるしゆると音を立てて青銅の蟒蛇が這い寄ってくる。

「おお、鈴々。良くやった」

「しゃあ」

張飛が頭を撫でてやると蟒蛇——鈴々は満足気に目を細めた。

そして、張飛の手に収まり再び矛に変形する。

「——さて、兄者達が心配だ。探そうか」

張飛は二人の義兄を探し求め戦場を練り歩いた。

どこも彼処も、死体に埋め尽くされ、大地は地に因って真っ赤に染まっていた。

鼻に入る大気も、生臭く、吐き気を催すほどだ。

そんな中、張飛は騎馬と槍持ちの大軍が何かを取り囲んでいるのを見つける。

劉備や関羽が中にいるかもしれないと、そちらの方に近付くと、不意に張飛は頬に冷たさを感じる。

雪が、頬に降りかかっていた。

だが、不可思議だ。厚い雲に空が覆われてはいるものの、今は雪が降る季節ではない。

では一体如何して？

そう思っていると、張飛は驚愕に目を見開くこととなった。

「なっ……!?!」

目の前に紅蓮の華が咲き乱れていた。

否、黄巾賊の者達や彼等の乗る馬の体が割れ裂け、肉と血が露出したそれが、華のようにように見えたのだ。

よく見ると、それらは冷気を帯びている。

——まさか、凍って裂けたとでも言うのか？

張飛は目の前の状況をそう考察したが半信半疑だった。

これをやった人物がどうやってこれをやったのかも見えていたのに、である。

「やあ、益徳。首尾は如何だい？」

「華」を踏み砕き、現れた人物は、涼しい顔をして張飛に訊ねた。

「兄者」

見間違える筈もない。

胸まで伸びた艶やかな髭と、同じく艶やかな髪。一度に数百の敵を薙ぎ払う奮戦を見せつけ乍（なが）らも、優美な面差しは疲れに崩れることも、汗に塗れることも、一滴の返り血を浴びることすらなく、貴公子然とした微笑みが湛えられている。

関羽雲長である。

「……見れば分かるだろう。俺の率いていた隊は壊滅状態だ」

「そかそか」

「其方は如何だい？」

「——似たようなもんさね」

そつと目を閉じた関羽にはけれど、悲痛さというものは微塵も感じられなかった。

否、悲痛を感じている暇はないのだ。

劉備を探し出し、撤退をしなければ、本当の本当に、義勇軍は壊滅するとそのような危機的状况なのだ。

「さて、そんじやま。兄さんを探しますかね」

「待て、兄者」

「何だよ？ 今は一刻一秒を争うぞ？ くっちやべってる暇はない」

劉備を探しに行こうとする関羽を、張飛は引き留めた。

「説明をしろ。先程、黄巾の輩を蹴散らした『アレ』はなんだ？」

「ん？ アレ？ 思いつきだよ、思いつき」

「思いつき……だと？」

人の屍が紅い花を象るあの凄まじい絶技が思いつき。

冗談に思える関羽の言葉に、冗談めいたものが感じないのを受けて張飛は愕然とした。

「知つての通り、ボクの冷艶鋸の威力は城ごと万の兵を打ち滅ぼすような凄まじいものだ。でもそう易々とは使えない」

張飛は関羽の大刀の持つ真の力を目の当たりにしている。

その破壊力は確かに絶大であるが、味方や無辜の民を巻き込むような代物である為、そうおいそれと使うことは出来ない。

「で、その為に一騎打ち用の技を考えた。今さっき」

「それがこれか……」

城や軍勢を滅ぼせるだけの力を、たった一人を滅ぼし尽す為だけに費やす。

これが、この紅蓮の大輪の真相なのだろう。

「素晴らしい！」

突然張飛が叫んだ為に、関羽は目を丸くする。

「これは得難き絶技だ！ 誰であろうと——仮令、項羽であろうと殺しきれぬ！」

ケタケタと地の底から滲み出るような笑顔を張飛は上げた。

一つ、関羽は疑問が湧く。

「項羽ってあれだろ？ 楚の霸王の。ボクがいくら強かろうと死人は殺せないぜ？」

項羽とは秦王政の時代の生まれの将であり、赤竜の子と称される劉邦と中華の覇権を争った人物である。

武勇に於いては枚挙に遑がなく、軍略に優れ無敵の強さを誇った。

「譬えだよ、兄者。劉備は皇帝の血より出し、竜の末裔。であれば、だ。いずれ項羽のような猛将とも渡り合わねばならん」

劉備は劉邦の末裔に当たる人物だ。

その血の繋がりこそは薄いかもしれないが、その面差しと、覇気に皇帝に相応しいものであると感じ、故に関羽と張飛は劉備に仕えると

決めたのだ。

恐らく、劉邦と劉備はその魂の質はよく似通う。ならば、同じような運命をたどる可能性だってある。

成程、張飛の言葉にはある一定の根拠があった。

「知つての通り、彼奴（きやつ）は弱い。貴様と俺がアレの武とならねばならぬ。ならばこそ、俺達は項羽を殺せる者でなければならぬ！」

あまりにも情熱的で狂氣的な張飛の言葉。

だが、関羽は微笑を零す。

「そうだね」

劉備には自分たちが必要だと肯定をして。

「では、その絶技に銘を付けよう」

「……それ、意味あるの？」

関羽は苦笑する。

「銘は大事だ。その心に掛る重みが違う」

「にいと張飛は口を裂いた。」

「項羽を殺すならば……そうだ、虞美人草が良い」

虞美人草。

項羽が愛した姫君は、項羽の死を以て自らも命を絶った。そして、その亡骸からは紅い花が咲いたと言われる。

項羽の死とは、即ち、爛漫たる雛罌粟（ヒナゲシ）。

「虞美人草——故に、その絶技の銘は……」

第十二話 虞美人草

「美塵葬・大紅蓮（チンロン・ユーメイレン）“！”」

衛宮切嗣はワルサーWA2000狙撃銃に備えつけられた暗視スコップと使い魔の体内に仕込んだ盗聴器で以て海浜公園で自身のサーヴァントたるセイバーと対峙するランサーの真名解放を確認する。

——衛宮切嗣がセイバーの戦闘開始を知ったのは、自身の体から魔力が持っていられる気怠さを覚えたからであった。

セイバーの仮の主であり、自分の妻でもあるアイリスフィールに発信機を渡しており、戦闘が起こった場合にはそれで居場所が分かるようにしていた。併し、魔力は持っていかれている。

発信機は簡単なスイッチ式である為、考えられるのは二つ。

正規のマスターと間違われて殺されてしまったか、或いはスイッチを押すという違わないほどの激しい戦闘になっているか、である。最悪なのは前者である。そうであるならば、衛宮切嗣の大望は果たされなくなるのだから。

戦場を早急に突き止め、海浜公園が見渡せるビルの最上階を確保し、アイリスフィールが生きていることを確認。

だが、決して安心できない状況にあった。

圧倒されている。最高峰のステータスと実力を持つ最強のサーヴァントである筈のセイバーが。

『……あのサーヴァントは』

インカム越しに、向かい側のビルに配置した一般的な言い方に当て嵌めれば“相棒”といった存在に当たる久宇舞弥が口を開いたのを受け、切嗣は再びスコップを覗く。

ライフルに付けたスコップは二つ。一つは暗視用の高倍率スコップ。

もう一つは、熱源探知のスコップであり、今度は此方を使う。

すると、ランサーの持つ薙刀の刃とその周りの大気が異様に青く見えた。

此処から分かるのはランサーの切り札は「冷気」を扱う宝具だということ。但し、具体的な温度までは分からない。このスコープの熱感知能力の下限は摂氏マイナス五度。だが、それで充分。冷気を操る宝具であるという情報だけでも収穫である。

それ以前に——切嗣は既にランサーの真名を把握している。

「関羽雲長……だろうな」

宝具の真名解放は同時に英霊の真名の露見に繋がるが、ランサーの場合はまさにそれであった。

解放の結果浮き出た、青龍の紋様。あの武装が青龍偃月刀であることを表す。

それを主武装にし、セイバーを圧倒するほどの実力を兼ねる英雄などただ一人——中国全土にその名を馳せ、日本に於いても広く知られる大英雄、関羽雲長でしか有り得ない。

『ですが、これは西洋の魔術器盤を利用した儀式。東洋の英霊を召喚することは……』

「アレのマスターがそれを可能にするだけの魔術師ということだろう」

切嗣は再び暗視スコープでランサーの直ぐ後方にいるマスターを見る。

カジユアルな装いはアパレルだとかファッションだとかそういう道にいる者が好むような印象を受け、到底魔術師のようには見えない。

そして、本来召喚不可能な関羽雲長を召喚する程の強力な魔術師だということに衛宮切嗣はそれが誰なのか分からなかった。

——コルネリウス・アルバ……ではないな。

切嗣は、その男が西洋人であることを鑑みて、事前に調べていた参加者の内の一人の名を思い浮かべる。

その男を写真で見た時の強烈な印象は中々忘れられるものではない。赤いシルクハットに赤いタキシードと、悪ふざけにしても過ぎるような装いの男であった。

他に名前が割れている三名、日本人である遠坂時臣、間桐雁夜、言

峰綺礼とは到底思えなかった。

既に大きな過ちを冒していることに衛宮切嗣は気が付かない。否、魔術師を狩る者として、魔術師を知り過ぎていて思いつけないのだ。彼の知っている魔術師は、魔術が万能であると思いつき込み、どのような窮地であつても問題ではないと慢心し切つた生き物なのだ。自分が時計塔に潜り込ませていた情報筋のその全員が、ケイネス・エルメロイに買収され、偽の情報を流したなどどうして考えられようか。

『……一体何者でしょうか？』

衛宮切嗣を、殺人マシン足らしめる為の補助装置である弟子の舞弥も、ケイネス・エルメロイの名には思いつけない。

まさか、ロンドン市内でトラックにはねられ、極一般的な人間であれば一〇〇%死んでいたであろう重症により、未だ生死の境を彷徨っている筈のケイネス・エルメロイがこの場所にいるなどとは思えないのだ。

ロンドン市内の事件記録や、病院の入院患者のリスト、更にはケイネス・エルメロイが取つたであろう治癒に長けた魔術師とのコンタクトなど、くまなく洗い、ケイネス・エルメロイが戦闘不能であることも把握してしまっている。

ケイネス・エルメロイ最大の天敵は、ランサーが立てた策にまんまと引っかかっているという形だ。

相手が、魔術師ではなく、只の兵士やテロリストならばすぐに此方の過ちにも思いついたであろう。先入観で物を見過ぎていることも気が付いただろう。

「何者だろうと、こつちのやることに変わりはないさ」

だが、ついで切嗣はそれが出来ない儘に、徹底的に自分への対策を講じた相手に照準を合わせてしまった。

†

一方、冬木大橋では。

「ハツハツハツハ！ これはいかん！ 実にいかんぞ！」

セイバーとランサーの戦いを見届けていたライダーが突然大笑いしていた。

ウェイバーは呆気にとられ、一瞬、鉄橋から手を離しそうになった。慌ててウェイバーは両手の力を込め直し、

「い、いけないって、一体何がいけないんだよ？」

とライダーに訊ねる。

ウェイバーの不安気な表情をよそに、ライダーは生きの良さそうな餌を見つけた獅子の如き、恐ろし気な笑みを浮かべていた。

「ランサーが宝具を解放しおった。勝負を決める気だ」

「ね、狙い通りだろ？」

「何を勘違いしておる」

ライダーが足で鉄骨を大きく打ち鳴らす。橋ごと揺れたのではないかと錯覚するほどの振動に、ウェイバーは声にすらならない悲鳴を上げた。

「小僧は敵の疲弊を狙う算段だとも思っていたかもしれないが。余の狙いはそこではない」

「じゃ、じゃあ、なんだって言うんだよ？」

にいとライダーは歯を見せる。

「探し出す手間を省く」

「は？」

言っていることの意味が分からず、ウェイバーは眉尻を上げた。

ライダーははあと、溜息を吐いた。

「分からんか？ 六人揃ってから、纏めて相手にした方が早かろう」

ウェイバーは言葉も出なかった。

召喚した時から思っていたことであるが、改めて認識する。

このライダーは馬鹿だ。理解の及ぶ範疇を超えた大馬鹿だ、と。

「……併し、これではそれも待ってられん。あのセイバー、実に良い。ここで死なすには惜しい人材よ」

「いや、そこは死なせろよ！ お前、ホントに主旨分かってムギヤツ！」

ウェイバーの必死の訴えも、一発の拳骨の前には空しかった。そして、この後の展開も予想が出来ている。

腰の剣を抜き、戦車を呼び出し、戦闘に介入する。

それを思うと胃が痛くなるウェイバーであったが……

「ライダー？」

併し、ライダーは今もって動かなかった。

ただ口元を吊り上げ、爛々と輝く瞳で、戦場から放たれる、翡翠色の輝きを見つめている。

「……死なせるには惜しい。それは分かっている。分かっているが」

「は？」

「見たい」

独り言つライダーは、いつになく楽し気な声色である。

「あのランサーを」

ウェイバーはそれに、底知れぬ不穏なものを覚え、ごくりと唾を飲んだ。

†

「覇（ハ） ツー！」

優美な顔立ちに似つかわしくない、喉が潰れるような掛け声と共に放ったランサーの一撃はとても美しかった。

刃が描く軌跡は翡翠の煌めき。

そして、一振りに因って水滴が珠となり、星を砕いて飾り付けたように綺羅を見せる。

ケイネスとアイリスフィールは見惚れ、そして対峙するセイバーですらそうなり掛ける。

「ツー！」

だが、これが死を伴った美であることは明白であり、セイバーはそれを大きく飛んで躲す。

この際に、燃費の悪い魔力放出を使用した。

「何故そんなことをするか？」

紙一重で躲すことが危険であったからだ。

セイバーの持つ直感スキルが告げていた。

「この刃には絶対に触れるな」と――。

触れるな――直撃するのではなく触れるな。畢竟（ひっきよう）掠っただけでも危険だということ。

剣呑な一撃を躲したがそれだけでは終わらない。ランサーの宝具は真名解放後、魔力を充填し続けていけば、効果が続くタイプのものであった。

「でやあー！」

セイバーが開けた距離だけをランサーはすぐさま詰め、今度は下から切り上げる。

それに対し、セイバーは一步踏み込み、大刀の柄の部分で剣で受ける。

――触れるな、といことは、剣で受けてもならないということだ。それを防ぐが、余計な動作が入り、然も力が入り辛い体勢となってしまう。

加えて、ランサーとの間合いが近い。

「がら空きだぜエー！」

即座にランサーは左手一本に大刀を持ち直し、残った右手で鍵突きを放つ。

狙うは顎（ジョー）。

基本的に、英霊といえど人間である以上、体機能は人間と同様である。そこを遣られれば、脳震盪を起こし、一瞬隙が出来る。

況して、ランサーの筋力のランクはA。それも、同じくAランクの筋力値を持つサーヴァントと比べても最高峰に位置するAだ。セイバーに隙を齎すのは簡単であろう。

そうなれば、あとは「青龍艶月」を掠らせるだけでランサーの勝利と相成る。

だが、

「なっ!？」

「がら空きっ。何のことを言っているっ。」

セイバーはその攻撃にワザと当たりにいった額で。

そこから夥しい量の血が溢れ、凜とした綺麗な顔を真っ赤に染め上げたが、セイバーは笑っている。

其処には、諦めなど微塵もない。

「やあっ！」

セイバーは剣を振るい、すぐさまランサーの首を薙ぎにいく。

「Shit（スイット）！」

舌を打ちながら、ランサーは後方に飛び、斬撃を躲す。

セイバーはその僅かな隙に活を見出した。

両手で剣を振り上げる。

「風王（ストライク）……」

大気を圧縮し、剣を不可視としている風の鞘。風王結界（インヴェイジブル・エア）。それを解くことに困り、一度限り放つことが出来る強大な威力。

「鉄槌（エア）アアアア！」

セイバーはそれをランサーに放った。

それまでその全貌を見せなかった黄金の剣が頭になったかと思うと、超大な圧を伴った、大気の砲弾がランサーへと襲い掛かった。

「何ッ!？」

予期せぬ攻撃に、ランサーは驚き、

「のわああアアアアッ！」

成す術もなく直撃し、吹き飛んでいく。

辺り一帯に砂埃が満ちる。

——やったか？

セイバーは半信半疑で、粉塵の幕の向こう側を見つめる。

——やった……の？

アイリスフィールも不安気にそれを見つめていた。

「フッ」

ケイネスは笑みを零した。

「私のサーヴァントは、その程度ではとれんよ」
暫くして、砂が晴れていく。

「いやあ、誇ってくれて有難いんだけどね」

お道化たような声が響き、セイバーとアイリスフィールは絶句した。

「今のはヤバかった。コイツが無けりや、今まで積んだAdvant
age（エイドヴァントエージ）をチャラにされていたとこだよ」

にこやかに笑って、マスターがいるであろう方向に大刀を見せつけるランサーが無傷で立っていた。

「まさか、そんな隠し玉を持つてるとは思わなかった。然も、その宝剣……成程、どーりで強いわけだ」

くつくつとランサーは笑声を零す。

「騎士王アーサー。まさか、女の子だとはね。驚き桃の木、だよ」

と言いながら、別段と驚いている様子は無かった。

騎士王アーサー……アルトリアは召喚されてからずっと、自分の性別に驚かれてばかりであったので、それがとても新鮮であった。

「女であるから、手を抜く——か？」

冗談気にセイバーは、ランサーに訊ねてみた。

「さっき殴られたの、もう忘れたの？ 悪いんだけどね、ボクにそういうのは無いんだ」

ランサーは体の周りで大刀を回しながら何々大笑した。

「武器を取るのと、戦場に立つのにさ、女だの男だの、老いだの若いだのってのは関係ない。誰だって何かや誰かの為に戦って良いし、みんな一様に殺しても良い権利と、殺されても良い義務を負うのさ。……それを区別したら、ボクはギエンとトン姐さんに斬られるよ」

肩に大刀を担いで腰を伸ばすランサーの声色は、話す内容に反して、燦々とした太陽のように明るい。

セイバーは、それを聞いて——少しばかり喜ぶ。

自分を召喚した衛宮切嗣は、女であるセイバーに英雄という生き方を背負わせた世界への怒りからか、セイバーを必要以上に無視した。彼の妻であるアイリスフィールも、女を捨てた生き方に憐憫のような

ものを寄せていた。

だが、このランサーは違う。総てを肯定した。

そういった思考の下ならば——一見卑劣極まりない徹底的にマスターを狙うという戦い方も、セイバーはある程度の理解を示すことは出来る。

然う、セイバーが考えていると、

『おい、ランサー!』

ランサーの側では、マスターの怒声が爆発していた。

「ん? どつたの?」

『お前は誰の名を出した!』

ケイネスの怒りの原因は、魏延、夏侯惇という関係者の名を出したことにある。

英霊の生きた痕跡は伝承として残っている為、そこに関わった者の名が手掛かりとなる場合があるのだ。

——だが、これについて、ケイネスは休息すべきだろう。

「……ボクの実名がバレるって言いたいんだろ? それ、宝具解放した時点でバレてるよ」

自身のマスターへ苦笑を残しつつ、ランサーはセイバーへと向き直り、

「——と、いう認識なんだけど、どうなんですかねえ?」

へらへらと顔を崩した。

セイバーはそつと目を閉じる。

「青龍偃月刀、その閃きと重さ、分からない方が可笑しい。『義勇王』

関羽雲長……この手合わせ、誉れとさせていただきます」

「あい、ありがとね。でも、ボクは誉れとかそういうの無いんで」

あくまで戦いは戦いであり、ランサーの中ではそれ以上の価値を見出せないもの——セイバーはその返しをそのように受け取った。

「……ということだ、主。加えて言うなら、『大紅蓮(ユーメイレン)』の力もバレてるね」

そう言っつて、ランサーはセイバーに未だ翡翠の光を放つ龍を見せつける。

「ボクの『青龍艶月（チンロン・グアンダオ）』は、青龍の靈格を宿した氷の刃。詰りは、神造兵器だ」

青龍偃月刀。

その武器名となる『青龍』の所以は、刃に青龍を描いていることにある。だが、併し、関羽雲長の持つそれは、描かれているのではなく、そこにいるのだ。

剛力無双であり、一振りであらゆる武器を壊してしまう関羽の為にある鍛冶師が丹精を込め打った大刀。伝承に曰く、それ打つ途中、青龍が現れ刃に宿り、以後冷気を帯びるようになり『冷艶鋸』と呼ばれる。

そもそも青龍の成り立ちとは、中国式の星座——二十八宿で言う所の、東の七宿を龍に見立てたものだ。

詰り、龍とは星そのものの具象化。

故に、龍は幻想種の中で『最強』とも言える竜を超えて、『無敵』なのだ。

星そのものを相手取ることなど、星の内側にある英雄にはどうあっても不可能であろう。絵の中の騎士が、それを収めた額縁を決して切ることが出来ないのと同じだ。

そして神造兵器とは星に鍛えられた武具を指し——星に最も近い龍が宿る、関羽の武装はそう言っても決して間違いではなかった。

その青龍が所以で、ランサーは霧を操り、蜃気楼を起こし、そして風王鉄槌を退けたのだ。元来、青龍が司るのは冷気ではなく、『木』。五行に於けるそれは西洋魔術の四属性に置き換えれば『風』である。「そして、コイツの持つ冷気の全開——それを刃に押し留め、たった一人を殺し尽すのが『美塵葬・大紅蓮（チンロン・ユーマイレン）』。気付いていると思うけど、掠りでもすれば全身が凍り付く。例外なく、全身だ。そしてその軀は割れ裂け『虞美人草（ユーマイレン）』のような紅蓮の華に似る」

この絶技を放つ際、刃に宿る青龍がその姿を現す。

関羽の氣——魔力に反応して。

青龍の鱗は、純度の高い翡翠よりも美しい緑色をしている。故に、

この刃は新緑の輝きを放つ。

そして、これが通った後に、金剛石を散りばめたようになるのは、空気中の水蒸気が水を経ずに氷となるからだ。

だが、見かけの美しさとは裏腹に、この技は正しく『必殺』である。例外なく全身、霊格も含めて全身が凍って砕け散る。

「それが如何した？ 当たらなければ如何ということはない」

だが、セイバーそれに慄くことはなく、寧ろ力強く言葉を返す。

「しかもこちらはまだ、全力を出していないぞ？」

そう言つて、セイバーはアイリスフィールを抱きかかえ、ランサーから距離を取る。

海浜公園のほぼ端側。

距離にして凡そ一〇〇m。

そこでアイリスフィールを下ろし、剣を——騎士王アーサーが誇る、聖剣エクスカリバーを両手で構える。

「セイバー……」

アイリスフィールは彼女を呼ぶ。

その面持ちは切迫していた。

強い言葉を返せど、状況は依然不利だ。

逆転を狙うには、最早聖剣の解放以外にない。

ランサーもそれを理解し、

「Master（ムアスター）」

主を呼んだ。

——セイバーが宝具を解放する。

——あれが聖剣エクスカリバーであることを鑑みるに、対軍——もしかしたら対城宝具の可能性もある。

——こつちも対城宝具で迎撃しようと思うけど、構わないね？

たったそれだけで、ケイネスはランサーの言わんとしていることを理解する。

『構わん、やれ』

ケイネスが静かに告げると、ランサーはそれを発動する体勢に入る。

両手に力を込めて大刀を握り、極端に前傾し、且つ体を振じる分
かり易い程の大技の構えだ。

渺と、風が鳴り、木の葉が舞う。

それを皮切りに、

「約束された（エクス）……」

「君美（ヨンユエン）……」

今、勝負が決しようとしていた。

第十三話 魔王勧誘

衛宮切嗣は、引き金に置いた指を中々動かさないでいた。

照準を合わせ、あとは射殺するだけの筈だったのだがここで一つ問題が起こってしまった。

スコープ越しの魔術師が此方に振り返り、ウインクをして来たのだ。

要するに殺害対象に気が付かれている。

向かい側のビルにセットした舞弥の存在も同様に悟られているようであった。

これはスナイパーとして最も犯してはいけないミスであり、もしそうなってしまう場合は一度その場所を引き払いポイントを移し替えるか、一旦引き、別の機会を狙うかの何方かであろう。

だが、今回はそうは出来ない。

このままではセイバーは負ける。さらにもっと問題なのは、アイリスフィールが殺されてしまう可能性があるということだ。

聖杯を壊されてしまえば、衛宮切嗣の大望は——嘆きと悲しみが駆逐された世界は手に入らなくなる。

故に、切嗣は待った。

相手には付け入る隙もあつた。見つかっているのに、攻撃が来ないということとは、向こう側には、遠距離に対応した手札が無いか、殺生与奪を握っていることから来る慢心があるかのどちらか。ならば、それが隙になる。

そして、幾らランサーが強大であろうと、セイバーは騎士王アーサーなのだ。苦戦はする。切り札を使わなければならなくなる。その際に齎される、多大な魔力消費。その後、必ず息継ぎが遣つて来る筈だ。その一瞬に掛ける。

魔力消費による疲労は切嗣にも起こる。寧ろ、燃費の悪い魔力放出のスキルをセイバーが連発せざるを得なくなってしまうている状態である為に、ランサーのマスターよりもそれは大きいと言えた。

が、それについて問題は無かった。切嗣は戦闘開始を察したその時

に、アデノシンの受容体を麻痺させる薬物を投与していた。これは、疲労を感じない」ということと同様の意味合いを持つ。

あらゆる薬を投与し、どのような状態でも銃を撃てるような訓練もしている。

人事は尽くしている。あとは、天命を待つのみ。

そして、その天命は訪れた。

ランサーに充填されていく魔力が膨大に膨れ上がったのを、見逃す切嗣ではなかった。

再びトリガーに手を当てる。

致命的な外傷を負った場合、魔術師は体に刻まれる魔術刻印の自働詠唱により無理矢理生かされる。詰り、非魔術師と比べ死にくい。一撃で仕留めるには、霊格——心臓を狙うことになる。

当然、切嗣はレンズ内に映る十字線（クロスヘア）を魔術師の心臓に重ねた。

そして、今まさに引き金を引こうとしたその時——。

†

二つの超大な威力を持つ宝具がぶつかり合おうとしていたその場に突如、轟雷が激突し凄まじい爆音が響き渡った。

目が眩むような光が溢れ、爆風の熱と圧がランサーとセイバーに届き、

「くっ！」

「うわっ！」

宝具の発動の為に取った構えを僅かに崩す。

ランサーとセイバーは理解する。乱入者の目的が、決戦に横槍を入れることにあったのだと。

二名の英雄は見つめる。光の中から現れる二頭の牡牛が牽引する、豪壮な飾りの戦車を。これが空から、流星のような速度で降って来たのだ。着地地点が二人の剣戟を阻む位置である為にこれに駆る御者の目的が、戦闘の中断であることは明白であった。

「双方、刃を収めよ。これ以上の流血に意味は無し」

地を震わすような声が二人を制する。

騎士王セイバー、聖君ランサー……共にその雷名を轟かす大英雄であり、言霊の威圧だけで止まるわけがない。

それでも彼らが動くことが出来ないのは、御者の目的と正体を量り兼ねていたから。

——これほどの雷。雷神の縁者……然も、ゼウスに連なる者。

牡牛と迸る雷電からセイバーは相手の真名を割り出そうとする。

——見たところライダー……ずっとボクらを張っていたヤツだな。さて、一体どんな代物か……。

襲撃を掛けるには、あまり旨味の無いタイミングでの登場を果たしたサーヴァントの性質をランサーは見極めようとする。

重い沈黙が辺りの空気を支配し続ける中、やおら御者が立ち上がり、両手の拳を天へと突き上げた。

天を衝くような巨躯が、更に大きく見える。否、大きく見えるのは、其の為ばかりではない。滲み出る気迫と、刺すような眼光、そしてその堂々たる佇まいに因る。

一体何が起こる？ サーヴァントの後ろに控える、ケイネスとアイリスフィールはごくりと生唾を飲んだ。

「我が名はイスカンドル！ 天地に響きし、征服王である！ 此度の聖杯戦争にあつては騎兵の位階を得し者なり！」

爆撃のような絶叫で、巨漢の御者は名乗りを上げた。

聖杯戦争に於いて、凡そ聞くことは無いであろう名乗りを。

この場にいる全員が呆然とした。打倒の糸口となる真名を、自ら明らかにするサーヴァントなど有り得る筈がなかったから。

「フアアアアアアツク!!」

彼等の自失は、御者台に乗っていた少年の金切り声に因って解かれる。

「何をやっているんだ、この馬鹿アアア！」

マスターである彼にとっては当然の怒りであった。併し、その抗議は、ライダーのデコピン一発で鎮圧される。

——なんなんだ、これは。

この光景、この状況に、最早誰もがそんな考えを抱く。

そのような混沌とした状況の中、最初に口を開いたのは、

「あのお、征服王殿。柄のことお伺いいたしますがねえ」

ランサーであった。

拳手をしながら、へらへらと笑みを崩さないランサーはこの状況下にあつてすら平常運転を取り戻す。

「その前に一つ、貴様に問おう」

「Little(リトル) wait(ウェイ)。質問をしているのはボク……」

「問おう」

征服王は一步も譲らなかつた。

ランサーは溜息を吐いた。あまり、相手のペースで話を進めたくないという思いがありながら、一方で自分のペースに持つていくのは困難を極めると考えて。

不本意ながら、ランサーは折れることにする。

「なんじやらほい？」

さて、相手はハンニバル・バルカを始めあらゆる時代のあらゆる将に尊敬されたアレクサンドロス大王である。

その人物を相手にした、王ですらない一介の将止まりの男のこの態度は、彼を愛した英雄達が蒼褪め卒倒しかねない。

「貴様の戦い方を見ていた。隙あらば、その婦人を狙っていたがあれはどういう見だ？」

併し、ライダーはどこ吹く風といった様子で、アイリスフィールを指差しながら、ランサーに問いを投げていた。

「……女の子を狙うとか、その手の説教がしたいなら刑務所にでも行つてくると良いよ」

「違う！ ただ理由を聞かせろと言っただけだ！」

ライダーのがなり声に、ランサーは耳に走る痛みを覚え、顔を顰めた。

「理由ねえ。なもん決まってるよ。戦場に於ける礼義ってヤツ」

「礼儀？」

ライダーは腕を組み、眉尻を吊り上げる。

「その子の目を見てみると良い。可憐な中にも、何か揺るぎない意志のようなものがあるだろう？　自分で考えて戦場上がったモンの証左ってヤツだ——いや、もしそうでなくとも戦場に出ると決めたのは確かだ」

「それが如何した？」

「戦うと決めたことに対しての礼儀の払い方なんてのは、たった一つだ。首をすっぱり撥ねてやること。『夢』なのか、『使命』なのか、はたまた『言いなり』なのかは知れんが、きちんと終わらせてやることだろう？　それを女だからなんていう糞のような理由でしてやらんのは、その『決定』に対する冒瀆さね。況して、この子は自分の意思で戦ってるんだ。尚のこと、だよ」

ランサーの哲学を前にライダーは押し黙った。

そして、

「フツハハハハハハッ！」

大声を上げて笑う。

「……笑うなよう。失礼な」

「いや、その信条実に気に入った。ますます気に入ったぞ！」

ライダーの笑顔に、ランサーは何やら底知れぬ不気味なものを覚え身震いする。

そんな時だった。

「貴様！　突然現れて一体何をしに来た！　いい加減目的を言ったらどうだ？」

痺れを切らしたセイバーが剣の切っ先をライダーに向け、聞き質そうとした。

正直、ランサーもそれが気に掛っていた為、

「そうだぞー。早く話さないとお母さんに怒られるぞお」と、囁し立てる。

「では、単刀直入に言おう。うぬらの力に惚れたのよ」

セイバーはそれだけでは何を言わんとしているか理解出来なかったようであったが、ランサーは総てを察する。

何が、ランサーを不安にさせていたか自分でよく理解出来た。

ライダーの続く先を、ランサーはげんなりとした顔で待つ。

「如何だ？ 此処は一つ、我が軍門に降り、共に天地を此の手に収めようではないか。余は貴様らと共に世界を味わい尽くしたいのだ」

ライダーの言葉を掻い摘んでしまえば、『聖杯を諦めて降伏しろ、世界征服に力を貸せ』であろう。

セイバーはその言葉に、怒りすら通り越してあきれ果てているようであったが、ランサーは違った。

——ああ、やっぱりか。

涙腺が決壊を起こし泣き出しそうだった。

厭な予感はしていた。自分を気に入ったという、ライダーの顔が、曹操と重なったから。

ただ、一つ予想外といえば、世界征服という規模の大きさであろうか。彼が征服王イスカンダルであることを考えれば、当然と言えば、当然かもしれないが。

「……世界征服だつて。凄いなー」

自分を欲してきた曹操に関しては、嫌な思い出しがなく、ランサーは遠い目で後ろに控えるケイネスに話を振った。

「そ、そうだな……」

ケイネスもケイネスで、かの名高いイスカンダルの実際に、言葉を失っていた。

よりにもよってこんなヤツを自分は召喚しようとしているのか、と。

絶対には出したくないが、ランサーで良かったとケイネスにしてみれば、全く在り得ない思いすら湧いてくる。

ハハハハと、ランサーとケイネスが二人して乾いた笑みを上げかけたその時、

「——特にその緑色」

ライダーが名指しをした。

ランサーは自分の顔を指差し、セイバーに訊ねる。

「ボクウ？」

と。

「私の出で立ちを見て緑と言ったのならば、その征服王は色盲か何かだろうか」

冷淡に、セイバーに吐き捨てられて、遂にランサーは涙をこらえることが出来なくなりそうになる。

なんとか、耐えるが、ライダーの次が、彼に追い打ちを掛ける。

「力があり、智もあり、素晴らしい勇士だ。貴様のような逸材には中々出会えんだろう」

如何やら、征服王は関羽雲長を甚くお気に召してしまったようであり、

「是非とも我が軍門に降って貰いたい。そして、世界を此の手にした暁には、その半分を貴様に統治させよう」

まるで、魔王のような誘いを出す始末。

「どうだ？」

ライダーはそう訊ねるが、ランサーにとってしてみればどうだもこうだもあつたものではない。

愈々以て、ランサーの顔からは表情というものが一切消えていた。

第十四話 黄金乱入

「H A H A H A ! 世界の半分だってよ。いやあ、モテる男は辛いねえ」

普段通りの軽口を吐くランサーは、けれど表情が死んでいた。

「大丈夫かお前？ 目どころか、もう顔全体が笑ってないが」

うざったい程、常に笑顔のランサーの恐るべき変化にケイネスは心配になる。

だが、併し――。

ランサーには実以て悪いと言う他ないが、ケイネスはこの誘いに魅力を感じていた。尤も、本当に軍門に降るわけではない。軍門に降るふりをするのだ。ライダーの人格面は、ランサー同様に胃痛ものであるが、仮にも世界征服に最も近付いた一人。英霊としての格はかなり高い。或いは、あの黄金のサーヴァントにすら対抗できる力があるかもしれない。

と、ケイネスはそこまで考えて思い至る。

ライダーの戦車から顔を出した少年の顔に。

『征服王、少しばかり貴方のマスターを見せて戴けぬか？』

何かの見間違いの可能性を考えてケイネスはライダーに訊ねた。

「ほれ」

と、ライダーは少年の首根っこを掴んで、自身の前に吊るす。

「おいコラ、やめろ！ 的になる！ 的になるからア！」

敵から無防備の姿を晒すことになるその状態に、少年は恐怖してバタバタと暴れた。

流星に、ライダーもそれが分かっていたのか、直ぐに御者台の中へと少年を隠した。

捨てるように、ぞんざいに。

「これが如何した？」

ライダーは姿が見えぬ、ケイネスに対して、問い返す。

ケイネスは鈍痛に頭を抱え、答えることが出来なかった。

『ああ、本当にそうだったか。よりもよって、貴様が』

呆れと、怨みが籠った声がケイネスから齎され、御者台に隠された少年は竦み上がった。

姿も見えない。声も判然としない。併し、明らかに自分に向けられた負の感情。

一体誰だと、少年は疑問を抱く。

『ランサーに参加していると言われる時は正直胡乱だったが。まさか、聖遺物を奪って自ら聖杯戦争に参加するとは。ああ、驚いた。驚いたぞ、ウェイバー・ベルベット君』

そして、少年——ウェイバー・ベルベットは漸く、その人物の正体に気が付き、

「……………あ……………」

喉が干上がるのを感じた。

今の今まで何故思い至らなかったのか。

幻惑で判然としない声の主——ケイネスは時計塔の学部長の一人、ロード・エルメロイである。

地位もあり、伝手があり、資金もある。聖遺物を失ったとしても、また新たに聖遺物を見繕うことは簡単である。

意外と言えば意外なのが、召喚したのが東洋の英雄であること。併し、それだけだ。

この対面には、不自然はないのである。

『ここまで頭が足りてないとは思わなかったよ。ああ、残念だ。実に残念だ。物を知らない教え子には、言ってみせ、やって聞かせてやるしかあるまいよ。本当の魔術師の闘争というものを』

冷やかな声で告げられた殺意に、ウェイバー・ベルベットは慄き固まった。

時計塔で彼の生徒として過ごした数年、ウェイバーはずっとケイネス・エルメロイを敵視し続けた。三代という魔術師としては浅い家柄に生まれたウェイバーをたったのそれだけで見下し侮蔑する彼を恨まなかった日はない。殺してやりたいとすら思ったこともある。

だが、その逆は今までなかったのだ。

悔っていた。魔術師が殺し合うということ。

真に魔術師たる者は自身の死を超越しなければならぬというが、それを言葉の上でしか分かっていたとまざまざと思ひ知らされる。

そこに屈辱を感じる違（いとま）すらなく、ウェイバーはただただ震えた。

だが、そんな彼の小さな肩を優しく、力強く、包み込むものがあった。

「ライダー？」

肩に置かれた、硬く大きく温かい手。

ウェイバー面を食らった。ライダーの大きな手は、矮躯の少年にとって忌むべき対象でしかなかったから。

「魔術師よ。察するに貴様、余を従える腹積もりだったらしいな。フン、臍が茶を沸かすわ」

ランサーの後ろに隠れる魔術師を、ライダーは鼻で笑った。

「この征服王に相応しき男は、余と共に戦場を馳せる勇者よ。姿を見せる度胸すらない小心者なぞ、願い下げだわい。大体、そこな益荒男の主として、その振る舞い恥ずかしいと思わんか！」

ライダーはランサーを指差しながら、ケイネスを捲し立てる。

ケイネスは怒りに顔を歪め、押し黙ることしか出来なかった。

沈黙が流れかけた其の時――

「ほう？」

ライダーの頬に、浅いながらも長い切り傷が生じた。

傍らのウェイバーは驚き振り返ると、後ろに聳える木の幹に、匕首が刺さっていた。

「さっきの誘いだかね、これが答えだよ」

如何やらそれはランサーが投げたものであった。

目を丸くし呆けるライダーにランサーは口角を吊り上げこう告げる。

「分からないか？　〴〵やなことったパンナコッタ〴〵つつつてんだよ」

ぴくりとライダーは眉を顰めた。

「ボクの主を手前の物差しで測るんじゃない。ボクのマスターは偉い

魔術師であつて、養うべき使用人や弟子を抱える、〃高きものの責任〃を持った玉だ。お前の勇者様がどれほどのモンかは知らないが、抱えているものの重さが違うんだよ。君も王なら分かるだろう?」

ランサーの答えに誰より驚いていたのが、他ならぬケイネス・エルメロイであつた。

主が軽んじられたことを怒っている。不敬も良いところな普段のランサーの行動からは考えられない振る舞いであつた。

「それを思えば、主の行動は臆病でもなんでもない。当たり前というんだ。履き違えるなよ!」

怒鳴るランサーのその姿には、ケイネスの知る剽軽な態度がない。ケイネスは胸がすつと軽くなるのを感じ、自然と笑みを零していった。

『もう良い、ランサー』

今にも征服王の首を撥ねに掛りそうになっている自身のサーヴァントをケイネスは制し、そして、幻惑の術式を解く。

「主!」

「その征服王の言う通りだ。此処まで言ってくれるお前が仕えるこの私が、これではいかんだろう」

そう言つて微笑を返すケイネスに、ランサーも顔を崩す。

「クソウ……アンタ、本ツ当に困つた馬鹿だよ」

ランサーの主に対する不敬な言葉の中にも、喜びの色があつたのを見て取つて、ライダーは呵々大笑し、誰ともなく夜空に向かつて大声を張り上げる。

「見たか、益荒男共を! いと勇敢な魔術師を! まだこの闇夜に隠れ、覗き見をしている輩がおろう! この気概に何も感じ入る所がないのか! 残りのサーヴァント共に、真(まこと)の英雄はおらんのかアアア!」

一帯に響き渡れとばかりに声を張り上げるライダーに、アイリスフィールはほつと胸を撫で下ろす。

屹度、何処かでの戦いを見守る夫。その姿を見つけられてしまつたのではないかと肝を冷やした故に。

だが、ライダーの関心には、他のサーヴァントのことしかないようであった。

磊落に笑い飛ばし、ひたすら挑発的な瞳で闇夜を見据える。

「聖杯を求めんと欲す、豪傑共よ！ 尚も穴熊を決め込むつもりならば、この征服王の謗りを免れぬものと知れ！」

大演説は、遠くビルの屋上で尚もその場に集ったマスターの命を狙わんとする衛宮切嗣の元にも届いた。

「何の茶番だこれは」

切嗣は一連の流れを見て、そう吐き捨てた。

インカム越しの舞弥からは何の答えも帰っては来ない。恐らくあきれ果てているのだろうと、切嗣は察する。

——只の殺人鬼と五十歩百歩変わらない英雄や魔術師が一体何の世迷言をほざいている。何を良い話をしているようなつもりになっているんだ。

——義だの勇だのと飾り立てた所で人殺しは人殺しだろう。

切嗣はそう思いながら、改めて引き金を引こうとした。

†

「これは、拙いな」

戦場となった海浜公園を見張っていたのは切嗣だけではなかった。

遠坂邸にて討ち死にした筈のハサン・サツバーハがそこにはいた。

それも一人ではない。

髑髏の仮面を付けた黒いローブの人影が、老若男女、矮躯も巨躯も様々な十数人の集団であった。

ハサン・サツバーハは、その名を襲名するにあたり、誰にも真似できない「業」を持つことが必須となる。サーヴァント化するに辺り、それらは皆、「サバーニーヤ」という名の宝具へと昇華されるが、このハサンのそれは分裂能力であった。

「妄想幻像（サバーニーヤ）」。生前のハサンは暗殺教団の歴史に於いても奇怪な人物であった。ある時は毒を用い、ある時は罨を作成する才覚を見せ、またある時は失われた幻の武術を振るい、様々な方

法で暗殺を行う人物であった。また、学問にも精通し、様々な人物と心を通わせる姿は、時の暗殺教団に於いては、まるで長が複数いるかのような錯覚を覚えさせていたという。

実際のところ、比喻ではなく、本当に複数人いたのだ。解離性人格障害。所謂多重人格に因り、様々な才能を持つ、自分を作り上げ、それを切り替えることで様々な暗殺を可能にしたのが、今この聖杯戦争に出陣するハサン、百の貌のハサンの正体である。

複数の人格は肉体という殻を失いサーヴァントとなる段階で完全に分離し、分裂能力として宝具と化した。

無論、増えているわけではなくあくまで一人が二人に別れている為、分裂すればするほど一個体の性能は下がっていく。但し、気配遮断のスキルに関してはそのそれを逃れる為、諜報を行うには極めて優秀なサーヴァントといえた。

聖杯戦争開幕早々、主である言峰綺礼の指示を受け、敗退したと見せかけると、それからは街中を飛び回り情報収集に勤しんだ。

今回もその活動の最中であつたが……

「これは拙いな」

海浜公園から聞こえたライダーの挑発にアサシンは肝を冷やした。

屹度、言峰綺礼とその同盟者である遠坂時臣も同じ心境だろうと考える。

アサシンは知っていたのだ。

この手の安い挑発に簡単に引っ掛かる様な人物を。

†

「うわあ……実物を見ると、余計に金ぴかだねえ、こりゃ」

ひとしきりライダーが吠えた後に現れた黄金の光を見て、ランサーはそう感想を述べた。

聳える樹木の頂に降りた黄金の鎧を纏う逆さ髪の男絢爛たる様に、集うマスターの全員が息を呑んだ。

それは、間違いなく遠坂邸でアサシンを滅殺したサーヴァントで

あつた。

ところで、この登場で最も不幸と言えたのが衛宮切嗣であつた。何故なら、アーチャーが出現した地点は、ケイネスと彼を繋ぐ一直線上——詰り、ライフル弾の軌道上であつたのだから。

ランサー、セイバー、ライダーはこの場にいる。脱落したことになるアサシンを除き、残りはアーチャーかキャスターかバースーカーか。

鎧を纏う魔術師など有り得る筈がない。故にキャスターは在り得ない。

この荘厳な王気を纏う存在はライダーの挑発の意味を解した。故に理性を焼失したバースーカーでは在り得ない。

何より、マスター達が目に映す、目の前の存在の高いステータスが三騎士の一角であることを伝えていた。

「アーチャーのサーヴァントだな？」

「我（オレ）を差し置いて王を名乗った挙句に、問いを投げるか。痴れ者め。万死に値するぞ」

ライダーの問いかけに、アーチャーは不愉快気に口元を歪め、冷酷で無慈悲な言葉を返した。

傲慢を絵にかいたようなその態度には、明らかにその場にいる他の三騎に対する侮蔑が含まれている。

「こりゃあれだわ。多分、始皇帝以上の暴君だね、うん」

ランサーはそう評したが、それがアーチャーの癪に障った。

「以上？ 何を言うか、常世にも幽世にも、この我（オレ）以外の王はおらぬ。あとは紛い物——雑種に過ぎん」

その答えにランサーは苦笑いを浮かべていた。

ランサーは認識を改める。暴君などではなく、これは「傲慢」という概念が鎧を纏った存在であると。

「我への謁見を叶えて尚、稚児にも分かる道理も解せぬようなら——最早、貴様等に生かしておく価値は無い。疾く消えるが良い」

断罪を、アーチャーが宣言すると、彼の背後の空間が、蜃気楼の如く揺らめいた。刹那、其処から現れたのは、眩いばかりの光輝を放つ、

無数の刃であった。

剣、槍、斧、種別も造りも様々なそれらは、どれもが膨大な魔力を帯びており、宝具としか思えないような代物であった。

アサシンを倒したのと同じ戦法。ランサーはすぐに、ケイネスを連れたの逃亡を考える。

そんな場面を未遠川のほとりで見守っていたマスターがいた。使い魔越しに戦場に降り立った黄金のサーヴァントを見ると、

「はっ……はははははは」

興奮と、憤怒と、怨嗟の色を隻眼に滲ませて、顔面を半ば崩壊させながら哄笑した。

疑うべくなく、アサシンを迎撃したサーヴァント——遠坂邸を守護した憎き怨敵——遠坂時臣のサーヴァント。

愛する女を、葵を奪って行った男、遠坂時臣。

それで尚、葵から愛娘を取り上げた仇。

にもかかわらず、平気でいられる卑劣漢。

第五のサーヴァントのマスター——間桐雁夜が殺さなくてはならない相手。

「ブチ殺せ、バーサーカー！ 時臣のサーヴァントを八つ裂きにしろオ！」

その絶叫に呼応し現れたのは、漆黒のフルプレートに身を包む屈強な影。

「■■■■■■■■■■！」

大凡、通常の人間ならば発音も聞き取りも不可能な咆哮を上げ、影のような鎧のバーサーカーは疾走し、勢いよく川へと飛び込んだ。

第十五話 狂乱暴風

やおら海から飛沫というにはあまりも派手すぎる爆発が起こり、雨となつて戦場に降り注ぐ。

誰もが予想だにしなかつた第五のサーヴァント。

然も、真冬の海を泳いで遣つて来るなどと誰が思おうか。

海中からミサイルのように飛び上り、フルプレートを纏つた漆黒の騎士は黄金のアーチャーの眼前へと降り立つ。

それはまるで影絵のような存在であつた。全身を覆う甲冑は只管（ひたすら）に黒く、炎のように揺らめきながら湧き上がる黒い魔力の所為で輪郭がぼやけて見える。

ヘルメットのスリットの奥が地獄の業火の如くに燃え盛り、一体何を考えているのかまるで判然としない。

ただ分かるのはこのサーヴァントには、英霊が持つ「華」がないこと。

騎士王アルトリアのような、凜とした清廉な闘気も。

関聖帝君雲長のような、薫風を思わせる余裕に満ちた佇まいも。

征服王イスカンダルのような、漢を体現した王道も。

黄金のアーチャーのような、ただそこに在るだけで呑まれそうになる絶大な自我も。

何も無い。只あるのは体から齎される恩讐の闇——言わば負の波動であつた。

「征服王。あの騎士には誘いを掛けないのですか？」

突然現れた黒騎士を警戒しながら、セイバーは揶揄するかのようライダーに訊ねた。

「駄目だなありや。話し合いすらままならんだろうなあ」

お手上げとばかりにライダーは手をひらひらとはためかせた。

現れたサーヴァントから感じられるのは殺気のみだ。

そこから推察されるクラスはバーサーカー以外に在り得ない。ステータスを上昇させる代わりに、その理性を狂乱の檻に閉じ込める、暴風。

それがバーサーカーのサーヴァントだ。

「Master(マスター)。あれのステータスってどんな感じ？
強いのか弱いのか？」

ランサーの問いかけに、ケイネスは自失したまま首を振った。

「分かん」

「分からないって……ステータスが見えないってこと？」

「そうだ。あれに関して分かることは一つとしてない」

ランサーは胡乱しながら、バーサーカーを見つめた。

暗闇と同化した甲冑は無骨であり、個性というものがまるで存在せず、素性を割り出す材料にはならない。否、具に観察しようと思えば思うほど、どんどんぼやけて、陽炎のように不安定になっていく。

それを感じたのはランサーだけではない。セイバーも、ライダーも、傍で見守るアイリスフィールですらもそうであった。

宝具かそれともサーヴァントが固有に持つスキルの一種か。

兎も角それが原因で、黒甲冑のバーサーカーの全貌はステータスも含めてよく分からない。厄介なことこの上ないと、言つて然るべきだろう。

それだけではない。こうも混戦となってしまうえば動けない。然も、バトルロワイヤルの常道で行けば、最も劣勢に立たされたものが総出で叩かれる。

——拙い。

ランサーの所為で散々疲弊していたセイバーがそこに一番近かった。

それを心配し、アイリスフィールが不安気な顔をする。

「大丈夫です」

と、無理くりな笑みを返したが、正直なところかなり追い込まれているのも事実であった。

ランサーとしてはそのセイバーを一刻も早く倒しておきたいところであった。結局ついで解放しなかったエクスカリバー。一体どれほどの代物かは分からないが脅威になると見て間違いないだろう。それ以外にも何か他に隠し玉があるかもしれない。無論、かなりいい

所まで追い込んだということもある。

ライダーとしては、誰かを仕留めようというつもりはない。今のところは他の顔ぶれの確認程度であろう。強いて言うのであれば、ランサーが欲しいとは思っていると言ったところか。

アーチャーは、先にいた三騎悉くを、殲滅する腹であろう。無論、挑発の主であるライダーを最優先にしてだ。

さて、問題はいきなり現れた黒騎士だ。戦場は最早混迷を極め、次に何が起こるかすら誰にも判断が出来ない状況になっている。そんな状況でサーヴァントを放つ旨味はない。

ランサーは考えた。幾つかの例外はあるが、バーサーカーは戦い出せば嵐のように暴れる為、制御が難しい反面、平常時ならば理性がない機械的な存在というだけあって操作がしやすいという利点を持つ。詰り、マスターの意に反して戦場に出てくるということはまず起こり得ないのだ。

裏を返せば、この乱入は完全にマスターの意思に因るもの。そして、そのタイミングが黄金のアーチャーの参戦。

——まさか、このバーサーカーのマスターは、アレを殺ろうって考えなのか？

バーサーカーが躍り出た場所が丁度、アーチャーの眼前だということも含めて、ランサーはそうとしか考えられなかった。

だが、在り得ない。遠坂邸での戦いを殆どマスターが見ている筈。ならば、敢えてアーチャーと戦おうなどという考えは浮かばない。

——となると考えられるのはバーサーカーにはあれと倒せるだけの何かがあるか、或いは……

バーサーカーの殺意が込められた視線が、樹木の頂に立つアーチャーのみに確認しながらランサーは思考する。

——アレのマスターに何か私怨でもあるかってどこか。

典型的な魔術師というのは魔道の探求の中で人の命を奪うこともあるし、当然ながら政治戦に因り相手を蹴落とし、自分がより良い地位に預かろうとするなどということは間々ある。

ケイネスからそれを聞いていたランサーは恐らくその辺りで、あの

アーチャーのマスター、遠坂時臣自身が誰か知らに怨みを買っていたのではないかと考える。

——ともあれ、確かなのは、バーサーカーが敵と認識しているのはアーチャーだということ。そしてそのアーチャーも自分に対する敵意を理解し、バーサーカーを真紅の双眸で睨んでいる。

「誰が我を目に入れて良いと言った？ 頭が高いぞ」

彼の背後に滲み出ていた剣戟の切っ先が余さずバーサーカーへと向いた。

「面を下げよ、雑種」

王命と共に、無数の武具が一斉掃射された。

それは『投げ捨てる』とでも表現すべき投擲であった。恐らく、宝具を何処からともなく出現させ射出するというこの攻撃方法が、アーチャーがアーチャーたる所以であろう。

そして、この捨てるような射出が出来る理由は所有する宝具の数が異常だからだ。

これが、黄金のアーチャーの強み。

だが——。

その攻撃をバーサーカーは凌ぎきる。

然も、その方法がその場にいた英雄たちを驚嘆させる。

射出された武具の中から最初に投げられた剣を二本掴み、それを巧みに操り、次々と遣って来る刃を叩き落したのだ。

当然、総てが宝具である為、その強さも一定ではない。手に持っているものよりも強いものが来るたびにそれを捨て、当たらな得物を掴み取り、また打ち落としていく。

「Wow（ワウ）！ 器用なヤツだねえ」

ランサーが囁した。

「とてもバーサーカーとは思えない……」

セイバーもそのように評する。

理性が融かされる異常、バーサーカーというクラスで現界した英霊はその技巧の大半が失われる。

併し、黒騎士は違った。向かってくる武具を掴み取り、それを操る

腕には、確かな冴えがあった。

そもそも、宝具というのは、担い手のみに扱われる専用装備だ。拾った所で使いこなせる是非も無く、凄まじい速さで遣って来る宝具の弾丸を切り落とすということなど言う間でもない。

「あれがヤツの能力というわけか」

ライダーが唸り声と共に齎したことが恐らく真実。

——手に持った宝具を自分のものにする。

次第に激しさを増す攻撃をけれど、バーサーカーはその能力で以て凌ぎきる。バーサーカーに命中した武具はついぞ一つも無かった。

そして、バーサーカーは手に残った戟と大剣を、忌々し気にその美貌を歪ませ、自身を見下ろすアーチャーへと投擲した。

盲打ちに過ぎなかったか、それとも最初からそこを狙っていたのか。大剣と戟は、アーチャーの足場になつていた樹木に命中する。全長の半分ほどの位置から、樹木は倒れ、轟音を立てる。

併し、それだけだ。

黄金のサーヴァントは樹木が倒れ伏すより先に、ふわりと宙に躍り出、何事も無かったかのように地に降りた。

「この私の宝物に穢れた手で触れたのみならず、同じ地に降ろすとは。天に立つべきこの我を」

——いや、「何事」は既にあつたようだ。

アーチャーは激怒していた。此の不敬なる狂犬を正さなければならぬと思つた。

「最早、肉片一辺すら残さん。裁きの時だ！」

紅蓮に燃える双眸をバーサーカーに向け乍（なが）ら、アーチャーは怒号を上げる。

そして、またも空間を歪ませ現出する宝具の群れ。

夥しいその数は、この場にいる全員から言葉を奪うのに充分であつた。

誰もが、黄金のアーチャーの底を見極めることが出来ないでいた。

†

圧倒的な力を見せつける、アーチャー。

必勝を期して遠坂時臣が呼び出した古代ウルクの王、ギルガメツシュ。

だが、マスターの遠坂時臣は自身邸宅の工房内で胃痛に喘いでいた。上等なスーツに身を包んだ、如何にも気品の漂う紳士然とした見目には相応しくない狼狽えぶりは、戦場を感覚共有の魔術に因ってアサシン越しに見張る言峰綺礼からの情報の為だ。

工房の机に置かれた一見朝顔の様にも見える、宝石魔術を応用して作られた通信機。

それが伝えたのは、英雄王がさらに力を発揮し、バーサーカーを殲滅せんとしている時臣にしてみれば胃潰瘍ものの報告であった。

時臣が立てた必勝の方針とは、綺礼が召喚したアサシンを用いて謀報を行い、敵の実像を見極めてから、英雄王の宝具、あらゆる宝具の原典が貯蔵された宝物庫「王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）」で以て一気に勝負を決めるというものだった。

だが、まだ聖杯戦争も序盤の内に、ギルガメツシュが積極的に戦いに出てしまった所為で今まさにそれが瓦解しようとしている。

総てはアーチャーのクラススキル単独行動の所為だ。これの所為で、マスターからの魔力供給がなくなるとも現界することが可能になる。畢竟、ギルガメツシュは自分勝手に行動出来てしまうのだ。

そして、その自分勝手に過ぎた結果、バーサーカーに「王の財宝」を全力で放とうとしてしまっているというわけだ。無論、何度も使えば、流石にその仕組みと、アーチャーの正体を見極められ、対策も立てられてしまう。

これを止めるには最早令呪しかない。たった三度しか使えない絶対命令権。傲慢で、マスターの命令など聞く気も無い英雄王を律する為には必要不可欠になるものだ。

『導師よ、御決断を』

宝石通信機から綺礼の催促が掛った。

常に余裕を持って優雅たれ——遠坂の家訓を常に実践してきた筈の自分が、まさか他のマスターに先んじて令呪を切ることになるとは思ってもおらず、その悔しさに歯を噛み締める。

右手の甲を凝視する。

「令呪を以て奉る。我が王よ、御帰還を」

†

不意に、今にも宝具の雨を降らせんとしていた黄金のサーヴァントが姿を消した。

この場の誰もが予想していなかった突然の撤退。

皆が理解に窮した。

『どう見る？ ランサー？』

ケイネスから念話に因って問い掛けが来る。

『令呪を切ったんだらうね。これ以上暴れさせるのは危険だと踏んで』

ランサーはそう見立てた。

「どうやら、あの金ぴかのマスターは気の小さな男のようだのお」

呆れたようにライダーは嘯いた。

だが、まだ落ち着ける雰囲気ではない。

バーサーカーは新たな敵を探そうとしている。

標的を見失い、スリットから覗く紅い双眸は所在なさげに彷徨い――

―見つけた。

怨嗟の炎に燃える視線が捉えたのは、セイバーであった。

「……ur……」

呪詛の如き声だった。怨念が籠った魍魎の如き呻き。

「……ar……ur……!!」

最初に耳にしたバーサーカーの音声は、はつきりした言葉のようであり、聞けば聞く程、ノイズが走ったように掠れる。

殺気を迸らせ、黒騎士は白銀の鎧を纏う、騎士王へと迫る。

第十六話 槍兵敗走

「やめろオオオ！ バーサーカー！ 戻れ！ もう良い！」

川辺でのたうち回りながら、バーサーカーのマスター、間桐雁夜は叫んでいた。

間桐雁夜は魔術師の家に生まれながら、生粋の魔術師ではない。

あまりにも残酷な魔術師の在り方を嫌い、出奔していた身である。ある目的を持って、生家に戻って来たのがほんの一年前。それから、間桐の秘伝により、魔術師となった言わば急ごしらえの魔術師だ。

然も、その秘伝魔術というのがこれまた悪辣。体内に、魔術回路を代替する虫を飼うというもの。

魔力を消費するという行為を行えば、体内に飼った虫が暴れ、肉を喰らう。

そして、サーヴァントの実体化とは、魔力を消費する行為である。加えて言えば、バーサーカーのクラスのサーヴァントは大食らいである。

「あぐっ……うぎい……」

その二つの組み合わせは、雁夜の体に激痛を与える。

否、**“激痛”** と言うには生ぬるい。

生き乍らも、体を貪り尽くされる恐怖と共に遣って来る痛みは地獄そのものであった。

神経が針の筵の如くささくれ立ったような、血液が一滴残らず毒薬になったような、細胞の一つ一つが癌細胞になったかのような、痛み、痛み、痛み、痛み――

雁夜は肌が裂け、爪が剥がれ落ちる程、全身を掻き毟った。

体を何度も地面に叩き付け、苦しみ喘ぐ。

これを止めるには、バーサーカーを撤退させ、霊化させれば良いのだがそれが出来ない。

バーサーカーが新たな標的を見つけてしまい、戦闘を止める気配が無かったから。念話で命令を下せども戦闘を止める素振りを見せない。それどころか、雁夜からバーサーカーへと流出する魔力は余計に

増していく。

それに伴い、刻印虫暴走は激しさを増す。

「止まれエエエエ！」

令呪を使うという選択肢すら、雁夜の頭からは解け落ちていた。

†

「A——urrrrrrrrrrrッ！」

けたたましい咆哮と共にシオルダーチャージを仕掛けてきたバーサーカーを、セイバーはひらりと躲した。

その勢いにより、そのまま樹木に激突する。

其処は、丁度ランサーが投げたヒ首が突き刺さった場所であった。

バーサーカーは怯むことなく立ち上がると、ヒ首を引き抜きセイバーに向かって投げた。

音速で迫る刃をセイバーはいとも簡単に弾く。

「ちよっ!? ボクのだぞ、それ!？」

くるくると回りながら、宙を舞うヒ首を慌ててランサーは拾う。

「大切に扱えよなあもう……うん?」

と、そこで気が付く。

ヒ首に葉脈のような黒い筋が生じていた。魔力を感じる。バーサーカーから滲み出ているのと同じ、負の感情に満ち満ちた魔力を。

「まさか……」

ランサーがある可能性に行きついた時、めりめりと凄まじい音がバーサーカーのいる方向から鳴った。

ランサーはその音に驚き、顔を上げる。バーサーカーが傍の樹木を引き抜き、右腕に抱え込んでいた。どうやら、それを武器にする算段のようだ。高く、太い檜を軽々と引き抜き、片手で持てるだけの剛腕も凄まじかったが、それ以上に筆舌すべきは、その大木に起こった現象。

バーサーカーが握った箇所を起点に、蔓(アイビー)を思わせる、黒い筋状の魔力が絡みついていった。

相對するセイバーも、見守るライダーもランサー同様に理解する。バーサーカーの宝具の正体を。

「手に触れたものを宝具にする能力か」

宝具はランサーの「青龍艶月」や、セイバーの「約束された勝利の剣」のような武具としての形を持つものばかりではない。

英霊の肉体に掛けられた呪いや加護、修練のなかで生み出された技、逸話が昇華された特殊能力などの形を取る場合もある。

バーサーカーのものは、そういった形のない宝具であった。

だが、正体があったところでその脅威は変わらない。そして、アーチャーが射出した宝具を奪い取り、自在に操ったその手前も、今ならば誰もが納得出来た。バーサーカーの魔力に浸食され、文字通り、「彼の宝具」と化していたのだ。

そして、ただの樹木ですらも、膨大な魔力を帯びて、他の宝具と打ち合う程の代物となる。

まずバーサーカーの突進。更に追撃の薙ぎ、唐竹。一発一発が大振りにも関わらず、研ぎ澄まされている。然も、樹木のサイズが超大であり、まるで破城槌のような威力がある。

セイバーは罅迫り合いをする。互角に打ちあえてはいるが、それも何時まで持つか。

ランサーとの死合で、魔力放出を幾度と無く使った。マスターの魔力とセイバー自身に残る魔力を総動員しても切り札の「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」を一発放つのが限界。

そもそも、バーサーカーの猛攻は溜めを作らなければ放てない対城宝具を使わせるだけの隙を生じさせることすらない。

此方は戦えば戦うほど不利になる。劣勢に立たされるセイバー。再び、バーサーカーの突きが放たれる。

セイバーは顔に焦りを露わにしながらそれを受け止めようとする。だが、それがセイバーに届くことは無かった。

「Sorry（スオリー）、狂戦士君。でもこの嬢ちゃんはボクの獲物なんだ」

ランサーが間に入り、大刀の切っ先を樹木の根に食い込ませ防いでいたのだ。

そして、そのまま剛力で以てはじき返すと、体の周りで得物を振り

回し、後ろ手に持って構える。

「邪魔立てすんなら君の首から撥ねるよ?」

「ラン……サー?」

死闘の決着を付けて起きたい。ランサーの気持ちをそうだと考えてセイバーは、違和感を覚える。

——何かがおかしい。

決着を付けるという願いは、彼女が殉じた騎士道そのものである筈なのに。何も感じ入るものがなかった。

「何をしている! セイバーを攻撃しろ! 倒すなら今であろう!」

ランサーの行動に途端にケイネスが痲癢を起す。

「セイバーはこのボクがただ一人で倒す! 然う決めた! お願いだ、阻まないでくれ!」

優美な微笑みが似つかわしいランサーからは想像が出来ぬ、沈痛な面持ちでランサーは訴える。

「聞けぬと言うのなら仕方あるまい! 最早、これに頼るまで!」
そう宣言し、ランサーに見せつけたのは右手の甲に宿る令呪であった。

途端に、ランサーの表情が絶望に凍結した。

「止めるオ! 止めてくれ、主!」

喉が潰れそうな程の絶叫。

見ているセイバーですら胸が締め付けられそうになる。

だが——

「——美塵葬・大紅蓮（チンロン・ユーメイレン）」

冷ややかな声で告げられた真名解放に因り、セイバーの背筋に怖気が走る。

——拙い。

そう思ったが時既に遅かった。ランサーが、刹那で反転し、青龍を宿した絶対零度の刃の輝きをセイバーへと閃かせる。

迫り来る刃を寸での所で受け止め、セイバーは呆然とした表情でランサーを見つめる。

「……仕留めきれなかったか」

ぞつとするほど冷淡な声でランサーが呟き、漸くそれでセイバーは違和感の正体に気が付いた。

この男は、一対一で自分と打ち合った時に何と言った？

その力を讃えた時に何と返した？

誉れなど自分にとっては無用の長物であると切つて捨てたではないか。

このランサーにとって、戦いは戦い以外の何物でもなく、命を奪うものという認識しかないのだ。

騎士道という精神がまるで存在していない。故の、騙し討ち。

「残念だったな、ランサー。そうまでして勝ちを狙ったようだが、私は以前未だ変わりなく健在だ」

「そうだね。でも、触れたな？」

そう指摘され、セイバーはぞつと顔を蒼褪めて聖剣を見つめた。

魔力も、宝具が持ち得る高貴な気も、何も感じられない。

聖剣が死んでいる。

一体何故？

セイバーは答えを探す。そして、彼女はあの技を躲す時に頭の中で何を思っていたかを考える。同時に、ランサーはその技をどのようの説明したかを。

確か、武具や体で触れると拙いと感じた筈だ。

曰く、触れた者を紅蓮の華のような姿で殺す技だと言った筈だ。

そして、セイバーは答えを導き出す。

ランサーは嘘を吐いていたのだ、と。

「気が付いたか？ ボクのこの技は人を殺すのみじゃあない。宝具を凍てつかせ——砕く！」

それが真実であった。

「だが、流石に聖剣だ。仮死状態に持つていくまでが精々か。長くて五日、短くて三日。封印しておくくらいが限界かな？」

ランサーはそう苦笑したが、セイバーにとっては今のこの状態ですら剣呑である。

何故ならば、

「けど、これでその剣は岩に突き刺さる程度の棒切れだ。襲るるに足りないよ！」

一対多数になった場合の唯一の打開策である対城宝具がこの場では失われたことになるのだから。

「いや、併しMaster（ムアスター）。中々の演技力だった。お蔭で上手く騙せたよ」

「フン……。貴様の三文芝居に付き合うのも楽ではないな」

仲間割れをしたように見せかける為にケイネスはよく働いたと言えた。

この場の誰もが、令呪を切ると思った事であろう。

「――外道め」

セイバーはランサーをそう吐き捨てる。

かはははとランサーは大笑した。

「外道で結構。やらぬ正道より、やる外道ってね」

そして、ランサーは依然大木を構えたバーサーカーと共にセイバーへとにじり寄る。

「悪く思わないでくれ。ボク、これでも三対一とか経験ある方でして。二対一で女の子を甚振ることに関しては何の感慨も無いんだ」

この状況下でも、優美な微笑みを絶やさないので、セイバーにとっては殊更に恐ろしく感じた。

「アイリスフィール！ 貴女だけでも逃げてください！ 最早これまでです……」

成す術無しと判断したセイバーはアイリスフィールに逃走を促す。マスターの妻を守らないという考えはセイバーの中には無かった。

「セイバー、諦めないで！ 貴女のマスターを信じるの！」

だが、アイリスフィールはかぶりを振った。

セイバーを死なせるつもりなど毛頭ない。屹度、この場には夫が――切嗣がいるとアイリスフィールは信じた。

夫が考えた策により自分は此処にいるから。戦場で華々しく戦えと命じられて。実際多くの敵を惹きつけた。

今も、ランサーとそのマスターはセイバーに注目して背中を晒して

いる。

屹度、切嗣が考えた通りの展開成っている筈だとアイリスフィールは信じて疑わなかった。

†

——こんな展開であつて良い筈がない。

切嗣は内心でそう毒づいていた。

最強のサーヴァントの筈のセイバーが此処まで追いつめられる展開も。

アサシンに見張られながら、制圧射撃をしなければならぬこの切迫した状況も。

何もかも予想外だ。

「……舞弥。『聖杯』を守る事が最優先だ。制圧射撃をする。カウントに合わせてアサシンを攻撃しろ」

もう何度目になるか分からないが、ランサーのマスターそ今度こそ仕留めきり、ライダーのマスターをも完全沈黙させる。

他に選択肢はない。

アサシンの攻撃に関しては恐らく切嗣の側に来ることにはないだろう。何故ならば、切嗣のライフルには消音装置が取り付けられ、相方の舞弥のそれには消音装置がない。

十中八九、アサシンは彼方に行つてくれるだろう。

そう自分でも甘いと思えてしまう目論見を立てて、いざ一世一代の賭けに出ることにした。

†

その時、耳を劈くような轟雷が鳴った。

目を抉るような、閃光。ひた走る何億Vにも価する紫電。土石を巻き上げながら爆走する車輪。

「A A A L a L a L a L a L a L a L a i e (アアアラララライツ) !」

猛々しい声を上げ乍ら、ライダーがランサーとバーサーカーへと迫る。

「うおっ!?!」

ランサーは驚きに目を見開きながら、身を翻して回避する。

「■■■■ツ!?!」

バーサーカーはセイバーばかりを注視していた為に思い切り跳ね飛ばされた。

空中を錐もみ旋回しながら吹き飛ぶ。

そして、海へと叩き付けられ、大きな飛沫を立てる。

だが、雷電を纏った角が抉り込まれ致命傷を負った筈のバーサーカーはそれでも息絶えてはいなかった。

ぴくりぴくりと痙攣しながらもなんとか陸上に戻ろうとする。

「ほう……良い根性ではないか」

ライダーはバーサーカーを見下ろしながらも讃える。

併し、残念ながら足掻きもそれまで。バーサーカーは海の中に吸い込まれたかのように、蠟燭の炎の如くぼうと音を立てて消えた。

「それでだ、ランサー」

まるで、何事も無かったかのように、ライダーは獣の如き眼光でランサーを見た。

「貴様の頼みの綱であったバーサーカーはいなくなったぞ？ 如何する気だ？」

ランサーは顔に焦燥を露わにしていた。

「……何だい君は？ 卑怯者が気に入らないから正そうってのかい？」

「違う。先程、貴様が投げた刃。この征服王への挑戦状と受け取った。それだけだ」

ランサーはハハハハと弱弱しく笑った。

「……Master (ムアスター)。Pinch (ペインチ) だ」

「説明しなくても分かる」

だが、ケイネスは至って落ち着いた態度であった。

「無論、これを打開する策はあるんだろうな」

その眼差しには期待が籠っていた。

「そうだ、ランサー！ これで万策尽きたというわけではないだろう！ 我はこのセイバーと貴様を潰しに掛るが、勝機はあるんだろう？」

それを、この征服王に晒すが良い！」

ライダーからも威勢の良い声が掛り、ランサーは顔を覆った。

そして、はあと溜息を吐き、凜烈な面差しへと直り、ライダーとセイバーを睨み付ける。

「無論だ。君らに対する策は決めている」

そう言うとは彼は、大刀を一文字に構える。

「青龍艶月（チンロン・グアンダオ）」

その宣言と共に起こったのは、セイバーに襲撃を掛けた時と同じく濃霧であつた。

「なんだ……一体何をやる気だ？」

セイバーは困惑しながら辺りを見渡す。

隣のライダーは押し黙っている。

そして、どれほどの時間が経つただろう。

やがて霧が晴れると、其処にはランサーとそのマスターのケイネスがいなかった。

「……逃げたな」

セイバーが呟いた。

「やっぱりな」

ライダーも呆れたように呟いた。

逃走経路は海であつた。

海上を若芽の様にランサーとケイネスは揺蕩う。

ランサーに抱きかかえられる形で波に浮かぶケイネスは

「おいコラ、ランサー！ 策はどうした!？」

と暴れるように彼を怒鳴り散らした。

ランサーはH A H A H Aと愉快そうに笑い飛ばした。

「そんなものはない！ 逃げるんだよ！」

「お前を信じた私が馬鹿だったよ！」

ケイネスは忌々し気に叫んだ。

大英雄と時計塔の君主は、その名にあるまじき敗走を決めたのだつた。

第十七話 戦闘終了

「クソウー」

衛宮切嗣は、ライフルを思い切り地に叩き付け、その場に蹲った。動作不良の心配など、頭の中にはまるでなく。

そこにあるのはただ苛立ちだった。

原因が一体何か。切嗣は自問する。

セイバーが敗北しかけたことか。それもある。

ランサーに追い詰められた所をライダーに助けられたことか。寧ろ此方としては有難い。

切嗣をことに腹立たせていたのは、ランサー陣営の予測不能の動きであった。

「どういうことだ？ あの逃走経路、明らかにスナイパー対策だった」
ランサーが霧を起こした後、逃走に選んだのは海であった。水に隠れられるのは狙撃手にしてみればかなり厄介である。水面にライフル弾が着弾すると普通ライフル弾は砕け散る。

水にはそれだけの抵抗力があるのだ。人がプールに腹から勢いよく飛び込むと、痛みを生ずることがあるが、それと同じことだ。

尤も、普通軍人など銃の扱いに長けた者が同じく狙撃に遭った場合、水に潜ってやり過ぎすなどということとはしない。当たり前だ、人間の機能の限界というものがある。もしそれを実行しようものならば、酸欠に耐え切れず水面から頭を出した所に銃弾を撃ち込まれて終わりだ。況して水の中では自由も効かない。音速を超えて遣って来る銃弾を躲せる是非もない。

普通の人間ならば。

だが、魔術師の場合は別だ。魔術刻印を継承した人間というものは丈夫に出来ている上、礼装や魔術の力を借りることで水の中の自由を可能にし得る。

魔術師がスナイパーに狙われた場合に水の中に逃げるといのは有効な手立てではあるのだ。

併し――

「どうして魔術師が遠距離からの狙撃を警戒するんだ？」

切嗣にとって一番の謎がそこであった。

魔道のどっぷりと漬かり切った人間は得てして文明の技術というものを見下す傾向にあり、近代兵器もその限りではない。

第一魔術師に狙撃ポイントを見つけられたケースは切嗣のこれまでの殺害経歴の中には存在しない。

その上でそれに対する対策を立てる者など悪い冗談にしても悪すぎる話であった。

衛宮切嗣という人間が聖杯戦争に参加するという情報は知られていると切嗣自身そう考えていたが、自分向けの対策を考えてくる魔術師など俄かにも信じ難かった。

「——そもそもこれを考えたのは本当にあの魔術師か？」

ここにきて切嗣は、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト、コルネリウス・アルバに代わる外来の魔術師——と、思い込んでしまっている人物——の手腕によるものかを漸く疑い始める。

あのマスターに着いていたサーヴァントは一体何だか。

切嗣が思い至ったのはランサー、関羽雲長の存在であった。

同時代に於ける武人の中でも関羽雲長は算術盤を発明したという伝説が残る程の智者であったとされる。

聖杯に与えられた知識から現代戦の何たるかを得、現界に当たりそれを学び直したとしたら。

魔術師というものをよく学び、それとかみ合うような戦術を新たに編み出したのだとしたら。

切嗣にとつては厄介なことこの上ない相手だ。

「クソウー」

もう一度叫び、切嗣は床を殴りつけた。

血が滲む。

衛宮切嗣という人間は英雄というものが嫌いだ。少年時代より戦場を渡り歩き、そこがいかにかに地獄のようであったかを知っているから。戦場をさも華々しいものであると誤解させる英雄は憎むべき対象であった。

特に、関羽雲長という英雄は嫌いであつた。

彼の伝説も、それに対する信仰も。

「顔良、文醜を両断し、曹操への恩を返す」——それに因り、関羽雲長は義に厚い人物として讃えられているが、切嗣にはただの人殺しにしか思えなかつた。

「五つの関所を突破し、そこを守る将をも打ち倒す」——通行手形を見せられず、門番を殺す行為を人それ、蛮行狼藉という。そもそも関羽と劉備の妻がその場で死んでしまえば、五人の將軍は助かり、命を散らすことはなかつたのである。

大した人物ではないと思つてはいたが、実際見てみると、切嗣はより醜悪な人物だと感じた。

不意打ちをし、女であろうと平気で傷つけようとし、あらゆる手を着くし敵を嵌め、勝利のみを貪欲に追及する。

自分とさして変わりはないただの殺し屋——切嗣がランサーに抱いた印象と評価は彼が持ち得る評価の中で最低値であつた。

「クソウー」

また、拳を叩きつけた。

切嗣は激情に駆られていた。

ただ自分と似たようなことが出来ながらも恥ずかしげなく英雄を名乗っているとそれだけならば、切嗣は目的の為にただ殺す対象として冷静に処理できただろう。

それでも感情を制御できなくなってしまったのは、あのランサーの表情が原因だつた。

——笑つていた、心から。

常に笑みを湛え、自分の為に笑顔を浮かべるその様は、自分を罰し続け、努めて幸せから遠ざかろうとする切嗣の在り方からすれば理解し難く、また許せないものだつたのだつた。

†

ケイネス・エルメロイは足先まで水が満ちる通路を歩いていった。

一寸先も見えない程暗く、凍えるように寒い。壁と壁の間が狭く、両手を広げ切ることが出来ない。

天井も低く、頭上の間近に冷ややかでいて湿っぽくそして硬いコンクリートが迫っている。

ケイネスが歩く度に鳴るじゃば、じゃばとした水の音が異様に反響し耳に残る。

その間を縫って、ちゅうちゅうと喧しい鳴き声が届いた。この水路の主だ。

そして、辺りに漂う吐き気を催す腐臭に耐え切れなくなり、「もう嫌だ！ シャワー浴びたい！ 風呂入りたい！」

遂にケイネスは癩癩を起した。

「だったら立ち止まらないでくれ、Master（ムアスター）。じゃないと工房に帰れなくなる」

ランサーはケイネスに続いて足を止めると、自分の前を歩くケイネスを窘めた。

「大体、何故こんな逃走経路を選んだ？」

「言っただろう？ 衛宮切嗣からの攻撃を……」

「それは聞いた！ だから海に入ることも納得した！」

ランサーから事前に相手の攻撃手段への対策方法を聞いていたケイネスは躊躇なく極寒の海へと潜った。

風と水の二重属性を持ち、それらに共通する性質の流体操作の魔術を得意としている為に、水の中でも地上と同じように呼吸が出来るということも手伝っていたのであろう。

そして、まんまと戦場を脱出し、ランサーに導かれた場所は――

「だが私はこんな汚い場所に来るとは聞いていない！」

下水道であった。

ランサーはケイネスを抱きかかえながら、海から泳いで未戸川を逆走、そこから用水路の注ぎ口に侵入した。

「人に見つからない良いルートなんだけどね」

とランサーは苦笑した。

冬木を人間の五体に見立てた時、地下水路は血管である。

街の至る所に通じており、ケイネスの工房が置かれている場所の傍まで行くことも可能であることはランサーも調査済みであったが……。

ケイネスが育った環境にまでは頭が回らなかった。

魔術はその研究に多大な資金を必要とする。その為、名門と呼ばれる魔術師の家系は表向き貴族や富豪が多く、ケイネス・エルメロイもその例に漏れない。

そして、その貴族という性質が、不潔という言葉を敷き詰めたようなこの環境に拒否反応を起こさせたのだ。

「すまなかったね。罪人上がりのごころつきの立てる方針なんてのはこんなもんなんだ」

「……フン」

皮肉ったようなランサーの謝罪の言葉にケイネスは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

併し、実際のところそこまで怒っているというわけではない。

ランサーが最善だというならば、ケイネスはこの下水道にも耐えられた。

実際、ランサーの指示で視野を三六〇度まで、遠見視力十倍に強化するコンタクトレンズのような礼装 “星詠夜鷹（オクルス・ミールウス）” を着け、そのお蔭で自分を狙う魔術師殺しの存在を察知することが出来たのだから。

だが、ランサーは水路に伏し、

「すまなかった」

汚水に前髪が浸かるまで頭を下げた。

「お、おいそこまでしなくとも……。私は別に……」

慌てて頭を上げさせようとするケイネスを、

「いや、こうさせてくれ」

と押し留めた。

「何もこのことだけで頭を下げるわけじゃない。さっきの戦いのことも含めてだ」

「先程の戦い？」

「ボクの独断でライダーからの誘いを断ったことだ」

ケイネスはその言葉に寧ろ、鳩が豆鉄砲を食うような感覚を味わう。

「……征服王イスカンダルに取り入り味方に付けられれば大きな力となっただろう。策としてはかなりの上策だったのに。その選択肢を蹴散らしてしまった。本当にすまない」

最早、排水を呑み込まんとするほどライダーは頭を下げていた。

「君を馬鹿にされたのが本当に許せなかったんだ。冷静さを欠いてしまった……」

ケイネスは言葉を失った。

ランサーはケイネスが聖杯を求める目的を知っている筈なのに。それでも聖杯をケイネスに齎すという誓いを守ろうとしていた。

もう一度、桃園に行くという願いなど頭の隅にも無く——ただ、ケイネスの勝利のみを求めているのだ。

「……頭を上げろ、ランサー」

「だけど」

「良いから上げろ」

そう言ってケイネスはランサーの額を軽く蹴飛ばし、無理矢理顔を上げさせた。

「つてえー！ 何も蹴ることはないじゃないか！」

ランサーはでこを抑え涙目でケイネスに訴える。

「黙れ、対して痛くないだろう」

ケイネスの態度は一見素っ気なかった。

はあと大きな嘆息すらしている。

「あれのことなら良い。私が謗りを受けたのは元を正せばあれのマスターを糾弾し、征服王を無闇に炊きつけた所為だ。貴様に落ち度はない」

「でも……」

「加えて言うならば。若し私への罵詈訾に対して動かないようであれば、私はそのままお前を自害させていただろう。当然だ。主を軽んじる従者など万死に値する」

そして、ケイネスはランサーの目先まで下がり、彼の肩に手を置いた。

「だから——お前は正しいことをしたんだ。責任を感じる必要はない」

ランサーはそう言われ、目を見開いた。

常に不機嫌そうな仏頂面をしているケイネスが一瞬笑ったように見えたから。

「だが、正直それには自分で気が付いて欲しかったがな。お前の啖呵に乗った時点で」

それからすぐにケイネスは立ち上がり、腕組をすると不貞腐れたように、目線を逸らし、口を尖らせた。

「あはっ」

それが可笑しくて、ランサーは短く笑声を漏らす。

「何が可笑しい?」

「いや、別に」

ランサーはそう言って立ち上がった。

「それよりもボクはその責任をどういった形でとれば宜しいでしょうかね?」

いやらし気に口角を吊り上げ、訊ねるランサーにケイネスは溜息を吐きながら、呆れたように両手を挙げる。

「そんなことも分からないか。君は実に愚かだなあ」

そして、馬鹿にしたようにケイネスはほくそ笑んだ。

「そんなもの料理で以て示せば良いだろう。君のそれは一流を名乗るべきものなのだからな」

刹那、意外そうに眼を開くと直ぐにランサーは微笑みを浮かべ、

「Yes (ヤエス), your (ユワア) highness (ヒヤイネス)」

と、まるで執事の如く、平手を胸に置いた。

戦が終わった海浜公園。

その上空一万フィート。奇妙な物体が浮かんでいた。

全長10mほどはある卵型で、断末魔を上げる人の顔面が張り付いている。無数の砲身が取り付けられており、三角形と丸と、それを割る様な一本線という特徴的な印が刻まれている。

その頭上に二人、何者かが乗っていた。

「成程、これが聖杯戦争なのか」

その声は、気だるげで霞の様に掴み所のない少女の声であった。

その時代ではまだ珍しいといえるブレザータイプの学生服を着ており、公園を見つめる倦怠的に半眼された濃鼠色の瞳が特徴的な少女。

右京薫である。

「大体分かったようだね。物分かりがよくて嬉しい」

そう彼女を褒める声は、少年らしくまた可愛らしい声であった。

ソロモンの星を背負うローブを纏った、王族然とした小柄な少年。

彼女のサーヴァント、キャスターである。

「それで、今後の方針は如何するの？ 僕は君の決めた通りに動くよ？」

キャスターは薫に訊ねる。

すると、薫はそうだなと、唇に指を中てた。

本来ならば、あざといと思われるような仕草がキャスターには極自然に映る。

それだけに少女は可愛らしく、また美しい。

「セイバーちゃんは綺麗だね。可愛くて可愛くて堪らないな」

「否定はしないよ。アルトリアは美しい」

キャスターは彼女の評を肯定した。

「バーサーカーは……なんというか、あれはちよつと怖いな。近寄り難い感じ」

「狂戦士というのはそういうクラスだよ、薫」

滑らかな口調でキャスターは、クラス特性について伝えた。

「ランサーとライダーは愉快な人達だね。その二つの陣営はとても

楽しそう」

「雲長とアレクは生というものを謳歌しているからね。それは楽しいだろうさ」

まるで見知った者であるかのようにキャスターは彼等に対して言及する。

「この二つの中からより楽しそうな方に着きたいな。それで良いだろうか、キャスター」

「構わないよ。君が望むなら」

そう言つてキャスターは顎に手を当てる。

「ふむ、より楽しそうな方か」

暫しキャスターは悩み、答えを導き出した。

その答えに、薫は微笑を零す。

「じゃあ、それで行こうか」

考えているのか、何も考えていないのか、それすら不明な相槌をして。

第十八話 帰還

ケイネスの魔術工房の生活スペース。

四人掛けのテーブルに肘を付き、

「はあ」

もう何度目になるか分からない溜息を洩らした。

ソラウはケイネスのジャケツトの中に使い魔の鼠を仕込み、そこから戦場を見ていたのだが、途中でその光景が暗転してしまったのだ。

これは使い魔が死んだことを示しているが、殊にソラウを不安にさせた。

「……どうしよう。あの人の身に何かあったんじや」

否応なく不吉な想像に思考が持っていかれる。

だが、ケイネスの体に密着した使い魔が死んだということは何かしらケイネスに外的な衝撃が加わったことを意味する。

もしかしたら、ケイネスは死んでしまったのかもしれない。死んでいなくとも、重傷であるかもしれない。

——ソラウはテーブルに顔を伏せた。

ランサーと繋がれているパスに何か重大な変化があったわけではないと、自分を言い聞かせながら。

それでも、胸を締め付ける、狂おしい痛みに瞳を固く閉じて。

だが、そんな感傷に浸る暇は無かった。

「YEAHHHHHH（イアアアアア）！ たいマンダム！」

工房の扉が開き、訳の分からない勢いで帰りを告げるランサーの所為で。

ソラウは顔を上げ、呆然とそちらを見つめた。

「……た、ただいま」

ランサーに肩を強引に抱き寄せられ縮こまっているケイネスが隣にはいた。

心底迷惑だと言いたげな表情をするケイネスを見て、きつと平時のソラウであればいたたまれない気持ちになっていただろう。

だが――

「ケイネス！ ランサー！」

ソラウは飛び出して、二人を思い切り抱きしめた。

「Oh (アアウ)！」

業とらしくランサーは驚いてみせる。

一方でケイネスは

「あ、え？」

赤面し、固まったまま動けないでいた。

そして、なんとか正気を取り戻すと、今度は自分の腹の辺りに押し付けられている柔い感触に気が付き意識を手放しかける。

「あの、ソラウ離してくれ。胸が……」

ケイネスが発熱する脳髄で、その事を指摘するがより抱きしめる力は強くなる。

そして、

「良かったあ……」

絞り出すような声がケイネスの耳元に届いた。

「ソ……ラウ？」

氷の如くに凜とした普段の彼女からは考えられないような優しい声色にケイネスは困惑する。

「心配してた……。アナタに、二人に何かあったんじゃないかって思ってた」

「ソラウ……」

ソラウは、震えていた。

泣いているようにも、ケイネスには思えた。

このまま、抱きしめても良いのだろうか？

柄にもなく、ケイネスはそんなことを考える。

いや、寧ろ抱きしめたいと思った。普段弱さなど見せないソラウが弱っているように見えたから。

だが、ケイネスはそうしようと思うと震え、出来なかった。

そんな自分を情けなく思っている、

「ああ、えつとお二人さん？ Can I talk (キャノイター

ク)?」

躊躇いがちに、ランサーが話し出した。

「なんだ?」

「なに?」

二人してランサーの顔を見る。

「いや、感極まって抱き付いたのは分かるんだが、ボクとケイネスの状態を考えると……ね?」

含みのある言い方にケイネスは一度眉を吊り上げると、

「あ」

すぐに気が付いた。

「あ」

ソラウも同様であり、すぐさまケイネスとランサーから離れた。

それはもう逃げるように。

当然であった。ランサーとケイネスは、ずっと海を辿り、川を泳ぎ、下水道を辿って工房まで遣って来たのだ。

当然着ている服は水が滲み込み、汚泥に汚れている。

そんな二人に抱き付けばどうなるか。

「あちゃー……」

ソラウもまた水と泥で汚れることになる。

顔を真っ赤にし、ソラウは透けたブラウスからはつきりと見えてしまふ胸元を隠した。

+

シャワーを浴び、風呂によく使った後、ケイネスは着替えなおした。

――襟の裏地がノルディック調の柄となった白いYシャツ、クリム色のセーター、青のコーデュロイパンツ。

襲撃に備えて何時でも逃げられるようにと、街中に繰り出せるような服装である。

ソファに腰かけるケイネスは、自身の前に置かれた低いテーブルにある本に手を伸ばす。

そして、それを開くと、

「ところで、この服はお前が用意したのか?」

ケイネスはセーターの襟を引っ張るようにし、キッチンに立つランサーに声を掛ける。

「そうだよ」

大凡、人間には不可能な動きと速度で野菜を刻みながらランサーは答える。

「戦争だからね。服は一着じゃ済まんだろうと思って買ったんだ。こんなに早く出番が来るとは思っても見なかったけれど」

高く上がる炎を前に涼やかな笑みを浮かべながら中華鍋を振るうランサーもまた同じように新しい服に着替えていた。

ブラウンのフード付きレザージャケット、牛の頭蓋骨のようなものがデザインされた黒のTシャツ、濃紺のダメージジーンズといった一式。

調理中である為に、その上からきのこをモチーフにしたよく分からないキャラクターが描かれたエプロンを着ている。

「……そうか」

ケイネスは炒める食材を空中で一回転させるほど激しいランサーの調理に唾然としながら相槌を打つ。

ランサーの調理は食材が飛んだり、目で追えない程素早い包丁捌きを行ったりとケイネスの常識を大きく超越しているものであり、まるで慣れることが出来ないでいた。

「そういえばさー」

そんなケイネスをよそにランサーは手元を殆ど見ずに、寸胴鍋から茹でていた麺を掬い出し、湯切りをしながら話し出す。

「手元を見ろ、危ないぞ……何だ？」

「ボクを舐めるな、へまはやらんさ。ソラウさんのことなんだけどね」
麺を、食材を炒めているものとは別の中華鍋に移し焼き始めつつ、

ランサーは訊ねる。

「ソラウさん、なんか病気やってる？」

その問いに、ケイネスは胡乱気に眉を顰める。

「いや、至って健康体だが？」

「そうか、そうか。それなら良いんだけど」

「何故そんなことを？」

首を傾げるケイネスに対して、ランサーは麵の焼き加減と具材の焼き加減を両方見ながら、火を調整する。

「そりゃ、聞くだろうさ。お風呂から出てきたら、顔真っ赤にして鼻血垂らしてればね」

ランサーは苦笑する。

話を少しばかり遡り一同ずぶ濡れになった直後。一体誰が一番先に風呂に入るかを話し合った時、ソラウからの提案でランサーとケイネスが二人で同時に浴びることになった。

曰く、ランサーは料理をしなければいけないから優先的に体を洗うべきだが、かと言ってケイネスも人間の身で冬の海や川、溝に小一時間浸っていたから早急に体を温めた方が良い。

ともすれば、ランサーとケイネスは一緒にシャワーを浴びるべきだ。

このような論法に困って、あれよあれよという間に男二人でのシャワーが決定してしまった。

ケイネスの強い拒否をよそにである。

「病氣じゃないとしたらなんで鼻血なんて……。扁桃でも食い過ぎたんかね？」

流石にランサーの眼力を以てしても、ソラウという人間の性(さが)は推し量れなかったのか、アーモンドの食べ過ぎという斜め上過ぎる予想を立てる。

だが、ケイネスは知っている。否、知ってしまったている。

以前から、その前兆は察知していた。

何やら書き物をしているということ、ケイネスのセクシャリティーを邪推したこと。

そして、机に置かれた流麗な書体で『K×K』と表紙に書かれた、瘡気のような只ならぬ存在感を放つ分厚い日記帳。ケイネスは、その中身を見ることで推測を確信へと変えた。

「Master (ムアスター)? 如何したんだい?」

ケイネスが顔を蒼褪めさせる一方で、悔しいとも辛いともとれるよ

うななんとも言えない表情になったのをランサーは訝しむ。

理由を問いたただそうと、ランサーが思い立ったその時――

「良いお湯だったわ」

丁度、ソラウが風呂から出てきた。

「うわアアアア！」

すると、突然、ケイネスが絶叫を上げた。

「……どうしたのよ？」

「な、な、な、なんでもないぞよ？」

不自然を丸出しにする形になってしまったケイネスは、当然ソラウに怪訝な目を向けられる。

併し、読まれたら拙い著作物をケイネスが読んだとは思ってはいないだろう。

件（くだん）の文書を、ケイネスは咄嗟にソファの下に隠したのだから。

「ねえ、ケイネス」

「な、何かなソラウ？」

「ここに、本が置いてなかった？」

ソラウがソファの前のテーブルを指してケイネスに訊ねた。

ケイネスは背筋に寒気が走るのを感じる。

ソラウの瞳から不意に光が消え失せ、声には「美塵葬・大紅蓮（チンロン・ユーマイレン）」も斯くやというほどの冷気を帯びていたのだ。

心臓が早鐘を打ち、どつと冷たい汗が流れるのをケイネスは感じた。

――誤魔化しきれるか？

ケイネスが生唾を呑み込んだその時――

「ゴーン飯があーでーきーまーしーたーよオオオ！」

ゴンゴンと中華鍋をレードルで何度も打ち鳴らしながら、ランサーが騒ぎ始めた。

見れば、四人掛けのテーブルの上には人数分の料理が並んでいた。皿の上に盛られたそれは、あんかけ焼きそばである。

料理の失敗と思われるような不自然な焦げは一切なく、立ち上る湯気がとろみのついた野菜や卵、魚介をより艶やかに映す。

「さあ、冷めない内に食べるアル！ お残しは許さないネ！」

尚も、中華鍋を銅鑼の如く鳴らしながらランサーはソラウとケイネスに着席を促す。

「ああ、もう！ ウルサイ！ 食べるから、それ止めなさいよ！」

耳を塞ぎながら、ソラウはうんざりとした顔で席に着く。

「Master (ムアスター)！ Dinner (ドウウイナー) time (ターム)！」

「分かったから、落ち着け」

頭に響く喧しい音に、ケイネスは顔を顰め、渋々と席に着いた。

全員が席に着き、ランサーは漸く騒ぐのを止め、自分も席に着くと「そんじや、皆さんいただきましようか」

と声を掛け、大盛りに盛られたそれを凄まじい速さで食べ始めた。

ソラウも心から嬉しそうな顔をして、まず一口。

「うへえ……」

美貌が台無しになるような、気の抜け切った表情で口の端からは涎を垂らしていた。

「ソラウ、顔」

「……はっ！」

ケイネスが指摘するまで、その状態が治ることは無かった。

「うへえ……」

尤も、二口目を食べれば元通りになってしまうのだが。

「いやあ、ホントにソラウさんって美味しそうに食べるよね」

それを見て、ランサーは輝かしいばかりの笑みを浮かべていた。

「……こんな風になるのはお前の作ったものに対してだけだよ」

そう一言だけランサーに返すと、ケイネスは目を閉じ、無言で焼きそばを食べ進める。

「ほいっ？」

ランサーは首を傾げたが、ケイネスの言っていることは事実であった。

ソフィア家にて生まれ育ち、処世術として「我儘」が嫌というほど身につけているソラウは今まで行つたことのある総ての料理店に於いて、文句を言わなかつたことが無かつたというほどには食事に五月蠅い。

婚約者であるケイネスは、当然ソラウとも食事に行つたことがある為、それをよく知つてゐるのだ。

そして、ケイネスの知る限りに於いて——というより、ソラウ史上、文句も一切言わず、ただ美味そうに食べるという例は、ランサーの料理が初めてであつた。

「貴方、ホントに受肉したら？ 料理人として雇いたい」

「い、いや……それはちよつと。死んだ奴がもう一度人生を得るつてのもなんか違うと思うしさ」

ランサーは手をぶんぶんと振つて、苦笑する。

「そう……。それは残念ね……」

ソラウは大きく気落ちした。

「てか、前もこんなこと言つたようね？」

ランサーが思い出したのは冬木に着いて初日の出来事。

料理の腕に覚えがあつたランサーは勿論それを振るうつもりで、一番の得意料理である「肉まん」を作つた。

日本に於いてはコンビニでもよく見られる定番の中華料理であるが、その起源はランサーが仕えていた「蜀」にあると言われる。

一般によく知られる説では諸葛孔明が作らせた饅頭が始まりとされ、それに関する記述が存在する書物を紐解けば、関羽の死亡した年と重なる。関羽が嬉々として肉まん作る光景に出くわせば、屹度歴史家は、それを知つてゐる筈がないと断ずるであろう。併し、書物は書物。

アーサー王が女性であるという真実を伝えられなかつたように、関羽雲長が中華まんを編み出した人物だという真実を伝えはしない。

この日、この瞬間を仮初ながらも生きるランサーは生前通り、料理の達人で肉まんを作ることが出来た。

出来たのだが——それがいけなかつた。

『ケイネス、何とかしてこの関羽を受肉させなさい！ この素晴らしい料理人を私達で雇うの！』

肉まんを食べて一口、ソラウの感想。

それは出来ない、ケイネスが宥めるが、ソラウが深く、甘い囁きをした。

『もしやってくれたら、あんな恰好やおんな恰好で、あんなことやこおんなこととか、してあげるのになあ……』

その言葉で、ケイネスは、壊れた。

令呪を三つ使えば、或いは受肉できるかもしれないと言い出し、実行に移しかけたのである。

……なんとか、ランサーが説得しなければ、そこで聖杯戦争が終わっているところであった。

というよりも、もしそんなことをすればエルメロイの家は、周りの一族から愚者の烙印を押されていただろう。

「ねえ、ホントにこの世界に残らない？ そうしたら、お気に入りのメイド長も嫁にあげるわよ？」

「魅力的な提案ではあるが、それでも遠慮願うよ。あれだけ素敵な人なら、ボク以上の素敵な旦那様というのにも巡り会えるだろうし。それにやっぱりボクは過去の遺物だ。与えられるのは、一夜限りの夢のような、すぐ忘れ去られてしまうような時間だけで良い」

ランサーの意志は固かった。

その戦法や在り方に英雄らしい拘りを持たない彼にとって、唯一譲れない矜持なのであろうと、黙ってあんかけ焼きそばを貪りながらケイネスは考える。

ソラウもそれが理解出来たのか、

「分かりました。諦めます」

と肩を落とす。

「まあでも、気に入って貰えたのは創り手として正直嬉しいね。成り行きながらも頑張ってきた甲斐があった」

ランサーが何気なく漏らした謝意に、

「成り行き？ 一体どんな成り行きだ？」

早くも焼きそばを完食したケイネスが反応を示した。

すると、ランサーは遠くを見つめるような目で話始めた。

「あれは、確かまだ益徳と出会ったばかりの頃だった。ワケあって野宿をすることになって、張飛がご飯をつくることになったんだ。思えば、これが始まりだった」

「何故？」

「張飛が料理と言って出してきたものは『蜥蜴と蚯蚓の煮つけ』だったんだ」

あんまりにもあんまりな内容に、ケイネスとソラウは言葉を失った。

「『兄者、お前は泥を食ったことがあるか？ 俺はあるぞ、何度もある……』 そんなことを神妙な顔つきで言いやがる益徳を見てボクは思ったよ。これからも屹度、野宿する機会はあつて、そのたんびにこんなものを食わされていたんじゃ命がいくつあつても足らんと。このゲテモノ野郎じゃ、まともなもんを作ることなんぞ期待は出来ないし、これはボクがやらねばならないと」

「……大変……だったのね」

「関羽雲長、めっちゃ苦労しました」

にこやかに答えるランサーであったが、その眼は死んでいた。

……少しばかり、ランサー陣営の食卓はしんみりとした空気に包まれた。

第十九話 移動要塞

呉松荘——冬木新都にひっそりと建つ小さなホテルは、市内最高級とも言われる冬木ハイアットホテルにも負けない設備とサーヴィスを誇る宿泊施設であった。また、“第三の魔術師”の工房がある場所でもある。

衛宮切嗣は見知らぬ魔術師について調べた。

名を“ゴットフリート・フォン・ジツキン”という。魔術階梯は典位。執行人であり決闘に於いては無敵の強さを誇る……時計塔に潜り込ませていた密偵からの情報である。

執行人というのは、時計塔が定める封印指定の魔術師を捕獲することを使命とした狩人のことだ。

遠距離からの攻撃を警戒する頭があるのも、切嗣は納得した。

時計塔からの依頼で魔術師を殺すこともある切嗣はその人物についてもある程度面識があったのだ。ゴットフリートという魔術師は、クロスボウの名手であり、十数キロ先の目標にも的中させる時計塔きつてのスナイパーである。餅は餅屋——狙撃手が狙撃手のことを分かっていない筈はないのである。

そのゴットフリートという人物の逸話の中に“極度の飽き性であり、自分の面容すら頻繁に変える”というものがあつた為、尚更ランサーのマスターであるということを疑わなかった。

そして、この男の性質も知っていた。慎重派でありながらも、好戦的で短気という悪癖も。その詰めの甘さも。

——ゴットフリートの工房の所在はすぐに分かった。一切の警戒もなく、本名を使いワンフロアを貸し切るような目立つことをやっていたから。

そして、その場所は切嗣が事前に調べ上げた、“魔術工房となり得る建物”の一つであつた。図面も仕入れてある。

破壊する為に——。

発破解体という技術がある。建物の構造に於ける、竜骨となる部分を最小限の爆薬で破壊、そして自重を利用して倒壊させるという代物

だ。この技術では、破壊された部分が傾く方向を緻密に計算することで、敷地の内側に向かい、折りたたむように、圧縮するように、ビルディングを消す。

殺し屋である切嗣は、その技術の一環として、当然ながら破壊工作にも精通していた。

爆発物を設置し、実際に呉松荘を魔術工房ごと瓦礫の山と変えるのには、一時間も掛らなかつた。

大地に呑み込まれるように崩落する四階建ての小さな建物を、切嗣は数区画離れた建設途中のビルの上階から確認した。

短く深く、息を吐くと、切嗣はコートの胸ポケットを探り煙草の箱に手を伸ばしつつ、一方で携帯電話を取り出し、番号を打ち込む。

呉松荘のはす向かいの雑居ビルの屋上に配置した舞弥の携帯電話に通ずる番号を。

「どうだった、舞弥」

『標的に動きはありませんでした。ゴットフリート・フォン・ジツキンは工房の中から一步も外を出ていません』

意味することは、ランサーのマスターは、工房ごとホテルの重量で以て圧殺されたということ。

——ホテルで働く人々の営みと共に、或いはそこでの宿泊を楽しみにしていた旅行者の笑顔と共に。

其処に奇妙な充足感が湧くのを、切嗣は聴く感じ取った。

アイリスフィールという妻を得、その間に娘——イリヤスフィールを設けてから衛宮切嗣という人間は弱くなっていた。

嘗ては機械のように人を殺めていた筈なのに、聖杯戦争にあたり自分に衰えがあることに切嗣は気が付いた。

九年という時の流れではない。只、愛する者の顔を思い浮かべると、胸が締め付けられ、銃を動作させるその手を鈍らせていたのだ。愛する者達が穢れなく儂げであるから、自分の手が如何に穢れているかをまざまざと知り、センチメンタリズムに陥る。

それが、あの海浜公園での戦いまでの切嗣であった。

その状態のままであったならば、屹度この爆破に関して“甘え”の

ようなものを残しただろう。

例えば、ホテルから聖杯戦争には無関係の人々を逃がしてから爆破するような。

そうしなかったのは、ランサーとそのマスターという脅威の為に。自身のサーヴァントを追い詰めて尚、未だ底が見えない陣営の存在が切嗣を焦らせ——逆に、往年の冷酷さと判断力を取り戻させたのだ。その点にだけは感謝しなければならないと、切嗣は瓦礫の山を冷淡に見下ろしつつ考えた。

嘗ての自分が戻って来る、凍結した安堵感を噛み締め乍ら、切嗣は紫煙を呑み込み、煙草を捨てる。

「引き上げるぞ、舞弥」

相方に撤退を指示し、自身もさっさと退散しようと後ろを向いたその時——。

かつん、かつん、かつん。

切嗣は音を聞いた。革靴がコンクリートを踏みつける音。

何者かが此方に向かって遣って来る。しかも、かなり近い。

階段は上りと下りで一つずつ。近付いて来る人間は下からであり、当然顔を見せるのは階段から。顔を少しでも見せ次第——部外者ならば、意識を奪い、記憶を消去しこの場に捨てておく。他のマスター及び、この聖杯戦争の関係者であれば容赦なく抹殺する。

切嗣はそう考えて、懐から九mm口径の拳銃——グロックを抜く。

「御機嫌よう。良い夜だな、衛宮切嗣」

併し、切嗣は、低く冷ややかな声で自分に挨拶をする男の顔を見て、思考が完全に停止した。

——今日は厄日だ。

次の瞬間には心の中でそう毒づいていた。

兼ねてからの調査で明らかになっていた参加者の中でも、切嗣が最も危険だと断じた男がそこにいたのだ。

遠坂時臣の弟子として魔術を学び、令呪を宿したことでマスターとなった——ということになっている男。

元聖堂教会の代行者、あらゆる分野に於いて自分を激しく苛め抜く

ような鍛錬を積み続け、だのに「情熱」が見当たらない危険な男。

無意味な遍歴の成れの果てとして黒い修道服の下には鍛え抜かれた肉體、そして双眸は絶望と怒りに淀みその黒にも況して尚も黒い。

「言峰……綺礼……」

切嗣は、その男の名を呼んでいた。

†

新都に聳える冬木ハイアットホテル。最高級の設備とサーヴィス、そして市内一の「高さ」が売りのそこからほど近いコンビニエンスストア。

それとしては広い駐車場の中には、道行く人や通り過ぎる車からも一際目を引く、一台の大型トラックが止まっていた。

フロントデッキに甲冑を思わせるような金属加工によりラツセル車にも見える。至る所に行灯がぶら下げられ、電飾を取り付けたワイヤーが樹に絡みつく蔓を彷彿とさせる。そして最も印象的なのは、コンテナ部に描かれた見事な龍。桃の花と雪が散りばめられ、大変華やかに映る龍が今まさにも飛び出さんと空目させる。

所謂、デコレーショントラックである。

日増しに摘発が多くなり、数を減らしていくデコレーショントラックだが、それだけならば別段珍しくはない。人目を特に惹きつけるのは華美の中にも、品のようなものがあつたからだ。

さて、ではこのトラックの運転手は誰か。

その人物は運転席で紙巻煙草を作っていた。手製の紙巻煙草の作り方は、本当に手で作る場合と専用の道具を用いる場合があるが、このトラックの持ち主の場合は後者だ。道具自体は非常に単純な仕組みだ。ローラーが二つ付いており、それにシートが掛けられており、その間に煙草の葉を敷きローラーをスライドさせシート内に閉じ込める。そして、その状態でローラー部分を二、三度回転させて、煙草を筒状にし、ローラーとローラーの間に出来る隙間から巻紙を入れて、ローラーを回転させる。多くの巻紙は端の部分に切手のような唾で溶ける糊が付いているからその部分を舐めれば、煙草は完成する。

一連の動作を、数十年は慣れ親しんだかのような手つきでこなす運

転手は、けれど二十代後半の若者のように見える。

服装はブラウンカラーのフード付きレザージャケットにダメージ加工を施したジーンズとトラック運動手らしく見えなくはないもの。

但し、旋毛の部分で結われた艶やかな長髪と優し気な美貌が、運転席を覗き見る人々にその認識を拒ませる。

「はあ……やるとは思っていたけれど、Real（ルエル）にやるとはね」

先程の呉松荘の崩壊とそれに因って起こる喧騒に、辟易とする運転手は言う間でもなく、ランサーである。

『お前の言う通りになるとはな』

ダッシュボードに取り付けられた一見芳香剤のようにも見えるビーズのようなものが入った瓶から声が響く。

ランサーのマスター、ケイネス・エルメロイの声だ。

さて、このような通信機を使っているということは、ケイネスはランサーとは離れた場所にいるのであろうか？

否、そうではない。

ケイネスはソラウと共に、ランサーの近くにいる。

具体的にはトラックの荷台の中に。

然う——ケイネス・エルメロイが此度の聖杯戦争で拵えた工房はデコレーショントラックの荷台に作られていたのだ。

だが、別に伊達や酔狂でこのようなことになったわけではない。

これは、ランサーの策によるものであった。

——話はケイネスが人形師、アオザキを尋ねた所に端を発する。

ケイネスは、ランサーが衛宮切嗣を警戒しろと言ったことを聞き入れ、念には念をと、自分とソラウの肉体に何かあった時の代替となる人形の製作を依頼したのだ。

封印指定——魔術協会にとって物珍しく、研究に値する人間——であるアオザキは隠匿中の身であるが、ケイネスにはその搜索は至極簡単であった。そして、サーヴァントという生粋の魔術師である彼女にとっては研究価値のあるものを有するケイネスが気紛れな人形師を容易く従わせたのと言うまでもないだろう。

そして、個人的に交友を持つゴットフリートを頼り、その名義を借りうけて新たに工房となり得るホテルを借りる。

ケイネスが立てたのはそういった策であった。ランサーが事前に衛宮切嗣と繋がる密偵の存在を見つけ出し、〃ケイネス・エルメロイの事故〃と〃コルネリウス・アルバという魔術師の参戦〃という虚構という後ろ盾もあつた為、ケイネスはこれで完璧だと確信した。

併し、ランサーはそれではまだ不足だと言った。ランサーがまずやったことは、アオザキ製の人形をおとりに使うこと。ゴットフリートの名で貸し切ったホテルに、簡易的な工房を作り、ケイネスが誇る降霊術を用いて人形に亡霊を定着、〃ランサーのマスター〃と〃その婚約者〃に見せかけた。

衛宮切嗣が爆破し、建物ごと殺したものの正体がそれであった。

だが、それではケイネスは拠点がないまま戦うことになってしまふ。無論、乱世を生きたランサーは拠点の大切さを知っており、必要だとも考えていた。

——そこで思いついたものが、トラックを用いた移動要塞である。移動する分だけ、地脈から受けられる大源（マナ）の恩恵に変動が出るという欠陥があるが併し、それはケイネスの才覚により幾らでも補えた。

さらに移動する為に、中々居場所を悟られにくい。況してランサー陣営は工房から離れる際と工房へと戻る際の移動には地下水道を利用している。拠点の発見は不可能に近い。

ランサーの持つ〃騎乗〃のスキルを最大限に利用できる上、工房に改造した際に結界を張っている為、サーヴァント実体化に際する気配増幅も防ぐことが出来る。

大凡、完璧な工房であった。

魔術師にとって忌むべき、文明の利器（デコレーショントラック）を用いているという点を除けば。

最初にケイネスがランサーの策を知っていれば、その購入に用いる金がケイネスのものであつたならば、屹度ケイネスは全力を挙げて大反対していただろう。

だが、マスターに無許可で、その上ランサーが「関聖帝君」に付随する「黄金律」のスキルを悪用しギャンブルで得た金で購入されたトラックを見せられてはぐうの音も出ない。

「ランサーが購入したトラックを工房に改造しているからあくまでも自分は科学に頼ってはいない」——そんな子供のような理屈で自分を納得させるケイネスであった。

この案に反対しようものならば、令呪を切らざるを得ない状況になるであろうことも手伝ってケイネスは胃痛を抱えながら工房を築き上げたのだ。

……ケイネスがそれを思い出し、胃痛がぶり返すのを感じた時であった。

「でも、一つ予想外はあったんだけどね」

ランサーは三十数本作り上げた煙草の内、一つを銜え、火を点けながら話す。

『なんだ？』

と、ケイネスはランサーが作った桃饅頭に舌鼓を打ちながら、訊ねる。

「——あの糞野郎がカタギを巻き込んだことだよ」

ランサーの回答は、お道化はなく、また彼が元来持つ緩やかな気風というものは一切感じられなかった。

少なくとも、ケイネスと彼の隣で同じように桃饅頭を楽しむソラウはその味を消失させた程、その声はぞっとするほど冷淡であった。

サーヴァントという霊的な存在となっているが故に、霊視能力が上がっているのだろう。だから彼の目には見えたのだ。爆破に巻き込まれる、聖杯戦争とは無縁の人々の嘆きが。

「許せねえ。確かに、戦場に立つ者つーのは、なんであれどうであれ須らく命に対しての責を負う。そこには誉や礼の立ち入る隙はねえよ。だがな、血とは縁も糞もねえ無辜の民を巻き込むのは絶対にやっちゃいけないことだ。それだけは、ボクのような戦う者が守らなきゃならん心理だろうが」

声こそ荒立ってはいない。併し、そこには怒りがある。

明確な、殺意と敵意もある。

屹度、衛宮切嗣がこの場に居れば、ランサーは迷うことなく彼を細切れの、粗挽きの肉団子にしていたことだろう。

——ケイネスにとつては、無辜の民がどうだこうだということは別段価値のないものだ。併し、忠臣が怒っていることに気を遣らねばという思いだけはあった。

『お前の思いは分かる。その怒りを晴らす機会もやろう』

ケイネスはそう誓う。嘘はない。

それだけのものを与えないで、何がマスターだというのだろうか。

だが、その上でケイネスはランサーを諫める。

『だが、今は収める。お前の殺気は大きすぎる。それが故に私の命が散ってしまえば、その機会すらなくなってしまうぞ?』

その言葉を聞き、ランサーははつと目を見開く。

青天の霹靂であった。冷静さを欠いていた自分にこの瞬間まで気が付いていなかったのだ。

「うん。それはそうだ」

ランサーは微笑み、紫煙を呑む。

——嗚呼、良い主だ。

——玄徳、ボクはもう一度の生でとてもいい人に巡り遭えたよ。

遠く、星を見つめ、もう一度煙を呑もうとした時であった。

『所で、ランサー一つ問題が起きたんだが、工房に戻ってくれないか』

「何かな? ケイネス?」

『ソラウが鼻血を吹いて倒れた』

ケイネスの意外な報告に、ランサーはただただ呆然とした。

「いや、ボク、医学は齧る程度なのですけれど」

頼りにしてくれるのは構わない。

だが、主は自分が何でも出来る勘違いしているのではないかとランサーは疑い、苦笑した。

第二十話 第七光線

午前五時。

まだ眠っている人間の方がマジヨリテイーである時間帯。

基本的に夜に行われる戦いの所為もあり、寝ていたい気持ち強いウエイバー・ベルベツトは、理不尽にもライダーにたたき起こされ、連れ出されることになった。

不平不満を言ったウエイバーではあつたが、デコピンにより沈黙。敢え無くライダーの戦車へと御用と相成り、そして行きついた場所は、市内にある小学校の校庭。

「こんな所に、一体何の用があるっていうんだよ」

空を征く戦車が、目的地に降り立って、ウエイバーはまず訊ねる。

「……声がした」

ライダーは短く、唸るように答えた。

「声？」

「余の頭の中に直接響くような声だ。それが告げた……いや、命じた」のだ。ここに来いと」

念話の一種であろうかと、ウエイバーは推測する。

だが、昨夜の大混戦は恐らく総てのサーヴァントとマスターの知ることとなっており、当然誰もがライダーの真名を知る筈であつた。

イスカンドルの名を——蹂躞王チンギス・ハンに次いで最も世界征服に届きかけた征服王の威を知り尚、挑発に出るマスターがいるならば、それは余程の馬鹿か自殺志願者のどちらかだ。

魔術師（キャスター）のクラスのサーヴァントという可能性もあるが——そんな魔術師がいるならば、それこそ自殺志願者である。

キャスターは高い魔力を持つ魔術に縁のある英雄、そうでなくとも詩作や芸術といった創作に縁のある英雄に宛がわれるクラスである。だが、筋力や耐久といった創作に纏わるスキルは他のクラスと比して格段に弱い上、剣士、槍兵、弓兵、騎兵のサーヴァントは「対魔力」という読んで字の如く魔術に対する防御能力を有する為に積極的な戦いには向かない。

主に自分にとって有利な空間を作り出す「陣地作成」のスキルを用いた籠城による防戦がキャスターの基本的な運用方法になる筈なのだ。

そして、それは聖杯戦争の基本としてマスターが知る所であり、またサーヴァントも知っているから、わざわざキャスターのテリトリーに立ち入る様なチョンボは冒さない。
わざわざ挑発する旨味はないのだ。

だが、キャスターはそれを敢えてやった。加えて言うならば、キャスターが呼び寄せた場所は陣地内ではない。

ウェイバーは魔術師としては未熟であるが、それを名乗る程度の感知能力はある。それで以ても、今、ウェイバー達がいる場所が工房ではないという結論がはじき出される。

そもそも、小学校という人の出入りが激しく、また人目に付きやすい場所に配置するなど愚かではない。

では一体、まだ姿を現さないキャスターの目的とは？

ウェイバーがそれを考えようとした時であった。

「このイスカンドルたる余を呼びつけたのだ！ いい加減姿を見せんか！」

痺れを切らしたライダーが辺り一帯に響く程、怒鳴り声を上げた。

近隣の住民が驚き目を覚ましかねない音量に、ウェイバーは肝を冷やした。

だが、併し——ライダーの無茶も今回ばかりは功を奏した。

『ここだよ』

機械で拡張されたような子供の声が響いた。

併し、姿は見当たらず、ウェイバーとライダーはその発生源を探す。

それは上空であった。

無論ただ上空ではなく、ライダーの感知能力の範囲外となるような上空である。

四階建ての校舎より高く、また雲と肩を並べるほど高い。

それほどの位置からゆっくりと降りてくるのは、奇妙な物体である。

卵のような形をしており、至る所から砲身のような筒が生えている。物体の中央に浮き出るは断末魔を上げる人面。その額には、三位一体を表す三角形、その中に魔術儀式の陣の外周に最も用いられる円、それを割る様な形で一本線という不可思議なエンブレム。

物体の上に乗っていたのは、体にまるで合っていない大きすぎるアイスグレーのローブを纏った貴族然とした十代の前半ほどのまだ幼い少年。そしてその隣には、十代半ばと思われる、ブレザータイプの学生服を着た、倦怠的な雰囲気醸し出す毒花のような少女が腰かけている。

遂に浮遊体は地に降り立ち、その上から少年が飛び降りる。

「待たせたね、ライダー」

軽やかな動きから笑みをライダーに飛ばすその姿は、到底戦士には見えない。ウェイバーには少なくともそう見えた。また、鬨気といったものもまるで感じられず、間違いなくクラスはキャスターであろうと思われる。

「なっ!？」

だが、ウェイバーはそのサーヴァントのステータスを見て絶句した。

「……ありや、強いのか、小僧?」

ウェイバーの動揺を見て取り、ライダーは問う。

「強いも強い! 魔力がEX(規格外)、あとは全部Bランクだ!」

「ほう……」

短く唸り、ライダーは顎髭を撫でた。

そして、

「おい、貴様!」

とその声量だけで第七のサーヴァントを倒しかねない勢いで叫びつける。

「キャスターのサーヴァントと見受けた!」

「如何にも」

だが、少年はそれに対し恐れもせずには答えた。

ライダーはそれを見て豪快に笑い声を上げる。

「成程、魔術師の身で宣戦布告か。実に見上げた奴よ」

魔術師は臆病者——そのような先入観があったライダーは、目の前のキャスターの堂々とした振る舞いを大変に気に入った。

「その心意気は見事。だが、此処まで来て己が誇るべき真名を隠し通すつもりではあるまいなあ!? んんっ!？」

ライダーの豪笑と共に齎された挑発。

海浜公園での戦闘では、あらゆるサーヴァントを呆れさせたそれに、ウェイバーは胃が痛くなるのを感じた。

だが、キャスターはさも楽し気に笑い、

「名乗りを上げろということだね。尤もだ、王様」

そう言っただけで頭を下げた。

瞬間、キャスターの隣の空間が歪んだ。

それは、まるで黄金のアーチャーの宝具の発動にも似ていた。

出てきたのは、短剣であった。柄に赤い宝玉が埋め込まれた三〇cmほどのそれはウェイバーも良く知るものである。

「アゾット剣」。魔術師が、皆伝する弟子に向けて送る贈与品として最もピュラーなアイテムである。

キャスターはその切っ先を天に向け、凜と顔を引き締めた。

そして、キャスターは厳かに告げる。

「聞け、そして慄け。薔薇十字が同胞（はらから）、カリオストロが師家、獅子心王（クール・ド・リヨン）が盟友——そして最も偉大なる魔術王ソロモンの弟子。我こそ悠久を征く魔術師サンジェルマンである！」

ライダー同様に臆面もなく真名を明かす少年に、ウェイバーは驚愕し、開いた口が塞がらない。

然も、その名がサンジェルマン——。

成程、魔術師の階梯を得るに相応しい威名である。

その男が活躍した時代は十七世紀のヨーロッパ。

あらゆる言語、あらゆる学問、あらゆる芸術に精通し、そして錬金術にも長じていた中世ヨーロッパ史上最大の怪人物。

時のフランス王と友誼を結んでいたとされるが、それ以上に彼を神

秘足らしめたのはある伝説による。

彼は不老不死であったというのだ。曰く、初めてヨーロッパ史に現れた時点で既に老境に差し掛かっていたにも関わらず若々しく、また何年経つても見た目が変わらなかった。曰く、十八世紀以降も度々彼はヨーロッパの各地に出没し、ある時はマリー・アントワネットの身に降りかかる危険を予言し手紙で忠告をした。

また曰く——二千年とも三千年とも言われる悠久の時を過ごした。その間に出会った人物は多岐に渡り、魔術王ソロモン、獅子心王リチャードなど大人物ばかり。

「……なあ、ライダー。アイツの顔に見覚えある?」

そんな中世史最大の謎とも言われる人物が目の前にいることがウェイバーには信じられず、ライダーにそう訊ねていた。

若し仮にサンジェルマンの伝説が総て真実であれば、征服王イスカンドルとも盃を交わしている。詰り二人は面識がある筈であった。

「うーむ……知っているような……知らないような……」

だが、ライダーの態度は煮え切らない。

「無理を言ってはいけないよ、ウェイバー」

そんな様子を見て、キャスターはウェイバーを諫める。

「英雄というものは座に着き、永久(とこしえ)を過ぐすと記憶が摩耗してしまうものなんだ。屹度、僕なんかとの記憶は溶けてしまっている。特にそのアレクサンダーのように多くの人々と交わり激動の生涯を送った大英雄ともなれば尚のことだ。人々の理想や妄念といったものを塗りつけられるということもあるしね?」

ウェイバーは何だか妙な気分になった。

目の前の人物こそ、伝説に名高きサンジェルマン伯爵だとしても、その姿は子供。子供に諭されるのはとても釈然としない。

「そういうわけなんだ。分かってくれただろうか、童貞君(チエリーボーイ)」

そして、そこにキャスターのマスターと思われる少女の追撃。

腹立たしさが加速した。

童貞というのは、ウェイバー・ベルベットにとって厳然たる事実で

あるが人から指摘されれば怒りも込み上げてくる。

「……ファック」

ぼそりとウエイバーは呟いた。

だが、それがいけなかった。

「ファック……それは私に、という意味だろうか？」

耳聴く聞き取った少女はウエイバーにそう訊ねていた。

「はい？」

ウエイバーは聞き返す。

何を言っているのか、意味が分からず。

「どうしよう、困った。私的には童貞っぽいつていうのは実は褒め言葉なんだけれど。男は女にとって最初の男になることを望み、女は男にとつて最後の女であることを望む。なんて言葉があるけれど、私的には実は女の子も男にとつて最初の人が良いよねと思っっているんだよね」

ウエイバーにとつてはそんな思想、知ったことではない。

聞いたところで困る。

「まあ、それを知らずに君のように怒ってしまう人がいるのですが。でもまさか、筆卸までさせようとするのは君が初めてだ。如何しよう……引き受けてあげたいけどコンドームの持ち合わせがない」

気だるげな表情と、気の抜けた口調で口走る少女の言葉の意図をウエイバーは漸く理解し、

「な、何を言ってるやがりますかあああ！」

赤面し絶叫した。

童貞のウエイバー其方の方面について初心であるから童貞なのである。

列挙される淫語は動揺を促すには観面であった。

ライダーは寸劇に腹を抱えて笑い、キャスターは溜息を吐いて呆れている。

「君の顔はすごい好みだし、したいという気持ちは強いものだけれど。全然安全日だし、でももしもということがあるから……」

「おいコラ、話を聞け」

ウェイバーの言葉を無視し、少女は顎に手を当て押し黙る。そして、指を指す。校庭の隅に建てられたウサギ小屋を。

「うん、女は度胸だ。出来てしまったらその時はその時。そのウサギ小屋でウサギさんみたいにエキサイトしようぜ！」

「だから、僕の言うことを聞けつてんだよー」

ウェイバーは顔から火が出るような思いを抱え、叫んだ。

胃に、穴が空いたような痛みが走る。

「落ちつけ、小僧」

そんなウェイバーの肩を叩きライダーは激励する。

「あんなものはただの冗談だ。笑って流せないようですらどうする?」

ライダーのその言葉に、少女はムツと顔を顰めた。

「結構本気だったのだけれど」

「あんなにあけすけに物を言ったんじや、軽んじられて当然だよ、カオ
ル」

自身のマスターにキャスターは容赦なく毒を吐きつけた。

「というか、話の腰を折らないでくれ。当初の目的を忘れてしまった
のかい?」

「ああ——割と忘れていた」

呆けた顔で答える薫に、キャスターは頭を押さえた。

ウェイバーは彼に憐憫を覚える。

こんなマスターと組まされる彼は屹度、とても運が悪いのだと。

「……すまなかった、アレク」

「ああ、うん」

磊落なライダーですら、同情の目をキャスターに向ける。

「それで、貴様の目的とは一体なんだ? この征服王との決闘を望む
ならば受けて立つが」

いや、とキャスターはそれを否定した。

「無茶を言わないでくれ。戦闘は苦手なんだ」

「だが、貴様、剣を持っておろうが」

「……これは、星を視る、元素使いの剣（カルデアス・アゾット）」と
言って儀式に使う杖のようなものなんだ。まあ、ちよつと面白いこと

が出来るけれど、直接的な殺傷力はあまりない。僕自身の剣術も嗜む程度だ」

苦笑交じりにキャスターは自分の非力さを自嘲した。

そして、直ぐに顔を引き締めると、

「だから、闘争ではない。逆だ。僕らの目的は君との和睦だ」

キャスターは自身の目的をライダーに告げる。

「余との同盟を望むということか？」

ライダーは言葉の真意をそう取った。

「そういうこと」

キャスターは首肯し、微笑を浮かべた。

第二十一話 黄金劇場

思わぬ同盟の申し出に、ライダーは腕を組んで唸り声を上げた。

——実のところ同盟自体は悪くない。

今現在、ライダーが抱えているものを、守らなければならぬ。マスタールのことを考えた時、仲間がいた方が心強くはある。

だが、果たしてキャスター——サンジェルマンが信用に値するか如何か。

確かに名乗りを上げはしたが、實際腹に何を抱えているか。

無論、征服王たるイスカンドルはそれすら呑み込んでみせる度量はある。

尤も、許すだけのものをキャスターが持つていればの話であるが。故に、イスカンドルは乞う。

「まずは貴様の力を見せい。話はそれからだ」と。

キャスターはフツと微笑した。

「なるほど、それはそうだ」

そして、キャスターはライダーに

『……丁度良く、僕らを見張ってる連中もいるしね』

と、念話を送った。

「何?」

ライダーは辺りを見渡した。

敵らしき姿も、その気配もありはしない。

『アサシンのサーヴァントだよ。気配遮断をしている。気が付かないのも無理ないよ』

と、キャスターは言ったがならばこそ一層にライダーは驚愕し、目を見開く。

一点、アサシンのサーヴァントは敗退したとばかり思っており、それがまだ存在しているという事実。

二点、自分よりも早くその存在を察知する目の前のキャスターに。

『お褒めに預かり恐悦至極。でも、魔術師というのは暗殺者程度にすら怯えなければならぬ程脆弱が故に、素敵の術を持たざるを得ないというだけの話だよ。君みたいに豪胆ではいられない程、このサンジェルマンは弱いのだ』

ライダーは眉尻を持ち上げ、ほうと、感嘆の声を上げた。

どういう理屈かは分からないが、キャスターは心の中を覗き見るようなそんな「芸」を持つらしい。

一体その仕組みがなんであるのか、ライダーはそこにも興味を抱く。

併し、最大の関心事は、そのキャスターの実力。

戦闘は苦手と嘯くサンジェルマンの実際は果たして如何なるものか――。

ライダーの期待が最高潮になった時、キャスターはにたりと笑った。

「――では、僕の歌劇をご覧あれ」

そして、手に持つアゾット剣を振り上げ、

「開け、黄金劇場（ドムス・アウレア）」

さながら、軍団に突撃の指示を下す指揮官のように振り下ろす。

瞬間、薔薇の香りがライダーとウェイバー、そしてマスターである薫の鼻に届いた。

そして、赤い花卉が舞う。それはまるで嵐の様に吹き荒び、視界を覆い――気が付けば一同がいたのは、歌劇場の観客席であった。

目を開いていることすら憚られるような、華やかでありまた煌びやかな造り。

舞台上を見下ろすような二階観客席にライダーとウェイバーは座していた。先程まで奇怪な浮遊物に腰を掛けていた薫も、彼等に挟まれるような位置に座っている。

「おお……これが両手に華というやつだね」

その状況を薫はそう評した。

「いや、絶対違うと思うぞ」

それに対し、ウェイバーが一言。

言う間でもなく、一般的な感性に於いて、矮躯の少年と筋骨隆々の巨漢に挟まれた状況が「両手に華」なわけがない。

この薫という少女は、頭の螺旋が一本外れているのかもしれないとウェイバーは思った。

そうであれば合点がいくのだ。仮にもまだ敵である自分達に囲まれている状況下にも関わらず落ち着いていられるということにも。

いや、狂っているといえればそのような状況を作り出したキャスターも、であろう。

「ライダー……」

その意図を量り兼ねて、ウェイバーは真つ先に自身のサーヴァントを頼る。

ふむと、ライダーは顎を撫でる。

「余に対し腹を割つたということだろう」

信用している——だから、要であるマスターの命をも晒す。

同盟を組む上で最も大事な信頼をキャスターはそのようにして得ようというのだ。

友誼の証明にしてはやや綱渡りに過ぎる。だが、ライダーはそれがとても気に入った。

またキャスターのマスターの肝の強さも、ライダーにとっては好ましく映る。

「よし！ ならば余は貴様を同胞と認めよう」

そう宣言するとライダーは立ち上がる。

「その上で貴様の力を見定めて貰うぞ！ やい！ さつさと幕を上げんか！」

未だ幕が下がった儘の舞台上に向かい吠えたてる様はまるで野次だ。

同じことをウィーン国立歌劇場あたりでやればつまみ出され兼ねないだろう。

だが、この舞台の演出家は殊に寛大であった。

『ふむ、流石は韋駄天となった王様。中々にせっかちだ』

劇場に放送機器めいたキャスターの声が反響する。

その声色は、怒る所か、嬉し気ですらあった。

『では——そのご要望にお応えし、幕を上げよう』

そう言うのと、一聴間抜けにも聞こえる映画館で用いられるようなブザー音が鳴り、幕が上がった。

顔を見せるは、真つ暗な舞台。

次の瞬間、ライトアップされたのは、五人のハサンであった。

しかもハサンの象徴たる黒のローブと髑髏の仮面以外は、体格も外見から想定される年齢もバラバラという始末。

「なんだこれは?」

「一体どうなってる?」

大きな鳥籠のようなものに閉じ込められ、また気が付けば見知らぬ場所に立たされたことに困惑しているようであった。

「アサシン!?! どうして!?! やられた筈じゃ!?!」

だが、動揺は舞台の賓客たるウェイバーも同じことであった。

夢か幻としか思えない光景である。遠坂邸でハサン・サツバーハが討ち死にする瞬間を、ウェイバーは使い魔越しに目撃していた筈なのだから。

「それに如何して六人もアサシンのサーヴァントがいるんだ!?!」

「理屈は分からん。確実なのは、あの夜の脱落は三文芝居に過ぎんかったということだろうなあ」

マスター殺しのサーヴァントが脱落していなかったという事実は今後の聖杯戦争にも差し支えかねない出来事である。だが、ライダーはアサシンの登場に関して、興味を示してはいなかった。

「それよりも見ろ、小僧。ヤツが出てきたぞ」

その視線と心を稀代の怪人が奪っていたから。

ライダーが見つめる先を、ウェイバーもまた見つめた。

姿を見せなかったサンジェルマンが現れた。

神を引く機械仕掛け（デウス・エクス・マキナ）に因って、つり下げられ、少年の姿をした魔術師は舞台上に姿を現す。

鳥籠の周りをふわふわと飛び回る姿は、さながら童話に描かれる永遠の少年（ピーターパン）のようである。

「これは貴様の仕業か!？」

五人ハサンの内、最も筋肉質で背も高い一人がキャスターに問う。

「その通りだ」

キャスターは誤魔化さず答えた。

その時であった。一人、腹が突き出た小太りな男が驚愕の声を上げる。

「馬鹿な!?! 霊化出来ない!?!」

如何やら、他の四人を出し抜き霊化によって折から抜け出そうとしたらしい。

それに引き続き様に、彼等にとっては悪いと言わざるを得ないような事実が次々と浮き彫りになる。

「気配遮断も効かないぞ!?!」

「ステータスも下がっている!?!」

「拙い!?! この劇場、出入り口がない!?!」

ハサン達は狼狽した。

そもそも未だに如何して此処にいるかも呑み込めていない。

自分達は隙を付いてマスターを殺害する為にキャスター陣営を見張っていた筈であったのに。元々彼等のマスターであった言峰綺礼は聖杯戦争に対してあまり積極的ではなく、自分達が聖杯を手にする機会を失っているも同然であった。そして、昨晚を境に、元々やる気のなかったマスターが、如何いうわけかさらに消沈するという事件もあり、遂にアサシンは痺れを切らした。

こうなれば、マスターも、その同盟者である遠坂時臣も出し抜き独断で戦うしかない。

アサシンも伊達や酔狂でマスターに仕えているわけではない。聖杯を得て、叶えるべき願いがあるから召喚に応じたのだ。

故の独断専行。元々勝利することにより乗気でない言峰綺礼は、アサシンのスペックを正しく把握するということすらも放棄していた。数の多さこそが強みの「百の貌のハサン」であるが、言峰綺礼はその正しい人数を知らなかった。

そうでなくとも、無数の軍勢たるハサン全員の行動を把握し切るな

ど至難の業だ。

出し抜ける機会はいくらでもあった。

そして、実際出し抜き、キャスターのマスターを殺害する機会を得たのだ。そこに更にマスターを連れ回すライダーも現れ、アサシンは僥倖と考えていた。

故に、このような機会は想定外であった。

「招き蕩う黄金劇場（アエストウス・ドムス・アウレア）」

この事態に理解が及ばないアサシンにキャスターが答えを齎す。

「君たちの存在には気付いていた。別に見逃しても構わなかったのだけれど、王様に力を示せと言われてはね。だから、捕まえさせてもらった」

「な……に……」

アサシンは言葉を失う。

さながら神石から出でた心猿が釈迦の掌の上で踊るだけが関の山であったが如く、何時の間にか、自分達がキャスターの演劇の出演者になっていたという事実になつていた。

「これは『黄金劇場』。昔、偉い王様が自分の演じる劇を民衆に見せる為に劇場の出入り口を塞いでしまったことがあってね。それを魔術で再現してみせたものだけ……『逃がさない』ことと『よく見せる』ことに於いてこれ以上ない代物だよ」

故に、アサシンは姿を消す気配遮断と靈化を封じられている。そして、キャスターの歌劇が終わるまで舞台から降りる事すら出来ない。

正しく八方塞がりである。

「……まあでも君らにチャンスがないわけでもない。簡単なことだ。これから僕と戦い勝てば良い」

そう言つてキャスターはハンドスナップをする。

ぱきんという小気味の良い音共に、スポットライトが照らす場所が七つ。

一か所ずつ、人間で言えば幼児程のサイズの少女人形が立っていた。

「ほう……これはまためんこいのが出てきたのお」

率直にライダーが感想を漏らす。

これにはウェイバーも同意であった。

七体の人形はそれぞれ違った色を持ち、そしてそのどれもが美しかった。

「紹介しよう。この黒い娘（こ）が『永劫』」

そうキャスターから紹介され、恭しく首を垂れたのは黒いゴシックロリータ調のロングドレスを纏った銀色の長髪の少女人形。手にはヘルメスを象徴する絡み合う二匹の蛇を模した杖が握られている。

「この金色の娘（こ）は『至高』という」

ボンネットを被った金色のナポレオンジャケットとワンピース風のスカートに身を包んだ緑の髪を編み上げた少女も同じように会釈をする。

手にはヴァイオリンとそれを奏でる為の弓を持っている。

「そしてこの二人は双子だ。赤い娘（こ）が『無間』、燈色の娘が『黄昏』」

二人の仲は良いようで手を繋ぎ揃ってお辞儀した。双子というだけあり、亜麻色の髪と顔の作りが似通う。『無間』と呼ばれた短髪の少女は彼岸花を思わせる色合いの中央アジアの民族衣装に見られるような絢爛な柄を施した服装であり、一方の『黄昏』は長髪で橙色のチャイナドレス。いずれも可愛らしかった。その手に握られているのが、それぞれ斧と機関銃でなければ。

「鎧姿のこの娘が『曙光』」

鎧姿というだけあり、紹介に跪くその姿は騎士を彷彿させた。白銀の何処か刺々しい印象のフルプレートを纏い腰には剣を帯びている。ウェイバーとライダーは何故かセイバーと顔立ちが似ていると感じた。

「紫色のこの娘は『天魔』」

『よろしゅう』とガリが混じった声が主の呼びかけに答える。

紫色の葦が描かれた浴衣を着た日本人形を思わせるタイプであった。手にしている武装は此処日本に於いては呪術にも用いることがあるという梓弓であろうかとウェイバーは推測した。

「最後の一人は『墮天』という」

白い修道服めいたものを着た、白い髪と赤い目が印象的な少女人形は一際異彩を放つ。手に持っている武装は、一見レイピアのようにも見えるがウェイバーはそれがなんであるかを知っていた。魔術教会とにらみ合う、聖堂教会の代行者を代表する武装、『黒鍵』である。

「これが僕の持つドルエンジニアリングを以て生み出した最高傑作、戦闘人形『ゴツペリア』だ。そして、君たちの相手をする獅子だ」
そうキャスターが告げると、暗殺者たちは解放された。

そして、瞬間、せせら笑う。

何が、獅子だ。こんな人形に一体何が出来るのか、と。

如何やら、キャスターは捕縛が得手なだけの雑魚であるらしい。こんな木偶が頼みの綱とは……。

兎に角さつきと片づけて、キャスターを始末しようと、アサシンたちは意気込む。

「我らを解放したことを悔やむが良い」

そして、短刀を片手に『ゴツペリア』達に襲い掛かった。

勝負は、一瞬であった。

一合も待たず、ハサンは殲滅された。

当の彼等には一体何が起こったのか、分からなかっただろう。

少女人形たちが振るう元素変換と音魔術、道教由来の呪術、剣の一振りが齎す赤き稲妻、呪詛の毒を含む矢の掃射、そして神代の城壁すらも崩壊させる埋葬機関秘蔵の投擲法『鉄鋼作用』。

それらが一気ハサンに襲い掛かったのだ。

「なっ……」

ウェイバーは言葉を失った。

「うむ」

ライダーは満足そうに笑った。

「かっこいいぞ、パン屋さん」

薫は無表情のまま拍手をして、気だるげにキャスターを褒めた。

「まだだ……」

——その時、そう呟く声があった。

その刹那、〃コツペリア〃の攻撃によつて粉塵が巻き上がり宛ら煙幕の様になつたその中から一体のハサンが飛び出した。

五体のハサンの内の一体がキャスターに一矢報いようと、人格を分離させていたのである。

矢の如き速さでキャスターに迫る。

予想外の攻撃の筈、これは躲せない。

アサシンはそう思っていた。

だが、

「秘剣——〃燕返し〃」

次の瞬間にはアサシンはバラバラになっていた。

ア……レ……？

何をされたのか、当のアサシンにはまるで分からなかった。

また、それを傍で見守るウェイバーと薫にも見えなかった。

理解出来たのは、ライダーただ一人。

「〃剣術は苦手〃？ フン、ふざけたことを」

キャスターが自らそう称したのを思い出し、ライダーは鼻を鳴らした。

アサシンが襲ってくるや、アゾット剣を抜き出したキャスターの放った一撃。

否、正確には三撃であった。

首への薙ぎ、心臓にめがけての胴、体を真つ二つに裂く唐竹。それが刹那よりも短い誤差で以て、ほぼ同時に襲い掛かったのである。

「……いや、これが本物だったら全く同時のタイミングの斬撃を繰り出せたんだ。僕の剣技はまるで全然、得意というにはほど遠い」

ライダーの言葉にキャスターは自嘲的な笑みを湛えた。

「まあ、こんな僕だが。如何だろうか？ 君の仲間にして貰えるだろうか？」

その笑顔の儘、キャスターはライダーに問う。

最早、答えは言う間でもなかった。

第二十二話 正体不明

斯くて、征服王イスカンドル、悠久の怪人サンジェルマンは同盟を組んだ。

「仲間が増えたよ」

「やったね、サンちゃん」

キャスターが魔力で作り上げた劇場を消し、校庭に戻ると彼は薫とハイタッチをした。

如何やら、黄金劇場は構築する時にはその中に取り込む者を場内の好きな位置に置くことが出来、また逆に門を開放した時は排出する場所を選べるようであった。

故に薫はキャスターの隣に、ウェイバーとライダーはその二人と対面するような位置に立っている。

「サンちゃんってお前……」

ウェイバーは呆れ果て、次の口上が出てこなかった。

己のサーヴァントが如何なる人物かもまるで把握していないのか——そう思いつつ薫と呼ばれた少女を見つめる。

そして気が付いた。

その少女から感じる魔力が微弱であることに。

「あまりまじまじと見つめないでくれないかな。心臓と下着が拙いことになる」

「ご、ごめん」

呆とした表情のままの薫の指摘に、ウェイバーは思わず顔を逸らした。

「如何したのだろうか？ 何か、私に聞きたいことでも？」

「まあ、うん」

「スリーサイズなら上から一一七、七十三、一〇一だけれど？」

「ちよっ!? 聞いてないだろ！ そんなこと！」

違々（こうこう）とし、ウェイバーは顔に赤い熱を点らせる。

女性に対する免疫で言えば、彼は此度の聖杯戦争に参戦するマスターの中で最弱であった。

「じゃあ、何が聞きたいの？」

狼狽えるウェイバーに対して薫は首を傾げるばかりであった。

顔面の筋肉に痙攣を覚えたウェイバーは、叫び暴れ出したくなるような衝動を咳払いで抑え——先程の数字が頭を過り、つい少女に肢体を凝視してしまうような過ちを冒さぬよう努めながら、改めて問う。

「お前、シロウトなのか？」

と。

だが、ここでウェイバーは大きなミスを犯していた。

「私をAV嬢だの風俗嬢だので雇ったら、その人達は豚箱待ったなしだよ。まあ、でもそれに準ずるような技量の持ち合わせはあるから、安心するといい」

言葉の選び方を致命的に間違えたのだ。

「シモの話題から離れろよ！」

「喜べ童貞（しようねん）。君の願いは漸く叶う」

「お前に僕の何が分かるってんだ！」

呆れと怒りのあまりに、指摘のポイントすら出ずれ出す始末のウェイバーである。

「まあ、それは冗談として——私が魔術師かそうでないかということを知っているということの良いのだろうか？」

「ああ、そうだよ」

分かっているなら最初から答えてくれという嫌味はひとまず呑み込んでおき、ウェイバーは彼女の次を待つ。

「生まれも育ちもごくごく一般的な家庭です。私の記憶に何か致命的な欠陥が無ければ、まあ、多分アレイスター・クロウリーだの、コルネリウス・アグリッパだのとは無縁の人生を送っています」

詰り、そんな身であるから勝ち残れる是非もなく、故に強力なサーヴァントと同盟を組むことが必須であったということか。

ウェイバーはそのように考えるが、

「それは違うよ」

とキャスターが首を振った。

「この娘に聖杯を手に入れようだとか、生き残ろうだとか、そういう考

えはない。ただ君たちが楽しそうな人達だから一緒にいたら楽しいだろうなと思っただけだ」

ウェイバーはキャストの言葉を聞いてぎよつと目を見開く。

その内容にはない。薫という少女の能天気ぶりは、脳味噌の代わりに蟹味噌が詰まっているのかと疑うほどであるから、この際驚きはない。

問題はキャストの行動である。

心を読んだ——それは構わない。相手の心の内を探る程度のことならば現代の魔術でも可能な範疇だ。英霊になるほどの魔術師ならば言うまでもない。

問題は、ウェイバーが心の内を読まれたその瞬間、全く魔力を感じなかったことだろう。

「キャスト、お前もしかして千里眼を持つてるのか？」

それは歴史の中で一握りの魔術師のみが持ったと言われる最高位の証明。

あらゆるものを見るというその眼であれば、読心など思いのままであろう。

だが、キャストはその可能性を否定する。

「僕はそんなに上等なもんじゃないよ。魔術師としては悲しいまでに三流さ」

そして、自嘲を含んだ笑みと共にキャストは同盟者たるウェイバーに衝撃の事実を告げる。

「工房を作ることだって出来やしない程の、ね」

†

同盟を組むならば同じ場所で生活した方が良い。

そして、キャストと薫が拠点としている薫の住まいはアパートの一室である為、まだ一軒家であるマッケンジー宅の方が大所帯の生活には適しているという結論になり一同はそのような方針で行動を開始した。

そして、四人がやって来たのは、薫のアパート。

目的は薫の着替え等、生活用品を取りに来ること。

薫の住まいは、小学校から徒歩十分ほどの所に存在した。

「……ホントに工房は無いんだな」

日本では極一般的な“団地”の体裁を取っている彼女の住屋からは魔術師の工房なら流出して当然の魔力というものがまるで存在していないかった。

アシンを悟られず捕獲した劇場を創り出すほどの魔力、高い戦闘力を持つ“コツペリア”や格の高い英雄であるライダーの感知能力すら逃れるほどの飛行能力を誇る殺戮球体“カスパール”などを作り出す道具作成技術。

いずれも魔術師として最高峰だと思われる能力を持つキャスターは、併し魔術師として要となる工房を作る能力が無かった。

工房はその持ち主を全肯定する要塞である。その中であれば、通常ならば発動に丸一日かかるような大魔術もより短時間、より簡易的に使うことが出来るかもしれない。また、その主たる魔術師以外には逆に不利になる要素を無数に付与することが出来るかもしれない。

工房を作る資金が無く、守りという観点で不安に過ぎる拠点を構えていたウェイバーはそのような要塞を作ることが出来るかもしれない。いキャスターと組むことが出来たことを多少なりとも喜んでいた為、蓋を開けての工房を作ることが出来ないという真実には落胆した。

「お前、如何して工房作れないんだ？」

比較的早い歩調で階段を上り、八階建ての最上階にある我が家を目指す薫とキャスターを追いかけながらウェイバーは訊ねる。

「多分、僕に対するイメージの問題じゃないか？」

キャスターは答えた。

曰く、サンジェルマンとは悠久を歩き続ける者。故に留まるべき場所を持たない。そのような風評に困って、彼の實力如何は関係なく“留まる場所”である工房を作るという能力が無くなっているらしい。

「防衛はあれのお蔭で万全だけど」

そう言ってキャスターは、建物から顔を出す空を指差した。

ウェイバーは階段の踊り場、その縁に立ち、手すりから身を乗り出す。

其処には、ただ青空が広がっているだけにウェイバーには見えた。「ム？」

よく目を凝らす。

すると、景色が不自然に歪んでいる一か所を見つけた。硝子球から世界を覗き見た時のように、白い雲を含んだ蒼穹が彎曲している。

然も、その「歪み」は一か所だけではない。

いくつも存在し、流れる雲の様にゆつくりと動いていた。

「カスパール」だよ」

「あの、お前たちが乗ってた気持ち悪いヤツのこと？」

キヤスターは小さく頷いた。

「光そのものに干渉する礼装を搭載していてね。透明になれるんだ」

「そ、そんなことも出来るのか!？」

ウェイバーは驚く。

彼はキヤスターが乗る浮遊物体の詳細が気になり、先程軽く説明を受けていた。

殺戮浮遊球「カスパール」——最大飛行高度は対流圏と成層圏の狭間まで。頭上の空間を搭乗者の生息環境に整える機能を持ち、高度の酸素濃度また低温にも適応可能。視界は三六〇度総てを網羅し、5km先までを目視可能、物体透視能力を備える。そして、全身に備えられた砲身からは、人工的に培養した幻想種の生物「ココトリス」の毒を音速で射出し、その腐食作用及び単純な破壊力を以て敵を殲滅する。

その他にも色々と機能を取り付けてあるとは聞いたウェイバーではあったが、これほどの兵器が透過するなどとは想像もつかない。ウェイバーは身震いした。

味方に回れば頼もしいことこの上ないキヤスターであるが、敵に回してしまえば、これほど恐ろしいものはない。

味方であってくれて良かったと思うばかりであった。

そんな遣り取りがあつて、一行は薫の部屋の前に辿り着く。

「あれ？ 誰だろう？」

すると薫は家の前に見知らぬ姿を目に止め、立ち止まった。

一〇歳にも満たないと思われる少女であった。白いワンピース姿で、健康的な褐色の肌をし、黒い髪を短く切りそろえている。屹度活発な印象を与える要素であろう。だが、ただただ只管に薫の部屋の扉を見つめる様は、何処か脆く儂げであった。

「……お前の知り合いじゃないの?」

ウェイバーは不振に思い、薫の顔を覗き込んだ。

「子供とは関わらないようにしてるんだ。だから、知り合いっていうのは在り得ない」

「なんで? 嫌いなのか?」

その問いに薫は首を振り、

「違う」

と断ずる。

「寧ろ好きだよ、可愛いから。ただ可愛すぎるのでつい食べたくなっちゃう」

「ああ、それで……」

あんまりと言えばあんまり過ぎる理由に、ウェイバーは力無く納得した。

同時に、彼女の熱烈過ぎるアプローチの理由にも合点が行き益々気落ちする。

畢竟するに、子供っぽい見目と思われているのだ。

はあと、ウェイバーは溜息を吐いた。

「で、あの子どうすんだよ?」

ウェイバーがそう訊ねようと口を開こうとした時だった。

おもむろに薫が少女に近付いた。

「やあ、お嬢ちゃん。私の家の前で何をしているんだい?」

腰を落とし、少女の目先に顔を合わせ薫は訊ねる。

顔こそ笑っているが、その様はまるで誘拐犯か何かのようでウェイバーは苦笑う。

それ故なのか、少女の答えは遅れに遅れていた。

「……わからない」

肝心の内容すらもこの始末である。

「お名前は？」

「わからない」

「お母さんとお父さんは？」

「……わからない」

ゆつたりとした口調で齎される少女の答えは総てが同じ。

未だ少女は謎の儘であった。

見かねたウェイバーもまた少女の前に立ち、膝を落し彼女の目線に合わせる。

「ねえ、君。逆に何か分かることはない？」

「……わかる……こと？」

「そう。なんでも良いんだ。君の知ってること」

「……わたしの……しってる……」

少女はアンニュイな表情のまま、考え込む。

長い沈黙の後、漸く少女は口を開く。

「……かみのながい、おにいちゃん」

小さな、消え入りそうな声で少女は言った。

「お兄ちゃん？」

「……きれいなおにいちゃんだったの。でも、こわかった。めが、こわかった」

ウェイバーは、途切れ途切れで、一つ一つが意味を持たないような言葉に押し黙る。

その時、薫がウェイバーに耳打ちした。

「乱暴された？」

それは、ウェイバーがまさに考えていた可能性であった。

性的暴行に因るショックは大きなものだ。心的外傷やストレスから自身を守る為に、健忘を起こすというのは在り得ない話でもない。

「ライダー」

自分はそのなにお人よしではないと、自負していたウェイバーは自分でも驚くほど速く頼りがいという言葉を体現したような巨漢に願い出た。

「この子が失くした記憶を思い出すまで——いや、思い出せなくても

この子を探している親が見つかるまでで良い。なんとかしてやりた
いんだ」

どうすべきか、ウエイバーの中に答えはなかった。
故にライダーに答えを出して貰いたかった。

その巨体に似つかわしい豪快な笑声と共に、ライダーは自身の胸を
叩いた。

「少女を虐げる匹夫の手から守れということだな？ ならば良し！
この征服王に任せよ！」

そう答えるような気がすると、或いはそう思っていたのかもしれない。
い。

ウエイバーは安堵の表情をした。

「本気で言っているのかい？ アレク」

「応とも。余は此の手の諧謔はせんのでな」

「だってアレは……」

キヤスターは少女の指を指し訴えようとする。

だが、

「些細なことよ」

そう言つて、ライダーはキヤスターの言葉の続きを封じた。

「小僧が仁を見せたのだ。それを立ててやっても良いではないか」
にいとライダーはキヤスターに歯を見せる。

困惑するキヤスターに、

「キヤスター、私もこの子を守ってあげたいと思う」

薫も願い出た。

それを受け、キヤスターは押し黙る。

そして、暫く目を閉じ、考え込むと、

「……君が望むなら」

と遂に観念する。

「……どうなっても知らないぞ」

ぼそりとキヤスターが呟いた言葉は遂に誰の耳にも届かなかった。

二十三話 相棒

「ブオツホイー！」

隣を歩くランサーの大きなくしゃみに驚き、ケイネスは思わずランサーを二度見した。

「……凄いくしゃみだな。風邪……いや、お前はひくわけが無かったな」

昨日、真冬の海に飛び込み、更には薄暗い下水道を少なからぬ時間歩き続けることになった事実から自分の身に起こったかもしれないことを鑑み、そしてランサーにも当て嵌めたことに、ケイネスは少なからず驚いた。

たかが使い魔を、一人の人間として扱い、情を注ぎ過ぎている自分に。

「サーヴァントだからね」

輝かんばかりの笑みで当のランサーが告げたことが真実である。

ランサー関羽雲長は人間ではない。人の身に余る程の力を振るう、英雄という名の怪物だ。

例えば、『ヨハネの黙示録』に描かれる蒼褪めた馬に跨る騎手のようなその暴威を象徴化したような存在を相手にしてしまった場合にはその限りではないだろうが、基本的に病気にはならない。

況して、その存在すらも危うい。

関羽雲長そのものではなく、大刀の使い手という部分と元破落戸という側面が強調された現身。聖杯の力と、ケイネスが供給する魔力に因ってこの世に留まっている奇跡のような存在である。

鏡の中に咲いた花であり、月夜を映した水面であり——ランサーの言葉を借りれば一夜の夢のような存在だ。

故に否応なく別れは訪れる。

特にそれを肯定するランサーの場合は逃れ得ぬだろう。

「……では一体なんだというんだ？」

ケイネスは湧いて来る言いようのない感情を忘れようとランサーに問いを投げかける。

——朝方だからであろうか。吹き付ける風は異様に冷たく感じられ、思わずケイネスは着ていたダツフルコート襟元の襟元をギュツと閉めた。

「Weiler（エエイリウ）……なんつーかあれだね、誤解というかいらん風評被害というか」

煙草を銜え、火を灯しながら、ランサーは紫煙交じりに答える。

「意味が分からん」

率直に、ケイネスは吐き捨てる。

「そんなことよりも、だ」

そして、ケイネスは手元のA4サイズほどのファイルを叩いた。

「……本当にこれ、全部回るのか？」

中身はある人物が通った学校の学生名簿であった。

最も新しいもので十一年前、古いもので二十年も前——その上で在学中の上級生、下級生に当たる人間のものまで在り、殆どその人物の人生を網羅しているといつて良いだろう。

其処に記された人間の名はそれこそ星の数ほど。

二人はまさにその一人一人を当たろうとしているのだ。

「Police（ポリリス）は足で稼ぐってね」

「いや、魔術師とサーヴァントだが。貴様、一体我らが会わなければならぬ人間が何人だと思っている？」

「白起が長坂に埋めた人数よりは少ないでしょ」

中華の英雄に相応しく、中華の英雄を喩えにし、ランサーは大笑いをした。

ケイネスは苦笑いを浮かべる。

白起というのは、関羽が活躍するより遙か昔、中国文明が誕生する以前の秦の武将のことだが、とりわけ『撃墜数』が際立った英雄である。彼の手によって殺められた人数は文書に記録されているだけでも八十万——彼が活躍した時代の戦に纏わる書物の殆どが始皇帝の治世に於いて焚書されていること、残っている書物に關しても捕虜にした敵兵の処遇について書かれているのみで戦死者の記録がないことなどを鑑みれば百万を超すと言われている。

それでは、ランサーが話題に出した長坂の戦いで生き埋めにされた捕虜の人数とは？

諸説あるが最も一般的なもので四十万人という記録がある。

「……ジョークにしても笑えないぞ」

言う間でもなく、四十万世帯も訪問出来るほどケイネスの根気は強くはない。

そもそも、早朝から十軒ほど回って既に根を上げ欠けている始末だ。

「まあ、安心したまえよ、Master（ムアスター）。既に回った段階で本人に近しかった人物の手掛かりは得ている。ボクと君の運の良さから言って、日が沈む前には欲しい情報に行き付くだろうさ」

煙を吐きつつランサーは馴れ馴れしくケイネスの肩を叩く。

「それは運が良いと言うのか？」

素朴な疑問をケイネスは呈した。

「そもそも、これは本当に意味があるのか？」

ランサーは紫煙と共に溜息を吐く。

「良いかい、ケイネス。戦つてのはいきなり切った張つたで始まるもんじゃあない。実際は殺り合う前……」

「〃相手をよく知ることから始まるんだ〃……とでもいう気か？」

「分かつてるじゃあないか」

「流石にこれまでの戦い方を見ていればな」

単純に戦士としての力量が高い癖に、石橋を叩いて渡るような策を立てる。

それがランサーの戦法。

武勇に秀るとはいえ、呂布を始め多くの武人に苦戦を強いられた彼の道程がそうさせているのだろう。

その方策にケイネスは既に幾度か助けられているのを自覚しており、ランサーのやり方に不満はない。

この探偵ごっこにも意味があるとも思いたい。

思いたいのであるが、

「もつと他の方法は無かったのか？」

貴族という育ちのケイネスには、現在のこの状況に漂う泥臭さは耐え難いものがあつた。

「もう、我儘言わないの。P a p a (プアープア) 許しませんよ」

「誰が関平だ。第一、歩きたくないというだけで言っているわけじゃない」

そう言われ、ランサーは腕を組み、宙を仰ぐ。

そして、首を下ろし、ケイネスの顔を見ると、

「もしかして、さっきの襲撃のこと言ってる?」

と訊ねた。

まるで困り果てた末、絞り出したと言わんばかりの顔で。

思わずケイネスは脱力し、そのまま蹴躓きそうになる。一歩間違えば、側溝に飛び込む羽目になっていただろう。

「良いこけ方だ。魔術師は廃業してc o m e d i a n (コメイデヤン) に転職するべきだね」

「認められるか、そんな未来。というか、お前、あれだけのことがあつたのを忘れかけたのか?」

その問いにランサーがこくりと頷いた為に、ケイネスはついに顔を覆つた。

先程あつた出来事はそれだけに衝撃的だつたのだ。

——時間を二時間ほど遡る。二人がふと見つけた児童公園のベンチで休んでいた時であつた。

アサシンのサーヴァントに襲われたのである。ランサーの助言も有り、アサシンが遠坂邸で息絶えた一人のみではないと覚悟していたケイネスであつたが、まさかこれほど早く見えることになると思つても見なかつた。

その人数が一人ではなく、四人だつたということも、驚きを大きくしていたかもしれない。

「つっても奴ら破れかぶれな上、あんま強くなかつたし」

先の戦いでのアサシンをそう評しつつ、ランサーは一見懐中時計のようにも見える携帯灰皿を取り出し、その中に吸い尽くした煙草を投じた。

「確かにそれはそうだが……」

そう言いかけて、ケイネスは続きが出てこなかった。

事実、アサシンが弱かったからだ。戦袍すら纏わず、ランサーは匕首のみで三人のアサシンを一瞬で葬り去り、逃げようとした一人をケイネスが仕留めた。

まさに一瞬の出来事である。

「また襲撃された時にどうなるか……」

「いや、次はないよ」

ケイネスの懸念をランサーは払拭した。

「ボクが殺ったヤツから出てきたアサシン、ソイツの能力は君の目にどう映った？」

ランサーが三人のアサシンを仕留めた時だった。その内の一人から、別のアサシンが排出され、そしてそのまま逃走した。

そのアサシンの後ろ姿を見た時に、ケイネスの目に映ったステータス。

ケイネスはそこに思考を及ぼせると、

「弱かった。殆どの能力が最低値……だったと思う」

そのように結論した。

確固たる自信を持ってないのは、よく見ようと目を凝らした時には、能力値を確認できなくなっていたからだ。

アサシンの姿が消えたというわけでもない。恐らく何かのスキルだと、ケイネスは推測した。

その考察をよそに、ランサーは話を続ける。

「そして、もう一つ前提として。多分だけど、他のアサシンについても、そこまで高い能力値ではなかったんじゃないかな？」

「ああ、その通りだ。だが、それが何だというんだ？」

「あのアサシンの能力の秘密がこれで分かった」

ランサーの言葉にケイネスはああと、納得したような声を出した。

「おっ？ 君にも分かったようだね？」

「お前は私を舐めているのか。当然だろう」

ケイネスは鼻を鳴らした。

「分裂能力……だろうか？」

ランサーは無言の笑みをケイネスに返した。

複数同じような姿のサーヴァントがいたこと。いくら最弱の階梯と呼ばれるアサシンとは言えど、一体一体があまりにも弱すぎたということ。

二つから割り出される答えは、一騎のサーヴァントの能力を複数に分割しているから。

詰りアサシンの集合体総ての能力を数値化し仮にそれを“百”と仮定した場合、二人が先程戦ったアサシンたちは精々が一か二の能力でしかないということだ。

そこまで来て、ケイネスははたと気が付く。

「——そうか。攻撃を仕掛け仮に失敗し数を減らした場合アサシンの総体としての力は弱まっていく。で、あるならば」

「一度奇襲を失敗した相手にまた攻撃を掛けるのはBetter (ヴェトウアー) ではない。やられるのは目に見えているからね」

そう言いつつ、ランサーは次の煙草を口に銜える。

「況して、ちよつとやそつとの分裂体なら蹴散らせることを、さつき主は証明してみせたわけだしね。信条であるMaster (ムアスター) 殺しを通じないことが分かっている以上、ボクらのところにまたアサシンが来ることはないと思う」

そう結論して、ランサーは煙草に火を点ける。

「お前、もしかしてその為にワザと私を襲ったアサシンを見逃したのか？」

「あ、バレた？」

ランサーは悪戯を親に発見された小僧のような笑みを浮かべ、口元から煙を零した。

「酷いキラーパスだったな。私が死んだらどうするつもりだった？」

ケイネスはわざと嫌味っぽくランサーに問う。

三人のアサシンが陽動としてランサーに襲い掛かり、その直ぐ後にもう一人がケイネスへと暗殺を仕掛ける。

これが一連の流れであり、不自然な点は無いように思われる。

だが、ケイネスは知っている。あの海浜公園での戦いで思い知らされてる。ランサーの戦闘技術を。最優のセイバーの中でもとりわけ強大なアーサー王を寸での所まで追いつめる自身のサーヴァントの力量をケイネスはよく知っている。

ならば、あの程度の単純な陽動は読めて当然、その上で敢えてアサシンの策に引つかかたと考えるべきである。

怒りはしない。ただ、ケイネスは呆れた。

それにより得たものもあつたが、ケイネスにとつてもランサーにとつても大きなものを失うリスクがあつたからだ。

だが、ランサーはあつけらんとした表情で、

「君が死ぬ？ あの程度で？ H A H A H A！ 全く考えてなかった！」

と宣った。

「おまつ……正気で言っているのか!？」

「ボクが狂戦士のクラスだったとは衝撃の真実だね！」

「戯れも大概にしろ」

マイペースにお道化するランサーを、ケイネスは滑らかな口調で窘める。

ランサーは深く煙を呑み、一度大きく吐き出し、表情を引き締め、そして立ち止まる。

ケイネスは五歩程度、ランサーよりも先を進んだ時点で隣に脂の匂いが消えたことに気が付き、続いて立ち止まり振り返る。

「……なあ、ケイネス。君は他人の感情の機微というヤツにもうちよつと聴くなるべきだぜ？」

「何を改まる」

「君が思っている以上に君のことは信頼している。そう言いたいんだよ」

真つ直ぐ、ランサーはケイネスを見据える。

「魔術師として、君の腕は最高峰にある。ボクはそう思っている。だから、衛宮切嗣以外の敵にはこれといった策は敢えて立てなかつたし、対魔力もなく、際立って戦闘力の高いわけじゃないアサシンを君

に任せようと考えた。……ちゃんと、理解してくれているかい？」
それを聞き、ケイネスは言葉を失った。

生まれて、魔道を極め二十数年——彼の成す神秘には称賛の声は数あれど、その中には常にほの暗い妬み嫉みの感情があった。

彼の失敗を、失脚を、或いは死を望む陰口に気が付かぬ程、ケイネスは鈍感ではなかったから——故に人を信じるよりも前に疑う癖が付いた。

だからこそ、ケイネスはランサーに一〇〇%の信頼を置くことが出来ないでいたのかもしれない——そう思わされた。

ランサーの混じり気のない、ただただ廉直な讃辞に。

「フン、理解してやる。理解してやろうとも。だが、もし私が死ぬようなことがあれば、その時は貴様を呪い殺す」

ケイネスは長年染み付いた憎まれ口でしか返せなかった。

それでもランサーは、

「H A H A H A！ 呪い殺す側を経験したボクだが、呪い殺される側にはなりたくないな！」

と冗談を交えながら笑い飛ばした。

「如何だかな。先程、逃がしたアサシンの分裂体。あれがこの身に仇なすことになるかもしれないぞ？」

「はわわ。それについてはL i t t l e (リトウ)、二つほど言い訳させてくんね？」

心から慌てていない癖に、その素振りだけは一丁前にランサーは右手の人差し指と中指を立てる。

ケイネスははあと、溜息を漏らす。

「構わん。まず一つ目は？」

「追いかけたら、伏兵だの火計だのが待ってると思っただんで」

「成程、確かにそうかもしれないな。というか、お前の所の軍師なら絶対そうするだろうな。二つ目は」

「益徳との約束がありました」

ランサーは苦笑し、その内容を告げた。

「幼子は殺しちや駄目ってことになってんだよね、ボク。特に女の子

は

第二十四話 絶望双六

マツケンジー宅のリビング。

つい先日までそこは落ち着いた、けれどどこか寂しさを感じさせる老夫婦だけの場所であった。

けれど、今は賑わいがある。それまではいなかった子供達がいるから。

その賑わいの中にウェイバーはいた。からからと、フローリングを鳴らすダイスを目で追いながら、

「いち、にい、さん、しい……あ、選定の剣を抜く、三マス進む」だつて」

自身と対面する童女が純粹に楽しんでいるのを見て、柔く微笑んだ。

「良かったじゃないか、ミナ」

フローリングに腰を崩す童女の頭を撫でた。

「ミナ」というのは、薫の家の前で出会いウェイバーら四人が守ると決めた幼子に呼ぶときに困るからと仮に付けた名前である。

命名は薫である。ヴラム・ストーカーの「ドラキュラ」の登場人物、ミナ・ハーカーと、アイヌ語で「笑う」を意味するミナが由来だと彼女は語った。

……名前の候補の中に、「ダイアー・ストレイツォ」という凄まじいものがあつたが、大真面目にそれを十歳にも満たない少女の名として与えようとした薫をウェイバーが全力で止めたというのは極めて余談であろう。

「つぎは、おにいちゃんのおん」

「あ、そうか」

ミナに促され、ウェイバーは盤面の上に落ちた賽子を拾う。

そして、今一度、自分の駒がある位置を見る。

——自分の三マス前には、キャスターの駒が、さらにその先にはミナの駒がある。そして、四マス先には、「二回休み」の文字。あれを踏むわけにはいかない。

取りあえず出してはならない数を見極め、ウェイバーは手の中で賽子を遊ばせる。

元来負けず嫌いが性分のウェイバーは戯れにも関わらず表情を引き締めている。

それを見ながら、ミナとウェイバーの間に座るキャスターはさも愉快そうに笑っている。

彼等が遊んでいる「双六」は、キャスターが作ったものであるから、そこに冥利を覚えることだろうか。

ウェイバーはキャスターの心情に思いを馳せながら、いざ賽を転がす。

「あ、四だ」

一番出してはいけない目を出してしまい、ウェイバーは肩を落とす。

「よしよし」

自分よりも遥かに若年であろうミナに頭を撫でられたことが更に追い打ちとなった。

「クッ！」

切歯の後、顔に苦渋が満ちる。

「フフッ」

「笑うなよ！ キャスター！」

つい吹き出すキャスターに、ウェイバーは向きになり睨み付けた。すると、キャスターは人差し指を立て、唇の前に置く。

沈黙を促すその手振りに最初、ウェイバーは首を傾げたが、

「あ」

直ぐに言わんとしていることに気が付き、食卓の方に目を遣る。

正確には、テーブルに付くマツケンジ―氏と、ダイニングで料理をする夫人へ。

今、口を吐いた言葉を怪しまれていないか、ウェイバーは恐々と二人を見つめる。

だが、そんな小さな恐怖心は、どすんと机に叩き付けられる二つの大ジョッキの音で寸断されてしまった。

「はっはっはっ！ お二人とも良い呑みっぷりですな！」

向かい合わせに座る、「夫婦」に拍手すら送り、マツケンジー氏は甚く嬉しそうな顔をしている。

如何やら、ウエイバーの疑念は杞憂に終わったわけであるが、それでもウエイバーは浮かない顔をしていた。

その理由は、やはり、「夫婦」に在った。

「いやあ、まさかこのようなもてなしに預かるとは！」

感激したように豪笑したのは夫——役のライダーであった。キャスターが道具作成のスキルを利用して作ったスーツを着ている為に、何かしらの授賞式に赴いたハリウッドの筋肉俳優といった風情である。

「そんな……大したものも出せなくて……ウエイバーちゃんが、教えてくれば、もつと御馳走の準備が出来たのですが」

夫人が手作りのつまみをテーブルに並べながら申し訳なさそうに笑う。

「いえいえ。お酒があつてお母様の美味しい手料理が戴ける。それだけで充分なのです」

「あらあら、奥さんたら。お世辞がお上手なこと」

奥さんと呼ばれた、黒いタートルネックのセーターと紫のロングスカートでさも淑女を装っているのは言う間でもなく薫である。

その姿に不釣り合いな呑みっぷりを披露してしまっているが、逆に老夫婦には快活に映り好印象であるらしい。

ウエイバーはこの状況に顔が引きつるのを感じた。

そんな彼を更に追い詰めるような事態が起こる。

「はい、みんな。おやつが出来ましたよお」

「わあー、おばさん、ありがとうー！」

子供達の為に手作りクッキーを焼いてくれた夫人に対して喜びを顕にしたのはキャスターである。

常態の彼を知るウエイバーにとっては、その絵に描いたような子供らしい振る舞いがとても気味悪く映った。

「ウエイバーちゃん。ジョゼフちゃんとミナちゃんをしつかり見てい

るのよ」

「アツ、ハイ」

人様の子供に何かあったりしたら大変だから——という意味合いの言葉を理解するのにもウエイバーはかなりの時間を要してしまふ。

実際子供であると思われるミナは兎も角として、"ジョゼフちゃん"——キャスターが名乗った偽名——に至っては三千歳とも四千歳とも言われる人物である。子供として扱えと云うのはかなり無理があった。

否、そもそも何故子供として扱わねばならない事態になっているのか？

何故、世に名だたる征服王と怪人サンジェルマン、頭の螺旋が緩んだ女子高生と、記憶喪失の童女が家族ごっこをしているのか？

ウエイバーは今更ながら、頭痛に駆られた。

総ての原因は薫にある。同盟を組む以上、同じ場所で生活しなければならぬ。自分達の住まいは大所帯にはあまりに手狭過ぎるからと、薫はウエイバーが寄生するマツケンジー家に転がり込むことを決めた。

だが、その為の策というのが、綱渡りにすらならない、失敗して当然のような酷い策であった。

ウエイバーは老夫婦に暗示を掛け、"イギリスに留学していた孫"という設定で彼等の家に転がり込んでいるわけであるが、薫はその設定を更に膨らませることにしたのだ。

曰く、"イギリスのアルバイト先でお世話になっているアレクセイ・ブラックストーンさんとその家族"。

いくら薫が実年齢よりも大人びて見えるといえどライダーと夫婦だと言い張るには無理があると言えたし、そこから生まれる子供が金髪碧眼の貴族然とした美少年と褐色肌のどこの生まれかも判然としない童女だというのは法螺話にしても過ぎるだろう。

更にウエイバーを混乱させたのは、その冗談のような話が真実としてあつさり老夫婦に受け入れられてしまったことか。

キャスターの暗示によるものだと最初は思ったが、彼曰く、"何も

やっていない”。

詰りはこの奇妙な状況が成立してしまっているのはライダーと薫の器量ということだろうか。

或いは、老夫婦が余程騙されやすいか。

ウェイバーは後者であると強く思い、心配になった。いつか、怪しい壺でも買わされるような目に遭うのではないかと。

暗示まで掛け騙している身で、老夫婦の行く末をウェイバーが案じた時、

「おにいちゃん」

ふと、ミナに名を呼ばれる。

口元には彼女の手と、そこに握られたクッキーがあった。

「あーん」

「はい？」

「おくち、あけて」

言われるがまま、ウェイバーは口を開け、クッキーを食べる。

「おいしい？」

「ああ、うん。まあ」

「わたしも、おいしい」

ミナはそれを伝えると笑った。

「そっか」

ウェイバーはそれに釣られて笑う。

自分の感じたものを、誰かと共有したい。幼い子供特有の感情に、ウェイバーは微笑ましさを覚えた。

そして、安らぎを。ライダーや薫の振る舞いが楽し気であるから薄れてしまっている様に思われるが自分の身は戦場にある。屹度、其の為に自分は知らず知らずの内に心的苦痛を覚えていたのかもしれない。

「ふふっ」

そんな二人の様子を見てキャスターは笑みを零す。

「嬉しそうだな、ジヨゼフ」

今度は偽名を口にすることを努め、ウェイバーはキャスターの眼差

しが優しく細んだことを指摘する。

「……二人が幸せそうだからね。嬉しくなっちゃって」

キャスターは答えた。我が子の幸せを喜ぶ親のような顔で。

そして、いや、と言いながら、今度はライダーと薫、そしてマツケンジー夫妻に目を遣る。

マツケンジー氏が秘蔵の酒を二人に振る舞うと言い出し、歓迎の宴は小規模ながらも大いに盛り上がっていた。

「君たちだけじゃない。此処には幸せが溢れている。人間は皆好きだけど、幸せな人達を見るのは格別だよ、やっぱり」

その声色はどこまでも温かく——屹度、一流の魔術師たろう者であろう人間にとつて一番忌むべきであろう感情というものが自分の中にあることをウェイバーはこの時ばかりは喜んだ。

悠久の錬金術師、第七光線の大師（マハトマ）サンジェルマン。逸話こそ多くとも、その人物像にも謎は多く、故にウェイバーは同盟を組むに中つて懸念があった。

だが、彼は典型的な魔術師像とは大きくかけ離れ、大凡裏切りなど是在り得ない、極めて人間的——いや清廉とすら言えた。

然う、ウェイバーは断じかけるが、

「こんな人間が永遠に続けば良いのに」

そう彼が発した瞬間、ぞくりと背筋が粟立つのを感じた。

喉が、干上がる。息が、出来ない。髪を伝い、落ちてくる汗が、冷たい。

キャスターの表情に変化はない。だのに、何故か底なしの井戸を覗き込んだような、不安にウェイバーは襲われていた。

言葉が、出てこない。時間の感覚すら、分からなくなる。一秒なのか、一分なのか、それとも一時間、否永劫なのか。

厭な緊張感——

「ちいにいちゃん」

それを破ったのは、ミナであった。

キャスターの袖を掴み、双六の盤面を指差す。

順番が回ったのだから、賽子を振ってくれと、訴えているのだ。

「おっ、僕の番か」

そう言つて賽子を拾い、キャスターは手の中でそれを弄り回す。

瞬間、ウェイバーが感じていた言い知れぬ不気味なものはキャスターから消えていた。

「それっ！」

威勢の良い掛け声と共に賽子を投げる様は快活であり、ほの暗いところはまるで内容に思われた。

思い過ごしか——ウェイバーはそう考えつつ、賽子の出目を見守る。

「おっ！ やった！」

キャスターはまるで見た目通りの子供であるかのように、ガッツポーズをした。

——いくら六が出たからつて大袈裟過ぎるだろう。

先ほどまでキャスターに対して感じていた得も言われぬ恐怖が、まるで最初からそこになかったかのように消え去ってしまったような呆れを含んだ笑みをウェイバーは浮かべていた。

弾むようにな手つきで、鼻歌交じりに駒を動かし、キャスターは止まったマスの文字を読んだ。

「クモが目覚める。文明が終わる。全員振り出しへ。……アレ？」

「ええー」

一番先頭を行っていたミナが頬を膨らませ、キャスターに抗議する。

「ごめん。でもルールなんだ。分かってくれ」

「ぶー」

ミナは不満そうに口を尖らせたが、その気持ちはウェイバーにも理解出来た。

「ルールも何も、お前が考えた双六だろ」

まず一点がそれ。

次に二点目が——

「てか、コレ、一々マスのルールが理不尽だし、文面も不穏過ぎるんだよ！ さつきから、〃振り出しに戻る〃ばつかじやないか！」

ミナの不満に同意できる大きな理由であった。

五回——振り出しに戻るのマスを三人が踏んだ回数である。

しかも、それぞれ文面が違う上に書かれている言葉からは終末思想めいたものである。

先ほどのクモが目覚めて文明が減ぶなどまだ良い方だ。

〃遊星から破壊をするたびに成長を続ける巨人が飛来する。絶望に打ちひしがれる。〃 だの、〃人類に失望した学者が核の雨を降らせる。未来はない。〃 だの、果てはノストラダムスの予言書に書かれた内容そのまま世界が減んだのだと、兎に角世界が減び続ける、苦行に苦行を重ねる——平たく言ってしまえば所謂〃糞ゲー〃である。

「いやあ。ごめんごめん。経験柄、あまり明るい内容が書けなくて」
「だとしたらカリオストロがかわいそうだな！」

弁明するキャスターにウェイバーは毒を吐く。

アレツサンドロ・デイ・カリオストロとは、錬金術師を自称した稀代の詐欺師にして、晩年は巻き上げた金を貧民に分け与えた日本と言う所の鼠小僧のような一面を持った人物とされる。

——無論、それは表の世界での話である。実際は彼の詐欺師という評価は時計塔が行った暗示と文書改竄の賜物であり、時計塔に史上に於ける偉大な魔術師の一人である。

そして、サンジェルマンの伝説に於いてもまた欠かせない人物だ。というのも、彼が好んで読んでいた魔導書の著者こそがウェイバーの目の前にいる〃糞ゲークリエイター〃だからだ。

魔道自体が、〃自身の研究が無意味であることを覚える〃ことから始まる陰鬱極まりないものであり、それに纏わる書物も大抵は読み物として見た場合には暗い内容になるものであるが、だとしてもサンジェルマンの双六の内容から読み取れる絶望主義は行き過ぎたものがある。

屹度、カリオストロが読んでいたのはメランコリーに陥るような救いようのない魔導書だったのだろうとウェイバーは決めつける。

そして、稀代の錬金術師がとんでもないマゾヒストだとも。

「……でも、確かに小さな女の子もいる。そんな場面で出すような代物ではなかったな」

そう言っただけでキヤスターは持ってきたリユックサックの中からゲーム機とソフトを一本取り出し、

「気分転換に薫の家から持ってきたゲームでもやろうか」と提案した。

「まあ、これよりマシなんじゃないか？」

魔術師見習いとして、近代技術全般を見下しているウェイバーであり、テレビゲームもその枠の中にあっただが、絶望双六よりは余程ましであろうと納得する。

「ミナもそれで良い？」

ウェイバーの言葉にミナは小さく頷いた。

「ところで、ジョゼフ。そのゲーム、タイトルはなんて書いてあるんだい？」

棚から牡丹餅で聖遺物を手に入れ、聖杯戦争への参加を決めたウェイバーは当然それ以前にすべき準備というものをしていなかった。

例えば、資金を用意したり、現地の言葉を覚えたり。要するにウェイバーは日本語を話せないし、書けもせず、読むことすらも出来ない。偽名を呼ばれたキヤスターは快く答える。

「えっと……『真・女神転生』だね」と――。

第二十五話 存在証明

「さあ、ソラウさん。ブツは上がってんだ。大人しく吐いたらどうだ？」

テーブルを叩き、対面するソラウを問いただすランサーの姿は宛ら刑事のようであった。

ソラウは顔を逸らし、唇を咬むようにして固く閉ざす。

そして、ランサーの傍らに立つケイネスは、腐りかけの魚のような濁った眼で何処でもない何処かを、呆と眺める。

——ここは地獄なのか？

現状に対する名状は、ケイネスの中に於いてそれしか見当たaranかった。

「You（イウー）が一体何を書いていたのか、正直に言うんだ！」
愛する人が書き記した「禁断の書物」を著者本人に突き付け、その内容如何を自身の従者が質すその光景が地獄以外の何であるというのか。

今、この瞬間に魔術師の悲願たる根源に至れるというならば、屹度ケイネスはその答えを真っ先に見ようとしただろう。

森羅万象、あらゆるものの始点となりまた終点である「アカシックレコード」としての機能を持つそれならばそれも可能な筈だ。

……同輩や先達の魔術師が聞けば卒倒しかねないような想到であるが、ケイネス自身としては大真面目であった。

「イヤ……言えない……ケイネスが、聞いているのよ。そんなの、無理」

絞り出すように、ソラウが紡ぎ出した抵抗の意思。

ケイネスの中で、伴侶に対する憐憫の感情が大きくなった。

そもそもどうしてこんなことになってしまったのか。

それは総て、間が悪かったの一言に帰結する。

ケイネスとランサーが調査を終え、昼食をとり工房に戻って来た丁度その時、二人はテーブルに座り「英気を養っている」まさにその瞬間を目撃することとなった。

彼女は一心不乱にノートに向かい、ペンを軋らせていた。凜烈な美貌が台無しになるほど、顔を緩ませ、口の端から涎すら垂らしながら。「ふへへへ……滾るう……」

邪な笑声、ソフィリアの家庭教育では決して培われないであろう語彙、そして全身から迸る黒い王氣（オーラ）——ケイネスは屹度、この日見たソラウの姿が焼き付いて消える事はないだろう。

だが、本当の地獄は此処からだった。

あろうことかランサーがひっそりとソラウの後ろに立ち、禁書の中身を覗き見たのだ。

そして、

「『令呪を以て命じる。私の子を孕め』」

そこに書かれた封印指定ものの台詞を読み上げた。

春の訪れと共に、川へと下る雪解け水のような、よく通る澄んだ声で。

それは貴公子然とした余裕と美しさに満ちていて、関羽雲長という人物の英雄らしさをよく表していると言えた。

尤も、その言霊は最低最悪の禍々しさを含んでいるのだが。

兎にも角にも、ランサーの言葉でソラウは妄想（ユメ）の世界から現に引き戻された。

その瞬間のソラウの表情をどのような言葉で表現すべきか、ケイネスには分からなかった。

それほどにソラウは、何もかもが『終わってしまった』ような顔をしていた。

故に、ソラウに弁明の暇は無く——ランサーから取り調べを受けることと相成る。

だが、問答は中々進展しなかった。己の性（サガ）に関わることであるからか、ソラウはランサーの追及に対し、重い口を保ったまま。「……答えられないなら仕方ない。答えなくていい。ただ、これだけは言わせてくれ」

最早、ソラウの意志は固く、口を割ることはない。

観念したランサーは真剣な顔で、

「ケイネスのエクスカリバーは割と大き目でズル剥けだよ？」
と、ソラウに教えた。

重要なことだと言わんばかりの深刻な面持ちで。

だが、当然それはケイネスの逆鱗に触れる一言であった。
今まで自失としていたケイネスであつたが、瞬間、覚醒。

そして、ランサーの頬骨に、足裏を思い切りねじ込む。

「ぐべらばっ！」

椅子ごと蹴りの勢いで突き倒されたランサーは痛みに頓狂な悲鳴を上げる。

「何すんだよ!？」

「それは此方の台詞だ!」

ランサーの抗議に、ケイネスは逆に——否、当然牙を剥く。

「プライバシーもプライバシーな部分だぞ!？」 何故ばらす!？」 よりにもよってソラウに!」

男として、親しい女性には一番隠しておきたい部分であろう。

「いや、言うて君ソラウさんとは婚約者でしょ？ てこたあそういうこともあるわけで……」

「そういうこととか言うな! 馬鹿!」

恥らいから、ケイネスは口の全く減らないランサーを、何度も何度も踏みつける。

そして、ひとしきり踏みつけた後、ケイネスは慌ててソラウの方に向き直る。

案の定、ソラウは赤面させ、ケイネスから顔を逸らしていた。

「ソラウ! ランサーが言ったことは忘れてくれ! 絶対に!」

鈍と音が鳴る程机を叩きつつ、ケイネスはソラウににじり寄る。

「あ、うん……。はい……」

気おされたかのように、少しばかり後ずさりし頷く。

ところで、魔術の中には暗示や、記憶操作といったこういった場合には適しているであろうものが存在するが、終ぞソラウもケイネスも思い至ることは無かった。

「絶対だぞ! もし覚えていたら正直生きていける気がしないからな

！」

ケイネスの頭を占領していたものが、自身の陰茎のことを愛する女性
性が忘却してくれるか否かであったが故に。

「じゃあ、ケイネスも忘れてくれる？」

また、ソラウにも視野狭窄させるような出来事があったから。

だが、ケイネスは首を傾げた。

「何のことだ？」

と。

「私が書いた本のこと！ ケイネスとランサーがくんずほぐれずする
とつてもエロいやツ！」

ソラウは頬を膨れさせ、知られてしまった自分の性的趣向に関する
ことであるとはつきりと口にする。

言葉を選ぶということすらせず、実以て直接的な表現で。

「ああ、そのことか。私は別に気にはしないよ」

「え？」

「君の趣味如何をとやかく言うつもりはないと、そう言っているんだ」

再三の説明にも、最初ソラウは理解が及ばなかった。

そして、暫く黙り込み、

「へっ？」

漸くソラウが絞り出したのは、間拔けな声であった。

「というか、だ。そもそもランサーが日々騒ぎ立てるまでもなく、私は
君の好みのことは知っていた」

ソラウは困惑し、瞬きの回数が不自然に増えている。

「え？ バレて？ え？」

「すまない。うっかりノートを見てしまったんだ」

ケイネスは申し訳なきように顔を伏せる。

「屹度、あまり知られたくないことだと思つて知らぬ存ぜぬを通すつ
もりだったか……」

ケイネスはそう言いかけ、未だに床で痛みに悶えるランサーを睨
み、

「コイツがいらんことをするから！」

と、蹴りつける。

「Stop(スタップ)！ Stapp(スタップ)！ 痛い！ 痛いってば！ アレだから！ ボク一応神様だから！ 母国だと結構崇められてるから！ 蹴ったりしたら崇られるよ!？」

「知ったことか!」

結局、何度目かの蹴りの時点でランサーが霊体化するまでケイネスの制裁は続いた。

蹴り疲れから肩で息をし、それからしばらくして仰々しく咳払いすると、再びソラウに向き直る。

「まあ、そういうことだ。君は今まで通り、ありのまま好きなものを追求していけば良い。私は応援している」

正直、衆道趣味を知った時に、少しばかり顔を顰めたケイネスであったが——それであっても、ソラウを思う気持ちに変化は無かった。

そもそも、考えればいくらソラウの頭の中で、自分が他の相手と結ばれていようと、自分の愛はソラウにのみ向いているのだから何の問題もない。

——ケイネスとしては相手役がランサーな部分だけは本当になんとかして載きたいところであったが、この際、それについては棚上げしておく。

「というわけだ。私が認めているんだ。忘れる必要はないだろう?」

兎も角ケイネスは、自分の前では、自分を偽る必要はないということとをソラウに伝える。

ソラウはケイネスの言葉が余程意外だったのか、呆気に取られ、口を半開く。

「……私の肯定如何は別に関係ないとは思うが」

反応が無かったことを、ケイネスがそのように捉え拗ねた様に呟いたその時、

「そんなことない!」

ソラウは机を打ち鳴らしながら、身を乗り出した。

だが、それは一時の勢いでしかなかったのか、

「大事よ、とつても。私にとっては」

ケイネスから顔を逸らしながら、ソラウが出した言葉はとても弱々しかった。

何故、そこが重要なのかその理由はケイネスにも図りかねた。

それを考えようとしても、ケイネスには屹度答えを得ることは出来なかつただろう。ケイネス・エルメロイは自分の実力にこそ絶対の自信を持っているが、人間的な魅力に関してはまるでないとすら思っていたから。

否、魔術以外何も無かつた今までそれを考えることすらなかつた。

自分を省みるということは、この聖杯戦争が始まってから漸く身についた能力だ。

そして、それが故にケイネスは真実には辿り着かない。

第一、

「二人ともお、御茶淹れたよう」

思考は一人の馬鹿の所為で、寸断されてしまうことになったが。

いつの間にか、霊体化を解いていたランサーはジャスミンティーを淹れ二人に差し出してきた。

ティーカップを頬に押し当てるといふ形で。

茶というものは使う茶葉の種類によつて、適した温度というものがあるが、ジャスミンティーのそれは九〇度である。

言う間でもなく、そんなものを頬に押し付けられれば、熱い。

「普通に渡せんのか、貴様は」

苛立ちながらケイネスはランサーが淹れた茶を受け取る。

一口啜る。

「……フン」

感想は敢えて言わなかつた。

「ありがとう」

ソラウもまた、ランサーから茶を受け取る。

一口飲むと、ソラウはまるで何十年と慣れ親しんでいるかのような、緩み切った顔をした。

「さて——では茶番もほどほどにして……」

「茶番にしたのはお前だろう！」

爽やかな笑みを湛え、平然と身勝手な発言をするランサーをケイネスは喝する。

だが、様式美というべきか、相も変わらざると言うべきか、ランサーはその言葉を耳にすら入れていないかのよう無視。

「おいコラ、ランサー」

ケイネスが額に青筋を浮かべている様子を気にも留めず、ランサーはクローゼットを漁っていた。

其処から引きずり出してきたのは、キャスターで動く足付きのホワイトボードであった。

学習塾や企業でのミーティングなどで使うそれであるが、ケイネスはそのようなものをランサーに買い与えた覚えはなかった。

「……いや、もうこういうことをお前に聞くのは無粋というものだが、一体それ、何時どこで手に入れてきた？」

「たまたま見つけたりサイクルショップで。中々悪くないなあ、と」
ランサーの行動には慣れていたつもりではあったケイネスは、それでも胃痛を覚えた。

ところでケイネスやソラウにはあずかり知らぬことであるが、こういったタイプのホワイトボードは法人向けの販売であり、ネットがまだまだ未発達の所謂零年代以前に於いて、個人で手に入れることが難しい代物である。

大きさにもよるが、値段も二万から四万円と、手が出し辛い。

手に入れたことは、実際のところかなり幸運であるとは言える。

「でも、今から何を始めるの？」

ソラウはそう訊ねつつ、茶を啜る。

にいと、ランサーは口際を崩す。

「血みどろの戦の一環さね」

ソラウがその答えで察していないのを見て取って、ランサーは笑みを湛えて言いなおす。

「Council (カアスイル) of (ヲブ) war (オウ)」

はつきりとした言葉で。

“作戦会議”だと。

「伏竜鳳雛には遠く及ばず、単福殿にも勝ることは無いが——まあ、だからこそ何度も作戦を練るのって大事だよね、つー話でして」

ランサーはへらへらと答えながら、ホワイトボードにペンを走らせる。

第二十六話 情報整理

「てなわけで、まず各陣営について整理しましょうかね」

まず、ランサーが書いたのは、自分とケイネスとソラウの横顔であつた。

「はい、まず『ケイネスと愉快な仲間たち』陣営」

「そのネーミングはどうなのよ……でも、貴方、絵上手いわね」

命名には物申しつつ、ソラウはランサーの絵の手前を褒める。

アニメ調のデフォルメがされているが、三人の特徴をよく捉えた素直に上手いと言えるイラストであつた。

「まあ、色々やってたからね。こんくらいは軽い軽い」

褒められたことに気を良くしたのか、ランサーは鼻歌交じりに再びペンを走らせる。

黄金のサーヴァントの横顔と、顔面に『遠坂』と書かれた人型が描かれた。

「次にアーチャー陣営だ。マスターは遠坂家の当主の遠坂時臣だね。これに異論は？」

「無い。見た通りであると考えるべきだろう」

「その根拠は？」

「彼の人となりだ」

ケイネスが上げた理由にほうと、ランサーは短く声を漏らす。

「確かこの遠坂とかいうヤツはこの土地のセカンドオーナーで、君の Home ground（ホームギユランド）たる時計塔でも有名ななんだっけか」

さも興味がないと言った口調のランサーにケイネスは頷く。

「幾つか、時計塔にとって益となる研究を残しているから、人物評についてでも厭でも耳に入るのだ」

「そら、悪評か好評かどちらだい？」

「……好評の方だな。強い克己心と深い信念を持つ求道者、天才と称される学究、常に釈然とした本物の貴族。概ねこんな所か」

ランサーは顎に手を当てる。

その姿は、日本のある文士のタブロイドの姿に似ていた。

「要するに魔術師らしい魔術師というわけね」

「そういうことだ」

魔術師の戦いには誇りがある。

一見するに騙し合いも裏切りも、なんでも有りにも思える中にも、彼等の中に在つてのルールが存在する。

そして、魔術師に対し誇りを持つ者であればあるほどそれを順守する。

とすれば、その玉条に従う人物であろう遠坂時臣が取る手段は只一つ。

サーヴァント同士、及びそれを隠れ蓑とした魔術師同士の堂々たる決闘である。

それを踏まえた上で、ランサーは新たに人物を書き足す。 “Unk own” と顔に書かれた人型と、髑髏の仮面を付けた黒いローブの軍団——アサシンのサーヴァントとランサー達にとっては不確定なマスターである。

「……ところで、話は変わるがMaster（ムアスター）。さっきのアサシン、如何してあのタイミングでの襲撃だったと思ってる？」

唐突な問いに、

「襲撃？」

ケイネスより先に反応を示したのはソラウであった。

心配とも、憤りとも、なんとも言い難い感情が、顔に現れていた。

「直ぐに片づけたがな」

ケイネスは、殊に誇らしげな笑みと共に、ソラウに語り掛ける。

——そんなに褒められたいんか。

ランサーは我が主の、何処か子供染みた欲求を隠しもしない姿勢に呆れた。

だが、

「本当に大丈夫だったの？」

ソラウは気も漫ろといった次第で、ケイネスに詰め寄った。

「え？ いや……」

歯切れの悪いケイネスを誤魔化していると受け取ったのであろうか。

ソラウは、余計にケイネスに詰め寄るが、実際は単に好いた女性の顔が近づいた為に、極端な緊張状態に陥っただけである。

このままであれば、ケイネスの緊張とソラウの迫及が堂々巡りし、無限の螺旋を描く。

「ねえ、いちやいちやするなら後にしてよ。話進まないじゃんか」

ランサーはそれを理解し、敢えて、茶化したような言葉を選ぶ。

「おまつ……何を言ってる……」

「いちやいちやなんてしてないから！」

すると、ケイネスは動揺し、ソラウは電光石火で身を引いた。

短い交わりではあるがこの二人の扱い方をランサーはよく分かっている。

よく分かったうえで苦笑いが浮かぶ。

男女のあれこれに関して、ケイネスとソラウはその年齢以上に子供であると思つて。

ランサー、関羽雲長は生年がはつきりしておらず故に享年も分からないが、少なくとも五十代であつたと思われる。現界したこの姿に関しても、呂布と最後の戦いをした頃——大体三十代前半頃の肉体と人格である。

要するに、二人よりも年上なわけだが、それを踏まえてもこの二人はそういつた面に関して、ランサーの目には非常に幼く映る。

尤も、ランサーにとつてはそれが面白いわけであるが。

「まあ、それはそれとしてアサシンの襲撃ですよ、襲撃。どうしてあのタイミングだつたんだろうね？」

「あのタイミングでなくても良かったと、お前は考えているのか？」

ケイネスが聞き返すと、ランサーは大きく首肯した。

「相手を知り、機を謀り、見極めるや否や即座に完結させる。それが Professional (ポロフィッショナー) の暗殺ってモンだ。にも関わらずアイツらは」

「何処か場当たりのだつた？」

「Yes (ヤエス)。加えて言うなら、アイツらは焦っている」

何に、と当然の疑問がソラウから齎される。

「暗殺者(アサシン)つつつても、伊達や酔狂で主に仕えるわけじゃない。信念故にすることもあるんだとは思うけど、聖杯に呼ばれている以上は聖杯が欲しいって下心が前提なわけだ」

「まあ、そうだな」

今更言われるまでも無いと、ケイネスは鼻を鳴らす。

「仮に若し、報酬が得られないということがあったとしたら？」

ランサーはホワイトボード上のアーチャー陣営とアサシン陣営を線で繋げた。

「同盟関係か」

「というよりも、この場合は主従に近いかな？」

「成程、遠坂時臣に聖杯を与えるという約束が『従者』との間にあったならば……」

「アサシンに聖杯が回って来る可能性は低くなるわけだ」

そう結論が出た所で、ソラウはあつと、声を漏らした。

「どつたの？　なんか意見でも？」

「いえ、意見というほどでもないけれど……。遠坂時臣といえば、聖堂教会から時計塔に向向してきた神父が確か弟子についたのが遠坂時臣だったような気が……」

思わぬ所からの情報に、ランサーは幾許か面を食らう。

「そうだった」

と、ケイネスは次を継いだ。

「確か今から三年前だったか。今の今まで忘れていたがひよつとする……」

「アサシンのマスターがソイツであるってことはあるね」

ランサーはアサシンのマスターの絵に言峰綺礼と書き込んだ。

「まあ、でも教会の人間か。確か、この聖杯戦争の監督役つても教会の人間だろ？」

「その監督役すら、遠坂の言いなりであると、そう言いたいのか？」

「可能性としてね」

だとすればとんだ出来レースであると、ケイネスは歯噛みした。

「まあ、でも屹度、僕らに対する motion (ムーブション) については、遠坂からすれば予期せぬものには違いないだろうぜ?」

そう言っただけランサーはケイネスの肩を叩く。

「聖杯を得られないというのが、アサシンの突拍子もない行動の原因——と言ったが、実はそれが全てではないとも思ってる」

ここにきてランサーは持論を翻した。

訝し気な顔になるケイネスに、ランサーは柔らかな口調で語る。

「若しそれが原因の総てだとするならば、アサシンは最初から主を裏切っているだろうさ。でも今まで従い続けたのは、アーチャーの脱落及び遠坂の死亡という可能性が残っていたからだ」

「確かにそれならアサシンにもチャンスが巡って来るな」

「でも、実際はそれを待たずして行動に出た。なんでだと思おう?」

そう問われ、ケイネスは考え込む。

「マスターの中で聖杯戦争以上の関心事が出てきたか、或いはそれがどうでもよくなるような何かが起きたか……」

ケイネスはそう言いつつ、ランサーの顔色を見る。

さも満足気な笑みを浮かべていた。如何やら、ランサーもそう考えているようであった。

「もしそうだった場合には、言峰(仮)はどっか行けとうっちゃられるか、最悪の場合は責任を取って首を差し出すことになるかだね。アサシンが敗退していない以上はまだなんだろうけど」

アサシンの焦りはそこにあるのかもしれないと、ランサーは仮定した。

「まあ、でも当初の予定が完遂せぬまま終わってしまったというわけだね」

「当初の予定?」

「真名の精査。アーチャーのサーヴァントの無数の宝具を鑑みるに、相手の真名さえ割れてしまえばあとはもう楽勝って算段だったんだと思うよ」

少なくともバーサーカー、若しかしたらまだ見ぬキャスターのサー

ヴァントについても、遠坂時臣は恐らく真名を割り出せてはいないだろうとランサーは彼等をホワイトボードに書き込みながら答えた。

「で、次にセイバーとライダーだね」

そう言つて、セイバーとライダー、そしてそのマスターであるアイリスフィールとウェイバー・ベルベットを描いた。

だが、

「ちよ、不意打ち過ぎる！ 何よ、セイバーとウェイバーのデザイン！」

それを見るなり、まずソラウが噴き出した。

他の人物の造形と比べ、セイバーとウェイバーのデザインは極端に崩れていたのだ。

セイバーは殊に酷く、まるで粗悪な中国製フィギュア——邪神と形容しても良いような造形になってしまっていた。

「ふざけるのも大概にしておけよ、ランサー」

「いやいやいや！ 真剣だつて！」

ランサーは慌てて身の潔白を示す。

「では、これは一体どういうことだ？」

「この二人は書きにくいんだつて！ 知り合いに顔が似てるから！」

今一呑み込めない弁明であつた。

「“違い”を変に意識すると、そつちに引つ張られておかしくなるつて言いたいの？」

「そういうこと！ よくぞ言つてくれた、ソラウさん」

そこまで言われ、ケイネスは漸く半信半疑といった次第であつた。

「……だが、確かにセイバーと漢中王は似たような顔をしているから、その言い分も真実か」

〃桃園の誓い〃の光景をケイネスは思い出す。

彼が見た漢中王——詰り劉備玄德の姿は、セイバーと瓜二つと言つて差し支えないものであつた。

特に劉備はランサーの中でも特に根幹を成すような存在なのだろう。似ているからこそ、違いをはつきりとさせたいという感情が、無意識のうちに出てしまつてもおかしくはない。

「よくもまあ、そんなことを覚えてるもんだね」

「印象に残る顔立ちだからな。というか、ひよつとしてお前の王も……」

「いや、ニーサンは男だよ。つーより、もし女だったら阿斗生まれてないからね?」

「だが、アーサー王にはモードレッドがいるぞ?」

「あ、確かにそうだ……。え、何? あのアーサー、ひよつとして女の身でありながら股間にもエクスカリバーとかそういうヤツなん?」

今度聞いてみようぜ、とランサーはケイネスに提案した。

「……ところでウェイバーは誰に似ているんだ?」

下の話題が正直あまり好きではないケイネスは、ワザとらしく話を逸らした。

だが、気にかかる話ではあった。セイバーの顔の造形が崩れた理由が見知った顔と似通うことにあるならば、ウェイバーにもその理論が当て嵌まる。

「ん? 伏龍先生だよ」

だが、その答えはケイネスの糜爛（びらん）な神経をいともたやすく逆なでするようなものであった。

「あれが孔明だと!? 馬鹿も休み休み言え!」

「そこまで目くじら立てなくても良いじゃないか。似てるってだけなんだから」

伏龍——孔明とは、三国志に於いて、関羽雲長と同程度に特別視された存在である。

腹の探り合いと裏をかくことに関しては稀代の軍師であり、あらゆる学問に通じ時には気象すら操ったと言われる。

そんな人物と、落ち零れのウェイバーでは似ても似つかない。

「まあ、でも案外分かんよ。芋虫だって綺麗な蝶になるだろう?」

「小汚い蛾にしかならんこともある」

ケイネスは子供のようにそっぽを向いた。

ランサーの有能無能の如何に寄らず、聖遺物を盗まれたことが未だ尾を引いているらしい。

ウェイバーのことに触れるのは止そうとランサーが話を進めようとすると、

「ケイネス」

あることに気が付き、ケイネスに声を掛けた。

何だと声を掛けると、ランサーは無言で指差した。

ケイネスの隣にいるソラウを。

そして、いざ其方を向くと、

「ソラウ？」

ケイネスは固まった。

事態を理解するのに、かなりの時間を要することになってしまった。

だが、それでもどうにかして認識まで思考を到達させると、

「ソラウウウウツッ!」

ケイネスは絶叫した。

どうしてこうなってしまったのか。何が原因でこうなったのか。

ソラウの性的趣向というものを知ったケイネスにすらその真相は掴めなかった。

鼻から血を滴らせながら、恍惚の表情を浮かべて、ソラウは意識を失っていた。

第二十七話 方針決定

ゴホンと一度咳払いをし、

「迷惑をかけたわね」

と、謝したソラウは恥じらいからか、頬を赤らめていた。

「……君の趣味をとやかく言うつもりもないし、些細な過ちの一つや二つ許容は出来るが。それでも一つ言わせてくれ」

あまりにも迂遠な提起の後、

「一体君は何に興奮したというんだ？」

とソラウに訊ねた。

「だって、二人だけの世界を目の前で展開されたら誰でもこうなる……」

「誰でもではないと思うが」

そもそもケイネスとしては、ソラウが思い描く理想郷を形成した覚えもない。

「それに、サーヴァントの過去を夢で見るなんて、それっでもうセツ」
「言わせないぞ」

飛躍し過ぎな上に、聊か脳内が桃色ではないかと、ケイネスは頭を抱える。

——せめてそういう妄想は私とランサーではなく、私と君自身に於いてするべきなのだ。

……こんな風に言えたらどんなに良いだろうかと、ケイネスは思ったが諦めることにした。

「つーか、いつからそういう趣味なわけよ、ソラウさんは」

一息入れようと、ランサーは甜茶を淹れ、二人に振る舞う。

突っ込んだ質問をされたからだろうか。ソラウはまるで砂漠に落とした一滴の水が滲み込んでいくような勢いで、カップの中の茶を飲み干した。

「アオザキの工房でそういう本を見つけて、それで暇つぶしに読んで……」

「虜になってしまったわけね」

ケイネスは、大きく溜息を吐き、

「傷んだ赤色めえ……」

と呪詛の如き唸り声を上げる。

ケイネスとしてはソラウの趣味を諷めるつもりは毛頭ない。好きになつてしまったものは仕方なく、またそれによつてソラウがケイネスから離れることも、ケイネスのソラウに対する気持ちが変わることもないのだから。

だが、許してはいけないものはあるのだ。

ケイネスは聖杯戦争が終わり次第、封印指定の執行者をアオザキの工房に派遣することを心に誓つた。

濡れ衣、八つ当たり——客観的に見てもそうであり、またケイネス自身ですらそう思っている。

故に、ケイネスは知らない。

総ての元凶となつた衆道本が、手慰みでアオザキが作り出した礼装であるという事実を。

その秘められた魔力は、読者の感情を“腐の道”へと強く引き付けるといふものである。但しその効果はあまりに微弱であり、正しく機能する相手は魔道の“ま”の字すら知らないような一般人のみ。多量なりとも魔術師としての手解きを受けたのであれば十分にレジスト可能な代物である。

だが、不幸はソラウが、今まで強く感情が揺れ動くことがない、言うなれば“渴き”を持った人間であつたこと。

胸に点つた熱は彼女にとって初めて感じる酩酊であつた。

故にその甘い蜜を、ソラウは拒否することは出来なかつた。本から溢れ出る腐爛した魔力に従い、彼女は穢れ切つた奇跡を手にしたのだ。

——されど、これは誰にも知られない物語だ。

禁書の生みの親たるアオザキすら、そんな礼装を作り出したことすら忘れていた始末なのだから。

「……ランサー、この聖杯戦争、早急に片づけるぞ」

屹度、気持ちを新たに、闘志を燃やすケイネスすら永遠に知ること

はないだろう。

「なんか全く気が引き締まらないけど……ま、そのOrder（ワードアー）には答えようか」

ランサーは項の辺りをぽりぽりと書きながら、こなれた様な手つきでくるくるとペンを回す。

そして、ホワイトボードに彼等が最も危険視する魔術師の顔を描く。

衛宮切嗣である。

情報収集により、顔写真も手に入れている為、似顔の作成も容易であった。

「アインツベルンに雇われての参加らしいこの男だが……」

ここでランサーは、「衛宮切嗣」とセイバー、またはアイリスフィールとの間に破線を繋ぐ。

「破線の意味は？」

「仮定ってこと」

「ホームクルスのマスターとの繋がりは？」

「マスターではない傭兵としてのローリー（ルオール）ってこと」

主の問いに、従者というにはあまりにもフランクな態度でランサーは答える。

「バーサーカーやキャスターのマスターということはないの？」

ソラウが口を挟む。

「それはない」

ランサーより早く、ケイネスが答えた。

「あの戦場を衛宮切嗣が見守っていたという事実とバーサーカーが乱入したタイミングから言って、在り得ない筈だ。遠くからの射撃——と言われても私にはピンとこないが……だがそれでもああも混戦になつてしまつては的を絞り辛いことくらいは分かる」

「それにバーサーカーって燃費悪いし、体にくるから。戦わせながら、正確な射撃ってのは無理なんじゃない？」

ケイネスの意見、そしてランサーの補足説明にソラウは納得したようになしていないような判然としない表情をした。

「それにバーサーカーのマスターは……おつと、これは後だな」

そう言い淀んだ後に、ランサーは説明を続けた。

「で、キヤスターのマスターって線も薄い。もしそうなら、あの戦いの中にも駆り出していい筈だ」

「役立たずの二流サーヴァントを呼んでしまったということとは？」

「それも考えたけれど、アインツベルンが付いている以上、仮にキヤスターも呼ばれていた場合には一流の英霊が呼ばれていた筈だよ」

ソロモン、トリスメギストス、クラウディウス・プトレマイオスなどランサーは思いつく限りの例を挙げる。

それらの英霊を呼び出せる触媒を揃えることが容易であることも、ケイネスは肯定した。

ソラウは成程と、唸るばかりであった。

「で、残る可能性はあのL a d y (ルエードイー) がセイバーのマスターかそれとも衛宮切嗣がマスターかってハナシになるわけだ」

ランサーはどちらの可能性が有力か、ケイネスに質した。

「……薄汚い殺し屋を雇うほどに堕したとはいえ、それでもアインツベルン。ホムンクルスの製造に掛けて言えば一流だ。魔力供給のことを考えればこつちが本命だと私は思うが……」

いくら衛宮切嗣が殺し屋として驚異的だとはいえ、魔力供給量において魔力回路を中心に設計されたホムンクルスに勝てるとはケイネスには思えなかった。

基本的に表だって戦うのは魔術師ではなくサーヴァント。

で、あるならば、サーヴァントの性能はより高い方が良い筈なのだ。「確かにそうだね。それに『女』というホムンクルスの性別は見逃せない点だよ」

ケイネスはランサーの言葉の意図が分からず、

「どういうことだ？」

と訊ねた。

「女に弱い英雄ってのは少なからずいるってハナシ。幸いにしてこの聖杯戦争にはそういう英霊はいないわけだが、若しそういうサーヴァントがいた場合にどうよ？」

「マスター殺しという選択肢がなくなる……のか？」

「それどころか、あのマスターに恋心を抱くって場合があるね。なんせ、ボクの娘に似て美人だ」

最も僥倖に僥倖が重なった上での微々たる確率であるともランサーは語った。

「娘に似て……それは高評価なの？」

ソラウの問いにケイネスは、

「正直全く洒落になってないくらいの高評価だ」

と答えた。

関羽雲長が愛娘に掛けていた思いは絶大である。

何せ、それが原因で自身の死を、ひいては蜀の崩壊を招いているとすらいえるのだから。

具体的に言えば、呉王孫権の息子と自身の娘「銀屏」との間に持ちあがった縁談を劉備にも無断で断り、それが原因で呉王孫権の怒りを買ったのだ。

「それで、ランサー。セイバーのマスターはあのホムンクルスということの良いのか？」

「現状ではそっちの可能性が高いかと思う。でも、そう思わせることにも意義はあるから衛宮切嗣がマスターである可能性も捨ててはいけないね」

その上でランサーは方針を決めた。

まずセイバーのエクスカリバーが凍結している間に敵の本拠地を突き止めるかセイバー自体を補足する。

そして、直接戦闘を行い、セイバーを撃破、その後アイリスフィールを捕獲。

最後に尋問なり拷問なりでアイリスフィールに衛宮切嗣の居場所を吐かせる。

「まあ、これが一番良いパターンではあるけど、上手くいくとは思えない。拠点の発見は結構困難だろうし」

衛宮切嗣が魔術師なら誰でも気を払うべき神秘の秘匿を気に掛けるような人間ではないこと、無辜の民の命にすら気を払わない外道で

あることを前提とし、恐らく住宅街の只中にでも本拠地を置いているのだろう——ランサーは現時点でセイバーたちの拠点についてそのような推測をするに留めた。

「……となると、矢張りあのプランか」

「うん。てかそれが本命だね」

二人だけに分かる世界……その甘美なる刺激に立ち上る熱を、より正確に言えば鼻腔に溜まる血潮をソラウは如何にか抑えながら訊ねる。

「一体何の話？」

平静を装いながら。

言う間でもなくソラウの様子は全く尋常ではないのだが、それを指摘すると話の腰が折れる為、ランサーは敢えてそこは見なかったことにして、ホワイトボードに写真を張る。

男性であった。十代の半ばを過ぎているかそんな見た目の、取り立てて特徴のない、何処か頼りない雰囲気を漂わせた併し快活そうな青年の顔を。服装は特徴のない、日本の学校ではスタンダードな学生服であるから学生なのだろうと、ソラウは思った。

だが、それ以上の感想を持ってない。序でに言えば、魔道の臭いさえしない。

ある意味でこの場に一番相応しくない雰囲気であるとは言えた。

「これは？」

「間桐雁夜——御三家の一つ間桐家の長男でバーサーカーのマスターだと思われる人物だ」

十年前の写真だからこの姿だとは限らないがと、ケイネスは余談をした。

「貴方達、ひよつとしてこれをずっと調べてたの？」

「ちよつと違うね」

ランサーは明朗な笑みをソラウに振る舞う。

「ボクらがやっていたのは間桐雁夜の Backbone（ヴァコウボン）の調査だよ」

兼ねてより、間桐雁夜が聖杯戦争に参加していることは分かっていた

た。

衛宮切嗣が雇った情報屋を買収して得た情報の一つである。

だが、妙な話だった。曰く、聖杯戦争開始より十年前、間桐雁夜は生家を出奔しており、一年前急に戻って来て魔術師としての修業を開始したという。

ケイネスは万能の願望器と聞いて飛びついていたのだろうと結論し、ランサーもその時点ではそうなのだろうと考えていた。

併し、バーサーカーのサーヴァントの行動を見てランサーは考えを改めた。

旨味が薄い状況下での戦闘介入は、遠坂時臣に対するバーサーカーのマスターの私怨。

駄目で元々——事前に知っていたマスターのうち遠坂時臣に怨みを抱き得る人間であろう間桐雁夜を調べようと、ランサーはケイネスを連れだした。

パソコンを使い、間桐雁夜が通っていた学校の名簿や、勤めていた会社を洗った。

最初こそ難航を極めた調査であったが、途中からケイネスが忘却した記憶を再生する術式を使うことで直ぐに片付いた。

更に間桐雁夜の会社にも電話を使い可能な限りの情報を絞り出した。

「で、結果はどうだったの?」

逸る気持ちを抑えられず、ソラウは訊ねた。

「……間桐雁夜は多分、遠坂時臣を逆恨みしている。バーサーカーのマスターであることもほぼ間違いない。でも重要なのはここから。間桐雁夜が聖杯を求めた理由だ」

「そんなことまで分かったの?」

「推測だけだね」

ランサーは自分の仮説を証明する為に、いくつかの事実を並べる。

間桐雁夜がある女に恋心を抱いていたということ、その恋は実ることとはなく女は別の男——遠坂時臣と結ばれたということ。

間桐雁夜の出奔、遠坂家に生まれた二人の女兒、一族に伝わる魔術

刻印を受け継ぐ子供は一人きりという変えられない因習、そして間桐の家には雁夜以外に魔術の素養を持つ子供がおらず遠坂の次女を引き取ったという事実。

間桐雁夜が冬木を離れてからも女と娘と頻繁に会っていたという物証——彼女達と映った写真を会社の元同僚が目撃していた事実。

間桐雁夜が辞職した時期が一年前、次女の桜が養子に出された時期が一年前と重なっていること。

「つてことを考えると、間桐雁夜が聖杯を求める目的はこの次女に由来するんじゃないかと思うんだ」

ソラウはまるで納得していないような顔をしていた。

魔術刻印を継げない子供を別の家へ養子に出すことはごく当たり前であり、寧ろ凡俗の身に墮する運命からの救済といえる。

それなのに何故、それを阻むようなことをするのか。

ソラウには分からなかった。

尤も、ランサーにとつてしてみればソラウのこの反応は想定内だった。というのも、ケイネスにこの推察を話した時も同じような反応をしたからだ。

「お綺麗な生まれにしてみれば理解し難いことだろう。でも相手はそのお綺麗な環境を嫌った人間、そういうのは得てして凡人だよ」

「そういうもののなの？」

「小市民のボクが言うんだ。間違いない」

ソラウとケイネスは喉に引っ掛かるものを感じた。

確かにランサーの出自は王侯貴族所か、武人の家柄ですらない為、小市民という表現は間違いではない。

間違いではないが、何故か釈然としないものを覚える。

「……ゴホン。まあ、あれだ。そういう凡人つてのはね、命を賭してまで成し遂げるべきことなんてない」なんつー理論で生きているもんなんだよ。それでいけば、愛した女の娘に魔術の修行なんてさせんという発想は充分あり得るよ」

批判的な視線に耐え兼ねたのか、ランサーは咳払いをした。

「待て。確かお前、その裏にはもつとドス黒い下心みたいなモンが

あるんだろうけど」だとか、言っていないなかったか？」

「それは……まあでもそれで作戦の内容が変わるわけでもないし、わざわざ晒すこともないっつーか」

ソラウはそこで傍と気が付く。

「そうよ、結局、〃作戦〃って一体何のよ」

肝心の〃作戦内容〃にランサーが全く触れていないことに。

そう問われた瞬間、ランサーの顔から笑顔が消え、双眸に絶対零度の輝きが宿る。

「バーサーカー陣営との同盟……しかも此方が絶対的優位に立てる同盟を組む」

これまた、凛冽な声色でランサーは告げる。

続く具体的な内容は、ソラウにとっても、事前に輪郭を把握していたケイネスにとっても驚くべきものであった。

第二十八話 父師誤謬

聖杯戦争に於いて、普通敗退を装うということは難しい。

何故なら監督役はサーヴァントの現界如何を知らせる霊器盤を持つからだ。

マスターはサーヴァントを失った場合に、監督役に保護を申し出ることが出来る。だが、それが虚偽だった場合は、当然断られる。

これは、表向き監督役が聖杯戦争を円滑に動かす為に存在しているからだ。

だが、監督役と保護を求めるマスターが通じている場合にはその限りではない。

言峰綺礼が敗退を演じることが出来たのはそれが故であった。此度の聖杯戦争に於ける監督役は、言峰綺礼の父、言峰璃正。その手引きにより、綺礼は聖杯戦争に於いて不可侵の領域である、教会を隠れ蓑にしアサシンを使った諜報に集中することが出来た。

何より、そうすることを望んでいたのは父の璃正であった。

璃正は、第三次聖杯戦争の頃より、監督役の任を預かっていた神父である。本来公平を期した運営をしなければならぬ監督役であるが、彼は監督役である前に聖堂教会の神父——信仰者であった。

故に、万能の聖杯が叶える願いには気を揉んでいた。

その願い如何に因つては、普遍的な一大宗教の教義そのものが脅かされる可能性がある。

だが、時臣の願い——根源への到達とは世界の内側から外側を目指す願いでありそれによって内側に変化が齎されるものではない。

ならば、時臣への肩入れは必然である。

加えて遠坂は古くより日本の基督教普及に力添えをしてきた家系であり、璃正自身、時臣の祖父に当たる人物とは約束を交わしておりそれを果たす為という事実もあった。

——総て、もくろみ通りに行っていた。

当初の予定通りアサシンの敗退は目撃され、綺礼は諜報に着手した。

首尾は上々であった——上々であった筈だった。

『私の要件が何か。分かるか、綺礼』

にも拘らず、如何して深山町の遠坂邸から冬木教会に、魔導通信機によつて齎された声色には苛立ちが見え隠れしているのか。

「いえ、まるで」

だが、真鍮の朝顔に言葉を返す綺礼の表情には、時臣が抱く焦燥は届いてはいない。

——空だ。今の綺礼には何もない。故にいくら打てども、跳ね返ってくるものも何もないのだ。

どうしてこんなことになってしまったのか。

時臣から息子に向けられた叱責を傍で聞きながら、璃正は沈痛な面持ちとなつた。

それは海浜公園での戦闘が終わつてすぐのことであつた。何を思ったのか教会を出歩いた綺礼が、戻つてくると目から全く精気が失せていた。

何があつたのか、と璃正が訊ねると、

『何も……無かつたのです……』

綺礼は自分の中にあつた何もかもを失つたかのような、力無い声で答えた。

その様子は“何かがあつた”に違いない顔であつたが、同時に息子が嘘を吐いているようにも見えなかつたため、その時は不問とした。

だが、それを境に綺礼から目に見えて、聖杯戦争に対する興味というものがすっかりと失せてしまった。

まず帳場となつた教会の地下室に自身のサーヴァントであるアサシンが入つて来ても反応を示さない。

報告を聞いても上の空である。仮面越しにもはっきりと分かるアサシンの失望は伝わつて来た。

『……言峰さんから話は聞いた。昨夜、冬木教会の敷地を出たのだから？』

「そう、ですか」

『一体そこで何があつた？ 何が君をそこまでにした？』

時臣の執拗にも感ぜられる追及に、綺礼は重い口を開く。

「……キャスターのサーヴァントと、そのマスターをアサシンが補足したのですが」

息子の思わぬ言葉に璃正は目を見開いた。通信機も暫し沈黙した。

『それは、本当か？』

「はい、身元の確認も取れています」

思わぬ吉報に、時臣の声からは喜びが滲んでいた。

「マスターは“カオル”と呼ばれた十代の少女……恐らく何かの偶然でサーヴァントを召喚してしまった少女だと思われます。そして、そのサーヴァントとの会話の中で一度だけキャスターの真名を漏らししました。“サンジェルマン”と」

『不死とも言われた怪人……成程、魔術師の階梯に相応しい人物だ』

時臣の声は、畏敬によって震えていた。

錬金術師を学び不死の肉体を得たとも言われ、遠坂が研究する宝石魔術の分野に於いてもダイヤモンドの傷を完全に消すという——“シュバインオーグ”にも匹敵する業の持ち主であったとされる。

宝石魔術は、自然霊が宿った鉱物に魔力を溜め込み使用するがその際に宝石の質というものが重要となる。若し、宝石に傷——曇りや霞として認識される細かなものから亀裂として目に映る大きなものまで——がある場合、それが隙間となり蓄積した魔力や魔力を蓄積する要素となる自然霊の流出の原因となる。だが、元の形を完全に維持したまま、宝石についた傷を消すことは魔術に於いても科学に於いても不可能に近いと言われている。

故に、それを可能にするほどの魔術師と相見え、手合わせ出来る機会に巡り遭えたことは、時臣にとって非常に喜ばしい事であった。

『その為には、作戦を立て直さなければならぬが……』

敬意は表すが、敵であることに変わりはない。聖杯を手に入れることへの障害となるならば容赦をするつもりもない。

——全身全霊で事に当たる。

『だが、綺礼。君が怖気づいてしまっていては始まるものも始まらなくなってしまう』

綺礼の報告が、キャスターとそのマスターに関するものであったから、時臣はそこに当りをつけた。

「はい」

時臣からの叱責に力無く綺礼は返事をした。

おかしい——と、璃正は感じた。

「待ってくれ、時臣くん。君は本当にこれがその程度のことだに臆したとお思いか」

綺礼は代行者であったこともある神父である。代行者とは、一大宗教の暗部組織である『聖堂教会』の中でも異端——魔術師や死徒と呼ばれる吸血鬼など——と、最も熾烈な戦いを演じる戦闘集団である。

そして、自分よりも遥かに力強い死徒や魔術師をも決して恐れない綺礼の戦いぶりは素晴らしいものであると聖堂教会内では定評があった。

サーヴァントであろうと変わりはないと、璃正は確信している。仮令、それがサンジェルマンであろうと英雄王であろうとだ。

『では一体、何が原因だど?』

「それは……」

そこまでは、璃正にも凶りかねた為、目線を息子へと遣る。

自分のことなのだから、自分ではつきりと話すべきであると。

「キャスターの……マスターなのですが……」

躊躇いがちに綺礼は口を開いた。

「似ていたのです」

『似ていた? それは、誰に?』

「妻に」

慮外から遣って来た言葉に、二人はどう言ってやるべきか、反応に窮した。

今から三年ほど前、綺礼が妻を亡くしたということは父の璃正は当然のこと、その璃正から聞き及んでいた時臣も知る所であった。

愛していた妻と連れ添った時間はあまりにも短く、故に綺礼は打ちのめされた。その痛みから逃れるが故に——という事情もあり、綺礼

は聖杯戦争に臨んだ。

恐ろしいまでの情熱で以て、魔術の修業に励んだのも、何かに情熱を捧ぐことで己の傷を癒すことが出来るから——少なくとも、時臣と璃正はそのように認識していた。

だが、妻の似姿を目の当たりにした時、修行に因って沈痛していた悲しみが吹き出してしまったのだろう。

二人はそう確信した。

『……綺礼。君は悩んでいるのか。妻の面影を手に掛けられるか、否か』

その言葉に、平素あまり変わらない綺礼の表情が歪み、一切の言葉が失われた。

時臣と璃正は沈黙を肯定と受け取る。

『ならば、仕方ない。カオルという少女とは争わず、和解に持ち込むでしょう』

遠坂家の家訓である「優雅」に拘泥していた時臣とは思えぬ意外な提案であった。

『その前に一つ聞きたい。このカオルという少女は年端もいかぬ一般人。それに対しキャスターは、「第七光線の大師」とも称される魔術師だ。催眠に因って傀儡にされている可能性は？』

「……それは無いかと。キャスターとそのマスターは確かに会話をし、意思疎通を行っていました。聖杯を求める目的は不明ですが、自分の意思で行動しているのは間違いないようです」

時臣はフムと一呼吸置いてから黙考に入った。

『それが何だというのでしょうか。それに和解とは……』

『相手は年端もいかぬただの少女。どうせ聖杯戦争にも遊び半分、殺し合いという意味も考えずに参加しているのだろう。そういった人間が持つ願いなどどうせ大したものではないよ』

大方金でどうにかなる問題と時臣は決めつけた。

貴族である時臣は傲岸にも少女をそのように定義する。

『キャスターを遠ざけた上で少女とは会話の機会を持つ。叶え得る要求は全て呑んだ上で、少女にはキャスターの自害を命じて貰えば良

い』

そう結論した上で、時臣は、「カオル」が抱いている願いが愛する者の蘇生という聖杯以外では叶えられない可能性もないとし、

『君にはキャスターのマスターの身辺調査を頼もうか』

と綺礼に申し付ける。

『そうすれば、並み一通りの願いというのは、予想が付く筈だ』

確かにそうだが、それに果たして意味があるのか、綺礼は胡乱じた。だが、璃正には時臣の狙いが分かった。

妻の面影に惑わされているのならば、さっさと側をひん剥いてしまえば良い。詳しく調べさせれば、少女が亡き妻とは全く違う人間であるとしたと認識できる筈。

そうすれば、綺礼の頭は冷えると考えたのだ。

「綺礼、直ぐに事に当たりなさい」

璃正もこれには賛成し、綺礼の背中を押した。

「分かりました」

敢えてその命令を棄却する理由を言えなかった綺礼は、その命に従うことにした。

『では、頼む。纏まり次第、此方に繋いでくれ』

一応の念押しを最後に、綺礼は通信機に違を告げ、事に当たる準備に取り掛かった。

+

「何故、このような作戦を提示成された？」

息子がいなくなつたのを、確認すると、璃正は未だに遠坂家に繋がった儘の通信機に声を掛けた。

『気に障ることでも御座いましたか？』

時臣の問い掛けは、冗談交じりであった。

——生真面目かと思いきや、ユーモアラスな部分が見え隠れするところが似ている。

今は亡き友の痕跡をその息子から感じ、璃正は凶らずも笑みを零

し、

「いや、此方としては、息子の思いを汲んで下さり、感謝痛み入る次第ですが、この方策事態、『優雅』であることはかけ離れているのでは？」

業とらしく嫌味を交えて訊ねた。

『『優雅』でないというならば、弟子に重荷を背負させたまま戦いに駆り立てる師となってしまう方が余程、『優雅』ではありませんから』

決して外面だけを取り繕った言葉ではなかった。

魔術師という選ばれた者であることに對する責任を全うせんとする姿勢に偽りは無い。

『……ただ、出来る事ならばかのサンジェルマン伯爵とは堂々たる戦いをしてほしいものだ』

綺礼がいた時には見せなかつた本心を吐露した。

魔術師にとつてしてみれば、偉大な先達との手合わせは光榮以外の何物でもない。いくら、マスターとしては論外の者に見出された、サーヴァントという英霊サンジェルマン本物でなかつたとしても。

屹度、それは遠坂の魔道の歴史に刻まれる栄光となるだろうから。

「ご安心下さい。あれが妻を深く愛していたことは確かでしょうが、いつまでも悲しみに沈むほど弱くはありません」

綺礼は立ち直り、キャスターのマスターとも戦う決心をするだろう。

璃正は気休めなどではなく、本心からそう思い、時臣に希望を持つように伝える。

『私もそれは分かっています』

時臣の目に映る綺礼とは貪欲なまでの求道者そのものだ。

魔術の素養こそ極々平凡であるが、修行に對する姿勢は真摯であり、また弛まぬ研鑽を積むということに関しては——敢えて妙な表現を使えば天才的であった。

此度訪れた試練に足しても十分耐えうる信念は持ち合わせていると、時臣は絶大な信頼を寄せてもいる。

父の璃正が息子に対して抱いている評価もそのようなものだ。故に、気が付かない。

綺礼の落胆の真相が何処にあるのか。

妻の面影に感じた、決して哀愁ではない別の感情の正体も。

それに気が付くことが出来るのは、信念があるか否かという観点でしか人間を量れない遠坂時臣と言峰璃正では断じてない。

量るとするならば、あらゆる角度から人間を暴く、悪辣な双眸。

「アーチャー？」

それは、例えば、綺礼自身の目の前にいる黄金の王。

一体何を思つての行動だろうか。

綺礼が教会内に宛がわれた自室に戻ると、それはいた。

この世は全て、我のもの。ならば、これも我のもの。

理屈になつていない理屈を傲岸に押し付けるかの如く、ギルガメツシユは綺礼の私物である長椅子に寝転がり、ワインの入ったグラスを傾けていた。

第二十九話 酩酊道化

「格別というほどではないが、中々の逸品が揃っている……数は少ないがな」

「……何のつもりだ」

テーブルにずらりと並べられた酒の数々に対してアーチャーが述べた讃辞を綺礼は突っ撥ねた。

無断の来客にいくらコレクションを褒められた所で、**“無礼”**以外の感想を抱くことが出来ようか。

この部屋にある酒の数々は綺礼が購入した物である。

尤も、酒仙というわけではなく、また左党というわけでもない。寧ろ、そうなれば、そうなることこそ綺礼の目的であるといえた。

己を痛めつけるような修行を繰り返す綺礼を、人は聖職者の鑑と持て囃したが、真実はそうではない。情熱的と言われる綺礼の内には実際には何も無かった。

そもそも人が厳しい鍛錬に臨むのは**“こうしたい”**だとか**“こうありたい”**といった目的があるからだ。だが、綺礼の場合は逆であった。目的を求める為に、道を進んできた。

否、実のところ綺礼は目的以前に自分が何者なのかが分からないという致命的な問題を抱えている。

ある日、ふと気が付いた時からだ。自分の感じ方が、周囲の人々と乖離していることに気が付いたのは。

美しいと言われた絵画を美しいと思えない。

家族の親愛が暖かいと言われても実感出来ない。

父が歩み、また自分が歩んでいる信仰の道すら真に前向きな姿勢にはなりきれないでいた。

自分が何者か解りたいから目的を求め、目的を求める為に鍛錬に明け暮れる。本末転倒な道程の積み重ねこそが**言峰綺礼**である。

件のコレクションにしろその一端、神父の身でありながら魔術という異端を修めたのも星の数ほどある徒勞の一つに過ぎない。

「アーチャー、これが貴様の逸樂の一環だと言うなら今すぐここを立

ち去って貰おうか。私は忙しい」

併し乍ら、そのような綺礼であっても、勝手極まる来客の接待にはどう考えても価値はないと判断し退室を命じる。

仕事をするに当たって、酔人に騒がれては集中するものも集中できない。問題はそれ以外にも存在する。

アーチャーの服装だ。綺礼は時臣から、この自儘なサーヴァントが実体化し遊び歩いていると聞き及んでいた。勿論、黄金の鎧を纏ったまま現代社会を謳歌するなどという馬鹿な行動に流石のアーチャーも移る筈もなく、現代風の装いをしているわけであるが、そのチョイスは綺礼の目から見ても疑問が残るものであった。

フアーをあしらった白のレザージャケットはどういうわけか丈が胸の位置までしかなく、その下に着た異様なまでの密着度を見せつける黒いシャツも大きく腹部を露出させるデザインである。下半身に目を遣ればそこにあるのはやたらと股間が強調される黒いエナメルのハーフパンツ。更に、ロングブーツまで合わせられてはその惨状たるや凄まじいものがある。

要するに、こういつた奇天烈な服装の人物が近くにいるということだが、精神衛生上あまり宜しくないと感じたわけである。

「ほごげよ、雑種。貴様には用があったからこうして出向いて来てやったのだ。有難く思えよ」

だが、アーチャーは断固として退出を拒否した。

然も、自分の方に用事があるのにも関わらず、まるで下手に出る気がないらしい。

綺礼は怒りを通り越して、呆れと共に嘆息する。

「ならば早く要件を言え」

「ああ、その前に一つ。此処の酒、幾つか持っていくぞ」
「何？」

聞き間違いか、或いは冗談か。

綺礼は疑ったが、その是非を質すよりも先にアーチャーは酒瓶を次々と歪んだ次元の中へとしまい始める。

王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）——自身の宝具たる宝物庫の

中へ。

綺礼は言葉を失った。

「天上の美酒などと大それたものではないが——遊戯に対する駄賃程度にはなろう。道化への土産に丁度良い」

「その道化とやらが何者かは知らないが——酒くらい自分で用意したらどうだ？」

綺礼の非難に、アーチャーは当惑したような表情を浮かべる。

「我（オレ）が欲しいと言い、そうして我の手に収まった。これを用意と言わずなんと言う？」

極一般的に言えばこれを窃盗というが、このアーチャーは恐らくそういう感覚ではないのだろう。

彼にしてみれば、これは「徴税」だとか「搾取」だとかそういう言葉になるに違いない。

全世界を我（オレ）であるというなんら根拠にならない根拠を元に自分の物と認識している。

それはこの男が英雄王ギルガメッシュであるが故に。

一般常識で諭すという手段は元よりアーチャーには通じない。言葉が通じない以上、綺礼は酒瓶の返却を諦めるより他なかった。

尤も、惜しい物でもない。深淵を明かり無く彷徨うような虚しい探求の痕跡に、愛着などないのだから。

「所で貴様の要求にも、その道化というのは関わっているのか？」

それ以上に、綺礼にはギルガメッシュが齎した道化の方に興味を惹かれた。

それは、袋小路に至った自己の探求に何か変革があるかと思つたからか、或いは本人としてはあまり乗り気になれない任を師から預かつた故の鬱屈からか。

——否、若しくは落胆の本当の原因になつたある裏切りからか。

綺礼はただ頼まれた、いち早く令呪を得ていたというだけで聖杯戦争に臨んだわけではない。

彼は己の内に己を見出せないから、他に己を見出そうとした。遠坂時臣が事前に危険人物と断じた人物に興味があつたからだ。

衛宮切嗣——魔術師殺しとして、聖堂教会内でも魔術協会内でも悪名高い人物。事前に遠坂が魔術協会のコネクションを利用して手に入れたその遍歴に綺礼は惹かれていた。

金の為ならなんでもやると残酷で信念のない殺し屋という時臣の評価とは乖離するその行動に綺礼は興味を抱いた。

魔術師との闘争や、各地の紛争地帯への介入に際するスパンの短さに、綺礼は何処か破滅的な強迫観念を感じ、衛宮切嗣という人物が自分と同類である可能性を見出した。

空（から）の心を満たすように苛烈なまでの試練を課し、「自分が何かを見出したのではあるまいかと。

だが、その期待は裏切られた。

冬木新都で爆破騒ぎがあったあの日、運よく邂逅した衛宮切嗣。綺礼は嬉々として問いただした。

だが、衛宮切嗣は綺礼が期待するような人物ではなかった。

虚無だと思われた衛宮切嗣には願いがあった。その内容こそ分かっていなかったが願いはあった。

それは、自分と同類ではないという証左。綺礼は落胆した。期待した分だけその衝撃は大きく、ふさぎ込むだけの理由となった。

故に、であろうか。綺礼は屹度、アーチャーが見出した道化という人物に縋ったのだ。

「その通りだ」

包み隠さず答える王に、綺礼は更に問う。

「……その道化というのは何者だ。この聖杯戦争に関係があるのか」「あるとも。何せ、最後に残った魔術師の階梯に奴は居座っているのだからな」

その言葉で綺礼は得心する。

「サンジェルマン伯爵か。伝承に因れば、彼は古代バビロニアの景色を実際に見たかの如く語ったというが……そうか、貴様とも顔を合わせていたか」

だが、綺礼の回答を、アーチャーは笑い飛ばした。

教会の一室という狭い空間に乱反射する膨大な笑声だった。

「ああ、その何とやらという魔術師を戯れに語っているのだったな。如何やら、周りを欺いた結果、自分をも欺いてしまっているようだが」
聞き捨てならない言葉であった。

このアーチャーは今、何と言ったのか。キャスターの真名がサンジェルマンではないと語らなかつたか。

「貴様は、キャスターの真名を知っているのか？」

「知っているとも。他ならぬ我だけの道化だ」

親愛の情にも似た熱の籠った言葉の後に、アーチャーはその名を告げた。

「な……に……」

その名は、綺礼にとって衝撃的な名であった。

「なんだ、綺礼。貴様も知っているのか」

アーチャーは意外そうに口を半開いたが、綺礼こそ知っていて当然の名であった。

ただアーチャーが告げたその名が正しく真名なのかは不明だ。何故なら、その英霊——反英霊と言った方が良いかもしれない存在を示す名は幾通りにも及ぶ。

だが、不自然な点もある。何故それが古代ウルクにいるのか。その存在が成り立つ前提条件すら整っていない時代である。

ギルガメッシュと知己となる人物としてはサンジェルマン以上に在り得ない。

「……それで私はかの罪人に何をすればいい」

だのに、綺礼が信じることにしたのは、アーチャーの言葉は壮言でありこそすれ彼の名を呟いた時の顔つきが真剣そのものであつたらなのか。

それとも、自分の性が、彼の信仰する教義に於いては邪悪ともされる存在に惹かれるように出来ているのか。

兎も角彼は、楽園の蛇にも似た甘言に乗ることにした。

蛇を厭う王は、けれどいやらしく釣り上げた笑みは蛇に似ていた。

「罪人ではなく道化だが……まあ、良い。アサシンをヤツに差し出せ」
「差し出せ……というのは？」

「わざわざ言わせるか？」

意地の悪い笑みに込められたアーチャーの意図を、綺礼は察した。アサシンをキャスターに向けて総動員させ玉砕させろと言うのだ。「それでは私がサーヴァントを失うことになる。そうするメリットがない。それにアサシンを使い潰すか否かの判断は時臣師に委ねられている」

「フン、よく言う。あのような面白味のない男に奉仕することに価値など見出していない癖に」

見抜かれている、何もかも。

ただ無秩序なようにも思われるアーチャーは、その実目ざとい。

綺礼はそれを理解する。

更にアーチャーは追及する。

「それとも、貴様が聖杯に懸ける願いとやらが惜しいか」

総てを分かった上でこの男は言っている。

誤魔化しは通じない。故に綺礼は包み隠さず話す。

「私に、願いやらない。導師を欺き、恙なくアサシンも動員出来よう。だが、貴様が熱を注ぐ場所に何があるという、ギルガメッシュ」

「愉悦」

ギルガメッシュは断ずる。

「当然だ。道化とはその在り方だけで人を愉悦へと導く者。ならば、叩いた所で出てくるものと言えればそれしかあるまい」

その回答は、マスターである遠坂時臣を何よりも馬鹿にしたものであった。

一次的な享樂など成し遂げるべき大義を持つ人物にとっては道に転がった小石と同義だ。

価値は無く、また時折足を掬う邪魔でしかない。

そんなものの為に台無しになる優雅なる遠坂家の満願成就の春を思い——綺礼は得も言われぬ胸の高鳴りを覚えた。

「愉悦……そんなことで得られるものなのか？」

「何だ、貴様は。愉悦も分からないか」

綺礼は押し黙った。

自分が分からない以上、自分が何を求めた時に心が動くかすら分からない。それは、愉悦も同様であった。

——ただ、手立てだけはあるのだが。それは妻との暮らしという過去のうちに。

妻となつた女は生まれて間もなく免疫系と全身の色素に異常を持ち、病を抱え込みやすくその為に出会つたその時点で余命幾許もない。

綺礼が他者とずれを持つていることを理解してくれた女であつた。愛し、また綺礼もそれに答え子供も設けた。

楽しい暮らしであつた。だが、綺礼は女を愛していなかつた。

——家庭の楽しさというのは両者の中に愛が成立することに因る。これはどう考えても異常であつた。

併し、その異常を認識できているのに、それが何かまでは分からない。

愛に正しく愛を返せず、またここまで自分が分からないことへの絶望。このような胡乱な存在は生まれてはならなかつたと認識するのはある意味当然であつた。

それでも今日まで生きているのは——綺礼が自ら命を絶つより先に女が命を絶つたから。

その死に感じるものが悲しみではなく、正体不明の悔恨であつたら。

命を懸けられたのだ。それならば、報いるのが当然だ。その報いは即ち——言峰綺礼という形を解する以外に他は無い。

それが正しいのかは分からないが、綺礼はそう思っている。

「アサシンを捧げる事の意味は？」

その為にまずは己の愉悦の形から。

人間を愉悦に導くという道化とやらに、果たして自分の愉悦もあるのかは甚だ疑問ではあつたが。

「酔い覚ました」

「酔い覚まし？」

「……今のアレはサン何某と言う名の酩酊で以て、己の道化という形

すら思い出せずにいる。髪を引つ掴み、頬を叩くくらいの衝撃は欲しいだろう」

ギルガメツシユは深い嘆息を漏らす。

「全く困った奴よ。持て余した退屈を漸く凌げると思いきやこのように、王を煩わせるとは」

実際動くことになるのは、綺礼であるというのに、アーチャーはしたり顔であった。

「……自分で出向けば良いのではないのか？」

「ほざけよ、雑種。己も分からぬ愚物に我が動かされて良い筈がなからう」

我儘にも程があると思っただが綺礼はその言葉を胸の内に呑み込んだ。

それに最早、アサシンなど惜しくもない。

「了解した。だが、アサシンを動員出来るだけの舞台を整えるには少し時間が掛る」

「出来るだけ速く頼むぞ」

グラスに少しばかり残っていた中身を飲み干すとアーチャーはソファから立ち上がった。

その洋装に関して言えば混沌というより他ないが、動く度に燦然とした輝きが放たれるような印象を与えるこの英霊は疑いようもなく原初の王である。

彼が部屋から出ていくと、綺礼は途端に部屋の照明が切れたような錯覚を覚えた。

さて、風変わりな来訪者の要求を満たす為に、どう時臣師を丸め込んだものか。そう考えようとするも、綺礼の思考は別の所に及んだ。

それは、街を出歩くだけでも問題になりかねないあの服装のことであった。

幕間三 神の微笑

昼の雲一つない空が黄昏に落ちたのは、世界から救世主が失われることが決定したその瞬間だった。

蒼穹が、息を呑む間もなく弁柄色に塗り替わる。

世界は嘆いている。そして、祝福もしている。

英雄——それも恐らく最も世界に名を知られることになる救世主の終わりであり、始まりを。

茨で編んだ冠を被った永遠の王を、十字架に磔、ピラトの兵士達が連れていく。向かう場所は、白い荒土の丘——髑髏に似た場所。英雄はそこで処刑されるのだ。そこに続くダマスカスの街道の路傍では国中の人々が悪罵と嘲弄とで乱痴気騒ぎが起こっていた。

罪人を伴う兵士達の塊が、愈々されこうべの丘に近付くと、祭りめいた躁狂は最高潮を迎えた。

「おい、邪魔だ餓鬼！　そこをどかんか！」

併し、兵士の一人の怒声が、そこに水を差した。

何者かが、死刑囚の一行の進路に割って入ったのだ。

併し、この光景を見ている少女には、その人物の姿は見えなかった。餓鬼と言うからには子供なのだろうという当りこそ付いたが、彼等の邪魔になるであろう道の真ん中にはそれらしき人物は見当たらない。

そこで少女は、傍と夢の視点の位置に思い至った。

然う——これはその少年が見ている光景なのだ。

「やあ、メルキゼデク。首尾はどうだい？」

兵士が怒鳴るのを無視し、兵士達が腰に帯びた剣に手を掛けたのを気にも留めず、少年は兵士集団に近寄り、“メルキゼデク”に声を掛ける。

すると、兵士の集団を掻き分け、

「よお、靴屋。嫌味でも言いに来たかよ。見ての通りだ。むっちゃ死にそう！」

“メルキゼデク”が顔を見せた。

無造作に結った空夜の月にも似た銀の髪、日照りの強い土地に在つて不自然な白雪のような肌、波紋のような光彩を持つ鳩の血液のような色の紅い瞳と異様な要素を含みながらも——人の良さそうな優しい面差しをしていた。

痣や生傷で顔が変形しているにも関わらず、それだけはよく分かる。

憎まれ口を叩きながら、冗談めかしく「死にそう」と語る「メルキゼデク」の笑顔は快活で、見ているだけで希望や勇気が湧いてきそうなほどだった。

「貴様等ア！ いい加減にしろ！ 自分の立場を考えろ！ 時と場合を考えろ！」

二人が和やかな雰囲気醸し出そうとしていることに余程腹が立ったのか。

最初に少年を怒鳴った兵士が、手に持った鞭を思い切り振り被つた。

併し、

「おい、雑兵」

「メルキゼデク」が一度だけ睨み付けると、その手は止まった。

特別何かをしたというわけではない。異能や魔術といった神秘はまるで関係ない。

王気（オーラ）だ。ただ、圧倒的なまでの存在感。

その為に竦んで動けなくなった。

「今、一体どつちを打とうとした？」

「ヒィー！」

喉が干上がり、声が出せない。

それどころか息の根までもが止まりかける。

周りの兵士達も、一歩たりとも動くことが出来なくなった。

「俺を打とうってなら構わねえ。嗚呼、俺としちゃ出来る限り救ってきたつもりだが、テメエらにとつちやそうでなかったんだらうよ。甘んじて受けてやる」

大衆の面前だというのにも関わらず、兵士は泣きはらし、失禁した。

生まれて初めて心の底から震えあがった。また、こんなものに相対する運命があるなら自分はこの世界に生まれ落ちるべきでは無かったとさえ思った。

母の血、父の精も恨めしい。

「だがな、俺の友達を傷つけてみる。〃手前の敵が右の頬を殴ったなら、左の頬を差し出せ〃」ってハナシは撤回させて貰うからな」

その言葉の意味は、兵士にも分かった。

『目には目、歯には歯』という教え通りにするということである。

だが、分からないのは〃ユダヤ人の王〃にとつて、この少年がどれほどの価値を持つかということ。

「ハヒィ……わ、わひやりまひた」

兵士は耐えた息と、全身の筋肉が弛緩した為に上手く回らなくなった呂律で、少年に武器を振るわないことを誓う。

すると、〃メルキゼデク〃はにいと口角を吊り上げた。

「ああ、分かれば良いんだ、分かれば。テメエもその濁った目ン玉、もつと真つ白にされたかねえだろう？」

そんなことをするつもりだったのか、また如何してこの男は自分が盲（めくら）になりかかっていることを知っているのかと、兵士は恐怖を一層に高める。

そして、この男は奇跡を以て盲目の男を癒したとされており、若しかしたらその逆も出来るのではないかと疑い、最早足腰からの力すら失せた。

兵士達は、腰が抜けた兵士に駆け寄り、肩を貸す。

そんな彼等に、〃王〃は微笑みかける。

「テメエら良いヤツだな。仲間が傷ついたらそんな風になれる」

兵士達は目を見開いた。

それは思ってもみない言葉であった。この〃ユダヤ人の王〃への罪が決まった時、兵士達は総督に命ぜられるが儘に、鞭や棒で散々に打ち付けた。

恨まれても当然のことをしたのだ。故に、この男には兵士達をわざわざ持ち上げる義理もそれによって発生する得もない。

だのに、如何して救世主と呼ばれたこの男は、そう言うのか――。それは、心からそう思っているからに他ない。

「だからさ、友達ってヤツの暖かさも、大切さも、分かる筈だよな？」
少しだけ、友と話す時間をくれ。

言葉の裏側にある、救世主のほんのささやかな訴えに気が付くと、兵士達と物見をしていた街の人々は突然、落涙した。

この男が受けた仕打ちを知ってそれでなお、最後の願いがあまりにも小さすぎたからなのか、それとも本物の救世主が世界から失われたことを本能的に感じてなのか。

それは分からない。或いは両方かもしれない。

「……心ゆくまで話すと良い。貴方の友と」

鞭を振るおうとした兵士とは別の兵士が、涙と鼻水とで汚れた顔を皺だらけにして答えた。

「ありがとな」

“メルキゼデク”は首を垂れる代わりに微笑みを返し、今度は腰が抜けた兵士の前に自ら跪いた。

「……なんだ」

「いや、さつきは脅して悪かったな。ムカついたとはいえ、流石に遣り過ぎた。ごめん」

その言葉に、目が濁りかけた兵士は、目の次は耳までおかしくなったのかと自分を疑う。

死にゆく者の言葉ではない。況して、自分に対して狼藉を働いた者に対して掛ける言葉でもない。

一体この男はなんなのだと、よく見えない目で男の顔を見つめる。

盲の兵士は、男の謝罪を受け入れ、また自分も友を傷つけようとしたことを謝るべきかと考えたが、恥をかかされた手前もあり中々言い出せず、押し黙った。

「……何も言わなくて良い。何が言いたいかはなんとなく分かるから」

男が抱く、極ありがちな対面を取り繕いたいという詰まらないプライドを、それでも救世主は是とした。

「迷惑かけた序でによ、テメエの目、治してやる」

兵士は今度こそ、自分が耳の病気にもなったと思い込んだ。

然も、自分の目の曇りが物理的なものだけだと仮定するのであれば、自分も散々に打ちのめした『ダビデの子』は、本気で何も知らない兵士の身に起こった不幸に憤り、また何とかしてやりたいと思っている。

不思議と、頬が湿るのを兵士は感じているだろう。少年の目を通じてこの光景を見ている少女はそう思った。

「俺が死んだらよ、俺の体を槍で突くと良い。そうすりゃ、テメエの目は一発で治らあ」

そう言い残し、『メルキゼデク』は立ち上がり、友との最期の会話に臨んだ。

「ンで、テメエ何しに来たよ、靴屋。さては、この冠が欲しくなったか？」

「ごめん、冗談に付き合ってやれる気分じゃないんだ」

「ケツ、辛気臭い話かよ。今から死に行くつーのに余計気落ちさせる気かね、テメエは」

『メルキゼデク』はそう言いつつ、地面に血液交じりの痰を吐き出す。

極めて悪漢めいた振る舞いだが、平素のこの男はいつもそうなのだろう。別段、少年は気に留めるでもなく本題を切り出す。

「君に苦言を呈しに来た——というか、はつきり言う止めに来た」

その言葉に、『メルキゼデク』は不快そうに眉を吊り上げた。

「……テメエ、何が言いたい？」

「こんな方法じゃ、人間は救い切れない」

少年ははつきりと、『メルキゼデク』の目的を知った上で断じた。

「……人間が滅ぼす悪を——原罪を、君はたった一人で引き受けるつもりだろう？」

「テメエ、何でもお見通しかよ」

はあと、『メルキゼデク』はうんざりと言わんばかりの顔で深い嘆息をする。

「じゃあ、分かってんならよ。止めんな」

「止めるよ！ 友達が犬死するって言ってるんだ！ 止めないわけないだろ！」

有らん限り、少年は叫んだ。

天穹が打ち震えるほど、強く、強く、強く、想いを乗せて。

「犬死に……だと？」

「だってそうじゃないか！ 分かっているだろ！ たった一人君が戦った所で、原罪は人間を追いかけて来て殺す！ 殺し尽す！ 余すことなく！ 総てだ！ 君がやろうとしているのは、それを近い未来から遠い未来に先延ばしにするだけのことだろ！」

少年の目には、滅びが見えている。

過去から遣って来る “滅び”、現在どこかで起こっている “滅び”、そして未来に起こるであろう “滅び”。

そして、その眼は近い内に人間を滅ぼす “原罪” の到来を予見していた。

また、それを “メルキゼデク” も見ていた。

少女に流れ込んで来る少年の記憶が、 “メルキゼデク” という男の彼が知り得るあらゆる事実を伝える。

そしてその事実の一つが “プロヴィデンス” であった。あらゆる事象、あらゆる存在、あらゆる時代、あらゆる次元を観測する全能ともいえる目はそう呼ばれ、そして彼を慕う人々に讃えられていた。

屹度、少年以上にこれから起こる “滅び” を、 “メルキゼデク” は理解していたことだろうと少女は思った。

「……それが何になるってんだよ。そんなことの為にさ、人間を——君も僕も大好きな人間を辞めることないだろ」

少女は頬に、冷たさを覚えた。

目線が地面に映った。

ポツリ、ポツリと雨粒が数滴。否、雨粒ではなく、少年は泣いているようだった。

少年は人間を愛している。元々、非人間的な生き方を強いられる生まれでありながら、その瞳で滅びゆく人間をたくさん見て来て、それ

で人間が好きになったのだ。

滅びの中にあつて尚も強い人間を。滅びに打ちひしがれ当然弱い人間を。

それは、少年とは生まれた場所を違いながらも、けれど生まれた時から目と目が合つて共に生きていた「メルキゼデク」も同じ筈だった。

好きになつたから、少年も「メルキゼデク」も人間になりたいたと思つた。そして、やっと人間になれたと確信を得始めた所だったのだ。

ある日から、「メルキゼデク」はおかしなことを始めた。非人間的な奇跡を振りまき、人間を救い始めたのだ。

病人を癒し、孤独を癒し、化け物と呼ばれ墓場に繋がれた人の魂を癒し——片田舎の少女を竜とも戦える英雄へと導きさえした。

そして、その極めつけに、今度は人間を辞めようと言うのである。「考え直せ。どうせ、最後には滅びが待ってる。ならいつそ僕等は——」

「ウルセエ、靴屋！」

友の訴えを、「メルキゼデク」は一蹴した。

そして、ギリギリまで顔を寄せ、友と同じく叫ぶ。

「未来がどうかとか、どうせ滅ぶとかそんな関係ねえ！ コイツらは

「今」生きたいって思つてんだよ！ だったら助けてやりてえだろ！ まだ手が届くんぞ！ 拳はまだ上がるんだぞ！ ならやるしかねえだろ！ 俺が行つて、闘（や）つてくるつきやねえだろ！」

「メルキゼデク」の瞳は、燃えていた。

信念と、人間愛に。

少年はその思いに震え、遂に言葉を失った。

長い、沈黙が流れた。

「……そういうわけだ。俺は行くからお前は待ってろ」

そう告げた声に何処か辛さが滲んでいたのは、自分の選択が友を傷つけると自覚しているからなのか。

「話は終わりだ！ 連れてけ！」

ぞんざいに言い着ける “メルキゼデク” に困惑しながらも、兵士達は彼を取り囲んだ。

「……×、お前と会えて本当に良かった」

その言葉が本当の別れとなった。

そして、世界は救世主を死へと連れていく。それに伴い、街から人も消え、皆、されこうべの場所に向かっていく。

そして、人の気配が一切失せた寂しい街だけが残った。

「馬鹿野郎……ここで待ってるなんて、寂しいこと言うなよ」

少年は独り言ち、空を見上げた。

幾許かの黄昏を残していた空は愈々、夜のような暗さになった。

まだ昼なのに。

それは、まるで一人の人間の死を惜しむようであり、一人の神の誕生を歡ぶようで、少年はなんだかとても厭な気分になる。

そして、多分その原因は勝手なことばかりを言い残した友人の所為でもある。

「僕も、一緒に行くよ」

少年は決意する。

——人間になりたいと、思っている。

——人間になれたと、喜んで。

——人間として、彼と生きたくて。

——人間を、救うと言った彼の言葉に。

——人間だから、動かされた。

願いは、変わった。一人の友の所為で。一人の友のお蔭で。

未練はあるが、それ以上にこの思いを叶えたい。

故に少年は、口ずさんだ。

「ポエタア、コテアパツクアクオチ」

生まれ堕ち、そして嫌った非人間の家の非人間に受け継がれる、非人間の呪文を。

少年は世界と契約し、永劫人間を守る為に “人間を辞める” のである。

その時だった。

「そこまでする価値は分らんが、その決断、悪くはない」

——何処かで、傲慢な王が少年を讃えた。

「その道はとても辛い道だよ？」

——何処かで花の魔術師が、嬉しそうに彼に忠告した。

「それもまた良哉」

——何もかもをそのように受け取る碩学が、いつものように肯定した。

「まあ、頑張れ」

——他人事のように、畜生腹から生まれた陰陽師が激励した。

「別に、これといって特に言うこともないかな？」

——最後に聞こえたのは、魔術の王の何処までも無関心な言葉だった。

こうして、この日、世界にとって最も都合の良い掃除屋が誕生した。

第三十話 人間失格

頭に掛る重さと、目を開けているのに一寸先も見えない状況に対する疑問から、薫は自分が読みかけの『グイン・サーガー』をアイマスク代わりに、眠っていたことに漸く気が付いた。

そうして本を外し、最初に目に映ったのは、トレーディングカードが並んだ棚であった。

見渡せば、漫画やテレビゲームのソフトが並んだ棚もあり、会計カウンターの向こう側では、数人の店員が忙しなく働いている。

薫はその情報から自分がいる場所を把握する。此処は、冬木新都に居を置く、市内で最も大きなゲームの販売店であると。

「アレ？」

——自分がいた場所はエルサレム市街の、『ゴルゴタの丘』に続く街道の只中ではなかったか？

薫は、何故だかそのような疑問を抱いた。

一体、自分は如何して此処にいるのか。寝起きで忘とした頭で考える。

「確か、ウェイバーがライダーやミナと協力して私のメガテンを勝手にクリアしたところまでは覚えてる」

手練り寄せた記憶は、時間にすると相当な前のことであった。

キヤスターが気まぐれで持ち込んだゲームはライダーとミナを大いに熱狂させた。

最初テレビゲームに興味を持っていなかったウェイバーも実際やってみると大いに楽しみ、またゲームの全体への興味を深めた。

そして、もつと別のゲームもやってみたいと思った三人が聖杯戦争という状況を忘れて、テレビゲームを買い求めに街に繰り出すのは、筋が通ると言えば筋が通る帰結である。

他の魔術師が聞けば卒倒しかねない事態であるが。

———そういえば、ウェイバーも大分棘がなくなつて来たな。ミナのお蔭だろうか。

そんなことを考えた所で、薫は他の四人にゲームを選ばせに行つて

いる間、自分は本を読みながら待つことにしたことを思い出す。

「キャスターの……夢？」

そして、思い至るのは先程見た夢の内容。

薫は、興味本位で死体を暴き、偶々偶然儀式をしたことでマスターとなった神秘とは無縁の部外者である。故に、聖杯戦争の諸々の詳細についてはキャスターが齎した情報しかない。そして、キャスターの話の中には、「マスターとなった者が契約しているサーヴァントの過去を夢として垣間見る」という内容のものはなかった。

にも関わらず——薫がそんな発想に至ったのは、「そうだったら、嬉しい」と思ったからだろう。

——何故、「嬉しい」と思うのかは、その理由については自分ですら定かではない。

薫は腕を組み熟考に入ろうとして——乳房が邪魔になって組み辛いことに気が付き、胸の「前」ではなく「下」で組んだ。

その姿勢故に、客や店員の男性の厭らしい視線が集中するが、そんなものはあつという間に感覚の外側へと追いやられた。

それよりも彼女の関心は夢の内容にあった。

サンジェルマンを、故郷にある同名の店に掛けて「パン屋」さんと称した薫ではあるが、その名が示す英霊についての知識くらいはある。

傍から見れば意外と言わざる得ないのであるが、薫は読書家であり知識量そのものは多く、学業成績自体は優秀であった。それ以外の、「危機感」だとか「一般常識」について問題が多すぎる為に、阿呆のように映るといっただけなのである。

そして、その知識で手繰るのは、サンジェルマンに付随する伝説の数々。

薫はそこからはじき出した結論は、キャスターの真名がサンジェルマンだというのは、「嘘」であるということ。

一応、『死ねずの君と』呼ばれた伯爵の伝説には、彼の聖人に纏わる物も存在する。イスカリオテの裏切りに因る悲惨とも言える末路を予言したというものだ。

だが、薫が夢で見たあの場面は予言とは到底言えないものだった。敢えてあの場面に名を付けるならば「別離」。或いは「決意」か。併し乍ら、アレクサンドロス大王が病弱な矮軀ではなかったように、アーサー王が少女であったように、記録や言い伝えが真実を語っているとは限らない。あの夢は、歴史が知らないサンジェルマンのみに分かる真実であるという可能性もなくはないのである。

だがそれを加味した上で、薫はキャスターがサンジェルマンでない可能性を捨てられなかった。

——夢の光景に既知感を覚えたから。何か、以前読んだ本の中であれと似た光景が描かれていたようなそんな気がした。

「なんだっけか……確か芥川龍之介の……」

真実に漸く到達しようとしたその時だった。

「リュウノスケが、どうかしたの？」

不意に声を掛けられた為、薫はベンチから飛び上りかねないほど背筋をびくりと震わせた。

「吃驚したな、キャスター。驚かせないでよ」

「君が勝手に驚いたんだろう」

言葉で表すほどの感情が全く籠っていない無表情を、薫は声のした方向に向ける。

噂に影とはこのことか、目下疑惑の対象であるキャスターが自分のすぐ隣に立っていた。

「他の三人は？」

「まだゲームを選んでもよ。予算は多くないから、これはと思う物を選びたいんだって」

「それで、リュウノスケがどうしたんだい？」

「あ、いや。そういえば、君を召喚した時にいた男の名前も龍之介だったなあ、と」

「はあ……」

キャスターは怪訝な顔つきで薫を見つめた。

こういつた時の薫は嘘が病的なまでに下手であった。

「あ、そういえば、芥川龍之介の本名ってなんだっけ？」

明らかに不自然な話題逸らしをする始末である。

キャスターは、呆れた様な溜息を漏らす。

「あのね、リュウノスケのアレはペンネームじゃないよ。本名だ」

「あれ？ そうだったけ？」

「綺麗な名前だから作り物っぽい感じするけどね」

そんなことを語りながら、キャスターは薫の隣に腰かける。

「というか、貴方は芥川龍之介とも会ったことがあるの？」

「あるよ。序でに言えば、自殺の本当の理由も知ってるよ」

「マジか」

「マジだよ」

薫は興味深げに耳を傾けた。

「言わずと知れた日本文学に於ける巨匠、芥川龍之介。その最期が『バビルトン』を用いた服毒自殺であるのは有名であるが、自殺の真相には謎がある。」

『僕の将来に対する唯ぼんやりした不安』と遺書には残っていた。時代の激動と、中国旅行中に患った病が彼の神経をすり減らした末に、とは言われている。

だが、それだけで片付けられない何かがあったのだろうと、薫は偉大な作家の死にそのような思いを抱いていた。

「それで、一体どんな理由だったの？」

「ああ、何のことはないよ。リュウノスケはね、人間に飽きたんだ」

「どういう事？」

「ぼんやりとした不安」以上に、ぼんやりとした理由である。

「そのまんまの意味だよ。自分としてやれること——まあ、創作のことなんだけど——をやり続けるのにも、ただ気が向くままに楽しみを求めることにも、嫌気が差したんだ。病気のこともあったしね。その苦しみに耐えるだけの意味を見出せなかったんだ」

「……じゃあ、『ぼんやりした不安』は？」

「『そう書くとなんかミステリアスでカッコいいだろ？』」

「えっ？」

「つて、リュウノスケは言ってた」

実際に死んでいることを考えるとそうも言えないかもしれないが、薫が抱いていた芥川龍之介のイメージを崩す、存外に愉快な人物像だった。

ただ、残された友や彼の読者の気持ちは一切合切踏み躪られているだろうが。

「……キヤスターは、彼が死んだとき如何思った？」

夢の中で人間が好きだと語った少年なら屹度悲しんだのではないのかと思いつながら、薫はキヤスターに訊ねた。

「……リュウノスケが決めたことだ。死ぬときは嬉々としていたけど、まあ、あれはあれなりに葛藤もあったんだろうから。それに僕が一々言葉を挟むもんじゃないよ。第一、死ねないヤツが人の生き死について語るつてのはどうなんだよ」

どちらを語るにせよ、自分の言葉はあまりにも軽すぎる。キヤスターはそう言いたげであった。

それを感じて、薫は寂しさのようなものを感じた。

「もし、私が同じように命を絶ったら……」

その哀愁めいたものが薫を駆り立てる。

「同じように言うの？」

何が寂しいのかも自分で分からないにも関わらず、聞かなければならないような強迫観念にすら襲われて。

キヤスターは困ったような笑みを浮かべ、

「君は、死のうとしたことがあるの？ それともこれから死のうとしてるの？」

と、薫に訊ねた。

「私は……」

薫はぼうつと、遠くを見つめた。

そこでは、伝票整理や商品の仕分けといった作業を、こなす店員たちの姿があった。生き生きとした、或いは抜け殻の如き人の営みの一端がここにも確かにある。

「分からない」

「どういうこと？」

「死にたいと、考えたこともないけど……生きていたいと思つたこともない」

キャスターはそれを聞いて押し黙つた。

思春期の青少年・少女にありがちな夢見がちな感覚、肥大化する自意識の発露——の類ではない。

そういった類のものであつたどんなに良かったらうとさえ薫自身思うほどに深刻なのだ。第一、薫は幼少の時からこんな調子であつた。

何がそうさせたのかは、薫にも分からない。ただ何となく、生まれつた時から患つているよく分からない五感の一部と脳の障害の所為だとは推理している。

具体的にどんな障害を持つているかは、薫自身よく分からない——そこに触れると、彼女の両親は半狂乱になつたものだから。

そういった境涯の為に、薫は——他人から見ても「おかしなひと」として見られて生きてきた。家族も含め、関わる人が殆どいないから自分の問題に気が付ける筈もなかつた。実際、ある時分から読書という趣味を得、人間というものがなんとなく分かるようになって、どこも具体的に言えるわけではないが、自分がずれた人間であるという認識に至つた程である。

最近、遂に両親から完全に縁を切られ、家賃と学費の支払いという差し迫つた問題とに直面したこと、もつと人間というものを観察したいという個人的興味から、薫は春を嚮ぎ始めたが、そこでも自分のずれを一層浮き彫りにさせた。

「生きてる実感が薄いつてこと？」

キャスターが言っている言葉に、薫は、

「そうかもしれない」と同意した。

人間観察の一環で、自分の体を売り、乙女であることを捨てる人間ならば、*「ただの変わり者」*くらいで済んだだろう。

だが、客として取つた、雨生龍之介が自分を殺そうとした時に感じ

たのが、恐怖ではなかったというのはどう考えても一般的な思考ではないだろう。

感じたのは羨ましきであった。自分を殺そうとした雨生龍之介は、とても生き生きとして、人間らしさに溢れていたと言えた。

そして、丁度タイミング悪く、体質である貧血が起こり気を失って——次に目を開けた時に感じたのは、後味の悪さだった。より人間らしい人間が死に、より非人間的な人間のような何かが生き残ることに對する申し訳なきと言っても良い。

尤も、それも次の瞬間には記憶の奥に追いやられ、今の今まで思い出せなかったわけだが。

「そっか」

だが、キャスターはそんな薫の思いを知ってか、知らずか微笑んだ。見守るように。

「こんな僕に言わせて貰えることがあるならだけど。そういうよく分からないって気持ちの儘なら死なない方が良いよ。そういう死に方は、死ぬべきだと思つて死ぬ」ことだから。絶対君は幸せになれない」

「幸せになれる自殺つてあるの?」

キャスターの意見は、薫にしてみれば思いがけないものであった。巷には、自分で自分の人生を終わらせるのは愚かであつて、絶対に幸せになれないとされていることだから。

だが、キャスターは自身を持つてであると答えた。

「死にたいと思つて死んだ時、人はその瞬間だけは幸せなんだ。それこそ、リユウノスケみたいだね。それは心が真実求めた願いでもあるんだから。でも『死ぬべき』つていうのは理性の範疇だ。選択肢を奪われて、或いは自分で狭めてそうなた袋小路のようなものだ」

「——嗚呼、なるほど」

それは嫌だ、と薫は思った。

何より窮屈そうである。そして、自分は今どうやらその窮屈な場所に陥りそうになっているらしい。

「有難う」

「僕は大了たことは言つてないよ」

「ううん、良いことを言つたから、とか、そういうわけで言つたんじやないんだ」

——生まれて初めて、誰かに気にかけて貰つたから。

思えば、最初からキャスターはそうであつた。死体を漁り、死体を絵具にして儀式をしたと言つたのなら、屹度薫が今まで出会つた人間の総てが、人非人を見る目で彼女を見ただろう。だが、キャスターはそんなことも気にせずついて来てくれた。

ならば——もうキャスターが自分の正体を隠していることなど小さなことだと薫は思い始めてすらいた。

キャスターはキャスターだ。サンジェルマンだろうと、別の誰かだろうとそれは変わらない。

では一体何故、正体に固執したのでだろうか？

直ぐに応えは出た。それは彼を少しでも知りたかつたからだ。

だが、それでもそこまでに至つた思いは自分の中で解せないものがあつた。

では、その疑問の答えは？ と、思つたその時——

「買つて来たぞい！」

公共な場には明らかに場違いな、大声が響き、薫の思考は中断された。

ゲームの小袋を提げたライダーが、ウェイバーとミナと共に目の前に立つていたので。

第三十一話 胡蝶之夢

「良い買い物をしたようだね、アレク」

ライダーの顔が満面の喜色に染まっているのを、キャスターは見て取った。

うむと、満足気に大きく頷くと、早速ライダーは戦利品を見せびらかした。

「これで、我らが選んだ逸品！ 見ろ！ 『アドミラブルⅣ』！ 我が胸を高鳴らせる名作よ！」

自信満々なライダーにウェイバーは、呆れたように溜息をつく。

「お前、名作かどうかはやってみないと分からないだろ」

「何を言うか、坊主。貴様も『面白そうだ』とはしゃいでいたではないか」

「うっ……」

途端にウェイバーは顔を赤らめた。

はしゃぐという行動が、子供っぽく感じられたから。

実際、キャスターと薫は小さな笑い声を上げた。

「笑うなよー」

「ごめん、ごめん」

剥きになるウェイバーを、あしらいながら、薫はウェイバーの隣にいるミナに目を向ける。

ウェイバーの手をギュッと握っていた。店の中で逸れないように、ウェイバーが手を引いていたのだろうと、薫は推察した。

「……ミナもこれがやりたかったの？」

「おい、話を逸らすな」

ウェイバーの批判を無視し、薫はミナに問い掛ける。

ゲームのパッケージのイラストとタイトルからして現代戦をモチーフにしたシミュレーションと考えるのが妥当な代物である。薫のイメージ的には、ミナのような幼い少女が好みそうなジャンルではない。

だが、ライダーはソフトの選択が全員の指示によるものであると

語った。

そこから、或いはミナがウェイバーへの無意識な内からの好意によって同調したとも取れる。

故に、薫はからかいたくなつたのだ。

「あ、う、うん……」

ミナは薫からあからさまに目を逸らした。

明らかに嘘をついているが故の所作である。それを思つて薫は、とても楽しくなつた。

関わる人間こそ少ないが、薫は人を揶揄うことが好きだ。特に、人の性事情や、男女の機微に纏わるあれこれは特に好きな題材である。はつきりといつてしまえば、薫は性悪なのである。だが、そんな彼女であろうと流石に小さな子供にまで己の悪性を発揮しようとはしない。

にも関わらず、実際にやつてしまったのは——誰かに手を引かれるミナが、なんだかとても羨ましくなつてしまったから。

「そうか、そうか。ミナは、ウェイバーお兄ちゃんと致したいか」

「え!?! いた……!?! って、なに?」

「クツクツクツ! 恍けちゃつて。とーつても楽しいことに決まつてるじゃん」

薫が浮かべる淫靡な笑みに、ミナは顔を赤らめる。

——楽しくなつてきた。

薫が、そう思つた時であつた。

「いい加減にしなよ」

雷が落ちたかのような乾いた音と共に、薫の頭がずれた。

「痛っ!」

キャスターがどこからともなくハリセンを取り出し、薫の頭を叩いたのだ。

「何するんだよお……」

「それはこっちの台詞だよ。何、ミナに猥談ふっかけてんだよ」

「いや、私的にはゲームの対戦プレイのことを言つてただけだ」

「言葉の言い回しがアレ過ぎるんだよ、君は」

薫の言葉を意識して、ミナはウェイバーから手を離し、薫から距離を取るようにライダーの足に隠れた。

「嫌われたな、カオル」

出会ってから向こう、ずっと薫に振り回されているウェイバーはすかさず攻勢に出た。

ここまで、ずっとやりこめられ続けていたから、自分が優位に立ちたいという欲が出たのだ。

「ムヌウ……好感度が高いからって調子に乗るなよ、ロリコン」

「誰がロリコンだ！」

怒髪冠を衝くと言わんばかりの勢いで薫に向かっていくウェイバーを見て、ライダーは、はあと、深い溜息を吐き、顔を覆った。

「よせ、小僧」

「離せ、ライダー！ コイツは一遍分かせないと駄目だ！」

ライダーに首根っこを掴まれ、ウェイバーはじたばたと暴れる。

「小娘の言葉に一々目くじら立てるな。アレは、お前が反応すればするほど調子に乗るぞ」

「だけど！」

と、ウェイバーが文句の次を続けようとしたその時だった。

グウ……。

あまりにも大きな腹の虫の鳴く音が響いた。

その主は、ウェイバーであった。

「大きな音だね」

くすくすとせせら笑いながら、薫は同意を求めるように、キヤスターを見つめた。

「そうだね」

キヤスターは同意しつつ、懐から鎖でローブに繋がれた銀時計を取り出す。

そして、外の景色を見た。

自動ドアの硝子から差し込む光は茜色であり、今が夕方であることを語っていた。

「……少し早いけど、晩ご飯の時間かもね」

マツケンジー宅で昼食を食べてから相当な時間が経過していた。

「じゃあ、そうしようか」

薫の提案を全員が肯定した。

「うん、なら私のオススメのお店に行こうか。ウェイバーとミナへのお詫びも込めて、私のおごりというところで」

薫が誠意を見せた為に、ウェイバーは取りあえずこの場は許すことにした。

併し、いざ薫が進めた店に着き、出てきた品物を見て、ウェイバーはその考えを改める。

——地獄という概念を仮に、色で表すとしたら、屹度こんな色になるのだろうか。

出てきた食べ物が紅蓮に染まっているのを見て、ウェイバーはそう思った。唐辛子とラー油を何世紀もの間煮込んだ異常なまでに赤い肉味噌の中に、白い豆腐が映える。ただ、皿を除いているだけで、目と鼻が焼けるように痛い。

故に、ウェイバーは口に運ぶ前から察した。この料理は辛いと。

ふと、隣に座るミナ表情を見た。自分と同じように、地獄のような四川料理に相對しているはずなのに、輝かんばかりの笑顔であった。

若しかしたら、自分の感受性に問題があるのかと、ウェイバーは疑う。

だが、ふとライダーとキャスターの顔を覗くと、引き攣っていた為に、自分の感覚は、極々自然のものだと認識した。

「さあ、これが私のオススメ。今日は私のおごりだ。心ゆくまで楽しみたまえ」

「楽しめるか!」

早速、自分にも並べられた同じく地獄のような食べ物を蓮華で一掬いした薫に、ウェイバーは怒鳴らざるを得なかった。

「いや、ホント聞きたいんだけど! コレ、なんだよ!?!」

ウェイバーは、岩漿と見紛う皿の中身を指差し、薫に質す。

「ああ、ウェイバーはイギリス人だから知らないか。これは麻婆豆腐

「とってね……」

「んな、こたあ分かるわ！　だから、僕が知ってる麻婆豆腐に似てんだけど、何かが違うんだよ！　決定的に何かが！」

「まあ、それは料理人によって作り方は千差万別だから。君が知ってる中華料理屋さんにはその店のやり方が、『泰山』さんには、『泰山』さんのやり方というものが、ね？」

そう説き伏せられたが、ウェイバーとしては釈然としないものがあった。

確かに同じ料理でも店ごとに製法が違うのは当然だ。併し、それを加味した上でも、薫がお気に入りだという『泰山』の麻婆豆腐は明らかにおかしかった。

まず以て麻婆豆腐から人に食べて貰おうという気配が伝わってこない。逆に、麻婆豆腐の方が人を喰らおうとしている気配すら感ぜられる。

「うーん！　うまうま！」

何より異常なのは、この麻婆豆腐を食しているというのに、薫が死にもしない所か、幸せそうな顔をしている点であろう。

ライダーとキャスターは啞然とした顔で、震え竦み上がっていた。

歴史に名を刻んだ英霊が揃いも揃って、この場からどうやって逃げ出すかのみを考えていた。

「わあ、これ美味しい！」

だが、無情——戦慄する一堂に、更なる戦慄が待ち受けていた。ミナが明らかに危険と分かる麻婆豆腐を食した挙句に、上手いと宣い出したのだ。

ウェイバーは流石に耳を疑った。ともすれば、殺意にすら満ち満ちている麻婆豆腐だ。

——否、若しかしたら美味しいんじゃないか？

そんな発想すら自分の中に浮かび、ウェイバーはハツとする。場を満たす混沌とした雰囲気、呑まれかけ、状況に流されようとしていることに気が付いた。

自分の中に生まれた危険な思考をなんとか打ち消し、何か別の料理

をオーダーし直そうと、ウェイバーが薫に提案した時だった。

「お兄ちゃん、あーん」

ミナがレンゲを一掬いしウェイバーの口元に差し出してきたのだ。
「うっ……」

ウェイバーは顔を歪ませた。

ミナには悪意があるわけではない。ただ、ウェイバーにも美味しいものをはやく食べて欲しいという、純粹な思いがあるだけだ。

その証拠に、ミナの笑顔には一点の邪気もない。

だが、逆にそれがウェイバーに断るといふ手段を奪わせた。この笑顔を踏み躪るわけにはいかない。

「食べないの、お兄ちゃん？」

「くっ……!?!」

中々ウェイバーが食べない為に、ミナの表情は曇り、声の音調は目に見えて沈んでいた。

これで退路は完璧に絶たれてしまった——ウェイバーは観念し、そして覚悟を決める。

「クソォー！」

腹の底から声を張り上げ、差し出された地獄の欠片にウェイバー・ベルベットはかぶりついた。

「わあ、美味しいなあー！」

「やったあー！」

ウェイバーは、やけくそ気味に笑いながら嘘を吐いた。

美味しいというのは嘘だ。否、分からないと言った方が適切か。

ウェイバーの舌は、痛覚しか受容していなかったのだ。

故に、味の感想など言えるわけがないのだ。

「はい、お兄ちゃん、あーん」

「あ、あーん」

一口目を食べたことで、ウェイバーの中で決定的な何かが壊れた。二口目をすんなりと受け入れてしまったのだ。

瞬間、剣山をまるごと呑み込んだかのような凄まじい痛みがウェイバーの舌に走り、体を火が付いたかのような熱が呑んだ。

客観的に見れば、自分が童女に食べ物を食べさせて貰っている危険人物だ——という認識すら今のウェイバーには困難であった。

「サンジェルマン……」

「アレク……」

ライダーとキャスターは互いに顔を見合わせた。ウェイバーの行動が、二人をおかしな方向に駆り立てたのだ。

逃げてはならない。ここで逃げれば男が廃る。

——食（や）るしかない……ッ！

「彼方にこそ栄え在り（ト・フィロティモ）！」

「いと高き所に栄光在れ（グローリア・イン・エクセルシステオ）！」

二人はいぎ、炎獄（ムスペルヘイム）の扉に手を掛けた。

†

「美味しかったね、お兄ちゃん」

「ソウデスネー」

ライダーの肩の上から満面の笑みと共に向けられたミナの言葉に、その隣を歩くウェイバーは脱力しきった声を返した。

否、脱力しているのは声だけではなく体そのものか。兎に角、麻婆豆腐に総てを持って行かれ、傍から見れば廃人のように映る程ウェイバーは疲弊していた。

他の二人も同じだった。ミナを肩車するライダーは、げっそりとした顔をし、その巨軀が二回りほど小さく見える。

キャスターも、足取りがふらつき今にも倒れそうだった。

「三人とも、何かあったの？」

「何かあったからこうなってるんだよ」

三人の声は揃っていた。

泰山の麻婆豆腐はそれほどに三人を破壊していた。

ウェイバー曰く、*“麻婆豆腐が原因で聖杯戦争に敗退していたかもしれない”*。

ライダー曰く、*“これは食事ではない、征服だ。この赤い麻婆とやらはこの征服王からなにもかも略奪する気なのだ”*。

キャスター曰く、*“ケイローンがヒュドラの毒矢を食らった時、死*

のうと思つた理由がよく分かつた”。

泰山の麻婆豆腐はとても食べ物と呼べた代物ではなかつたのだ。

「……甘い物でも食べたい気分だ」

「あ、僕もそれ思つた」

「余も同じく」

衝撃的な辛さは、三人の頭から “聖杯戦争” という単語を奪う。

そして、

「じゃあ、私が知ってるクレープ屋さんに行つてみる？」

薫が思いつきでそんな提案をして、

「ミナ、あまいの大好き！」

ミナがそれに乗るといふ形で、一堂は一気に遊ぶ方向へと流れていった。

最初に、薫の行きつけだといふクレープの屋台に行つた。クリーム
の甘さが殺人級の麻婆豆腐に苦しめられた三人の心を癒し、またミナ
がとても楽しそうだったから、三人もまた楽しくなった。薫が選んだ
山椒がかかつた山葵クリームのクレープについては皆、引き笑いをす
るだけだったが。

そして、近くにゲームセンターがあるからとそこに向かうことにな
り——その途中で、ミナが立ち止まつた。

一体何かと、ウェイバーが思うと、どうやらぬいぐるみの専門店の
ショーウィンドウに飾られた大きな熊のぬいぐるみに心を奪われた
ようだった。ウェイバーが、ミナに見たいか訊ねると、気恥ずかしそ
うに頷くから、みんなでぬいぐるみを見ることになった。ぬいぐるみ
が最も似つかわしくないライダーの存在もあつて、他の客や店員の視
線に苦しめられることになるが、それでも楽しい時間だった。

ミナがウェイバーにせがんだ大きな熊のぬいぐるみは聖杯戦争中
の軍資金に大打撃を与えることにもなつたが、ミナの感謝の言葉を聞
いたら、帰りの旅行費くらいなくなつてもなんとかなるだろうといふ
希望が湧いてきた。

そして、時間はあつという間に過ぎて——冬木の街に夜の帳が降り
てきた。

「……で、なんで僕達、お前の学校にいるんだよ？」

ウェイバーは途中で買った缶ジュースを啜りながら、愚痴る。

五人がいたのは、薫の学校——然も屋上だった。

「夜の学校ってドキドキしない？」

黒檀の風変わりな見た目の煙草を吹かしながら、薫は答えた。

ウェイバーは、薫の意見に同意出来ない。

そもそもウェイバーは薫やライダーのような、意味不明な行動力のある人間というのは接していて疲れるから好きではない。

「私は、楽しかったよ」

けれど、ミナはそう言って笑った。

「みんなと一緒に遊べてホントに楽しかったよ」

ウェイバーからのプレゼントをぎゅっと抱きしめ、心から、笑った。

「また、みんなと遊びたいな」

何処か、その言葉は寂し気で——このまま、ミナが消えてしまいうな不安に駆られて、

「うん、遊ぼう」

ウェイバーはミナの頭を撫でた。

「ライダーとキャスターは分かんないけど……僕と薫なら、また遊んでやれるからさ」

ウェイバーは薫に同意を求めるように笑みを投げた。

すると、薫は深く紫煙を吐いて、

「そうだね」

と気だるそうに答えた。

「それにライダーだって……」

世界征服を目指すからこっちに残っていてくれるかもしれない——然う期待して自分のサーヴァントの顔に目を遣ると、ウェイバーは表情の変化に気が付いた。

沈んでいる。磊落な余裕に満ちたいつもの顔がない。

物悲し気な、最もこの男に似合わない感情が現れていた。

「ライダー……？」

どうしたんだよ、と聞こうとしたその時だった。

ミナが抱きかかえていたぬいぐるみを落し——瞬間、二騎のサーヴァントの表情が引き締まった。僅かに遅れ、ウェイバーも周囲の気配の変化に気が付く。異様なまでの殺意が辺りに充満している。

ウェイバーは辺りを見る。

すると、そこには、月夜に浮かび上がる、青白い髑髏が一つ——。そして、最初の一つを確認してすぐに二つ、三つ——。

漆黒のローブに身を包んだ奇怪な集団が、五人を取り囲むように、フェンスや貯水タンクの上に立っていたのだ。

第三十二話 少女地獄

遠坂邸の地下工房——仮に若しこの瞬間此処に立ち寄った者がいたならば、まず、空間を満たす上品な芳香に気が付くことになっただろう。

それは、時臣の手中に在るティーカップから齎されていた。

湯気を上げるその中身は、紅茶であった。優雅を重んじる時臣は茶を嗜む。今日の茶は、インド直輸入の新芽取りの「アツサム」である。

『すべてのアサシンが集結しました。これより、総攻撃に移ります』
「フム……」

魔導通信機から齎される綺礼の報告を聞きながら、時臣はその甘味を堪能する。

この一時こそ、まさに優雅である。

未だ安寧に深山町の邸宅に引き籠る時臣が、綺礼からライダーとキャスターの陣営が同盟を組んでいることを聞いたのはつい先ほど。

これを聞いた時臣は内心で少しばかり焦りを覚えた。

目下、彼が警戒を抱いていたのがこの二騎であったからだ。

未だ交戦らしい交戦の形跡が見られず力の底が見えないライダーと、漸く正体が知れたばかりで詳細が一切不明のキャスターは手の内が知れない不気味な存在だ。

ライダーに「神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）」以外に何か切り札となるものがあるのか。キャスターの戦闘方法はどんなものなのか。

分からない以上、必勝法を立てられる筈がないのだ。

他の三騎については有効な策を立てられていた。

バーサーカーは楽であった。消耗ぶりが悲惨であるからマスターの枯渴を待つだけだ。わざわざ出向いて戦うまでもない。

セイバーは真名が割れている上、頼みの綱である聖剣をランサーの宝具によって封じられている。ギルガメッシュの敵ではないし、他のサーヴァントからの襲撃での敗退も考えられる。

ランサーについても、セイバーとの戦いであっさり真名を明かすというミスを冒している為、付け入る隙がある。その上、切り札である宝具を一つ開帳した上、対城宝具というもう一つの切り札の存在を匂わせている。畢竟、底はもうとつくに見せているわけだ。

——で、あるならば、アサシンをキャスターとライダーに差し向け、切り札を出さざるを得ない状況にまで追い込むべきだ、というのが時臣の考えであった。況して、ライダーのマスターは魔術師としては三流、キャスターのマスターに至っては全くの素人という始末だ。あわよくば、そのまま倒してしまえるかもしれない。

加えて、綺礼からの進言もあった。曰く、ライダーとキャスターの同盟は何を思ったのか街に繰り出し遊興に耽り出したという。襲撃をする絶好の機会であった。

「だが、綺礼。本当に良かったのか？」

『何が……ですか？』

「薫という少女のことだ」

ただ一つ、時臣には懸念があった。

綺礼に迷いを生じさせ、心を塞がせた少女こそ、キャスターのマスターである。此度の襲撃の為に少女が命を落とすかもしれない。

そうなった時、今度こそ綺礼は戦えなくなってしまうのではないかと。

『それならば、御心配には及びません。少女をよく見ている内に、しかと理解致しました。妻と、あの女は、全くの別物なのだ』

「そうか、ということは」

『はい。あの女を殺すのに、最早躊躇いはありません。……この手に掛けても構わないと思うほどに』

それを聞き、時臣は大いに喜んだ。

確かにアサシンというカードは失われるが、それ以上に頼りとなる弟子が本領を取り戻したことに。

その喜びが大きかったからだろう。時臣は、ある事実が気が付いていなかった。

「ここまで間抜けだと、逆に、面白味が見えてくるな！」

通信機越しに繰り広げられる二人の会話を聞きながら、ギルガメツシユは大笑し、グラスを傾けた。

よもや、姿が見えない自身のサーヴァントが、自分の弟子の元にいるなどとは思ってもみないだろう。精々何処かで遊んでいるくらいだと思ふのが、時臣には関の山だ。

それがまず間抜けの第一点。

尤も、ギルガメツシユは宝物庫の中身の一つである。認識阻害能力を持ったヴェール”を使っている為に、見つかる筈もない故に、仕方ないとは言えるが。

「併し、綺礼。よくもまあ、そこまで嘘が出てくるものよな」

そして、間抜けの第二点。

時臣が三年という長い時間を共にした弟子の心の内を、時臣はまるで見る事が出来ていない。

アサシンを差し向ける提案をした綺礼がギルガメツシユの口車に乗せられている事には気が付いていない。単純な、自分や父に対する義に因って動いていると信じ切っているのだ。

ギルガメツシユからすれば笑わずにはいられなかった。

「……いや、真実はあったか。貴様は、あの道化の隣にいる女を手を掛けたいと思っているのだからな」

通信機に向かう、綺礼からの返答はなかった。

沈黙を肯定と受け取り、ギルガメツシユは微笑を零す。

「どうして女に惹かれた？ 妻の面影からか？ 貴様の期待を裏切った男とは違い、今度こそ期待に答えられると感じたからか？」

ギルガメツシユの問い掛けを無視しながらも、内心で綺礼は辟易としていた。

何処までこの傲慢なる王は己の内を見透かすのか、と。英雄王の問いは両方とも正解であった。

妻が死んだとき——自分の手で殺せたならば良かったと思った。

若し、仮にそれが叶えられたとして、屹度言峰綺礼の真実は、その軀の中に在ると感じたのだ。

そして、あの女こそ自分と同類である筈だった。同じく答えなど知らないのかもしれない。だが、客観的な観測から見えてくるものに、綺礼は期待していた。

だが、綺礼はその胸の内をギルガメツシュに教えるつもりはなかった。そこまでギルガメツシュを信用してはいないのだ。

「……フン。まあ、良い」

ギルガメツシュは鼻を鳴らし、直ぐに別の所に興味を向けた。

綺礼やキャスターのマスターもギルガメツシュにとってすれば興味深い人間であったが、それが如何でも良いと思える関心事が傍にあった。

ギルガメツシュは自らの手の中にある鏡を覗いた。ともすれば、古代の遺跡からの出土品にも見えるそれは、併し、宝物庫のコレクションの一つである。

その中には、黄金の王の自身の姿——ではなく、キャスターの姿が映っていた。この宝物の持つ力とは、所有者が見たいものを見せるというただそれだけの力。

だが、ギルガメツシュにはその力が今はどんな宝物よりも重要であった。道化が目を覚ますその時がいち早く分かるのだ。

「さあ、我を待たせるな。早く目覚めろ。我を、笑わせろ……！」

爛々と輝く、炎のような紅い双眸が、嘗め回す様に、鏡の中の少年を見つめていた。

†

ウェイバーは恐々として辺りを見渡した。

巨軀、矮軀、老人、子供、女——様々な輪郭を象った影絵のような髑髏の仮面が無数に自分達を取り囲んでいる。

異様なまでの殺気を放ちながら。

それに怯えているのだろうか。ミナは自分の肩を抱き、震えながら泣いていた。

「なんて数だ……」

ウェイバーもこの数には驚嘆を感じざるを得なかった。

「……これは困った。死ぬかもしれない」

一方で、薫はぼううつとしたような無表情のまま、自らの置かれた状況をそのように言い表しつつ、煙草を捨て踏み消した。

泰然とした一般人の少女の振る舞いが甚だウェイバーの目には異常に映ったが——今はそれを論じる気にはなれなかった。

実際、薫が言い表した通りの状況に陥っているのが明白だったからだ。

「……如何見る、キャスター」

仏頂面で問い掛けるライダーに、キャスターはアサシン達を見渡し、そっと目を閉じた。

「令呪で、強制されて動いているね」

「ということとは……」

「君の想像通りのことが起こる」

告げる、キャスターの声は悲し気で、それを聞くライダーはギリと大きく音が鳴る程歯噛みした。

「詰まらん企てをしてくれたな……」

ライダーの声色には、静かな怒りが滲んでいた。

その怒りに呼応するかのように、旋風が吹き荒れた。打ち付けた鉄の様に熱い、砂漠を征く風が。

薫は不意に、目に違和感を覚え、擦った。原因となっていたのは砂だった。突然、巻き起こった風が砂塵を運んできたのだ。

「この大地に死ぬが良い」

熱風の中心に立つライダーはアサシンの断罪を宣告する。

渺——…風が嘶き、ライダーの肩にはマントが翻っていた。その姿は戦支度が変わっていた。

「集え—— 王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）！！」

遂に疾風は、括目を許さない程に膨れ上がり——そして、暫く経ち、ウェイバーが目を開けると、世界が変じていた。

「あれ？」

間抜けにも聞こえる声を薫は漏らしていた。それも当然だった。

目を開けた場所が、今まで自分達が立っていた夜の学校ではなかったのだから。

燃え盛る太陽。蒼穹の下には、赤い砂の大地。そこは、見渡す限りの広大な砂漠であった。その世界の変貌に伴い、ライダー達とアサシンの位置関係すら変わっていた。

数に任せ包囲していたアサシンは一カ所に固められ、ライダーと距離を隔て相対する位置へ。ウェイバー達はライダーの背を見るような位置へ。

「固有結界……！」

魔術のなんたるかを知るウェイバーは驚愕した。

これは魔術師の到達点の一つ。心象風景を具象化する大禁呪である。

「ん？ 何か来る？」

砂塵に霞む地平線の向こう側から聞こえてくる足音に薫は耳を傾けた。

——行軍だ。薫はそう思った。

足音の数は十や百ではなかった。万を超える、軍勢。見る見るうちに、勇壮な具足に身を包んだ屈強な戦士達がライダーの周りに集う。

「サーヴァントだ……コイツら、全員サーヴァントだ！」

ウェイバーはマスターに与えられるサーヴァントの能力を評価する透視能力に因りそれを見抜く。

そして、イスカンドルの切り札、最大宝具の正体を。

「サーヴァントがサーヴァントを……召喚できるのか……！」

流星の薫も、驚愕を禁じえなかった。

サーヴァントは一体だけでも、軟肌を撫でただけで人間を殺せるような強大な存在だ。それが凡そ数万。

「征服王イスカンドルと共に大地を疾走した勇者達が共有する心象風景。その理は、生前の軍団の召喚」

キヤスターは淡々と告げる。

そこで、薫は気が付く。ライダーの部下の中には、単独でも十分に強い英霊がいるということに。

“独眼”のアンチゴノス一世。その息子の“攻城者”デメトリオス一世。“救済王（ソテル）”と謳われたプトレマイオス。“勝利王

(ニカトール) “ という名で神格を持つセレウコス……単独でも強力だと推定される英霊が山のようにいるのだ。

然も、軍勢の中には飾馬に跨った、特に際立った意匠の鎧を纏った者がいる事から、それらの英霊がいることを察するのは、薫にも容易なことであつた。

畢竟、彼女が何を言いたいかといえば——
「死んだな」

これから、アサシンが酷死するという事実到他ならない。

ライダーの傍に、騎手のいない馬が近寄つた。凄まじい巨軀を誇る、逞しい黒い馬が。その額には角が生えていた。

「征くぞ、相棒」

ライダーがそう告げ、駿馬に跨る。これこそ、人食いの伝説さえ残る英霊馬。イスカンドルの相棒、ブケファラスである。

この馬に乗つた者は、世界を支配するという。

それが嘘か真実か果たして分かつたものではないが、今この瞬間、アサシンの命くらいはいともたやすく支配できることは誰であつても簡単に察することが出来た。

百の貌のハサンは、最早勝利を諦めた。それによつて取つた行動は、個体によつて様々だつた。逃げ惑う者がいた。自棄を起こし特攻を掛ける者もいた。また、ただ茫然と立ち尽くす者がいた。

「蹂躪せよ！」

だが、ライダーの中に、そんな彼等に掛けるべき慈悲はなかつた。躊躇いなくライダーは号令を下す。

『A A A L a L a L a L a i e ッ！』

軍勢はそれに応じ、鬨の声を上げた。豪風とも見紛う進軍。

アサシンの命は——風の前の塵に同じ。

一合もかからず、跡形もなく消え去つた。

『オオオオオオオオオオオッ!!』

いつの間にか、王に呼び出された勇者達が勝鬨を上げているこの様はともすれば、喜劇である。

そして、役目を終えると、英霊たちはふたたび幽世の彼方へと返つ

この場にいる全員がそう錯覚した瞬間だった。
涙がミナの顔を覆い、髑髏を象り、張り付いた。そして、その身を、
黒いローブが覆う。

「ミナ……」

ウェイバーは茫然と、彼女の名を呼ぶ。

何が起こっているのか、状況が分からない。否、認めたくない。

「逃げて……オ……にイ……ちゃん……」

さつきまで自分の近くで笑っていたただの少女が、アサシンにしか
見えないという厳然とした事実を。

第三十三話 玉兔之詩

「は、ははは……」

自然と、ウェイバーの口からは乾いた笑声が漏れていた。

この事態にあつて、最早笑うことしかウェイバーには出来なくなつていた。

「やめろよ、ミナ。冗談にしたつて、そういうの、笑えないぞ?」

ふらふらと、力の抜けた足取りでウェイバーはミナに近付く。

「ダメッ!」

ミナの叫びと同時に、ライダーはウェイバーの肩を掴み無理矢理彼の足を止める。

そこからさらに一瞬の後に、何かが碎ける音がした。

ウェイバーは音に驚き、発生源を目撃し、さらに言葉を失う。ミナが振り下ろした細腕に因つて、コンクリートの床に亀裂が走っていたのだ。

とてもただの童女に出来る芸当ではない。否、人間業ですらない。

「ホント……なのか」

如何取り繕つた所で、人外の所業と言うより他なかつた。

「ホントにサーヴァントなのかよ!」

認めざるを得なかつた。

ウェイバー一人くらいならば容易に撲殺出来る程の腕力。何より、一度見たら忘れない髑髏の仮面と黒いローブ。ミナがアサシンのサーヴァントの一人であると。

「そうだ、あの娘はアサシンだ」

驚くほど冷淡な声でライダーは答えた。

「知ってたのか」

ウェイバーの非難するような目に、ライダーは顔を曇らせる。

「アレクを責めてはいけないよ、ウェイバー」

ライダーと同じく、真実を知っていたキャスターが口をはさんだ。

「彼は君の気持ちを汲んだまでだ。その行動自体、何も間違つてはな
い」

「でも……」

「知っていたらどうにかなったとでも？」

キャスターはウエイバーの言葉を遮り、ミナを指差す。

「何も知らないただの女の子という役割を与えられたあの子を、本当に何も知らないただの女の子に出来る方法があつたつていうのか？

無い！ 残念ながらそんな方法、僕の中にも無い！」

魔術師として極限域にあるキャスターであつても不可能なことがある。そして、若しその不可能の先にあるものをウエイバーが望み、絶望することになるのだとしたら。

最初から知らない方が幸せだろう。

顔を悔し気に歪ませながら、ウエイバーは言い返そうとする。だが、言葉は見つからなかった。

サーヴァントにすら無理であるのに、一体自分に何が出来るという。今まで自分の中で、認められなかった事実。目を背け続けた自分の『非才』。

ウエイバー・ベルベットは全く以て無力な人間なのだ。だから、何も出来ない。

何も……。

「クソウツ……！」

ウエイバーは力無く項垂れ、泣いた。

涙が止めどなく溢れ、もう、顔を上げる事すら出来ない。ミナを直視することも……。

「泣かナ……イで、おに……チャ……」

だが、そんなウエイバーを、ミナは責める事はなかった。

「私、お兄ちゃんに……あたま、なでてもら……エて、うれしかった……」

「ミナ……」

消え入るような、不安定に揺れる声で、ミナはウエイバーにそう伝える。

屹度、明るい笑顔を見せてくれているのだらうと、すらウエイバーには思われ、それが逆に彼の心を深く抉る。

顔を、上げられなかった。

「お姉ちゃん……まーぼー、おいしかったよ……また、たべたかった……」

薫は自分に向けられたミナの言葉に、ただ押し黙った。

ミナを見つめる瞳には、憐憫の色が見える。

「ちい、兄ちゃん……すごろく、たのしかった……よ……」

「うん、有難う」

キャスターは感謝の言葉を返した。

最期には誠意を以て応えたいと思ったのだ。

「おじちゃん……おわかれの、じかんをくれて……ありが……」

ライダーへの感謝を伝えようとしたその時だった。

「ウアアアアアッ！」

またも、ミナが月を仰いで咆哮を上げた。

自らの腕を抑えるように肩を抱き、その場に無理くり蹲る。

「苦しそう」

宛ら、狂戦士の暴走にも見える様が、薫には痛みを苦しんでいる様にしか見えなかった。

「……令呪に耐えてるんだ。ウェイバーを、いや、この場にいる誰も傷つけたくないから」

先の襲撃に当り、アサシンは綺礼から令呪を以ての命を受けていた。

その内容は、『総員、玉碎せよ』。対魔力を持たないアサシンは、令呪に逆らえない。それは、ミナも例外ではなかった。

それでも、ミナは耐えた。それだけに誰も傷つけないという思いが強かったのだ。だが、対魔力無しでの令呪への抵抗など虚しいばかりだ。

出来たことと言えば、令呪に拠る指令の遂行を先送りにする。然も、それに払った対価は多大であった。殺戮に切り替わろうとする思考を無理矢理抑え込もうとしたことにより、ミナの脳は焼け、それでも無意識に戦闘行動に移ろうとする体を押し留めた為に、全身に激痛が走っていた。

「お……ねが……イ……ワタ……し……けし……て……」

だが、それにすらも限界が来ていた。アサシンの姿への変貌もそれが理由だ。貯めた分の負荷が一気に噴き出したのだ。

令呪の内容は、具体的であればあるほど、より短期的な命令であればあるほど、その強制力は大きくなるが、この場合はその際たる例だろう。こうなってしまうえば、最早、アサシンが死ななければ終わらない。

いや、或いは終わるまで耐えきったとしても、アサシンは死ぬ。加えて、ミナの小さな体を焼く激痛は、“自害”という選択肢を頭から消すほどに苛烈になっている。

「……すまなかった。余の勝手で、お前を苦しませてしまった」

雄大な英雄には似つかわしくなく、悲し気に顔を歪め謝したライダーに対し、ミナは首を横に振った。

それが何を意味しているか、ウェイバーは理解してしまった。

アサシンが包囲を始めた時、ミナはウェイバーのすぐ傍にいた。殺生与奪を握っていたということだ。なのに、実際にそうしなかったミナを見て、ライダーは察したのだ。だから、王の軍勢で、他のアサシン共々殺そうとはしなかった。

あまりにも短い時間とはいえ、同じ時を笑いあった友に、別れを告げる機会を与えようとしたのだ。

愛剣を抜き、涙に堪えるように打ち震え乍ら、ミナへと歩み寄るライダーの背中がウェイバーにはいつもよりも大きく見えた。

「クソウ……こんなのあんまりだ……」

だが、それでも、ウェイバーには受け入れられなかった。

「またみんなと遊ぼうって言ったじゃないか……なのに、なんで……どうして……」

言葉が続かなかった。

楽しかったのは、ミナだけではない。ウェイバーも、一緒にいて楽しかったのだ。頭を撫でた時に見せた笑顔を見られたことがとても嬉しかったのだ。

——また遊ぼうは、心からの約束だったのだ。

子供のように泣きじゃくるウェイバーに、ミナは微笑んだ。

「私が人間だったら良かったのにな」

突き放すような、悔やむような、それでいて在り得ない可能性だった。

ミナは、百の貌のハサンの中に生まれた人格の一つというだけのことから。

——限界が来た。最期の言葉を紡いだ為に、遂にミナは殺人兵器に変貌する。檻褻切れのように摩耗した体が戦闘態勢に入った。

それを見るや否や、ライダーは剣を振り下ろす。ミナの動きは緩慢だった。刃を躲すことなど不可能だ。首が切断される。

瞬間、ウェイバーは固く目を閉じた。サーヴァントは死んでも亡骸が残るわけではない。ただ消えるだけだ。だが、一瞬、きつと無惨な死に様が残る。それを思うとウェイバーには耐え難いものがあつたのだ。

キイイイーン——……。

なんだか異様に硬い音だと、場違いなことを考えながらウェイバーは恐る恐ると、目を開けた。

だが、目に映る光景は意外に過ぎるものだった。

「何をする、キャスター」

ライダーの剣をキャスターのアゾット剣が阻んでいたのだ。

「こうする」

左手一本でライダーの思い斬撃を受け止めるキャスターは、そう告げると、もう片手に別の短刀を持ち、ミナへと突き立てた。

悲鳴も上げず、ミナはその場に崩れ落ちる。

「こうしないといけない。然う、思ってたんだ……」

誰に告げるでもなく、そう呟くキャスターの目には涙が流れていた。

赤い、涙が。それは血だった。時折、聖母や聖人の石像に現れるという血の涙であった。

「分からん。キャスター、何故お前が止めを刺す必要があつた？」

意味不明の独白をライダーはそのように受け取り、キャスターに問

いただきます。その問い掛けにキャスターは首を横に振った。

「違う、そうじゃない」

キャスターはそう答えると、右手に浮かんだ赤い痣を見せた。

「令呪……だと!?!」

「ああ、アサシンとマスターとの間に成立していた契約を破棄して、僕に移し替えた」

驚愕するライダーに、キャスターはあっさりと答え、ミナを突き刺した短刀を見せる。

「破戒すべき全ての符(ルールブレイカー)”。あらゆる契約を破棄する宝具だ。さつき思い出した」

説明と共に、アゾット剣と件の宝具が光の粒となって霧散する。

成程、そのような効果の宝具ならば奇跡のような理不尽もまかり通るとライダーは納得した。

「如何してそれ、最初から使わなかったの?」

だが、疑問は残る。薫が言うように、この場面を打開するのに最適な宝具を持っていたにも関わらず、どうして出し渋ったのか。

「こればかりは仕方ないんだ。本当に、ついさつき思い出したんだから」

その答えに薫は首を傾げる。

「……どっかの誰かが雑な召喚をしてくれたお蔭でね、重篤な記憶障害に陥っていたみたいだね。使える宝具の三分の二くらいを忘れてたんだ」

笑顔で自分を非難してくるキャスターに、薫はなんだか馬鹿にされたような気持ちになり、頭に血が上るのを感じた。

「……記憶障害なんて聞いてないんだけど」

薫は、自分を苛めてくるキャスターに蔑むような口調で精一杯の抵抗を試みる。

「それは、ごめん。でも、教えられる筈がなかったんだ」

苦笑交じりに、頭を下げるキャスターに、

「なんで?」

と薫は理由を質す。

「記憶障害にあったことすら、今まで忘れてたんだよ」

「ああ、成程」

認知症患者が、自分の認知症に気が付けないと同じことだ。そして、そういった人物に異常を気が付かせる為には、その人物の尋常を知る第三者の指摘がいる。だが、この場合にあつては、キャスターの詳細を知る第三者など居ないから、何が正常であるか分からない。

詰り、今まで誰もが彼を正常だと思い込み、自分自身でさえもその認識だったということだ。

「で、丁度良く、記憶が回復したと」

「完全じゃないけどね。まだ三割くらい欠落してる」

「そうなの？」

「うん、然もその欠落の中には、どうも僕の本当の真名もあるっぽい」
自分の名を忘れていたという衝撃の事実を突きつけられたにも関わらず、薫は驚かなかつた。

寧ろ、キャスターが自分に対して嘘を吐いていたわけではないということが分かり、安心した。

詰りキャスターは今まで自分のことを、本当にサンジェルマン伯爵だと思ひ込んでいたのだ。

「ああ、もう！　ここまで出かかってるんだけど！」

自分の喉を指しながら、キャスターは苛立ちを露わにした。それが、少し子供っぽく映り、薫は微笑ましく思った。

「じゃあ、これからは君のことを『自分のことをサンジェルマンだと思ひ込んでいた精神異常者』と呼ぼう」

「罵倒にしても酷いよね、それ」

ふざけ始めるキャスターと薫をウェイバーは呆然と見つめた。

一体何がなんだか分からない。キャスターがアサシンのマスターとなった。アサシンとは即ち、ミナのことである。それが意味することとは詰り……。

「ううっ……」

童女の唸り声がウェイバーの耳に届く。

「あれ？　私、どうして？」

ウェイバーがそこを見ると、ミナが起き上がり、うつらうつらとしながら辺りを見回していた。

髑髏の仮面も、黒いローブも消え、ウェイバーが知っている彼女の姿に戻っていた。

「ミナ！」

堪らず、ウェイバーはミナに抱き付く。

「きゃっ！ お、お兄ちゃん！」

「良かった……良かったよ……」

慌てふためくミナをよそに、ウェイバーはただただ泣いた。

何処かに怪我をしている様子もなく、痛みを感じているわけでもない。

薫と戯れている間にも、キャスターが治癒魔術をミナに施していたのだろう。

「ありがとう、キャスター」

このまま感激のあまりにミナを抱きしめ続けていたい気持ちを如何にか抑え、ウェイバーはまず恩人に感謝の言葉を伝える。

「いや、感謝にはまだ早いよ」

すると、キャスターは頭を振った。

第三十四話 少年少女

「これは一時しのぎに過ぎない。聖杯戦争が終われば、君たちはまた離れ離れになる」

キヤスターは残酷な未来を告げる。

聖杯戦争が終わるといふことは、勝者が決定するか、なんらかの手段で聖杯が破壊されたり機能を停止したりするということだ。そうなるってしまえば、ミナも聖杯の魔力で以て留まっているサーヴァントである以上、座へと帰ることになる。

一応、聖杯が消えてもサーヴァントを現界させておくことも不可能ではない。だが、それには並大抵の魔術師では用意することすら不可能な膨大な魔力が必要になる。ウェイバーにそれを払うだけの資質はなかった。

「イヤだ」

ミナはそんな別れを拒んだ。令呪を抑えその痛みに耐える精神力と、自らの死をも厭わない強さを見せた少女とは思えない程、その姿は意外なものだった。

「そう言うと思っていた。ウェイバー、君はどうだ？」

「……正直、もう一回同じことを体験したとして、耐えられる自信がない」

その答えを予め分かっていたのか、キヤスターは特に反応を示すことなく、またもミナに問う。

「ミナ、君は人間に……」

「ウン！」

「……速い。最後まで聞いてくれ」

「人間になりたいかってことでしょ？ だから、ウン！」

力強く答えるミナに、キヤスターは困ったように頬を掻いた。

それを見て、薫は腹を抱えて笑っている。

「ウェイバー。君は人間になったミナと一緒に居たいか？」

「人間かどうかなんて問題じゃないが、そんな奇跡があるなら」

ウェイバーの中で、ミナと一緒にいられる世界への渴望は大きく膨

らんでいた。聖杯に掛けるべき願いと、言つてなんらおかしくはない程に。若し、今聖杯が目の前にあったならば、屹度ウェイバーはそれを叶えていただろう。

仮令、自分よりも余程ミナの為にやれることをやったライダーから聖杯を争うことになったとしてもだ。

「……僕なら叶えられるかもしれないとしたら？」

「出来るのか！」

希望に顔を綻ばせるウェイバーに、キャスターは薬が入った二つの瓶を見せた。

一つは、一見水にしか見えない透明な薬。もう一つは、禍々しい濃紫色の薬だった。

「『あまりある愛（ソフラーブ）』と『脳漿食む蟒蛇（エジユダハー）』という」

キャスターは薬の説明をした。曰く、透明な薬『あまりある愛（ソフラーブ）』は、ペルシャが誇る英雄ロスタムが息子を蘇らせるために探し求め、手に入れたもの。だが、結局それをロスタムが息子に飲ませることはなかったという。

「如何して飲ませなかったんだ？」

「……それによって得られる生というのは、呪われたものだったんだ」「如何いうことだよ？」

「この薬は『誰かを蘇らせたい』という願いを持っている人間の血を受けすることで初めて完成する。でも、実際に完成した薬を飲んで蘇った人間は、その血の持ち主にその生を縛られることになるんだ」

簡単に言つてしまえば、薬を飲ませてくれた人間の傍でしか生きられなくなるといふことだ。自分の意思で離れようとすれば、忽ちの内に死ぬことになる。そして、薬を飲ませた者が死んだ場合、蘇った者もまた死ぬという危険性も孕んでいる。

より正確に言えば、サーヴァント契約の如く、蘇った人間を魔力に因つて使役するのと同義だ。畢竟、この薬はもう一度生きている姿を見たいと願うほど愛している者の自由を奪うのだ。

自由を一切合切奪い、自分だけでその者の生を独占するということ

など牢屋に獣を入れて愛でることと同じだ。そんなものは人の愛とは呼べない。

もしそれでも、愛を語るのならば、それは愛の皮を被った狂気だ。だが、ペルシャの大英雄、無敵の勇士ロスタムはそんな狂気的な人物ではなかった。

糸杉のような壮大な肉体を持つロスタムであったが、その愛もまた壮大だった。だから、息子を蘇らせようとは思わなかったのだ。

「そんな……」

「それに問題はまだある。膨大な魔力供給をどうするかという大きな問題が」

ミナに人の魂を食わせるわけにはいかないだろうと嘯いて、次にキヤスターは、紫色の薬を見せた。曰くこれは、「双蛇王」ザツハークの肩に寄生していた悪竜の化身たる蛇の生き血から作った魔力回路を増幅させる霊薬であるという。ザツハークに寄生した蛇は、アヴェスターに現れるアジ・ダハーカと同一視されていることは有名であるが、そのアジ・ダハーカは千の魔術を操ると言われるほど、強力な魔力を秘めている。故に、その血液より作り出した薬が魔力を増幅させる作用を持っていてもなんら不思議ではない。

「これを飲めば、ミナに魔力を供給してやれるってことか」

「話はそう簡単じゃない。この薬の持つ瘴気はそんな易いものじゃないよ」

悪竜の血は人間にとっては毒も同然である。飲んだら最期、痛みに苦しみ続けることになる。第一、魔力回路を作為的に増やすということとは、腹腔に無理矢理臓器をもう一つねじ込んだり、足を切って二つに割いて別の箇所に取り付けたりすること同義だ。

魔力回路前提で創られるホムンクルスは故に寿命が短くなるし、人為的に回路を増設した魔術師から人間として当たり前に備わっている能力が欠損するなどというのは魔術師にはよくある話だ。

「勿論生きていられる保証もない。一歩間違えれば、ウェイバー、君は死ぬ」

ミナの顔が蒼白になる。自分が人間になろうとすることでウェイ

バーが死ぬかもしれないという可能性に、恐怖したのだ。

「怖いだろう、ミナ。でも、本来死んでいた者を——否、本当は存在しなかったかもしれない者を生かし続けるってのはそういうことだ」

元々ミナというのは、百の貌のハサンの中に発生した人格の一つでしかない。彼女の中にある記憶らしきものも、嗜好も、ウェイバーに見せた笑顔も、蜃気楼のような曖昧なものだ。

そんな胡乱な存在を確かなものにするのが難しくないわけがないのだ。当然、対価がいる。

ウェイバーにとつては重すぎる対価が。

「どうする、ウェイバー？」

自らの身を犠牲にしてまで、少女に不安定な生を与えたという咎を背負うか。自分だけはまともな体で、少女との別れを選ぶか。

選択肢は二つに一つ。

ミナが不安気な顔でその選択を見守る中、

「ごめんな」

ウェイバーは選んだ。

「ライダー、お前の戦い、ここで終わるかもしれない」

——ミナが生きていられる可能性を。

ウェイバーは右手の親指の皮を噛み切り、キャスターが手に持った透明の薬に、自身の血を垂らす。

“あまりある愛（ソフラーブ）”が鮮やかな赤に染まる。

それを見るとライダーは呵々大笑した。

「余はこの世界を喰らうのだ。こんなことで終わるとは思ったらんぞ？」

ウェイバーが失敗するなんて考えてすらいないのだ。

ライダーが信じてくれるということが、ウェイバーにはとても嬉しかった。

「本当にそれで良いのかい、ウェイバー？」

「腕が飛ぶにしても、頭が爆発するにしても、あれより辛いなんてことはないだろう」

ミナとの別れが逃れ難いと思ったあの瞬間の方が、自分の身に起こ

ることよりも余程大きい筈だ。

キヤスターの今一度の問いに答え、ウエイバーは何の迷いもなく、
「脳漿食む蟒蛇（エジュダハー）」を受け取る。

「ミナ、君はどうする？」

だが、これはウエイバーだけの決定だ。ミナが果たしてどうしたいかは分からない。

「……君がそこまでして生きたくないっていうなら、僕はそれでも良いんだ」

だからウエイバーは自分の気持ちだけを伝える。若し、縛られた命を選びたくないならそれでも良いという思いを。

「そんなこと、言わないでよ」

だが、ミナはウエイバーの言葉に頬を膨らませ、キヤスターの手から「あまりある愛（ソフラーブ）」を引手繰った。

「君は間違いなくウエイバーの重荷になるぞ？ それでも良いのかい？」

キヤスターは最期の警告をする。

「うん、ごめんなさい」

ミナの意志は変わらなかった。ウエイバーに対して、ペこりと頭を下げるミナは振る舞いこそ幼いがそこには断固たるものがある。

その選択を、キヤスターは哄笑と共に讃える。

「素敵だ、子供達よ。君たちの選択、このキヤスターが覚えておく」
そして、試練の旅へと少年少女を促すのもまたキヤスターの声だ。

「往つて来い、少年！」

最後にウエイバーとミナは約束を交わす。また起きたら、頭を撫でて貰いたいと少女が言つて、少年がそれに答える、そんな分かり易い約束を。

ウエイバーとミナは、それが結ばれたのをお互いの笑顔で以て確認し、手に持った薬を一気に飲み干した。

†

ウエイバー・ベルベットは小一時間絶叫を繰り返した後、疲れ果て、眠った。死んではいけない。だが、寝息は荒く、そして一体彼の肉体に

どんな爪痕が残ったものかも、彼を見守る四人には分からない。

「……でも、学校で一晩を過ごすことになるなんて思わなかった」

ライダーが脱いだマントを枕にするウェイバーの寝顔を見ながら、薫はそこだけに不満を漏らしつつ煙草を吹かす。

「成り行きに任せてしまったからね」

「手負いの小僧を戦車に乗せるわけにもいかんからなあ」

サーヴァント二人の意見に、仕方ないかと薫は諦める事にする。このままウェイバーを一人きりで寝かせておくわけにもいかない。他のサーヴァントに狙われる可能性もあるのだ。

……それにしても、何も薫まで起きている必要はないのだが、そこは彼女の意地のようなものだ。

だが、暇と言えば暇であるのも事実だった。

思い立ったが吉日、薫はウェイバーの目覚めを今か今かと待つミナを揶揄い倒して遊ぶことにする。

「ねえ、ミナ」

と、話しかけようとした時だった。薫はミナの異変に気が付く。震えていたのだ。耳を塞ぐようにして。

「……どうしたの、ミナ」

「イヤッ……聞こえる……」

それだけでは、漠としていた為、薫はもう一度訊ねる。

「一体何が聞こえるの？」

すると、ミナは答えた。

「鐘の……音が……」

と――。

第三十五話 崇信裁決

同じころ、冬木教会の地下では、作戦会議が行われていた。

『ライダーの宝具だが、評価はEX（規格外）ということで良いのだね？』

「はい、間違いなく」

王の軍勢の凄まじさについて綺礼から報告を受けている時臣であったが、狼狽の様子はなかった。

依然、未だ変わりなく優雅な振る舞いを崩さない。

『流石は世界を掴みかけた征服王と言ったところ。だが、十分付け入る隙はある』

それどころか、ライダーを讃える余裕すら見せつけ、対策も考えているようだった。

「それは、どのような？」

綺礼が問い掛けると、魔導通信機から短い笑声が返って来た。

『綺礼、“王の軍勢”は固有結界だという話だったが、その展開と維持に掛る魔力はどれほどだと思う？』

「……見る限り展開の際には膨大な魔力の流出が見られましたが、維持に関していえば、そこまで消耗している様子はなかったかと」

固有結界は世界を自らの心象の法則に塗り替える大魔術であるが、その展開と維持には膨大な魔力が掛る。

何故なら、世界には常にその状態にあり続けようとする抑止力が存在するからだ。

例えば、世界を海と例えた場合、固有結界とはそこに水槽を作り沸かした湯を放り込むようなものだ。当然水は温度を一樣に保とうとする為、水槽の外にある海の水の温度で注いだ湯は冷えていく。“湯”という法則を保つためには当然なんらかの方法で水槽の中身を熱し続けなければならない。この湯にくべる熱が、固有結界というところの維持に伴う魔力である。

固有結界の中には自分の肉体のみ、自らが振るう武器にのみに展開されている小規模なものと、文字通り世界を作り出すような大規模な

ものがあるが、大規模であればあるほど、その力が強大であればあるほど展開と維持が難しくなる。

当然だ。水槽の容積が増えれば増えるほど、最初の水槽の熱が高ければ高い程、その状態を維持し続けるのは困難になる。

温度の高さを維持できず下がっていく状態——これは、固有結界に置き換えれば経過時間と共に効力が弱まっていくということだ。

その点で言えば、『王の軍勢』は反則的だと言えよう。維持に掛る熱量が少ないのにも関わらず、維持している温度が極めて高いのだから。

『そう——維持に掛る魔力は少ないように一見感ぜられる。だが、実際はその力に見合うだけの魔力が払われているとしたら?』

時臣の言わんとしていることは、例えば水の中に、予め熱を発する物質が存在している場合の話だ。

『『王の軍勢』はライダーと呼び出された独立サーヴァント全員の魔力で以て維持している』

時臣の出した結論に、綺礼は同意した。

ともすれば、対策は簡単だ。水の中に混入した異物を除けば良い。恐らく軍勢の中の半分もいなくなれば、あの固有結界は維持できなくなるだろう。

『軍勢の中には、救済王や勝利王といった単独でも強力な英霊もいる一方でその殆どがただの雑兵に過ぎない。たった一度でも王の財宝を掃射すれば、それだけで結界を解除できる可能性すらある』

尤も、相手は征服王。そう簡単にはいかないであろうということも、時臣は考えていた。併し、王の財宝の中身に限りはない。そうなった時は有らん限り降らせれば良い。これまでの振る舞いから、アーチャーがそういった行動に出る事は想像に難くないだろう。

軍勢の弱い所から攻め、絶対数を減らし、固有結界維持に掛る消耗を増大させる。そして、ギリギリまで魔力を使わせた所で固有結界を解除させる。こうしてしまえば、マスターのウェイバー・ベルベットが未熟な魔術師なだけあって、連続しての展開が出来なくなる——或いはそのまま枯渇する。

綺礼が事前にアサシンを用いて諜報を行っていた為、時臣は確固たる自信を持ってそう言い切った。

『加えて、もう一つ、これはライダー自身に纏わる部分で、ある欠陥が存在する』

「と、いうと?」

『アレクサンドロス大王は、先陣を切る将だ』

「ああ、成程」

グラニコス川の戦いで、自ら先陣を切りペルシャ軍の将ミトリダテスを投げ槍で倒し自陣の士気を高めたという逸話を始め、イスカンダルは軍の最前列に立つ王である。

これは先の戦いでも史実通りの戦いぶりであることが明白だ。

戦士としては勇敢な姿勢ではあるが、アーチャーとの戦いを想定した場合は無謀の一言に尽きる。軍の後列で指揮をするならまだしも、この位置にいてはアーチャーの王の財宝の良的になるだろう。

もし、アサシンとの戦いのような陣形にアーチャーが置かれた場合には、ライダーを直接狙うように仕向ければ良いのだ。

「……となると、あとの問題はキャスター」

『何かしらの宝具を見せてくれれば良かったが、無いもの強請りをしても仕方ない。キャスターには令呪を以て対処することにしよう』
策を弄することが出来なければ強引に勝ちを狙いに行けば良い。一切合切を完結させる手段がアーチャーの王の財宝の中には眠っている。

「乖離剣エア」。ギルガメッシュの真の切り札たる一振りである。抜かれれば最後、如何なる敵であろうと粉碎可能だ。尤も気位の高い王は、真に認めた相手にしか使わないだろう。故に、令呪を切るのだ。だが、その選択は間違いなく英雄王との関係を決裂させる結果を招く。

それを避けるには、キャスターとの戦闘を最後に回す。そして、キャスターを乖離剣で下し、関係などという問題がなくなった後に最後の令呪を使い、アーチャーを自害させる。

……当のギルガメッシュが聞けば怒り狂いそうな作戦であったが、

不思議と綺礼の耳に怒声が届くことはなかった。

見れば、ギルガメツシユは鏡の中で繰り広げられている出来事に執心しているようで、綺礼と時臣の会話が全く耳に入っていないようだった。

アサシンを嚇けたことで、件の道化の酔いは大分冷めたようだが、未だ前後不覚にあるとギルガメツシユは語った。その時点で興奮ぎめとなるかと綺礼は思ったが、意外にもギルガメツシユはまだ何かあるかもしれないと、固唾を呑んで見守っている。

『無論、これはあくまで理想論だ。他の策も考える必要がある。その中で、綺礼、君の力を借りることになるかもしれない。その時は、頼むよ』

「はい、承知しております」

アサシンが敗退した今、綺礼を教会に匿う必要はなくなった。表立って戦い、魔術師の弟子としての能力と、一流の代行者としての手腕を発揮する時だ。

『……私も工房を出る。直接、自分の目で見れば見えるものもあるかもしれない』

それを最後に、時臣は遑を告げ、通信は切れた。

丁度、その時だった。

「ハッハッハハハハハハ！」

突然ギルガメツシユが、高笑いを上げた。

顔を覆い、半ば呼吸困難に陥りながら、それでも哄笑は止まない。

「……遂に気でも違えたか、アーチャー」

呆れたように綺礼は吐き捨てるが、ギルガメツシユは決して無礼とは受け取らなかった。否、受け取る余裕がない程の「笑撃」が彼を打ち抜いたのだ。

「これが、笑わずにいられるか！ あの道化、戯れに死神を欺き、死神をたたき起こしおったわ！」

「一体、何が起こった？」

「間違いなく、あの道化が目覚めるようなことだ」

結末が知れている講談など聞くに値しないとでも言わんばかりに、

ギルガメツシユは勿体ぶる。

「そうだ、そうと気が付かず獅子の尾を踏み、知らず知らず命懸け。そうして驚き、飛んで、跳ね——本物の見世物とはこうでなければ」

笑劇に対する持論を展開しつつ、強欲な王は鏡の先を見つめる。

怯え、自らに訪れる運命に耳を塞ぐ少女の姿を、嘗め回すように。

†

ふうと、深い溜息と共に、薫は紫煙を吐き出し、煙草を捨て、

「ねえ」

とキャスターとライダーに呼び掛ける。

なんだと返す二人に、薫はミナに起こった異変を伝える。

「ミナが何かに怯えてるみたいなんだけど。 鐘の音が聞こえる」つて」

自分で言いながら鐘の音が怖いなんて場面があるのかと、薫は疑問を抱いた。尤も、世の中には「ピエロフォビア」といって、道化師特有の風貌が怖いと言った症例もあるから、人の恐怖心が何に向かうかは分かったものではない。

併しこの場合、奇妙なのは、怯える対象というだけではないのだ。

「鐘の音なんて聞こえる？」

薫の耳には鐘の音など聞こえていなかった。

ただ、自分が聞こえていないからと言って、ミナを「異常」と決めつけるのはよくない。瘋癲病みが周囲の人間の方を狂っていると決めつけるなどというのは、よくある話である。

況して、薫には視覚と味覚に軽度の障害がある。実は耳もおかしかった——ということもないわけではない。

「鐘？ そんなもの聞こえんぞ？」

だが、如何やら薫の方が「正常」であるようだった。ライダーもそんな音は聞こえないと言い張った。

「聞こえないね」

キャスターにも聞こえない。

「キャスター、薬の副作用ってことはないの？」

薫はそれが原因で幻聴が聞こえている可能性を疑った。

「それはない」

キヤスターは首を振る。

「ダメ……どんどんちかづいてくる」

愈々、ミナの驚惶が収まらなくなり、薫は辟易としキヤスターに目で訴える。困ったように、キヤスターは顎に手を当てる。

そして、暫し考え込むと、

「鐘……もしかしたら……」

何かに思い至ったのか、キヤスターは表情を引き締めた。そして、その瞬間、キヤスターの隣に、一頭の狗が現れた。

その巨体たるや凄まじく、イスカンダルの戦車を引く飛蹄雷牛よりも一回りは大きい。

烏羽色の毛並みは綿のようで、その狂相は否応なく不吉なものを連想させる。

「『死招く黒狗（グリム・バスカヴィル）』」

それは宝具であった。魔術師として正しく教育を受けた者であれば、その身から湧き上がる膨大な魔力を見た瞬間に、黒狗が神獣の類であることを察知出来ただろう。

「……頼むぞ、コルネリウス。僕に力を貸してくれ」

その犬こそ、近代魔術の父とも言われるハインリヒ・コルネリウス・アグリツパが誇る鬼札。

バーゲストやグリムといった名でヨーロッパ各地の伝承に現れる所謂、ブラックドッグ。

魔女たちの女王、新月の女神ヘカターの眷属たる獵犬である。

目撃した者は死ぬと言われ、不吉の象徴である彼等の本質は『死の臭い』を嗅ぐことにある。黒狗に出くわすと死ぬという伝承は多く存在するが一体どのような死ぬのか。それは、『死』そのものを衝かれることに因る。彼等は、生物の死に易い部分を嗅ぎ分け、そこに触れることで、『死』そのものを発現させているのである。

尤も、触れられて直ぐに死ぬわけではない。各地で目撃情報が存在する黒狗の多くは魔獣、極々稀に幻獣の位階に相当する個体がいるか如何かであり、精々その能力は生命活動を弱らせるに留まる。詰り黒

狗による死というのは黒狗そのものが原因ではなく、肉体の弱体化に伴う免疫不全が感染症などを重病化させるような場合が殆どなのだ。

——尤も、真にヘカテーの眷属たる黒狗の場合はこの限りではない。神獣域の黒狗に嗅ぎ分けられた“死”を触れられた場合、即死を免れることはないのだ。

更に“死”を嗅ぎ分ける能力は、“殺す者”の臭いにも作用する。

「■■■■■！」

敢えて言語化することすら不可能な、ただただ不快でけたたましい哮りを上げ乍ら、黒狗はミナへと迫る“死”の在処に疾走する。

何もない筈の空間に、黒狗が牙と爪とを立てたその時だった——

「■■■■■！」

突然、黒狗の腹から血が噴き出したのだ。その場に崩れ、死を届ける不吉な存在はその力を発揮することなく絶命する。

だが、キャスターにはそれで確実に分かったことがある。黒狗を殺したのは斬撃だ。然も傷跡から察せられる刃渡りから察するに恐らく大剣。

そして、分かったのはそれだけではない。ミナに迫る死の居場所もだ。

刹那でそう結論するや否や、キャスターはアゾット剣を空間から取り出す。

「五大元素充填（エレメントフルチャージ）——真エーテル解放」

高密度の賢者の石で出来たアゾット剣はそれ自体が儀式を成す。一瞬でエレメントを作り出し、それを触媒に神代の世界に充満していた真エーテルを疑似的に構成する。

「星を視る、元素使いの剣（カルデアス・アゾット）」

そして、キャスターがアゾット剣に付けた“真名”の解放と共に、凄まじい速さで黄昏色の光が放たれる。

真エーテルは神代以降の生命体及び、物質に対しては猛毒とも呼べる代物だ。当然、直撃すれば崩壊は免れない。

併し、

「ヌウ……」

死の正体は只唸るだけで、特にダメージは見られない。

それでも、キヤスターは良しとした。その正体を白日の下に晒すことが出来たのだから。

「髑髏の……騎士？」

露わになったその姿を、薫はそのように評した。

天を衝くような体躯を覆う黒鉄の鎧、顔を覆う牡牛のような角が生えた髑髏の面は兜のようにも見え、更にその手に大剣を帯びている。その姿は、騎士以外の何者でもなかった。

「何という鬪気だ……」

ライダーは、その見目以上に、体から滲み出る鬪気に舌を巻いた。揺らめく黒い焰の如くに可視化した鬪気は濃密であり、此の者が圧倒的な強者であることを窺わせる。

そこまで考えて、ライダーは此の者が危険な存在であることを認識する。異常なのだ。これほどの存在感を放つ者がここまで近づいて誰も気が付かないなどということは。

咄嗟にライダーは、ミナと薫、そして未だ目覚めない自身のマスタアの前に立つ。

「愚かな」

ライダーの行動を見止めると、髑髏の騎士はアゾット剣から放たれる光線を手にした大剣で「切断」し乍らも言い放つ。

「嘗て墮落と淫蕩の街に神が火矢を放たれた時、そこに暮らす敬虔なる者もまた葬られた。何故だか分かるか？」

髑髏の瞳が、死沼に誘う鬼火（ウィスプ）の如くに青白く燃える。この時、ライダーは久方ぶりに気圧されるという感覚を思い出した。

「墮落を見過ぐしたが故に、だ。糾すことすら辞めるもまた墮落。双角王（ズルカルナイン）よ、そこな百貌を是（ぜ）と宣うならば、そのそつ首もまた我が手に在ると心得よ」

怖気というものがこの世に在るということを、イスカンドルは思い知らされる。

髑髏の騎士は、ライダーがこのままミナを守るといふならば、序で

に殺すと言っているのだ。

だが、それでも引くわけにはいかない。ウェイバーが必死になった命、自分も守らぬと言うならば、イスカンドルたる自分はそこで死ぬ。然う、考えながら剣に手を掛けた時だった。

カアン——と、耳を劈くような金属音が辺りに響く。髑髏の騎士の、片角が折れた。キャスターが手にしていたアゾット剣を投擲したのだ。

「話し合いなら僕が応じようか」

髑髏の騎士が振り向いた先にいた、キャスターは笑っていた。

「……ほう」

だがそれが心からの笑みでないことくらいは、髑髏の騎士にも察することが出来た。

「矢張り、とは思ったけど。君か、山の翁。何の用だよ？」

さらりと問い掛ける言葉に、ライダーは驚く。

山の翁と、キャスターは言った。それが意味していることは詰り、この髑髏の騎士が「ハサン・サツバーハ」であるということ。畢竟、このらしからぬ風貌の男は二体目のアサシンであるということ。

先程倒した、アサシン達とは恐らく別物だろうとライダーは推察する。何故かなどは問うまでもなく、全く格が違うからだ。

「晩鐘の響きを伝えに来た。死するべき者に」

ただ、そう語り、ミナを一瞥する眼力だけでも分かる強さ。ただ鐘の音を聞いていただけで怖がっていたミナは愈々以て発狂し、よく分からない言語を早口で呟き始めた。

「うん、分かった」

そう言って目を閉じ笑うと、キャスターは空間を歪ませ、そこに右手を入れる。

そして、そこから一振りの煌びやかな装飾剣を引き抜いた。その名も「原罪（メロダック）」。総ての選定の剣の原型となった剣である。キャスターはその切っ先を山の翁に向ける。

「お家に帰りなよ、君は疲れてるんだ」

煽りとも言えるキャスターの言葉に、併し山の翁は押し黙った。

暫しの沈黙が流れ――

「崇信裁決（イスラフィール）」

瞬間、山の翁の肉体から虹色の霧が噴出した。

拙い――キャスターはその霧を見るやそう判断し、咄嗟に空中にルーンを描き、風を起こす。

これを他の者に嗅がせてはいけないと、気流を操作し総て自分に集めると――

「……ッ！　これは……」

途端に漠然とした多幸感がキャスターの体を襲う。脳が蕩け、体が緩み、空を飛びながら海に沈んでいくような、足元の覚束なき。

右手に握っている剣の重さすら分からなくなる。否、自分は本当に剣を握っていたかすら分からない。そもそも自分は如何して此処にいるのだろうか。

分からない――ただ、嬉しい。

「……麻薬（ハシン）か」

「そうだ。審判の天使に因り賜りし、本物の麻薬（ハシン）だ」

イスラフィールとは回教に於いて、裁きを知らせるラツパを吹くとされる天使である。基督教に対応させれば、ラファエルに相当する。

そして、ラファエルとは薬師の守護聖人である。

「此の霧は祈りを秤（はか）る。定められし刻限、徒に弄ばんと欲す汝の渴望、真なる也（か）」

その問いに、キャスターは剣を掲げ答える。

「舐めるなアアアア！」

有らん限りの叫びを以て。

それに呼応するかのよう、*「原罪（メロダック）」*の切っ先が光輝く。

そして、キャスターは意志を溶かす虹の煙を寧ろ総て呑み込み、山の翁に迫る。

「*「原罪よ、塵に還せ（シャー・アン・シャー）」*！」

激烈な踏み込みと共に、一步で髑髏の騎士の懐に入ったキャスターは、光輝く剣の切っ先を突き立てた。

第三十六話 ぼくの、最高の友達

死を連想させる禍々しい意匠の具足を、まばゆいばかりの宝剣が貫く。

黒鉄を通し、肉に突き刺さり、刃を伝い血が滴る。

「ヌオオオオツ……」

普通、仮令英霊といえどもそこまですれば死ぬものだが、山の翁は痛がる様子すらなく、寧ろ、刃を掴み無理引き抜こうとする。

拙いと、傍で見ているライダーは息を呑んだ。

「――弾けろ！」

だが、キヤスターがそう叫んだ瞬間だった。

髑髏の甲冑の継ぎ目から、目もくらむばかりの光が漏れ出した。

「グアアアア……」

山の翁はうめき声を上げる。ダメージが入ったのだ。

「今のは、キュロス大王の剣技……」

キヤスターが放った絶技を、ライダーは知っていた。尤も実際に見たわけではない。生前ペルシャ帝国のパサルダガエにあるキュロス二世の墓を訪れた際に、イスカンドルはそこに残された碑文を読んだのだ。その中には、キュロス大王がマルドゥク神の加護を得て手にした愛剣「原罪（メロダック）」と、自身の振るう技についての言及があった。

自身が号した「王の中の王（シャー・アン・シャー）」と同じ名を持つその技は、碑文に曰く、「城をも崩す剣の光を切つ先に集約することであらゆる具足を貫き、そして刃を通すと同時に体内で光を爆発させる」。

これこそ、イザヤ書四十一章に於いて言及される、「敵を塵の如くに散らす剣」の正体である。

詰り「原罪よ、塵に還せ（シャー・アン・シャー）」を食らった人間は内側からの凄まじい威力の為に、塵のように四散することになるのだ。言う間でもなく、大抵の英霊の場合は死を免れない。

併し、キヤスターは追撃の手を辞めない。

「〃无二打・源流闘争（グレンデルバスター・デドリー）〃！」
キヤスターは柄から手を離し、徒手による連撃を放つ。

小柄な少年の細腕から放たれているとは思えない程重い拳。一打、一打が黒の具足を砕くほどの乱打。然も、ただ剛拳というわけではない。キヤスターは中国拳法の理論を織り交ぜ、自身の五体から〃氣〃を流出させ、一帯を満たしている。〃氣〃に呑み込まれた状態に於いては、中国医術で気や血液を体内で循環させている通り道——所謂〃経絡〃が乱される。そこに拳での一撃が加われば、意図的に暴走上体を引き起こすことが可能となるのだ。

端的に言ってしまうえば、気で相手を呑める程の達人に一打を浴びせられると、即死する。尤も、キヤスターの拳撃の技量はそこまでの極地には至っていない為、精々が致命的な一撃となるか、即死の危険を孕むといった程度の攻撃でしかない。

だが、それが乱打であれば話は別だ。死ぬ確率は大きく跳ね上がる。その上、肉体強化の魔術で膂力そのものが向上しているのだ。それこそ、山の翁を今襲っている一撃は、カインの末裔〃巨人グレンデル〃を撃退したベオウルフの白打に比する。

「ウルアアアアアッ！」

頸が爆裂するほどの叫びを上げ乍ら、キヤスターは止めの一撃を放つ。小惑星が衝突したかのような威力が髑髏の騎士の胸元で爆発し、そしてそのまま柵を押し破りながら空中へと投げ出されていく。

「やったか？」

ライダーは誰に問うでもなく、声に出した。

「いや」

それを問い掛けと受け取ったキヤスターはそう言いながら、また新たに二振りの剣を召喚した。

一振りは、虹を刃の形に押し留めたかのようにも見える機械の柄を持つ奇妙な剣であった。そしてもう一振りもまた奇妙だ。その刃は、熔解した鉄が冷えることなく剣の形に変じたように見え、それでいながら、刀剣特有の凛烈な鋭さも兼ね備えているようにも見えた。拵えは宝玉が散りばめられ絢爛。

ライダーはこの一振りを知っていた。この一振りこそ、イスカンダルが崇め敬う英雄が一人の愛剣であったのだから。

然う——これこそオリンポス十二神が一柱へフアイトスに鍛えられし名剣。後にギリシヤを離れ、騎士王アーサーの手にも渡った、大英雄ヘラクレスが誇る最強武装の一つ。

「マルミアドワース……ッ！」

畏れから、ライダーはその名を知らず知らずの内に口にすると、それと同時に疑問が湧いた。

「貴様、どうしてそれを持つている？」

普通に考えれば、キャスターの正体はヘラクレスかアーサー王に縁のある英雄ということになる。だが、その一方で先程、キュロス大王の「原罪（メロダック）」を振るつたという事実がある為に、それは考えられない。さらに言えば、ザッハークやロスタムに由来する霊薬に、あらゆる契約を破棄する短剣、最初の戦闘で展開した劇場、そして何度も披露しているアゾット剣など一サーヴァントが持つには宝具の数が多すぎるのである。

然も、アーチャーのようにただ投げつけるだけでなく、何か欠けている印象こそあれ使いこなしている様子すらあるのだから最早何が何だか分からない。

「ごめん、それを論じている暇はないんだ」

だが、ライダーの疑問を、キャスターはけんもほろろに突っ撥ねた。「今すぐ、皆を連れて、逃げて」

焦燥とした口調でキャスターはライダーに振り返る事無く、ただ破れたフェンスの先を見つめている。

最初、その頼みの意図が分からなかったライダーだったが、直ぐに理解することとなる。

「……是で終わりか？」

全身の血液が凍結するような声で齎された問い掛けの先に居たのは在り得ない者だった。山の翁である。キャスターの空拳を受け、転落した山の翁が剣を片手に校舎の壁をよじ登ってきたのだ。

流石に在り得ない。ライダーは冷たい汗が全身からどつと吹き出

るのを感じる。ライダーの見立てでは、キュロス大王の剣技で一回、乱打の中で計三回、山の翁は死んでいるのだ。

……死んでいる筈なのだ。なのに、何事も無かったかのように、髑髏の騎士は二騎のサーヴァントと相対している。

「我が信仰に伏臥は無く、退却も非じ。ただ、神託の下、孜々と首を求むるのみ」

疑問を察し、それに応じた山の翁の言葉はまるで理屈が伴っていないかった。

神を信仰している。そして、その神は死するべくして死ぬ者を殺せと言っている。だから少なくともそれを成すまでは死ねない。だから死なない。

そんなものは理不尽でしかない。気合で生きていっているとやっているのと同義である。

「解したとあらば、路傍に退くが良い。百貌の首を差し出せ。さもなくば、汝らの頭上にも晩鐘が鳴ろう」

晩鐘——それは黄昏を告げる寺院からの響き。それは、人々に葬送の時を告げる死の訪れでもある。

薫は震えるミナの肩を寄せ、そして理解する。

ミナが恐れた鐘の音とは畢竟、死の運命なのであろう。山の翁は死する運命にある者の首を刎ねる見た目通りの死神だったのだ。

享受すべき死を受け入れないというのならば、邪魔立ても許さず、情け容赦なく殺す。否、彼の言葉を汲めば、そんな邪魔だてすらも、神は墮落への迎合と忌み嫌い、序でと言わんばかりに殺せと命ずるのだろう。

「キヤスター……」

薫はそう呼びかけキヤスターを見つめる。感情の振動が、自分でもよく理解出来た。

「と、いうわけだ。僕らとしてはミナを死なせるつもりも、ウェイバーの思いをドブに投げ捨てる気もないからおじいちゃんにはなんとしても折れて貰わないといけないわけだ」

詰る所、諦めるまで戦うしかないということ。

キヤスターが嘆息しながら言ったロジックはライダーにも理解出来た。

「そんなことは、言われるまでもない。だが、小僧の蛮勇に報いたいという意思は余も同じ。ここで退くわけにはいかん」

何もキヤスター一人で戦う必要はない。ライダーとてこの世に雷名轟きし征服王。守るべき誇りと意地がある。だが、それでもキヤスターは首を横に振った。

「君と僕が二人掛りで暴れたら、ミナ達を巻き込むし、もし二人でやって共倒れになったら誰が守るって話になるだろ」

「正直まるで底が見えんが……あれは、そこまでなのか？」

「無事ではいるには、残りの三騎士の皆の力も必要になるね」

無限の宝具を持つアーチャー。そのアーチャーの投擲を総て凌ぎきるだけの技量を持ったバーサーカー。聖剣の担い手たる騎士王アーサー。そして、絶対零度の龍牙を振るう関羽雲長。この三人の力も加わり十全の力を発揮し、それで漸く無事が保証される。

それだけに山の翁は強大な存在なのだ。

「……何せ、あの山の翁はサーヴァント召喚の元となった決戦魔術で呼び出される原初の七柱。グランドサーヴァントの一角だからね」

ライダーはその真実に驚愕することはなかった。寧ろ、出鱈目な生存能力にもそれで合点がいった。

グランドサーヴァント。これは人類史が続く限り発生し続ける自滅因子への対抗策として生み出された、特に強力なサーヴァントである。

サーヴァントとは元となる英霊をある程度再現したものであるが、グランドサーヴァントはその再現度がより高く設定されている。例えば、同じ格の英霊のサーヴァントとグランドサーヴァントが戦った場合、グランドサーヴァントの方が圧倒的に強い。

文字通り「器」が違うのである。

「……逃げるしかないか」

「頼むよ」

キヤスターは笑顔をライダーに残し、グランドアサシンへと疾風怒

濤の突撃を敢行した。先程、アゾット剣を用いた真エーテルの砲撃を試みた際に、山の翁は真エーテルそのものを完全に「殺し」、攻撃を打ち消していた。そこでキャスターは彼の大剣ないしはその剣技があらゆる概念を殺す宝具であると予測したのだ。

であれば、山の翁を放置してはおけない。ライダーが戦車を出そうとしても、「出す」という行為そのものが「殺される」可能性があるからだ。

「でやッ！」

一歩で間合いを踏み殺し、キャスターは二つの剣を山の翁の胴と首へ振るう。

本気で殺（と）りに行く気で。

「フンッ……！」

自身に降りかかる必殺の双刃を、山の翁は難なく受け止める。

キャスターの行動の意図を理解していたライダーはその瞬間を見逃さない。キュプリオトの剣を一閃させ、ゴルディアスの縄目を解き放ち、「神威の戦車（ゴルディアス・ホイール）」を召喚する。

辺りに紫電が走り、屋上の一部を瓦礫に変えながら登場した戦車に、ライダーはウエイバーとミナと薫を一偏に担ぎ上げ搭乗する。

「武運を祈るぞ、キャスター」

「死なないでね」

薫とライダーのキャスターへの激励を残すと、二頭の神牛が牽く雷の戦車は夜天に高く、どこまでも高く疾走する。

キャスターはそれを見送ることはなかった。気を抜けば、山の翁に首を刎ねられかねない為、そんな余裕はなかったのだ。

現に、山の翁の大剣は今も二つの宝具ごとキャスターは両断せんとし、凄まじい力が掛っている。

——このままでは拙い。

キャスターは状況を好転させるべく、足で地面を打ち鳴らした。此れは所謂モールス信号である。もっと言えば、簡易的な音魔術である。その効果は捕縛。

だが、即興で編み上げた魔術はいくらサンジェルマンを語ることが

出来るほどの技巧を誇るキャスターといえども弱いものでしかなく、況してそれを掛けた相手はグランドアサシンである。

拘束時間は一合持つか否かだ。併し、その時間があれば、十分な間合いを取ることが出来る。

キャスターは後退し、その位置から攻撃に移る。

「〃射殺す百頭（ナイン・ライブス）〃！」

双剣が成す、九つの斬撃が山の翁に叩き込まれる。ヘラクレスがヒュドラを無数の矢で射殺した逸話の再現である。九つの首を持ち、幾ら落としても再生し、然もそこからまた新たに首を増やす怪物を、ヘラクレスは死ぬまで何度も殺すことで討ち取ったのである。

本来は弓の技であるが、ヘラクレスはあらゆる武器で放つことが出来る。無論、愛剣〃栄光冠す灼鉄の刃（マルミアドワーズ）〃でもだ。然も、〃栄光冠す灼鉄の刃〃は鍛冶を司る神、ヘファイトスが持てる技術を尽くして打った剣であり、液体化した超高温の金属でありながら刃としての鋭さを持つという矛盾を両立させた宝具である。液体でありながら打ち合いが成立する剣は、高熱に触れ続けるといった状態を成立させることが可能である。これが意味することは、打ち合った剣に対し熱を送り続けることが出来るということ。そんな状態になった武具は容易に熔解する。そうでなくとも、本来の担い手であるヘラクレスの剛腕と合わされば、余程高ランクの宝具でもない限り破壊される可能性があるのだ。

無論、キャスターはヘラクレスではないから、武具の真骨頂も技の威力も発揮することは出来ない。それでも、片手に持ったもう一つの宝具の威力とも合わせ、ヘラクレスに並ぶことが出来る。

死なない山の翁でも、流石にただでは済まない。

だが、それも刃が総て通ればの話だ。山の翁は一瞬で叩き込まれる無数の斬撃を総て大剣で受け流したのである。

然も、剣は〃栄光冠す灼鉄の刃〃の熱に晒されたにも関わらず、鎔けた形跡が見られない。

「なッ……!?!」

「愚かな」

驚愕するキャスターにそう吐き捨て、山の翁はキャスターの両手首をあつかりと切断する。

手首ごと、二つの剣が宙を舞った。

「ただの模倣がこの身に届くか」

形だけをなぞった技など通じない。山の翁はキャスターに己の力を誇示することもなくただ、指摘した。

確かにその通りかもしれない。ただ真に迫るだけの贗作ではこの強大な敵には太刀打ち出来ないかもしれない。

だが、それでも……

「舐めるなッ！」

キャスターの目はまだ死んではいなかった。

瞬時に飛ばされた剣の内、虹の刀身を持つ方を口元に転移させ柄を銜え、山の翁の腹に切っ先を突き立てた。

「オ……オオ……」

幾許か苦しそうな唸り声を上げるが、直ぐに山の翁は大剣でキャスターの首を薙ぎに行く。

自信に突き刺った刃を抜こうとも思わず、何の躊躇いもなく、キャスターを殺すことを優先させる胆力は凄まじいの一言であった。

だが、山の翁は気が付いていない。その剣が、嘗て遊星から飛来した巨人が軍神から奪い、そして幾星霜を経て大陸を支配する馬賊の王の手に渡ったものだということに。

「涙の星、（ティアードロップ）……」

夜空に魔法陣のようなものが浮かび上がる。月を覆うように、赤く輝くそれは砲台だ。軍神は、己の剣を奪った者への恨みを忘れていない。そして、剣の在処こそが怨敵のいる場所に他ならない。

これより降り注ぐは、軍神の剣を起点にした怨讐の号砲である。

「軍神の剣（フォトン・レイ）……」

瞬間、剣の本来の持ち主に怨みを抱く神々の怒りが光の柱として顕現し、校舎ごとキャスターと山の翁を呑み込んだ。

夜闇が一瞬、白むほど明るくなり、そして光が晴れると、校舎は瓦礫の山となっていた。

軍神の剣の本来の担い手である馬賊の王は、涙の如き神の怒りが滴り落ちるその場所を剣からある程度ずらし攻撃手段とすることが出来るのだが、キヤスターが使う場合には本当に剣の真上となる。

詰りは実質の自爆技である。だが、そんなことはキヤスターには関係なかった。

「ノオオオ……」

瓦礫の中からうめき声を上げつつ、キヤスターは自身に覆いかぶさったコンクリート片をどける。

そして、ふらふらと立ち上がると、今度は瓦礫の中に埋まった自分の手首を手元に転移させた。

キヤスターが仮の名として語ったのは不死の怪人サンジェルマンである。死なない者を名乗る以上、それに値する能力を持っていて当然なのだ。

——でも、山の翁も生きてるな。

瓦礫の中から未だ姿を現さない髑髏の騎士であったが、あれで死んでいるとは到底思えなかった。

それを考えキヤスターは空間からオルフェウスの琴の弦のみを取り出し、それを口に銜え巧みに操りながら切断された手首を縫合する。

山の翁に切断された傷は治癒魔術を阻害する呪いが掛けられていた。故にキヤスターは治癒を諦め縫合することを選んだ。手が無ければ剣を握ることも適わない。飾り物でもあった方が良くに決まっているのだ。

動かす方法はキヤスターの手札の中にいくらでもある。

「フン。神の裁きといえど所詮は紛い物。我、斃すに能わず」

キヤスターの予想通り、山の翁が姿を現した。鎧が多少砕けているが、戦闘不能には程遠い外傷だった。

故に翁は当然、剣を取る。キヤスターに天命は下っていない。だが、百の貌のハサンの残り香に、まだ天命が下っている以上は必ずや首を断たねばならない。併し、目の前の魔術師はそれを許す気が無い。ならば、動けなくなるまで傷つけるしかないのである。

真なる麻葉（ハシン）を前にしても、意思を貫き続けるキャスターの信念を思えば、山の翁としては戦いを避けたい。だが、避けられない以上は戦うしかないのだ。

「……悪く思うな」

山の翁はそう言いつつ、空間から自身の巨躯すら覆つてしまうほどの無骨な意匠の大盾を取り出し、再び剣を構える。

この姿こそ山の翁の全霊なのだろうと、キャスターは踏み、自身も本気を出すことを決意した。

「カバフアクアファイキジュテブククチ

ジオテヅクポダジヨジャクアフィドタヂジュテブ」

詠う、人ならざる言葉で。

キャスターは一つ、山の翁に感謝しなければならないことがあった。先程手首を切られた痛みが切っ掛けとなり、キャスターはまた記憶を取り戻したのだ。

そのお蔭でキャスターは、自身の本当の切り札を使えるようになった。

「ボトイファツタプタエタバキジヨトドフチクテヅクアファイ

ファバデコクオクオタウキフオイボクエコクオコフアウ

タトコイクエキイチデコプファイタダウチジャジヨデクアウボファイ

タヂジヨクエジクジエ

ボフオイジヨクオジエククテツ

タオデクエトコエタアコクオクオフィクオクオクオオクアクア

タアタダアツイツ

クアタダキオコクツジヨヂケタアトイ」

殆ど発音不能のこの言葉は天使の言語だ。

マグダラのマリアは処女懐妊を天使に告知されたとされたがそうではない。逆だ。天使が告知したから受胎したのだ。天使の言葉は結果を齎す。

嘗て、世界の言葉が統一されていた頃の言語に最も近い、キャスターが操る本当の魔術である。

「グコフオツコアアトイクオジヨクアクイ」——キトコクエボクイタ

「ダ！」

最期の詠唱をキャスターは一気に結ぶ。

瞬間、空を無数の刀剣が埋め尽くした。それだけではない。槍も在り、斧も在り、戦車や馬、船に幻獣の類までもが在る。それは、まるで山の翁を閉じ込める檻のようであった。

「……成程、是が汝の宝具か」

「そうだ」

キャスターは答え空を埋め尽くす無数の武具の中から赤い槍を呼び寄せ、構えた。

「僕の本当の切り札。対座宝具『ぼくの、最高の友達（イネーウィータービリスIIサギツタルーミニス）』。座にアクセスし、其処にいる英霊から直接宝具を借りる」

正確には召喚魔術であった。英霊と直接交渉し、宝具を使用可能な状態にした上で、キャスターが使用する、反則級の大魔術である。

尤も、この魔術の消耗は馬鹿にならない。これは宝具の召喚と実際に扱う上での真名解放の両方に魔力を必要とするからだ。彼が本当に薫からの魔力供給で現界しているならば、一つ宝具を召喚しただけで薫は枯渇している筈だった。

一体その魔術をどこから持ってきているのか？

山の翁は疑問を抱くが、キャスターに答える気は無かった。

「さあ、掛って来い山の翁。何度死ねるか試してみろ！」

最早、彼の頭の中が山の翁への敵意のみだったが故に。

第三十七話 少年覚醒

「幾度死ぬるか……か」

山の翁は、キャスターの啖呵を繰り返した。

大言壮語の類ではない。本当に山の翁が厭というまで、殺し続ける

——キャスターの言葉に嘘偽りはなかった。

故に、山の翁は答える。

「良いだろう」

鈍重そうな甲冑姿の巨軀からは想像し難い、高速での接近と共に。

「但し、心せよ。嘗試汝にも課される」

剣の一振りですて、山の翁はキャスターに、何度も殺すと宣言した。

キャスターは剣を朱槍の石突で流し、刺突と共に言葉を返す。

「嗚呼、勿論。何度だって死んでやろう」

山の翁は大盾で迫り来る穂先を受け止める。キャスターが持つ槍は神代の海獣の骨を削り作り出したケルトの英雄が振るう槍であり、ランクBの宝具である。

併し、大盾は傷ついた様子すら見せない。この盾は銘を、〃狂信天恵(ジブリアル)〃という。山の翁の決して砕けぬ信仰が染み付き、その結果、不破となっている。なんのことはない——元はただの盾である。

恐ろしきは、妄念を宝具化させるほどの、山の翁の信仰心である。

そもこの山の翁とは暗殺教団の開祖——詰り本質的な意味でのハサン・サツバーハその人であり、以降暗殺教団の長となりハサンを襲名した者達の審判を担ってきた人物である。暗殺という行為は神の信仰の元正しいとはいえ、人の道からは外れていることもまた道理。故に、山の翁は教団の腐敗を恐れた。腐敗とは、力の衰えであり、また己が信仰の屈曲であり——逃れ得ぬ殺害と死の運命からの逃走である。教団が腐敗した時こそ、神の名の下ですら間違いであったと証明される時であるとし、また腐敗を裁くことで歴代のハサン達が許されるようにと。

故に、山の翁はミナを——百の貌のハサンを殺そうとしている。こ

れは憤りが故であり、慈悲が故でもあり、また神が故にである。

ならば「狂信天恵（ジブリール）」は砕けないだろう。盾の性質が山の翁の信仰心を反映している以上、天啓が生き、また山の翁がその通りに成そうとしている内は彼の内なる炎は一層燃え上がる一方なのだから。

それを察し、キャスターは盾を回避することを試みた。

「刺し穿つ死翔の玄鳥（ゲイボルグ・トライエツジ）」！

そう、呪いの朱槍の真名解放である。この槍には「心臓を貫く」という結果を作ってから、槍の軌道という原因を後付けする「刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルグ）」という技が存在する。だが、これはケルト神話に輝く勇士クーフリーンにのみ許された技だ。彼に槍を授けた影の国の女王ですら、この槍は完璧に再現出来ず、双槍を用いたのだ。キャスターに完璧な再現が出来る是非は無かった。精々が心臓の辺りに命中する、といった程度が関の山である。

——ただ、衝くというだけならば。

併し、キャスターはここにアサシンを倒した秘剣「燕返し」を織り交ぜた。ほぼ同時のタイミングで、別位相から三つの斬撃を叩き付けるこれと「刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルグ）」が合わされば、三つの心臓を狙う攻撃が山の翁に襲い掛かることになる。

「ヌウツ……」

山の翁は同時に襲い掛かる三つの槍の軌道の内、二つを剣で、一つを盾で払おうと試みる。併し、剣は空を切り、盾は意味を成さなかった。槍が鞭のようになり、剣と盾を躲したのだ。心臓に命中する結果が既に存在する以上、何者もそこに介入することは出来ないのだ。

「グアツ……」

三つの槍が山の翁の胸部を貫く。伝承に曰く、肉体に突き刺さったゲイボルグは、無数の棘となり、体内で炸裂するという。山の翁の心臓は確かに貫かれた筈だった。

併し、

「オオオツ！」

山の翁は痛みを怯むことも、五体に刺さった槍を抜こうと逡巡する

ことすらもなく、キャスターの首を薙ぎにいった。

幾許かの隙が出来る事を想定していたキャスターの首は、敢え無く断絶。だが、

「調子に乗るなよ。君が死なないなら、こっちは死ねないんだ」

頸を落されながらも、キャスターの意志も未だ折れてはいなかった。それどころか、今度は手中に「薪」を収め、

「『妄想心音（ザバーニーヤ）』って知ってる？」

と、山の翁に問い掛けた。

愚問——というより他なかった。山の翁が、いや、山の翁こそ知らない筈がない。ハサン・サツバーハの名を継いだ、歴代の暗殺教団の長は自身の肉体を改造し、自分だけの暗殺技巧を持つ。というよりも、それを持たない限りはハサン・サツバーハの名を受けることは出来ないのだ。

それらは全て「死の天使（ザバーニーヤ）」と称される。妄想心音もその内の一つだ。自身の肉体に継ぎ足した悪性の精霊の腕を用い、相手の体に触れ、疑似心臓を作り出す。疑似心臓は本物の心臓と共鳴しており、握りつぶせば本物の心臓も潰れる。

そういった技だ。

——だが、その薪と何の関係があるという？

山の翁が疑問を抱くと、キャスターは「薪」を粉々に握りつぶした。

刹那、答えは導き出された。山の翁の肉体が砕けたのだ。

「ヌアアツ……」

痛みに苦悶を上げ、山の翁は剣を落した。その隙を見て、キャスターは槍を離し、落ちた首を拾い上げ後退する。

キャスターの言葉はあくまでたとえ話であった。実際にやったことは、余程性質が悪いものである。

メレアグロス——カリユドンの猪退治で知られるギリシヤの英雄である。彼は生まれて間もなく、三人の運命の女神（モイライ）から予言を受けることとなる。曰く、貴き者となる、無双の勇者となる、そして炉にくべた薪が燃え尽きるまでは生き続けると。母アルタイ

アーの手によって薪は燃え尽きる前に炉から取り出され、以降、メレアグロスは死なずの英雄となった。彼の命を救った母親自身の手で、薪が再び炉にくべられるまでは。

先程、キヤスターが握りつぶしたのは、その薪だった。メレアグロスの命と連動したこの薪は潰されれば忽ち、メレアグロスを亡き者とする。併し、それだけの力しかない。山の翁は殺せない。

だが、実際には山の翁の肉体は崩壊している。これはどういうことか。簡単だ。山の翁に、”メレアグロス”の名を付与したのである。

名前は体を表すと言い、日本神話に於いては名を新たに授けられた神が新たな力を得、また名を失った神が力を失う様子が描かれる。キヤスターがやったのはこれだ。

メレアグロスの名を重ねられた山の翁は、薪を潰され致命的なダメージを負ったのである。

だが、それでも尚、山の翁の信念は折れず。自身に突き刺さったゲイボルグを無理矢理引き抜き、

「フンッ！」

キヤスターに投げつけた。肉体は崩壊している筈、ゲイボルグは体内で無数の棘となり引き抜くにも想像を絶する痛みを伴う筈——だが、山の翁は肉体にかかつていた負荷が嘘であったかのように反撃を行う。

投じた槍の威力と速度は、ステインガーマイスイルと同程度。

キヤスターは取りあえず切断された首を、金輪の宝具で繋ぎ、別の槍を手元に呼び寄せ、ゲイボルグを叩き落す。

魔銀（ミスリル）で作られた、大盾と見紛う穂の付いた槍で。

その間にも、髑髏の騎士は剣を拾い、キヤスターへと猛進する。先程受けた肉体の損傷が嘘であるかのように、速力に陰りは無い。

それに対しキヤスターは、

「死がふたりを分断つまで（ブリュンヒルデ・ロマンシア）“！”
宝具の真名解放を以て応じる。

戦乙女の持つ槍は対象に抱く愛の大きさに応じ、そのサイズと重量を膨大させる。然して山の翁に振るわれる槍は、雑居ビル程度の大き

さに膨れ上がっていた。

槍の穂先が翁を襲う。 “狂想天恵（ジブリール）” でそれを受け止める。

盾には傷一つ付かず、また直接的なダメージも負わなかったが、体重差により山の翁は五十メートルほど後方に吹き飛ばされる。

距離が開いた。それを見て、キャスターは次の攻撃に転じる。

天を埋め尽くす宝具の中から弓を一つ手繰り寄せた。引き絞れば引き絞るだけ番えた矢の威力を上げる “天穹の弓（タウロポロス）” という宝具だ。

番える矢は “死がふたりを分断つまで（ブリュンヒルデ・ロマンシア）”。重さを保ったまま、自身の魔力を以て圧縮し、矢のサイズにまで持つて行く。

弦を最大まで引き絞り、肉体に強化魔術を何重にも施し、超重の矢を以て漸く再現するは、東方の大英雄が絶技。国境を築き上げた救世の一矢。

「流星一条（ステラ）アアアアツ！」

学校の運動場の土総てを裏返しながら、瓦礫を羽根の如くに巻き上げ乍ら、襲い掛かる矢の一撃。

それと同時にキャスターの肉体が崩壊を始める。矢を放つだけの力を込めた際に生じる負荷が大きすぎたのだ。だが、ここで倒れるわけにはいかないと、キャスターは崩れる体を治癒魔術で無理矢理繋ぎ止める。

だが、それだけの対価を放った一撃である。リスクが高い分リターンも大きい。放たれた一矢は、その衝撃波により宝具で取り囲んでいた学校の敷地一帯総てを呑み込んでいた。矢が直撃すれば山の翁といえど一溜りもない。おまけに、矢そのものを躲しても威力に巻き込まれる為、実質逃げ場がないのと同じだ。

山の翁の信仰が染み付いた盾であっても凌げる確率は低い。

ならば――

「死告天使（アズライール）！」

山の翁は受けて立つことにした。

盾と同じく自身の信仰心を以て、宝具の域まで練り上げた裁きの大剣。死を齎す彼の在り方を投影し、この剣は死そのものとなっている。

故に、この剣はあらゆるものに死を与える。

山の翁の大剣が成す斬撃の乱舞は、威力ごと、矢となった槍を一片も残さず殺した。

「……流石に目を覆いたくなるね」

必殺と思つて放つた一撃すら、ゆるりと片づける山の翁を見て、キャスターはそう口を吐いた。

正直、ここまでの強敵であるとは想定もしていなかったのだ。

「諦めるか。ならば、道を譲れ」

髑髏の奥の目が赤く光る。敗北とは即ち、命を掛けて守りたいものを手放すこと。山の翁はそう告げている。

ふふと、キャスターは笑った。

同時に、山の翁を三匹の巨獣が取り囲んだ。それぞれ、獅子の体と人面を持った奇怪な獣だ。それは砂漠の旅人へと試練を課す存在。王の墓を守護する神獣。恐怖の父（アブホール）とも呼ばれる伝説の獣「スフィンクス」である。

「……これが答えか」

「悪いな。こればかりは譲れないんだ」

困つたような笑みを返す、キャスターに山の翁は痛恨とばかりに頭を振った。

「無益、あまりにも無益……」

譲れない想いと譲れない信仰。それらは決して相容れぬ。ならば、このまま二人は剣を交えるのみ。

それが何合続くか、千日で終わるかは分からない。永劫続いて修羅となり果てるとも思われる。

それを思えば、無益としか言えなかった。

†

神威の戦車を末遠川の辺りまで走らせるとライダーは地上に降り立った。

長距離の移動は毒を飲んだウェイバーの体に負担を掛けると考えたからである。

ライダーは御者台に乗る他の者を見た。ウェイバーはまだ目覚めない。薫はいつものあつけらかなとした調子は何処へやら、不安に顔を曇らせている。ミナは未だ震えている。

「安心せい。此処まで来れば彼奴も追っては来まい」

ライダーは豪笑しながら、ミナに声を掛ける。だが、ミナは震えたままであった。それもその筈だ。ライダーの言葉はただの気休めのだから。

あの髑髏の騎士が一体如何いった存在なのかは分からないがそれでも一筋縄でいかないことくらいはライダーにも理解出来た。

そもそも、山の翁が一体何処から来たのかすら分からない。若しかしたら、今自分達が立っている場所から遠く隔たる地よりミナの天命を察し、ここまで遣って来たのかもしれない。何か超常的な移動方法で以て。

だとすれば、安全な場所などどこにもないのだ。

そう思うとライダーの表情は自然と曇った。どう対処すれば良いか、策がまるで思いつかない。愈々、袋小路に詰まりかけたその時だった――

「お兄ちゃん！」

突然、震えていた筈のミナが弾んだ声を上げた。顔には希望の光が差している。そして、ライダーは次に頭痛に頭を抱え、仏頂面を見せる自分のマスターの姿を見た。

「おお！ 小僧！ 気が付いたか！」

ライダーは雄叫びを上げ喜びを表す。

だが、二人の歓喜をよそにウェイバーは困惑したように辺りを見回す。

「ミナ、ライダー？」

まるで何かを探しているような様子に薫は察した。

「もしかして、目が見えないの？」

ライダーはハツとし、

「そうなのか？」

とウエイバーに訊ねる。ミナも不安気な顔でウエイバーを見つめた。

するとウエイバーは苦笑する。

「イヤ、ちよつとは見えてるから。大丈夫」

そう答えたはしたが、見えていても一寸なのだろう。御者台という短い距離すらはつきりしていないのだから。

キャスターの霊薬はウエイバーの目を破壊していたのだ。

だが、ウエイバーはそれを悲観することはなかった。寧ろ、笑ってミナの頭を撫でた。

「それに、ミナがいる。僕の代わりにミナが見て伝えてくれれば良いんだ。全然問題ない」

試練を乗り越えた為か、ウエイバーは少しだけ大きく成長しているようだった。これが平時であればライダーは喜んだだろう。でも、今はそんな余裕も無かった。

そんなライダーを少し訝しみつつ、ウエイバーは自分がいる場所となければいけない者が一人掛けていることを確認し、此処にいる三人に問い掛ける。

「キャスターは何処だ？」
と。

躊躇いつつも、三人は先程何が起こったのかをウエイバーに説明した。それを聞くと、ウエイバーの顔は義憤に燃え上がり、

「馬鹿野郎！　なんで置いて来たんだよ！」

怒鳴り声を上げた。

そして、一も二もなく御者台から飛び降り、ウエイバーは走り出そうとした。併し、ウエイバーの体は大きく泳ぎ、その場に倒れた。

「畜生ッ……！」

ウエイバーの顔は血と悔しさに塗れた。

悪竜の血液に含まれる毒素は、ウエイバーから歩行機能まで奪っていたのだ。だが、それでもウエイバーは這い蹲って進もうとする。盲になり掛けているから、何処に向かっているかすら自分で分からない

のに。

「止せ、小僧！ 行って如何なる！」

見かねてライダーも御者台から飛び降り、もがくウエイバーを止めようとする。

「離せライダー！ アイツはミナを助けてくれたんだ！ なのにここで逃げていいわけないだろ！」

「余の話を聞いておらんかったか！ ヤツは……」

「ビビってんのかよ」

ライダーの次を遮ってウエイバーは断じた。

「何？」

ぴくりとライダーの額が引き攣り怒りが滲む。だが、ウエイバーはそれを見ても迷わず睨み付けた。

「だってそうじゃないか！ 偉そうなことばつか言ってる癖にさ！」

お前、そんな髑髏一人にビビってんだよ！ そんなんで世界を取る？

ふざけんな！」

ライダーは目を見開いた。ウエイバーは見るからに満身創痍だ。第一、ただの人間だ。にも拘らず、どうしてここまで啖呵を切れる？

山の翁を知らないから？ 否、違う。恐れよりも、恩人を助けたい気持ちの方が強いからだ。

「お前みたいな役立たず、いるか！ 僕一人でだって助けに行くからな！」

ライダーは苦笑した。

まさか、ウエイバーに気が付かされるとは思わなかった。征服王イスカンダルは山の翁を恐れ、尻尾を巻いて逃げたという事実。そこから目を背けていたことに。

成程、確かに、山の翁は強大だが、世界に比すれば如何ということはない。

況して、自分は征服王。多くの勇者を友とし束ねる王だ。ならば、友を救う為に命を掛けるのも当然だ。

呵々とライダーは笑った。そして、ウエイバーの首根っこを掴み、御者台に投げた。

「痛ッ！ 何すんだよ！」

「全くボロボロではないか。よくそんな様で、このイスカンドルを役立たずと言えたもんだわ」

ウエイバーが怒鳴り返そうとするとイスカンドルは御者台に跨り手綱を取った。

「ライダー？」

「行くぞ。余がおらんと、貴様何も出来んだろう？」

ニイとライダーは齒を見せつけてウエイバーの肩を抱いた。

その力強く、また暖かい大きな手で。自然と、ウエイバーの目からは涙が伝っていた。

「……馬鹿野郎。出来るならさっさとそうしろってんだ」

憎まれ口を叩くウエイバーは、けれど小さな声で続けた。

「ありがとう」

と。

「……礼なら我らの友を助けてからにしろ」

ライダーは優しい気な声を返すと、神牛を走らせる。

再び闇夜に向かって。

第三十八話 君の名は。

熾烈なる戦いは続いていた。

キヤスターが召喚したスフィンクスや竜は打ち倒され、攻撃に使用したファラオを乗せる太陽船やギリシャの英雄たちと共に数々の伝説を打ち立てたアルゴー号は残骸と化していた。

戦車の類も殆どが破壊され、地に突き刺さる武具は刀剣、槍、斧と出自の違うものが様々。

こんな出鱈目な戦い方をしているにも関わらず、騒ぎになっている様子はなかった。キヤスターが展開した宝具が結界の役割をし、人々の認識を阻害していたからだ。

故にどのようなことが起ころうと騒ぎになることはない。

「『栄光の空中庭園（グロリアスガーデンス・オブ・バビロン）』」

—— 仮令、上空から巨大な建造物が墜落しようとか。

あらゆる武器を使い、それでも山の翁には通じず、その末にキヤスターは遂に建造物を直接ぶつけるという荒業に打って出た。

アブラハムの宗教に於いて、バビロン捕囚の主導者として知られるバビロニアの王ネブカドネザル二世。彼がメデシアから王妃を迎え入れる際に彼女を喜ばせるために作ったと言われる空中庭園である。

実際に現存した空中庭園は宮殿内に建てられた階段上のテラスが遠目に見ると宙に浮いているように見えただけの代物ではない。併し、宝具化するに辺り、この空中庭園はネブカドネザル二世の栄光と、庭園そのものに集められた信仰により、本当に空に浮かぶ「巨大な庭となった。

外敵を迎撃する砲台を構え、庭園内には肉を欲し毒素を放つ数々の幻想植物が跋扈し、主を強化する魔術工房のような機能をも兼ね備えた移動要塞である。

だが、キヤスターはその機能を一切使わない。というよりも、召喚した所でキヤスターは「留まる場所を持ってない」という自身の在り方が故に工房や神殿としての側面を持った宝具の殆どを使いこなせない。

だが、こうして単純な質量兵器として使う場合は別である。

然も、ただの質量兵器ではない。高さ五十メートル、最大面積百二十平方メートルを持つ土や大理石などの石材、そして水、更には無数の幻想植物がないまぜになった超質量兵器である。

それが時速三百キロメートルで頭上に落ちるのだ。幾ら山の翁と言えどただでは済まない。

だが、そんなものを黙って受ける程、山の翁は甘くない。

「悠久葬焰（ミカイル）……！」

真名解放の後、山の翁の右目から青白い炎が噴出し、頭上に落ちてきた庭園を焼き払う。

ミカイル——キリスト教に於いてはミカエルと呼ばれるその天使は、近代以降誕生した魔術の中の一つは四属性の内火を司る。それ故か、その名を冠したこの宝具も焰（ほむら）として顕現する。

そしてこの宝具の正体とは熱く、燃え尽きることのない山の翁の情熱そのものである。信仰に掛ける燃え滾る情熱は蒼炎を象り、その身に纏う鎧に宿つたのだ。そして、一度真名解放をすれば、火焰として噴出しはあらゆるものを滅する、積屍氣と化するのである。更に、山の翁の情熱を反映したこの炎は決して燃え尽きることはない。

——対象物を余さず灰にするか山の翁が鎮まれと念じぬ限りは。

だが山の翁がこの宝具を対人戦に於いて解放することはない。彼が信ずる神が焼殺を許していないからだ。墮落と腐敗への罰は首を断つだけで良い。それを許しとし、地獄に堕ちることを救済とする。地獄の責め苦すら許さない消滅など、山の翁は誰かに与えたいとは思えない。

それは今こうして敵対しているキャスターに対しても同じであった。尤も、使った所でキャスターに通じるかどうかは山の翁にとって甚だ疑問ではあったが。

「……剣を引け。これ以上の流血は無価値である」

故に、山の翁は今一度交渉を試みた。

この戦いが長引けば、今度は無辜の民をも傷つける。神託は百の貌のハサンの名以外を示してはいない。であるならば、これ以上戦闘を

激化させるわけにもいかない。死すべきでない人間が死ぬことになるかもしれないからだ。

故にキヤスターには引いてもらうより他なかった。

「それが分かっているなら君が諦めろ」

併し、キヤスターに譲歩の意志は無かった。

「愚昧、死すべき者が死ぬというだけのことだ。何故それが分からぬ？」

「分かっているのは君の方だ！」

山の翁からの苦諫にキヤスターは声を荒げた。

鬮の眼窩が、紅蓮に瞬く。

「死ぬべきだなんてそんなこと関係ない！ 生きたいかどうかだろ！」

キヤスターは叫ぶ。その心中を。

「あの子は、人として生きたいんだ！ そんなあの子に生きていて欲しいって思ってるヤツがいるんだ！ だったら生かしてやりたいだろ！」

山の翁は沈黙した。

何かを思惑するかのよう。その時だった。此方に向かい、飛来する光をキヤスターが見止めたのは。

彗星と見紛うそれは轟雷をまき散らしながら疾走する戦車であった。

「AAAA L a l a l a l a l a i e !」

戦車を牽く牡牛が力強く夜空を踏みつける度に、紫電が走る。

見間違えようもなく、ライダーの戦車である。ミナも、薫もいる。そして、覚醒したウェイバーがライダーの隣にいた。

「行けエエエエ！ ライダーアアアアアアアア！」

「応よ！ 遙かなる蹂躞制覇（ヴィア・エクスプラグナティオ）！」
ウェイバーの言葉に応じ、ライダーは「神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）」を最大解放する。

その瞬間、一步、一步と加速し最大速度に到達。その価、通常使用時の平均速度のほぼ二倍。纏う雷電のエネルギーも超大に膨れ上が

り、直撃した際の威力は計り知れないものとなった。

当然、標的は山の翁ただ一人。

流石に直撃は拙いと判断し、山の翁は身を翻す。キャスターも咄嗟に盾の宝具を召喚し、そこに身を隠す。その判断は正しかった。事実、戦車の衝突により爆風が巻き起こったのだ。巨大なクレーターが生じ、砕けた土石が宙を舞う。雷電の熱量もまた凄まじく、運動場だった場所は一部熔解していた。

「今のを躲すか」

呆れたように唸るライダーは、それでも笑っていた。

山の翁の器量を讃えるだけの余裕が戻ったのだ。

「アレク！　なんで戻って来た!?!」

併し、そんなライダーにキャスターは怒鳴りつける。

勝ち目がある筈もなく、それどころか犬死する可能性すらある。故にキャスターはライダーを逃がし、またライダーもそれを理解していた筈なのに。

「こやつ言葉でな、気が付いたのよ。至極当然のことにお」

ウェイバーの肩を叩きながら、ライダーはキャスターの問いに答える。

「我が名は征服王イスカンドル！　多くの勇者を束ね、固き友誼の上に王道を歩む者！　故にこそ我は、盟友（とも）を決して見捨てはしない！」

両腕を天に突き上げ、ライダーは己の在り方を有らん限り吠える。

「暗殺者よ、貴様には何も奪わせんぞ。キャスターも、この娘もな」

ミナの肩に手を置き、ライダーはグランドアサシンを見据える。

恐れはない。何故なら、イスカンドルの隣には、試練を乗り越え、一つ大きく成長した勇者がいるのだから。

「……つてことだ、髑髏ヤロー」

その勇者もまた、山の翁を睨む。

彼の威容にも、全身から滲み出る絶大な闘気にも、怯えることなく真っ直ぐな目で。

「ミナを泣かせてみるよ！　キャスターを傷つけてみるよ！　僕はお

前を許さないからな！」

殆ど見えていなくても、決して敵から目を逸らさず、ウェイバーは啖呵を切った。

山の翁は押し黙り、次に御者台の奥にいる百の貌のハサンを見た。「もう……怖くないよ。お兄ちゃんがいるから。なんだって乗り越えられるんだから！」

震えていたのが嘘であるかのように、少女の姿をした暗殺者はウェイバーと同じように叫んだ。

山の翁はゆつくりと天を仰いだ。

そして、考える。生前、百の貌のハサンは果たして首を断たれる時、ここまで生きようとする意志を見せたかと。否、百の貌のハサンだけではない。希望を持って死を乗り越え、生きようとした山の翁が今までいたであろうか。死への恐れから生きようとした者はいた。自身の在り方に耐え切れず絶望し死んだ者がいた。己の力の至らなさから、自身に訪れる死を希望とした者はいた。

だが、希望を持って生きたい、生きてやると渴望した者が山の翁の中にいたのだろうか。

鐘の音を聞き、まだこうしていられるのだろうか。

山の翁はふと、耳を澄ます。颯々と哭く夜風の間を縫って聞こえる筈の鐘の響きに。

併し、彼の耳にその響きが届くことは無かった。

「天命は過ぎたか……」

ぼそりと呟き、山の翁は剣を納め、身を翻した。

「は、ちよ……おい、待て！ 何処に行く気だよ！」

唐突にこの場から立ち去ろうとする山の翁をウェイバーは思わず引き留めた。

山の翁は立ち止まり、振り返った。

「帰る。我が在るべき場所に。幽世と常世の境界に」

「は？」

「百の貌のハサンを示す晩鐘が止んだ。最早我が此処に在る意味もない」

「どういふことだよ？」

言い回しの難解さ故に、ウェイバーには山の翁が何を言っているのかまるで分からない。

「ミナを殺すつもりはもうないってことなんじゃないかな？」

今まで戦車の御者台の中で黙っていた薫が、山の翁の言葉を意識する。

「そうなのか？」

「然り」

「じゃあそう言えよ！ お前の言ってること分かり辛いんだよ！」

この場に、ミナの他に歴代の暗殺教団の長が居合わせていたのならば、もれなく卒倒していただろう。恐れ知らずな少年の非礼に。

「それからな！」

「何だ？」

だが、山の翁は恐ろしい程に寛大に、ウェイバーの言葉に耳を傾ける。

「この子はな！ 百の貌のハサンじゃないぞ！ ミナだ！ アサシンなんかじゃない、ただの女の子だ！」

寧ろ、ミナの頭を撫でながら自身に向かって断言するウェイバーに、

「フハハハハハハハハハッ！」

山の翁は哄笑した。

「嗚呼、そうだ。確かにこの少女は一度たりともハサンとは呼ばれていなかった」

さも愉快そうに手を打ち鳴らす山の翁を見て、この場にいる誰もが思った。

笑うと怖いな——と。

「——では然らば。汝らの歩みに幸多からんことを。ビスミッター、ヒツラフマー、ニツラヒーム（慈悲深く、また恵み降らす、主の御名に於いて）」

一頻り笑うと、山の翁はこれからを生きる者達に祈りを残し、今度こそ来た場所へと帰ろうとした。

数歩、進んだ時だった。山の翁は突然振り返った。

「一つ、言い忘れていた」

枯れ井戸の如くどこまでも深い髑髏の眼窩から差す真紅の光はキヤスターに向けられている。

「……何だい？」

キヤスターが聞くと山の翁は、

「貴様は其処に居続ける気か？」

と問い掛ける。

この場の誰にも、キヤスターですらもその意図が掴めなかった。

「成程、安寧に微笑みを浮かぶは心地よいことだろう、偉大なるイーサーが友よ」

「イー……サー……？」

その音を紡ぎ出すキヤスターの唇は震えている。

「だが、それが貴様の成すべきことか。此処にいる意味か？」

薫も山の翁の言葉に魅入られていた。

彼は何かを知っているのだ。キヤスターに纏わる重大な何かを。

魂の仰臥を伝える断罪者は一層語気を強める。

「『永遠を歩く人（カルタフィルス）』よ、今一度考えろ。そして、働け」

薫の耳に、山の翁が紡いだ響きが染み付いて離れない。

『永遠を歩く人（カルタフィルス）』——特にその音が。

聞いたことがある言葉だった。だが、何処で聞いたのか、それが何だったか、薫には思い出せない。

「ねえ、おじいちゃん——」

「インシャラー」

その言葉の意味を、そしてキヤスターが何者なのかを、薫が正そうとしたのと同時だった。

山の翁は、伝えるべきことは伝えたとして、今度こそ闇夜に、泡沫の如く消えた。

『神が望むなら』——と何処か皮肉めいた言葉を残して。

「何だったんだ今の？」

ウェイバーは、正直な感想を漏らす。

「分かん……が、彼奴の言葉が正しければキャスターは……」

ライダーはウェイバーの言葉を受けて、自身の考察を述べようとした。

だが、続きを言うことは適わなかった。

「ウアアアアアアアアアアッ！」

鼓膜を裂くような金切り声に遮られた為に。

キャスターは膝を付き、月に向かい、狂ったように吠えていた。

白目を向き、涙腺からは血が流れ落ち、鼻腔からも血が溢れ、口からは唾液をだらだらと垂らしている。

「キャスターー！」

薫は戦車から飛び降り、彼の下に駆け寄った。

「アアアアアアアアッ！」

「大丈夫、大丈夫だから……」

激痛に震え頭を抱えなおも叫び続けるキャスターを、薫は抱きしめた。

こうすることしか、薫には出来なかったから。

強く、強く、抱きしめる。

「はあ……はあ……」

悲鳴が止むとキャスターは荒い呼吸をした。

額には脂汗が滴り、元から白い肌は、一層蒼白になっている。

「……落ち着いた？」

「あ、ああ。大丈夫……もう……」

とは言うものの、尋常でないことくらいは薫にも察することが出来た。

「キャスターー！」

ウェイバーは自分の足の状態も分からなくなるほど慌て飛び降りようとし、ライダーに止められた。

「ちい兄ちゃん！」

ミナは恩人の無事を確かめようと駆け寄った。

「……心配かけた、ね」

不安そうな顔で自分の顔を覗き込むミナの髪をキャスターはそつと撫でる。

浮かべる微笑みが、無理をしていることを隠し切れてはいなかった。

「一体どうしたのだ？」

そう問いかけたのは、ウェイバーを抱きかかえながらゆつくりとキャスターに歩み寄るライダーであった。

「……思い出したんだ。僕が何者なのか」

この時点でキャスターの目は虚ろになっていた。

「僕は……」

そして、そう言いかけた所でキャスターは気を失った。

「ライダー！ 戦車を出して！ 何処か寝かせられる場所に！ マツケンジーさんの家に戻って！」

「お、おう」

「早くー！」

ライダーは薫の剣幕に押され、キャスターを戦車に乗せる。

こうして慌ただしく、彼等は拠点へと引き返した。

——これが最後だった。この同盟がこうして共に行動をしたのは。

次の日の朝、ウェイバーとライダー、そしてミナが目覚めると、キャスター陣営は姿を消していた。

第三十九話 主役登場

「クハハハッ！ 堪らん！ 痛快だ！」

一階の礼拝堂にまで響いているのではないか？

綺礼はそんな懸念を抱いた。ギルガメツシュから噴出した大笑はそれほどのものであった。

キヤスターと山の翁の戦いの顛末を見届けるや否やのこれである。

綺礼は呆れを含んだ視線をギルガメツシュに向ける。

「何が可笑しい？」

「あれの在り方総てが。これが笑わずにいられるか」

綺礼には英雄王の笑いの壺が全く理解出来なかった。

「あれはな、人ならざる身に生まれ、人であることを渴望し、一度は人となった者の——人であることを捨てた男だ。人の身には過ぎた願いによってな」

「それを『愚昧』というのではないか？」

「その通りだ。だが、そういった愚かしさというのは存外に稀有でな。故に、ヤツは道化なのだ。その愚かしさは、愉悦に落とし込み、嗤笑の渦を起こす」

まるで好事家が自らのコレクションを自慢しているかのような口ぶりだった。事実、人寰一切己の庭と嘯く英雄王にとって、キヤスターもまた己の宝物の一部なのかもしれない。否、真に彼が宝とするは、彼が認めるだけの器を持った『人』なのだろう。

併し、ギルガメツシュがそこまで心を傾ける逸材に、綺礼はそこまで熱狂することが出来なかった。

その正体が、信徒にとって悪性とされ忌み嫌われる存在であり、信仰に虚しさを覚える綺礼にとっては惹かれてもおかしくはないのだ。

「——まあ、お前の興味は別の所にあるようだがな」

ギルガメツシュは冷笑と共に言い放った。

綺礼が先の戦いで一体何処に目を遣っていたのか、傲慢な王は目聡く観察していたのだ。

「サーヴァント風情が。お前に何が分かる?」

「分かるさ。己の愉悦の在処すら分からん愚物よりは、な」

綺礼が怒気を含めて睨んでも、アーチャーは目を細め、総てを見通すような視線を投げ返す。

「気が付いていないのか? 綺礼、お前嗤っているぞ?」

指摘され、綺礼は自らの顔にそつと手を当てた。

そこで綺礼は、己の表情筋の弛緩を漸くにして理解する。

「今、この時だけではない。あの戦いを見届けている最中、お前は幾度か笑っていた」

綺礼は、心臓を鷲掴みにされているかのような感覚を覚えた。明らかな動揺を見せた綺礼に、ギルガメツシユは満足気に笑う。

「そうだな、あのウェイバーとかいう小僧が悪竜の毒を飲んだ時と、その後にあの死神が遣って来た時だ。お前は愉悦を感じていたのではないか?」

言い返そうとして、綺礼は言葉を詰まらせた。事実、ギルガメツシユの言葉が凶星であるのは否定出来なかったから。

少年が悪竜の血を飲んだ時、天秤の傾きに期待を寄せた。

山の翁を名乗る黒衣の騎士が現れた時、少年の覚悟が台無しになってしまう可能性に心が躍った。

「加えて言えば、お前、我の道化のマスターとなった女を見ているときも、殊更に興味深げだったな。嗤っていたとも、また違うが」

「そう、だったのか?」

綺礼は愕然とした。薫という少女に見出した妻の面影。其処から感じたものなど、時臣に伝えた嘘でしかないと思いついていたから。「自覚がないか。ならば、其処にもお前は愉悦を見出していたのだろう。意識を超えた魂にこそ、愉悦を求める衝動は染み付いているのだから」

綺礼は自分の中の動揺を隠せなかった。何故、彼女に注目したのか。今一度考える。

恐らく、やり忘れたことを妻の似姿に求めたのだ。妻の今わの際、綺礼は不思議とこの女の死を自分の手で成し遂げてやりたかったと

思った。そして、度々考えた。若し、自分で成し遂げていたら、自分はどのようにならなかつたのかと。

不意に、薫の、また妻の断末魔を夢想し、綺礼は自らの胸を、抉るように掴む。まるで月面に立っているかのように、自分が「立っている」という感覚がはつきりしない。眩暈がする、口が乾く、不安定で不規則な音色を心の臓が打ち鳴らす——そして、それが決して厭ではない。

この感覚は嘗て何処かで、然う、妻との暮らしの中で度々感じていたものだ。

「私はこれまで徒労を積み重ねて来た。それでも終ぞ見つかることになかったものが、こんなに簡単に、見つかって良いものなのか？」
「『良いもの』かも何もそうなってしまったのだ。そこに意味など無いさ」

ギルガメッシュの言い分も尤もだった。

ならば、と綺礼はこれからをどうするべきかを考える。愉悦という感覚は分かったが、自分の中でのその正体のはつきりしない。

否、或いは掴む方法ならばある。

そう考えた綺礼の見つめる先は右手の甲。其処には未だ令呪があった。通常、マスターがサーヴァントを失った場合、令呪は消え、聖杯へと還る。そして、それより後にマスターを失ったサーヴァントが生まれた場合、未使用分の令呪を新たな契約者候補へと再分配するのである。

その契約者候補というのは、多くの場合、以前にマスターと認められた者となる。脱落したマスターを聖堂教会が保護するのもそれが理由である。

だが、未だ総てマスターが健在で、契約からはぐれたサーヴァントもない状況で、令呪が与えられるだけでも異常事態、サーヴァントの敗退に際して令呪が失われないなど絶対にはあり得ないことだ。

ならば、それが在り得てしまっている理由とは？

綺礼はそこに至り、考えるのをやめた。そこに意味はないのだろう。問題は、これをどうするかだ。

今、自分が今一番やりたいことは何だ？

ウェイバー・ベルベッドがアサシンだった少女を失う瞬間を、またはその逆を見たい。

そして、妻の似姿たる女を今度はこの手で殺したい。

何方の道を征くにせよ、あまりにも強大な敵が立ちはだかる。征服王イスカンドルに、死そのものとも感ぜられた山の翁を退けたキャスター。

対抗できる存在がいるとすれば、それは間違いなく目の前にいる黄金の王以外あり得ない。

「……そうだった。喜劇を見せてくれた札をまだしていなかったな」

無意識の内に綺礼はギルガメッシュに語り掛けていた。

「観覧を許したのは我からのサーヴィスだが……。まあ良い、何か超越するというなら受け取ってやろう。それで、綺礼、お前は我に何を奉ずる？」

「まだお前が知らない聖杯戦争の真実について」

綺礼の言葉に、ほうとギルガメッシュは訝し気に眉を吊り上げ、先を聞いた。

「聖杯とは世界の内側にあるもので、当然それが叶える願いも内側のみ完結する。当然世界の外側に通ずるわけがない。願望器の争奪戦はあくまでも儀式を成立させる為に外来の魔術師を呼び寄せる為の餌に過ぎない。『始まりの御三家』の真の狙いとは、願望器を超えた先にある」

これは遠坂と、間桐、そしてアインツベルンに連なる者にのみに許された真実であった。

「七体の英霊の魂を供物とした時、聖杯は世界の外側へと至る穴を開ける。これが『御三家』の試みだ。尤も、その悲願を正しく叶えようとしているのは、遠坂のみとなってしまうが」

「そういうことか」

気位の高さの為に激昂するかと思いきや、ギルガメッシュは存外冷静に低く抑えた声で得心した。

「ヤツは我が他のサーヴァントを打ち倒した後、令呪を使い自害させ

る腹だったということだな」

「察しが良いな」

綺礼の顔には悪戯めいた微笑が浮かんでいた。

それに釣られるようにギルガメツシユは嘖き出した。

「あの男、詰まらんと思っていたが臣下の礼の中にこのような奸心を持つていようとは。中々如何して、面白い男だったじゃないか」

邪悪な微笑みと共に齎された時臣の評価は過去形だった。

最早、時臣の未来は決定したと言つて良いだろう。

「だが、如何したのか。この我と言えど、マスターを失つては現界を来すし……」

業とらしく困つたような顔をするギルガメツシユに、綺礼は、右手に残る令呪を見せつけた。

「おお、こんな所に契約から逸れたサーヴァントを求めるマスターがいるではないか。僥倖、僥倖」

あからさまな棒読みに、綺礼は嘖き出しそうになりながら、綺礼は頷く。

「僥倖が良いが果たして、この私が英雄王に見合うか如何か」

「堅物に過ぎて、道化の演目の善し悪しが分かるとも思えんが……まあ、時臣よりはマシだろう。それに、見合うかどうかはお前にとつては問題であるまい」

所詮は利害の一致。

ギルガメツシユは見出した遊戯を全力で楽しむ為に。綺礼は答えを見出す為に。

互いを利用し合うだけ。ならば、そこに承認はいらない。だが、それでも二人は笑みを交わし合った。

†

キャスターと山の翁の戦いを見張っていたのは、綺礼とギルガメツシユだけではなかった。

あれだけ派手な戦闘だ。嗅ぎつけない者がいない方がおかしい。

尤も、キャスターが大量召喚した宝具が結界の役割を果たした為に、その全容は宝具を使い観察をしていたギルガメツシユ達にしか掴

めなかつたのだが。

「何だ一体?! 何が起きたって言うんだ?」

例えば、近くの雑居ビルの屋上から戦いを見届けようとしていた急造の魔術師——間桐雁夜。

彼が見届けることが出来たのは、夜空に魔法陣が浮かび、其処から放たれた魔力光が校舎を全壊させる場面までだった。

併し、そこまで見ただけでも、雁夜を混乱させるには十分であったが。

理不尽か、さもなければ性質の悪いギャグか。雁夜にはそう思えてならなかった。

「……あれと、戦わなきゃならないのか」

沈痛な面持ちで雁夜は独り言つ。

答えなど返ってこない筈だった。だが、

「いやあ、ホント嫌になるよねえ。やってられるかって気分だよ」

慮外にも言葉は返って来た。

声の方向に、雁夜は慌てて振り返る。

其処にいたのは二人の男だった。

一人は、くすんだ金の髪をした瘦身長躯の白人男性。何処かを患っているかのような惘然とした表情をしており、神経質を絵に描いたような印象を雁夜は覚えた。

もう一人は紐で束ねた緑の長い髪が目を惹く華やかな男だった。人の良さそうな春風のような微笑みと、そして現代に染まり切っていることが見て取れる服装からは一見して分かり辛いサーヴァントであった。

「お前はッー!」

雁夜はこの二人組を知っていた。海浜公園に於いて、その脅威を見せつけた二人だったから。

「H A H A H A H A H A! 待ちかねたかい? 待ち侘びたかい? このボクを」

煽る様な、迫る様な、とち狂ったテンションのサーヴァントに雁夜は当惑を隠せない。

——こんなヤツだったのか、と。

「そう、ボクだッ！ 掛値無しにッ！ 皆大好き！ 義勇王、関羽雲長だ！」

月に吠え、爆発するような豪笑を上げる男は、紛うことなく、残念ながらランサーであった。

雁夜は呆然自失とした。ある意味では、キャスター以上に理解不能の存在に。

ランサーの隣に立つマスターは頭を抱え、苦悶の表情を浮かべている。

——雁夜には、何だかランサーのマスターが甚く可哀想に見えていなかった。

第四十話 希望

それでも、憐憫で刃を収める気にはなれなかった。

雁夜には成さねばならないことがある。己が怠惰の清算。一人の少女を過酷な運命に突き落としたことに対する贖罪。そして、何より愛する人とその子供が当たり前のように笑いあっていた穏やかな日々を奪還。

聖杯を此の手に。我に勝利を――。

故に、負けられない。倒さねばならない。

「殺（や）れッ！ バーサーカー！」

雁夜の殺意に呼応するかのように、黒い霧が湧き上がり、渦を巻き甲冑を象る。

「■■■■■ッ！」

バーサーカーだ。

霧が辛うじて形となったかのような黒騎士は、マスターたる雁夜の意味を――目の前の敵の排斥を成さんとランサーに襲い掛かる。

「殺（や）られない！ ランサー！」

対するランサーは雁夜の宣言に剥きになって言い返し、戦支度に姿を変え、大刀の一振りをも以て応じる。

「覇ッ！」

渾身の一撃を込めた唐竹を。

「■■■■■ッ！」

バーサーカーはそれを所謂、真剣白刃取りの要領で受け止める。

瞬間、黒騎士の手が触れている箇所から刃に赤黒い葉脈のようなものが発生した。手に触れた物を自身の宝具とするバーサーカーの能力がランサーの青龍偃月刀を侵食していたのだ。

此の儘では宝具を奪われる。

刹那で判断し、ランサーは、

「ヌオオオオオ……！」

刃を掴むバーサーカーごと大刀を持ち上げ、

「ドリャアアッ！」

そのまま投げ飛ばした。重装甲の鎧を纏う大柄な騎士は、紙のように宙を舞い凄まじい勢いで、塔屋の壁に叩き付けられる。

「A a a a……」

衝撃によってコンクリートの壁はひび割れ、バーサーカーは地面に倒れる。

よろめきそして、呻き乍らも立ち上がろうとするバーサーカー。此の機を逃すまいと、ランサーは詰め寄り追撃を掛ける。

これを幕引きにせんと、ランサーは跪いた態勢のバーサーカーの首を薙ぎにいった。

防ぐ武器は無い。先程のように刃を素手で受け止めることは出来ない。大刀の持つ速力はバーサーカーに躲せる違を与えるものではない。

——やった。

ランサーは確信する。だが——

「何ッ!？」

直後、ランサーは驚愕した。

何とバーサーカーは、自身が壁に打ち付けられた際に出来たコンクリートの破片を拾い、斬撃を受け流したのだ。

普通、只の破片で宝具を受け流すなど出来ることではない。穂先の何処かに触れただけで粉々に砕けるのがオチだ。にも拘らずそれが出来たのは、バーサーカーの力により宝具となっていたから。

——拙い。

フィンニツシュを意識した所為で、大振りの斬撃をしてしまったことでランサーの体勢が崩れた。狂化して尚、アーチャーの宝具の連射を凌ぎきる業の冴えを持つバーサーカーは無論、この隙を見逃さない。

刹那で立ち上がり、屋上の出入り口となっていたドアを引き剥がし、そのままランサーの頭を殴打しに掛る。

当然、バーサーカーの手に触れている以上、ただのドアですら宝具である。致命傷とまではいかないまでも、易々と食らって良い物でないことは明白であった。

喧しく風切り音を立てる鉄製の板を、ランサーは皮一枚で躲す。無

論、攻撃はこれで終わらない。武器として振るうには如何考えても不向きであると思われる自身の身長と同程度のドアを軽々とランサーの頭部へと振り上げる。

「O o p s (ヲウプス)！」

ランサーは大刀の柄で受け止める。狂化に因り底上げされた高いステータスに任せ、バーサーカーはそのまま、押し切ろうとする。

併し、それは出来なかった。まるで、巨大な城塞を相手にしているかのように、ランサーはびくともしない。それどころか、バーサーカーは自身の腕が押し戻されているのを感じた。

「A!？」

「D o o r (ドウア)でここまで戦えるとは大したヤツだ。狂気に墮して尚この技量、恐らく君と肩を並べられる武人がいるとすれば呂奉先か、張文遠か……」

ランサーは戦闘に誉れを求めはしない。それでもランサーは、自分と同じ時代を生きた武人の中でも、無双を誇った二人に準えバーサーカーの技量を讃えざるを得なかった。

バーサーカーの実力とは、ランサーにとってそれほどのものだったのだ。

「だが、力自慢を競った時点で君の負けだ！ こちとら馬鹿力には定評があるんでね！」

そう豪語すると、ランサーはバーサーカーを得物ごと押し飛ばす。剛腕の為に、体勢を崩されよろめくバーサーカー。

「美塵葬・大紅蓮(チンロン・ユーマイレン)!!」

その一瞬の隙に、ランサーは鬼札たる絶技を叩き込んだ。

魔力消費を気にし、宝具を温存すれば、逆に戦いを長引かせ消耗を大きくする。そう判断して。

「■■■■a■■■■a……」

短く呻き声を上げ、バーサーカーは凍り付き、石像がそうだったかのような音を立てて倒れた。

呆気なく、また間抜けにも感ぜられる幕引きであった。

だが、サーヴァントがそんなやられ方をしたにも関わらず、雁夜は

狼狽えも、また呆然もしなかった。

「馬鹿な……」

それ以上に彼は自分自身が行っている戦闘に於いて、驚愕していたのだから。

急造の魔術師である雁夜は戸籍上の父であり、また間桐家の実質的当主である臓硯に回路の増設の為に「蟲」を植え付けられているが、魔術師と対峙する際に武器となるのもその蟲であった。

鋼のような外骨格を持ち、剣のような顎を持つ肉を食む甲虫。弾丸の如き速度で飛来する雁夜にとって唯一にして最凶の武装。その名を「翅刃虫」。

バーサーカーをランサーに嗾けるや否や、雁夜はこの食肉虫の大群を対峙する魔術師へと向けた。魔術師という時点で雁夜にとっては万死に値する。手心を加える余地など在于る筈もなく、当然殺す気で攻撃を仕掛けた筈だった。

だが、その攻撃の総てが、目の前の魔術師には届かなかった。

それだけならば、まだ怒り狂うだけの余裕が雁夜には残っただろう。問題なのは、目の前の魔術師の振る舞いだ。

一瞥すらせず、ランサーとバーサーカーの戦いを観戦しながら、翅刃虫を殺すことなく打ち落としていたのだ。尤も、翅刃虫は打ち落とされたのではなく、体の自由を奪われ勝手に墜落したというのが正しい。ケイネスは雁夜の攻撃に際し、自身の持つ魔術刻印を起動させ低級の動物霊を大量召喚し、迫り来る蟲の大群に一つ残さず憑依させたのだ。それにより翅刃虫に金縛りのようなものが掛かり、飛ぶことが出来ず墜落したのである。

「矢張り、戦闘となればヤツに隙はないか……」

自身のサーヴァントの戦いぶりに誇らしげな笑みを浮かべるケイネスに、雁夜は言葉を失う。

相対している自分を認識しているかどうかすら分からないこの有り様では怒りが湧くどころではない。寧ろ感情が死に絶え、雁夜は諦めを覚えた。

目の前の魔術師は、ランサーのマスターは雁夜にとっては絶望その

ものに思えるほど強大だったのだ。

或いは、こうして立っている相手が仮に時臣だったならば、憤怒の炎が理性を燃やし忘我に至ることで立ち向かう意志が湧き続けたのかもしれない。

だが悲しいかな、目の前に立つ敵はただの魔術師というだけなのだ。たったそれだけの憎しみでは、雁夜はこの絶望を乗り越えることは出来そうになかった。

「さて、此方は此方でやることをやってしまおうか」

そして、漸くケイネスは雁夜と向き合った。

「ヒイツ……!」

意図せぬ悲鳴が己の中から現れたことに、雁夜は激しい羞恥を覚えた。屹度、それは相対する敵対者にも伝わったことであろう。だが、それを意識して尚、足は震え、後ずさりを選んでしまっている。

それに合わせて、魔術師は雁夜にゆっくりとにじり寄る。

少しずつ、少しずつ――。

「クッ! ……あ」

その時、竦んだ足の為に、雁夜は尻餅を付いた。

「Unlucky (ワアンルアッキー)!」

その様を、ランサーが囁し立てた。

小気味の良い、口笛の響きが後から遣って来る。

「無礼に過ぎるぞ。止めたまえ、ランサー」

自身のサーヴァントを窘める魔術師であったがその中には明らかに嘲弄が含まれているのを雁夜は敏感に察した。キリと音が出る程歯噛みし、魔力回路の増幅に伴い崩れ去った容貌を更に歪せる。

「フツ。情けない……とは言わん。安心したまえ、間桐雁夜くん」

だが、まるで涼風とばかりに雁夜の憤怒を流し、魔術師は懐から注射器を取り出す。

そこには玉虫色の、不自然で、また不規則な発光をする葉が入っていた。

「……ッ! ……なんだそれは!?!」

“有害”という概念がそのまま形になったかのような外観の薬物

に、雁夜は目を見開く。

「私の研究成果、『第一要素分解剤』——『MTFE』。第二、第三要素を傷つけずに、第一要素のみを乖離させる——平たく言えば、肉と骨を余さず溶かし尽す薬品だ」

その説明を聞き、雁夜の恐慌は一層強まった。

聖杯戦争に身を投じると決めた時に死ぬ覚悟をしていた雁夜であったが、それもいざ自分の目的が叶えられぬまま死ぬとなると鈍ってしまふ。

捨て犬のように、無価値に死んでいくのは厭だと、思ってしまう。せめて桜だけでも助けて死ねたら良かったのにと、慙愧の念が湧いて来る。

「恐れる事はない。光栄に思い給え。君は私の探求の一助となるのだ」

だが、こうなってしまうえば、最早運命は変え難い。

注射針が雁夜の首筋まで、あと一寸の所まで来てしまっている。

「Disce libens」

……そして、ねつとりと耳に纏わりつくような、魔術師の言葉を最後に、雁夜の意識は断裂した。

†

雁夜の意識が失われてから暫しの時間を経た頃——
「ふう……」

ケイネスは屋上に留まり、横たわった雁夜の隣で茶を味わっていた。

ランサーが淹れた紅茶を水筒に入れてきたのは正解だったと、呑気なことを考えながら。

その向かい側では、ランサーが鉄柵を背もたれに腰を下ろし、凍り付き彫像のように固まったままのバーサーカーを肘掛け側にしながら煙草を吹かしていた。

ケイネスはふと、彼の足元に置かれた携帯灰皿の中の吸い殻を数えた。

——十だ。ランサーの手製煙草は、燃え難い巻紙を使っている為、一本を吸い切るのに結構な時間を要する。それが十も吸い尽くしてしまっているということは、二人が屋上にいる時間もそれなりだということだ。

「そろそろ良いんじゃないか？」

更にもう一本を吸い切つて、ランサーはケイネスに声を掛けた。

「……そうだな」

ケイネスはそれに同意し、

「起きたまえ、間桐雁夜」

雁夜の体を揺する。

「く、くおっ……」

苦悶の表情を浮かべながら、雁夜は覚醒する。

「御機嫌よう。良い夢は見られたかね？ ……まあ、その顔では聞くまでもないか」

「貴様ッ！」

雁夜は敵を目に止めて襲い掛かろうとし、此処で自分が一切動けないことに気が付いた。体の自由も、蟲の操縦も適わない。

「抵抗されては困るのでね。君には『金縛り』を掛けさせて貰ったよ」

金縛りは最も名の知れた霊障の一つであり、当然これもケイネスが得意とする降霊術の分野に含まれる。低級霊を操つての金縛りなどケイネスにとっては息を吸うよりも容易いことであった。

「如何して……」

「如何してこんなことをしたのか。何故、己は生きているのか……か？」

ケイネスは雁夜の言葉を遮って、逆に問い掛けた。

沈黙を、肯定と受け取ったケイネスは雁夜の疑問に対する答えを示した。

「では、まず君に打った薬について。肉と骨を溶かす薬と言ったが……あれは、嘘だ」

「嘘？ じゃあ、一体俺は何を……」

「『浸食細胞（グラケツラ）』……詳しく説明をしても、君には分から
んだろうか、掻い摘んで言うと、君に打ち込んだのは『使い魔の支配
権を乗っ取る薬』だ」

魔術師が扱う使い魔というものの多くは、一般的に認知された生物
であれ、神秘世界にのみ認知された魔獣であれ魔術師の体の一部――
詰りは細胞を組み込んで作られる。その肉体の一部――より正確に
いえばそこに存在する魔力回路が魔術師と使い魔とを繋ぐパスとな
るのだ。魔術師以上に強大な力を持ったものであればこの限りでは
ないが、大抵の使い魔にはこの法則が当て嵌まる。ケイネスはここに
目を付け、他人の使い魔を使役出来ないかと考えた。

例えばAという魔術師の細胞を埋め込まれた使い魔がいたとする。
当然この使い魔を使役しているのは魔術師Aであるが、これを魔術師
Bが捕獲しなんらかの手段を用いてAの細胞を摘出し、そっくりその
ままBの細胞に挿げ替えたいしよう。

すると、Aの使い魔の支配権はBの使い魔へと移動するのである。

畢竟、『浸食細胞（グラケツラ）』というのは、魔術師の細胞を食
い尽くす機能を持ったケイネス自身の細胞なのである。

「使い魔の支配権？　この体の蟲を乗っ取ったっていいのか？」

「そういうことだ」

「何の為に？」

「盗聴を防ぐ為に」

ケイネスの盗聴という言葉聞いても雁夜は胡乱気な顔をするば
かりであった。

はあと、ケイネスは馬鹿にするような溜息をついてから説明した。
「君が戦闘に使用した蟲は、恐らく間桐家の当主に植え付けられたも
のだろうか？　ならば当然、君の裏切りを予期して会話や行動も監視さ
れていると考えるべきだ。だがそれは此方にとっては困ることだ。
故に対策させて貰った」

「一体それにどんな意味がある？」

「その意味を明らかにする為に、第二の問いに答えようか」

厭らしく笑いながら、ケイネスはその前に一つと人差し指を立て乍ら前置く。

「不思議に思わないかね？ ランサーの宝具が直撃したというのに、バーサーカーは未だ現界を保っているということを」

「ハン。大方、その小綺麗な顔をした御仁が手を抜いたんだろうさ」
忌々し気な顔で視線を送ってくる雁夜に対し、ランサーはへらへらとした笑みを返した。

「いやあ、また顔を褒められてしまった。イケメンは辛いねえい」
「頼む、お前は喋るな。話が明後日の方向に行きかねん」

苦虫を噛み潰したような表情で、ケイネスは悲痛の訴えを起こした。

尤も、この手の頼みを通じないことなどもう分かり切ってはいるのだが。それでも奇跡を信じずにはいられない。

「——でもまあ、アレだ。雁夜くんが言う手加減したつてのは当たってるよ。ああ、当たってるともさ」

そして、ケイネスの言葉を見無視するところさえも、ケイネスにとってしてみれば様式美のようなものであった。

ところで、余談ではあるが、バーサーカーに仕掛けた攻撃は、『美塵葬・大紅蓮（チンロン・ユーメイレン）』の捕獲形態というのが正しい。偃月刀の刃に充填する魔力を微調整し、敵を殺すのではなく仮死状態にするといったもので、生前拷問や尋問に掛ける敵兵を捕らえる為によく使っていたらしいが、雁夜の言う手加減という言い方でもなんら間違いではない。

併し、ランサーとしては明確に区別している概念の為、雁夜の言い草に、少しばかり気を悪くしていた。

「じゃあ、なんでボクが敢えて手心を加えた分かるかね？ ヒトヅマニアのカーリヤクウウン？」

故に、ランサーの口からは、子供のような酷い悪態が出ていた。

ケイネスが金縛りで雁夜の思考から令呪を使うという選択肢を奪っていなければ、屹度令呪を使われていただろう。それを思い、ケイネスは胃痛を覚え、顔を歪め、

「だからお前は黙れよ！」

今度は大声で怒鳴った。

それで漸くランサーが黙ったのを確認すると、ケイネスはゴホンと大きく咳払いをし話を続ける。

「……言ってしまうとだね、私は君のバーサーカーの力が欲しいんだ。だから君と取引がしたいというわけさ」

ケイネスは微笑むと、一枚の羊皮紙を雁夜の眼前に落とした。

其処には、雁夜にとってはあまり見慣れない、けれど忘れがたい類の文字が書かれていた。忘れる筈もない。生まれた時からそこに在り、そして憎しみ続けたものの一端であった。血で書かれた一見無意味な記号の羅列は魔術的な契約が書かれた書簡だ。

併し、魔術を嫌った少年時代を過ごし、本格的な魔術の修業をした期間も短い雁夜にはその内容の詳細が分からなかった。

「……自己強制証文(セルフギアスクロール)だ。形式ばった文句を省いて噛み砕いて言うのだな……」君が心を砕いている間桐桜とかいう娘を私とランサーが助ける代わりに、貴様等一生私の奴隷」だ」

「……ッ、ふざけるな！」

「飲めないのか？」

恍けたような顔でケイネスは聞き返す。

「当たり前だ！」

「……つかぬ事を訊ねるが、君はひよっとしてバーサーカー単騎であるのキャスターや遠坂のアーチャーに勝てると思っているのかね？」

「そ、それは……」

雁夜は言葉を詰まらせた。今まで桜を救わねばという使命感と、時臣に対する積年の恨みの為に思考が鈍っていたが、冷静になってみれば勝てる保証など何処にもない。

それどころか、負ける可能性の方が高い。

……併し、その可能性の高い方向に運命が流れてしまえば、桜は一体どうなるか。それを想像し、雁夜は身震いした。

「本当は分かっているんだろう？」

ランサーは雁夜に微笑み掛ける。

悪魔のように。

「ボクが」

「私が」

「お前にとつての最期の希望だ」

二人の重なった音律は破滅の運命しか在り得ない男に、救済を安売りする。

「……では、もう一度答えを聞こうか？」

そして、今一度ケイネスは雁夜に返事を求めた。

第四十一話 人間人間

「どういう事……ッ!？」

一人魔術工房に残り執筆に明け暮れていたソラウは驚愕の声を上げていた。

自分が書き上げた作品の為に。

自らの欲望で沸騰した——否、*「腐蝕した」*脳細胞の赴くままにソラウはトランス状態で書き物をしていた。当然、そんな有様で執筆をしていたのなら、その最中に自分が作ろうとしているものを認識することが出来ないの言うまでもないだろう。

そして、筆者本人でさえ知り得なかった我が子の全容を知り、ソラウは愕然としたのだ。

「何故、ケイネスが教え子と目合っているの?」

ケイネスがウェイバー・ベルベッドと愛し合っていたのである。

否、愛し合っていたというよりも愛し合うようになったというべきか。

最初、ケイネスはウェイバーが書いた論文の評価と時計塔に於ける地位を餌に肉体を求めた。更に、時計塔にいられなくすると脅しさえもした。

甘い蜜と、苦い明日——それらを同時に突き付けられたウェイバーは師に体を委ねざるを得なくなった。自らの凡庸さに薄々気が付いて彼にしてみれば、時計塔で生き残り魔術師としての地位を確立する為にはこの方法しかなかったのだ。

始めの内は同じベッドに入ることすら躊躇っていたウェイバーであったが、肌を重ね、霊薬に理性を溶かされ、徐々に快樂に堕ちて行き、最後は心すらも許すようになる……。

物語としては極ありふれた筋書きである。王道であるが故に、細部の書き込みが甘ければ駄作の評価は免れず、また逆に硝子細工を扱うように丁寧に作り込めば名作ともなり得る。

そんな作品である。おかしいところは何も無い。

「ええ、そうよ。おかしい所は何も無い。ケイネスが取り得る行動と

して整合性はある。育ちが故の愛情表現の歪み、自分の愛が認められないのが許せない人格の歪み、自分に与えられた権力と才覚を最大限駆使する手腕……。私が思い描くケイネス像から外れていない。『実用性』に關しても完璧ね……特に口移しで靈藥を飲ませながら、尿道と直腸を『月靈髓液』で蹂躪する場面なんて……」

氷のような美貌を蕩けさせ、口元から零れる涎をソラウは隠そうとはしなかった。

そんな彼女が正氣に戻ったのは下腹部から背筋に懸けて、凍えるようなそれでいて焼けるような甘い感覚がのたりと這ったから。無意識のうちに、股を手で弄っていたのだ。それを省みると羞恥心が蘇り袖で拭い、ぶんぶんと首を振った。

煩惱を跳ね飛ばすかのように。

「だが！ 許せない、認めない！ 関羽以外と繋がるケイネスなんて解釈違いも甚だしい！」

そして、快樂を振り切ったソラウはその先に待っていた感情の——怒りのままに拳を机に打ち付ける。

この世の苦しみとは思いつりにならないことであり、この世はその思い通りにならない苦しみで溢れている。仏教に於ける『一切皆苦』という思想であるが、その考え方は間違っていないとソラウは痛感していた。

自分の手を以てしても、自分が真に好ましいと思うものを作り出すことすら出来ないのだから。

「もう、嫌……私、どうしちやつたのよ……」

ソラウは机に顔を埋めた。

だが、そんな彼女の憤りに寄り添おうとする者も、彼女の苛立ちを解そうとする者もここにはいない。

余計に惨めな気持ちになって、それならいつそ酒精に浸かってしまおうと、ソラウは立ち上がる。フラフラとキッチンへと歩むその姿は、第三者が見れば弱っているという印象を受けただろう。

さてそんな有様の中、ケイネスと関羽が、雁夜に肩を貸し、伴って帰って来た時一体、ソラウはどういった反応をしただろうか。

「この浮気者オオオ！」

その答えは、*“ただいまと告げた許嫁とその従者に向かい当人達にはまるで身に覚えのない罵倒を浴びせる”*である。

当然、ケイネスと関羽は困惑した。

雁夜に至っては、部屋の扉を開けたらそこが見知らぬ国であったかのような荒唐無稽さに、恐怖すら覚えていた。

「O o p s (ヲオプス)。一体如何したっていうんだ？ K i t t y (クウィツィー)、未来の H o n e y (フアヌイー)が帰って来たんだ。もうちよつとらしい態度っていうのがあるんじゃないかい？」

関羽は明け透けにソラウを、またそれ以上にケイネスを揶揄う。

従者の言葉に、顔を真っ赤にしケイネスは関羽を窘めようとする。

併し、それは叶わなかった。

「ハニーはアナタでしようが！」

ソラウの魂からの、根源的な部分からの叫びが、この場にいる男性陣の思考を凍結させたから。

「ケイネスはランサーとじゃないと駄目なの！ それ以外の運命なんて認められる筈がないでしょう！」

「あの、ソラウさん……っ？」

その圧倒的な気迫にケイネスは敬語になりながら恐る恐る、ソラウの肩に触れる。

だが、

「触るな、裏切り者。汚らわしい」

ソラウは彼の手を振り払った。

軽蔑を含んだ冷たい視線と共に。

「貴方も男よ。ハレムに憧れるのも性(サガ)という意味では仕方のないことなのかもしれない。でも、それでも……」

ガタと音が出る鳴るほど勢いよく立ち上がると、ソラウはケイネスの胸倉を掴み、

「性○隷を囲うなんて！ 関羽という良人がいながら！」

とケイネスを糾弾した。

併し、ケイネスは

「君は一体何を言っているんだ？」

困惑しか出来なかった。

「ソラウさんや、僕らの衆道で盛り上がるのは構わんがね。初対面の人が当然それを理解する前提で暴走するのは如何なもんかねと思うわけでして」

傍で一部始終を見ていたランサーは、億劫そうに小指をで耳を穿りながら苦言を呈する。

「見てみなよ。雁夜くんなんて、Shock（スイョーク）とUnpleasantness（アプリズアヌエス）で、クリムゾン・キングの宮殿”みたいな顔になってるぜ？」

ランサーはそう指摘しつつ、自身の肩を親指で指す。

ソラウはそこに視線を向けることで自分の過ちに漸く気が付く。

ところで、クリムゾン・キングの宮殿”というのはキングクリムゾンというロックバンドのファーストアルバムの名前であり、このアルバムのジャケッとは一度見たら忘れない印象的なものである。

ジャケット一面に、新生児のような赤い肌をした男の驚愕とも悲痛とも取れる絶叫を視覚的に捉えたもの。そうとしか譬えられないようなものが描かれている。

キングクリムゾンは世界的に見ても著名なバンドであるが、時代を重ねた魔術師の家系という浮世からは遠い場所で生まれ育ったソラウはそれを知る由もなかったが、それでも雁夜の表情が凄まじいことになっていることはよく分かった。

「ソラウ、暴走するなどは言わない。だが、逸脱するならせめて私たちの前だけにしてくれ。皆が君の理解者というわけではないのだから」
ケイネスに窘められるとソラウはまるで子供のように沈む。

「というか、○奴隷……一体どこで覚えたんだそんな言葉。然も、何故私がそれを得たいなどと思った」

「だって男の人はみんなそれに憧れているって。ネットに書いてあった」

「貴様か、ソラウにいらん道具の使い方を教えたのは！」

横目に自分を睨む主に、関羽は悪戯がばれた子供のようにぺろりと

舌を出した。

自分の行動に対する罪悪感は微塵も見えない。

……極めて余談になるが、ケイネスやソラウが生きる時代の日本に於いて、インターネットは漸く大衆向けのサーヴィスを開始し一般個人にも利用可能になった頃である。そして、黎明期のインターネットは一般的にはまだまだアンダーグラウンドの部類であった。そういった場所に跋扈する知識群が、令嬢たるソラウにとって果たして良い影響を及ぼすものであるかどうか。それは語るまでもないだろう。

例えるならば、スラム街を歩かせるようなものである。

尤も、つい最近現代を知ったばかりのランサーにそこまでを把握する器量がなかったというだけなのだが。

「……全くなんでこんなことになってしまったのか」

「貴方のせいでしょう……」

「身に覚えがないのだが？」

辟易と疑問を口にしたケイネスに齎されたのは、ソラウの嗜好の始まりに関する意外な真実であった。

だが、ケイネス自身に彼女に影響を与えるようなことをした覚えが無い。

「Master (ムアスター) それはだね……」

薄々とソラウが抱えている感情の正体に気が付いているランサーは説明しようとする。

ケイネスの工房には、聖杯戦争の殺伐さとは程遠い和やかな空気が流れていた。

「ふざけるな！」

それを破ったのは、雁夜であった。

「何の茶番だこれは!? 人の、桜の命が掛ってるんだぞ!? なんでそんなにふざけてられるんだよ!?!」

一瞬場を沈黙が支配する。

だが、一瞬だ。それも直ぐに打ち破られる。

「いや、だって心底どうでも良いもの。正直、桜って言われても 誰よそれ?」 って感じだし」

今まで発狂していた筈のソラウが真顔で答えた。

「そういうことだ。お前にとつて大事な娘とやらも、私達にとつてはその、なんだ、何気ない日常の会話以下ということだ」

さもそれが当たり前であるかのようにケイネスはあつけらかなとして、言い放った。

その人非人の言い草に雁夜は激怒する。

歯を噛み締め、目の前の男の横面を思い切り殴ってやらなければという思いに燃えた。

併し――

「おっと、その拳は治めて貰おうか？」

その義憤のようなものは、ランサーに止められる。

骨が軋む程、手首を掴まれるという形で。

「ッ……いい加減にしろよ、魔術師の狗め！ 離せ！」

「ロード・エルメロイの狗というなら狗で結構。失恋をこじらせて人助けと復讐を履き違えてる負け犬よりは全然良いさ」

「貴様……ッ！」

雁夜の言葉はそれ以上続かなかった。

自分の暴かれてはならない本心を暴かれたから――。

「まあ、Young (ヤアグ) で Beautiful (ビューティフル) な外見で召喚されたこのボクだがね。それでも君よりは長く生きた人間の先輩だからはつきり言わせて貰うぜ。ケイネスが言ったのはね、人として当たり前のことだよ」

先程と変わらないふざけた調子でそんなことを語るランサーに、雁夜は背筋が凍るような感覚を覚える。

無論、智の英霊たる関公の瞳は雁夜の動揺を見逃さない。

その上で敢えて、長年連れ添った友人のような気安い態度で、雁夜の肩に手を回し、まるで笑い話であるかのように語る。

「千里離れた場所の顔も知らん人間の訃報よりも、手に触れられるとこにいる友垣のほんの小さな幸せを気に掛け心を動かす。道端で綺麗な花を見ただとか、気に入った娘と二つ三つ言葉を交わせただとか、それこそ君にしてみればどうでも良い、小さなことを、だ。それ

が大抵の人間ってヤツだよ」

ランサーは煙草を上着の内ポケットから煙草を取り出し、口に銜え、ライターに火を灯そうとし——途中で止めた。

ソラウが紫煙の匂いを嫌うために工房内は禁煙であることを思い出したから。

「まあ、Exception(ヤクスエプシオン)——例外ってのはいるけどサ。ボク等の王様みたいに、知らないヤツの笑顔と当たり前の幸福ってヤツが大好きで堪らないって人みたいな。そういうどうしようもない感じのお人よし。でも、君、そういう感じじゃないでしょ?」

吸えない煙草を手の中で遊ばせながら、ランサーは断じた。

「それは……」

雁夜は返す言葉を見つけられなかった。

それは自分がここまで必死になっているのは、桜のことだから——葵が大切にしているものだからという自覚があるから。

その自覚すら実際正しい認識ではないが、それでもランサーの言葉を否定する材料が自分の中にはないことを鑑みることには出来た。

「……ほら、このザマだ。そんなんでボクの主に拳を向けるんじゃないよ。君も、ケイネス・エルメロイとはさほど変わらないだよ。天才として、玉であること定められた生まれにあるか、生まれ落ちて与えられたものを捨て敢えて凡人として生きる道を選んだかの違いではない。人間らしい人間だ。ボクのような英雄が愛すべきものさ」

魔術を憎悪し、魔術師を人ならざる外道と認識する英雄の価値観に、雁夜は怒りを滲ませる。

それすらもそよ風のように感じているのか、ランサーは笑みを絶やさな

「ランサー、そのくらいにしろ。虐めが過ぎるぞ」

「Oh(ヲー), sorry(スオールイー)。なんというか、雁夜くん、無性に弄りたくなる感じだから」

「……改めて思うが、性格悪いな。オマエ」

ケイネスは頭痛に項垂れ乍ら、改めて認識する。

関羽雲長はまさしく「万人の敵」であると。

彼の中のランサー評はそこで揺るぎはない。加わるものはあるが――。
「間桐雁夜、君も隷属という立場を自覚したまえ。過ぎたことを口にするな。間桐桜の殺生与奪は私の手に委ねられていることを肝に銘じるように」

嫌味たらしい口調で、ケイネスは雁夜を窘める。

雁夜がその怒りの矛先を再びケイネスに向けようとした。
併し、

「尤も、君はまず安堵しても構わないのだがな」

それは、続けられた言葉に因って断絶された。

己の従者の性質を詳らかにしようとするケイネス・エルメロイの傲慢のような言葉の為に。

「――そのランサー、先程はああ言ったが実のところ間桐桜のことを助けたくて、助けてたくて仕方がないのだよ。義弟との約束の為に、己の情が為か、判然とせんが、な」

ケイネスが嘲弄するかのように自分に微笑したのを受けて、ランサーは気恥ずかしそうに、頬を掻いた。

「……そういうの言わないでくんないかなあ。人が折角キメたところにサ」

「おっとこれは失礼」

にたりとケイネスが笑ったのを見て、ランサーはぐしやぐしやと頭を掻き篦り、

「Mood (モウド)！ 煙草吸ってくる！」

逃げるように工房を出た。

第四十二話 結界宝具

一体自分は何をしているのだろうか？

雁夜は自分の前に供された耶悉茗茶（ジャスミンティー）を見つめながら自問する。

男にとって聖杯戦争とは破滅を向かい入れる為の責め苦である筈だった。

自分の選択が結果として幸せな筈だった親子を壊したから。だからこそ、自分が取り戻さなければならぬし、自らの罪を清算しなければならぬ。

そう思つて雁夜は自分の体に汚らわしい蟲を巢食わせ、己が身を食わせ、狂乱の檻をその手に収めた。

五体を疾駆する痛みの嵐こそ、自分に相応しい罰だと。それでも、愛する人が抱いた悲しみと等価になる筈はないと思ひながらも。

併し、今の状況はとも責め苦などと言えるようなものではない。そう思つて雁夜は改め自分の両隣を交互に見る。ダイニングテーブルに向かい合わせて座るケイネス・エルメロイとその伴侶の重篤な令嬢。

自分と同じ茶を飲みながら談笑する姿は上流階級の気品を感じさせ、まるで貴族社会を舞台にした歌劇のワンシーンを切り抜いたような風情であった。併し雁夜を辟易とさせたのは、二人の醸し出す上面の冷たささではない。寧ろ、そういったものは雁夜にとって最大の怨敵たる遠坂時臣を思い出させ、再び陰惨な償いと復讐へと舞い戻ることが出来る。

では、雁夜の憎悪に虫食いのような穴を開けているのは一体何のか。その答えは品位の高さにも見え隠れする確かな暖かさである。

実家にいるような安心感などという言葉があるが、そもそも実家が休まる場所ではなかった雁夜にとっては不適切であろう。

ふと雁夜が思いを馳せたのは自分が学生だった時分。彼にも友達が——非魔術師の、普通の人である友人がいた。そして、友の家に行かなくてもあったがその時、その母親は当たり前のように優しい微笑

みで雁夜を向かい入れ、菓子とジュースを出してくれたものであった。

今、雁夜が感じているその時と同種の暖かさであった。

そして、それは今の彼にとつては無用の長物であり、望まない心地良さが不快に感じられて仕方なかった。

「如何した、間桐雁夜。百面相などして。ひよつとして猫舌かね？」

「フーフーしてあげようか？」

沈痛な面持ちの裏にあるものがそんな呑気なものでないことを察しながら、ケイネスは厭らしく口角を吊り上げて雁夜を揶揄った。

「ご心配賜りどうもありがとう魔術師殿。だが、いらん」

まさに売り言葉に買い言葉といった次第で雁夜は言い返し、一気に茶を飲み干す。

今まで飲んだどんな耶悉茗茶よりも美味しく、雁夜は少しだけ腹立たしさを覚える。

茶を淹れた人間が正に雁夜にとって腹立たしい人物であったから。「はい。P a p a (プアプア)特性の肉まんが出来上がりましたよー！」

無論その人物とは、キツチンから五段重ねの蒸籠を両手に、頓狂な登場したランサーのことである。

「おうおうおう！ ボクの淹れた茶が気に入ったかい？ ソイツァ、嬉しいねエイ」

テーブルに蒸籠を置くと、ランサーは雁夜の頭を鷲掴むような勢いで撫でた。

余りにも鬱陶しいランサーの行動に、雁夜は自分の額に青筋が浮かぶのを感じ、

「そんなわけあるか！」

と苛立ちを露わにし手を振り払う。

「第一何なんだ!? この肉まんは!?」

「ボクの手作り料理だが？」

「そういうことを聞いてるんじゃないんだよー！」

狂人を見るような憐みの目を向けるランサーに、雁夜は向きになつ

て返す。

「分からののか間桐雁夜」

「何が!？」

蒸籠の蓋を開け、肉まんを一つ取り頬張りつつ、何故か自信に溢れた表情を見せるケイネスに雁夜は言わんとしていることを質す。

「腹が減っては頭が回らなくなる。これから間桐邸襲撃に関する作戦を立てようというのだ。ならば、腹を満たすのは当然であろう」

「理屈は分かるけど、お前という人間が分からない」

ケイネスという男に生真面目という印象を抱いていた雁夜は率直に感想を漏らした。

「第一、そういう理由で何か食うっていうならせめて甘いものにしたらどうなんだ?」

「そう言うと思ひまして、Pudding(ピュディング) a(ヤ) la(ルア) mode(ムオド)をご用意させていただきましたも!」

「チヨイスおかしいだろ!」

雁夜の前に差し出されたのは色とりどりの果物で豪華に飾られた、視覚にも味も美しいプリン・アラモードであった。

併し脳を起動させる為の葡萄糖(グルコース)の供給には聊か度が過ぎた、本格的なスイーツである。

雁夜の指摘は尤もであったが、ランサーはチツチツと舌を打ち鳴らし人差し指を左右に振り、暗にそれは違うと示してみせる。

「何が言いたい?」

「そこは「あらどーも」と言うべきだろ。アラモードだけに」

「お前の頭の中にはプリンが詰まってるのか?」

下らないと言っただけ然るべき親父ギャグに、雁夜の心は冷えた。

所在なくなってしまう雁夜はふとソラウの方を見た。

「うまうまー」

そこには蕩けた表情で一心不乱に肉まんを食す女があった。

雁夜は旋律した。此処には自分を覗いて常識人がいないと。心の奥で叫んだ。

「助けて下さい！ 葵さああん！」と――。

誰もこの胡乱な状況打破出来る者がいないのである。

「あ、てかMaster(ムアスター)。なんか君、作戦会議しますよー
的move(ミューヴ)醸し出して感じだけどしないから」

だが、意外にもその空気を破壊したのはこの場で一番胡乱な男であつた。

「……しないのか？」

意外そうに、また落胆したようにケイネスは目を見開く。

「うん、しないんだ。でも、すると思つていた時の君はそこはかかない
”ときめき”というものを抱いていたことだろう。というわけで、作
戦会議以外の注文を聞こうか」

「何故、作戦会議をしないのかその理由を訊ねても良いか？」

「君ならそう言うと思つていたぜ」

クツクツ深淵から湧き上がるような笑い声を上げながら、ランサー
は真実を話し始める。

「実を言うと、だ。作戦は発表するつもりだった。でも、それがあまり
にも策というにはあまりにも大味だったんでそう評する気にはとて
もじゃあないがならなかつたってだけの話さね」

「一体どんな内容だ？」

「真正面から赴く。この工房ごと」

「よし分かつた。お前はやっぱり馬鹿だ」

ケイネスは満面の笑みでランサーを誇る。

当たり前であつた。そも冬木に於けるケイネス工房はデコレー
ショントラックの荷台なのだ。この工房ごと真正面から間桐邸赴く
ということはそれ即ち、トラックで屋敷に乗り入れることに他ならな
い。

こんなことをするのはケイネスが言う通りの馬鹿か、さもなければ
かなりの酔狂である。

「……基本的に魔術師の工房に入るとするのは危険だとは言つたが
な。其処から如何して工房には工房をぶつけるなどという発想に至
る？ そもそもこのトラックで屋敷まで出向いたら隠密も何もあつ

たものではないだろうが」

「勿論、霧に紛れていくさ。抑止力とやらに呑まれないように気を遣ったとしても、この街全体を包めるだろうさ」

「屋敷に侵入してからはどうする？ 衰退しているとはいえ、相手は五百年の老獪（ロートル）だぞ？ 幾ら工房が付いているとはいえ、一筋縄ではいかないだろう」

その答えにランサーはにこやかに笑う。

「何がおかしい？」

「いや、心配する主が面白いんでつい」

「貴様、おちよくっているのか!？」

「冗談、冗談。いや、ホントは安しろという笑みさね、これは」

訝し気な表情を浮かべるケイネスであったが、その根拠は台所の下にあつた。

「じゃじゃーん！ ブローニングM2！」

「何処から取り出した!？ 何処で拾った!？ いつ拾った!？」

ケイネスは思わず立ち上がった。

唐突にキッチンに戻ったランサーの手に在るそれはケイネスにとって突つ込み所満載の代物であったからだ。

それは重機関銃と呼ばれる武器であった。調達するには日本円にして凡そ五百万は掛る代物である。しかもランサーはあろうことかそれを二つも頭上に掲げ、子供のようにはしゃいでいる始末である。

ケイネスはこの工房を構えてから一度たりともキッチンの足元の収納を覗くことはなかったがまさかこんなものが眠つていようとは夢にも思わない。

「取り出した場所は見えての通りさ。そんで拾った場所は倭国の部隊の屯所からだ。正々堂々と盗んだ。ボクが一人冬木で遊び歩いている合間に」

「……辞書を引け。そして正々堂々の意味を今一度紐解いてみるが良い。どうしてこんなものを盗んできた？」

「いや、いざとなったらケイネスにぶっ放して貰おうかと。Cross（クロス） fire（ファイヤ）って感じで！」

「死んでも近代兵器などには頼らんからな！」

ケイネスは胃痛と頭痛に目が眩む思いであった。

関羽雲長について馬鹿だ馬鹿だと思っていたがまさか此処までだとは想定していなかったのだ。

「まあでも、ケイネスが使う必要はもうないんだが」

「どういうことだ？」

「そら雁夜クンのバーサーカー先生にぶっ放して貰う腹積もりに決まってるだろう」

そこで雁夜は意外そうに目を見開いた。

「おいおい、まさか君、自分のサーヴァントの性能を把握してないんじゃないだろう？」

「それはその……」

「はあ……。復讐なんてするなって野暮なことは言わんさ。ボクの仲間には復讐鬼と言っても良いようなヤツもいたことだしね。でも、いくらなんでも行き当たりばったり過ぎんかね？」

嘆息と共に詰られた雁夜は赤面して押し黙る。

たかが化け物に凶星を付かれてしまったことが恥ずかしかったからだ。

「まあ、良い。兎も角君のバーサーカーは持ったものを何でも宝具にしちまえる。それこそ、剣から竹輪まで手に持てるもんならなんだって宝具に出来るんじゃないかな？ それを生かす為に、ここでこの Machine (ムアスイン) gun (グアン) を此処で使っちゃおうってわけさ。Do you understand (アダースタン)？」

確かに兵力としては申し分ないものであった。

併し、それだけで間桐邸を、当主のマキリ・ゾオルケンを簡単に落とせる理由には不足である。

では一体何がここまでランサーを強気にさせるのか、ケイネスは考えた。

「……ケイネス、察しの良い君のことだ。本当は気が付いているんだろう？」

「気が付いている？ それは君が私にウソを吐いているということか？」

「その通り。ボクは君に一つウソを吐いている」

ケイネスはぴくりと眉を動かした。

「……宝具を申告した時か？」

「ご名答。そして申し訳ない。主を騙すこの不敬者を許してくれ」

「フン、何を今更。貴様のそれは病気のようなものだろうに。それにこれはアレだろう。君の国でいう所の、彼を知り己を知れば百戦殆（あや）うからず」というヤツの一環なのだろう？」

「そうそうそれ。……ボクにとっちゃ忌々しき男の御先祖様の言葉なんで肖（あやか）るのも厭なんだが」

畢竟するに、戦に勝つには敵の資質を知ることと、味方の資質を見抜くこと両方が不可欠となるという意味である。

関羽雲長はこの聖杯戦争に於いて敵の情報をつぶさに調べていたが、それと並行して自身の主であるケイネスをも図っていたのだ。

ケイネスの魔術師としての能力は、本来聖杯戦争に召喚されな^{関羽}い筈の自分を召喚したことからも高い能力を持っていることは明らか。

では人格はどうか？ 人の上に立つ者としての美点と欠陥は？

魔術師としての能力、例えば胆力、物事の真実を見抜く叡智はどうか？

関羽はずっとそれを見ていた。

そしてケイネスのことを抱えている秘密の一つを明かしても良い存在だと認めたのだ。

「使い魔風情がと言いたいが……その傲慢、私の役に立つならば許してやろう。それで、君が抱えていた秘密の全貌とはどのようなものか？」

「……ヒントにとどめさせてくれないか？ いや、君をまだ信用していないとかじゃなく」

「私ならばそのヒントを頼りに真実に辿り着くから言いたいのか？

フン、まどろっこしいが戯れに付き合ってやろう」

「うん、じゃあ言うね」

関羽が持つ四番目の——否本来の第一宝具。

冷氣と風を媒介に氣象を操る青龍チンロン・グアンダオ艶月。

一対一の戦いで無類の強さを発揮する絶技、血の氷華を咲かせる美塵葬チンロン・ユーメイレン・大紅蓮。

そして、その絶技の本来の形である対城規模の広域破壊宝具。

それすらも超える関羽雲長、真の奥の手。

曰く、そのランクはEXである。曰く、種別は結界宝具である。曰く、冷艶鋸以上に関羽雲長を象徴し、また関羽雲長らしい宝具である。明かされた情報はそれだけであった。だが、それでもケイネス・エルメロイにとつては十分に過ぎた。

「大体分かった。成程、そんなものを隠していたなら自信満々にもなるろう」

「……たかが五百年ほち生きた若造なんて、” You are not (ナアト) my (ムアイ) match (ムアチ) って感じだろう? 」

「おいおい、慢心はするなよ。そういう人間から最初に死んでいくのが常だ」

クツクツと笑う二人には、余裕はあっても慢心はなかった。勝てる戦いを確実に、危なげなく勝つ。

二人の間にある意思はそれだった。

雁夜はそれを傍目で見ていて、悪魔と悪魔が和気藹々と話し合っているような薄気味悪さを覚えた。

「——と、雁夜くん。君に大事なことを聞くのを忘れてたぜ」

突然、いつもの躁病患者のような振る舞いに戻るとランサーは懐から一枚の大きな紙を取り出し雁夜の前に広げた。

それは雁夜がよく知っている場所の見取り図であった。間桐邸である。

「こんなもの一体どうやって……」

「企業秘密さ。そんなことよりだ。この中で桜とかいうお嬢ちゃんが絶対に立ち寄らないと思われる場所とか知ってたら教えて欲しいんだよ。ほら、ど派手に侵入するからサ」

「成程……」

桜の安全もしっかりと考えているランサーに雁夜は感心し、記憶の中の桜の日常生活を再生しようとする。
が、

「おいどうしたんだよ、急に固まって」

その思考は中断させられた。

「……なあ、ランサー。お前が作った肉まん、何か赤いものとか練りこんだか？」

「何を言ってるんだ？ 肉まんはPure（ピヤア） white（ウアイトウ）。Pride（プルアイ）分かるだろ？」

「赤いぞ、令嬢さんの食ってる肉まん」

恐る恐る、ランサーはソラウが座っている席に視線を向けた。

ケイネスはランサーよりも先にそれを目に収め、頭を抱えた。

「ソラウさあぁあん!!」

ランサーの絶叫が工房の中を反響する。

——確かに、肉まんは赤かったのだ。ソラウの鼻腔からの流血の為に。

第四十三話 黒黒黒黒

その日の冬木市は朝を迎えた筈なのに、星のない夜のような闇に包まれていた。

天と地を、手に触れられるような距離まで近づけている厚い灰色の雲が、曙光を隠しているのだ。

——嫌な空だ。

ウェイバー・ベルベットは死に身の思いで街路を歩みながら、目に映った空から逃げるように項垂れた。

霞掛った視界に在ってすら、暗いことが分かる。以前よりもはつきりと感ぜられる頬が空気を舐める感覚はやけに湿っている。

雨が降るかもしれないと、ウェイバーは考えた。併し、それでも歩みを止めなかった。

杖代わりに持ってきてしまったマッケンジー氏の傘を使うかもしれないとぼんやりと思いつながら、何処にあるかも分からない目的を指す。

「何処に行っちゃったんだよ……」

その目的とは、キャスターのことであった。

昨晚の山の翁との戦いの後、気を絶したキャスターを連れ一同がマッケンジー氏の家まで戻るとウェイバーはそのまま泥のように眠りに堕ちた。

髑髏の騎士が放つ絶大な殺意と一人の少女を失うかもしれないという緊張感、そしてキャスターの霊薬が持つ毒素はウェイバーが考える以上に彼を疲弊させていたのだ。

故にその後のことは覚えていない。起きたらライダーもミナも眠り、キャスターと薫がいなくなっていた。

ウェイバーは慌てて飛び起き、既に起きて朝食を摂ろうとしていたマッケンジー夫妻に二人が何処に行ったか訊ねてみたが知らないという。

——何処に行ったのか、ではない。そんな人達は知らないというのだ。

マツケンジー夫妻の記憶をキャスターが消したのだ。何故消したのか、ウェイバーには分からなかった。それを考える余裕すらなかった。

兎に角探さなくてはという焦燥に駆られ、ウェイバーは自分の五体が不満足なものになっていくことすら置き去りにして、今この瞬間にも聖杯戦争という殺し合いの只中であるこすら忘れ家を飛び出し、元々薫が住んでいたアパートに向かった。ウェイバーにはここしか宛てがなかったのだ。

併し、二人はそこにいなかった。

早速手詰まりとなり、ウェイバーは宛てもなく街を彷徨い歩く他なかったのだ。

だが、その歩みすらも、止まることとなった。障害を抱えた足で歩き続け、ウェイバーの体力は早くも限界を迎えたのだ。況して、ウェイバーは危険を脱したというだけで、その体に悪竜の毒を抱えた儘だ。歩き続けるのは無理があった。

ウェイバーはその場に崩れ落ち、

「畜生」

と一言呟いた。

自分から好き好んでこの体になった癖に、この時ばかりは忌々しかった。

抱えるならばせめてもう少し軽い荷にならなかつたのかと、運命を呪いさえた。

「なんで勝手にいなくなるんだよ……」

そして次に恨み言を吐いた相手はキャスターであった。

「まだ有難うしか言っていないだろ……」

自分にとつて、本来ここに在る筈がなかった一人の少女にとつて在り得なかつた未来の道を作ってくれたキャスター。

ウェイバーは彼に、まだ何も返しておらず、そして出来ることならこの恩に対して何か返すものがあれば良いと思っていたのだ。

併し、キャスターはウェイバーに何か与えるものを作る時間さえ与えず彼の前から勝手にいなくなった。

キャスターにとっては理不尽で身勝手な怒りであろう。彼にも何か事情があるのかもしれないのだから。けれど、それを承知の上でウェイバーは怒らずにはいられなかったのだ。

「ハハハ……ライダーに、何も言わずに出て来なかったのは失敗だったな」

一人で立ち上がれない自分の無力さに、ウェイバーは乾いた笑い声を上げる。

「小僧オー！」

「おにいちゃんー！」

ウェイバーは渡りに船を得た。

よく知った二つの声が耳に届いた。ウェイバーは辺りを見渡し、ぼやけた世界であつても見間違える筈のない大きなシルエットを確かに捉える。その横には小さく可愛らしい人影も見える。

「探したぞ、小僧。勝手にいなくなりおつて」

ライダーの声色はウェイバーに安堵を伝えていた。

それがウェイバーには意外であつた。この男はこんなことでは慌てたりはしないと思つていたから。

「嗚呼、ライダー。丁度良かった。肩を貸してくれ。一人じゃ立てなくて。あと、戦車も出して欲しいんだ」

「……如何して？」

「決まつてるだろ？ キャスターを探しに行くんだよ」

ライダーからの返答はなかった。

ウェイバーは訝し気にライダーを見つめる。一体彼がどんな表情をしているかウェイバーには分からない。

屹度、ライダーが悲し気な顔をしていたとしても、今のウェイバーにそれを理解する術などなかった。

「おにいちゃん、あのね……」

「探しても無駄だ」

ミナが話し始めようとして、漸くライダーは真実を告げる。

「奴は……キャスターはもう我等の元には戻つて来ない」

ウェイバーにとっては残酷かもしれない真実を。

——昨晚、ウェイバーが眠った後のことだ。

彼に続く様にミナも眠りに落ちた後、ライダーと薫の二人で気を絶したキャスターを見守っていた。一体どれほど時間が経った後であったか、ライダーは覚えていないが、突然キャスターは目を覚ました。

そして、不意にこのようなことをライダーに語り始めた。

『やらなければならないことが出来た。君たちとの同盟は解消する。此処にはもう戻って来ない』

と。

そして、次に薫に訊ねた。

『君はどうしたい？ 僕と一緒に来るか、それとも彼等と共にあるか』それを聞かれ、薫はキャスターと行くこと返事をする。

一体何を言っているのか、ライダーには分からず詳しい訳を聞こうとしたその時——。

「——キャスターの手に琴が現れての。その音色を聞いた瞬間、意識が飛んでおったわ」

恐らく、『オルフェウスの琴』だろうとウェイバーは考えた。

アルゴノーツの一員であり、音楽魔術の祖として知られるギリシヤの英雄オルフェウスは琴の名手として知られ、その奏でる音で三頭犬(ケルベロス)を眠らせたという逸話がある。

キャスターには様々な時代の英雄の宝具がある為、恐らくオルフェウスの琴を扱うことも出来たのだろうとウェイバーは思った。

「でも、アイツがやらなきゃいけないことってなんだよ？」

「知らん。だが、聖杯を手に行きたくないのは確かだ」

若しそうだったのであれば、ライダーが意識を失った後に彼を殺めていた筈だ。にも関わらずこうしてライダーが現界し続けているということは詰り、聖杯とは別の目的があると考えるのが妥当だろう。「……そういえばあの髑髏、キャスターに成すべきことをやれとか言ってたよな？」

「恐らく、それを思い出したんだろうなあ」

今までキャスターは記憶を失っていた。

その中には彼の本来の目的もあつたのだろうと二人は推測する。

「これだけじゃ何にも分からない……そうだ！ アイツ、髑髏になんか変な名前と呼ばれてたよな？ えっと、確か……」

「『カルタファイルス』」

「そうそれ！」

真名が分かっているなら或いはキャスターの目的も分かるかもしれないと思つたウェイバーであつたが、ライダーは重いため息を漏らすばかりであつた。

「その名前だけ分かつていてもどうしようもない。第一、その真名で余の中にある知識通りの道筋を辿つた奴だというならば……」

「いふならば？」

「尚のこと奴の目的など見えて来なくなる」

ライダーの細められた瞳は分厚い雲の向こう側を見ていた。

†

闇の中と言えば良いのか。それとも一面黒塗りの部屋と言つた方が正しいのか。

否、『黒』という色そのものの中と表現すべきなのかもしれない。少女が見ていたのはそんな光景だつた。その中にパイプ椅子が一つ逆さまに浮いていて、そこに腰を着いた人物が一人。

極彩色の道化師を思わせるような目に悪い意匠の貴族服を纏い、ゴーグルが一体化した奇妙なシルクハットを被つた服装からして胡乱な人物がパイプ椅子に足を組んで座つていた。

……当然、パイプ椅子は逆さまに浮いているのだからこの奇妙な人物も逆さまに座つていゝことなのだが、奇妙なことに被つていゝ帽子やスカーフが落下してくることはなかつた。

だとすると逆さまなのは、自分なのか？

少女がそう疑問を抱いた瞬間――

「安心したまえ。ハングドマンは私の方き。君はちゃんと二本の足で立っている」

男が少女の疑問に答えた。

「ようこそ、私のブラックルームへ。我が名はサン・ジェルマン。本物

のサン・ジェルマンだ。サンで区切ってからジェルマンと続けてくれないが此処は気安くサンジェルマンと読んでくれたまえ。偽物クンの友人よ」

——パチモンくさい。

突然現れた本物のサン・ジェルマンに対する少女の率直な感想であつた。

「世の中なんてそんなものさ。偽物の方がよっぽど本物らしく、本物なんて拍子抜けするようなものばかりというパターンが多い。例えば、アレキサンダー三世だ。かの偉大な王なんて影武者——君の言葉で言えば『パチモン』の方がアレキサンダー三世らしくったという始末だった」

——確かに私のイメージしていたアレクサンドロス大王は、あんな筋肉達磨じゃなかった。

不本意ながらも、少女は本物のサン・ジェルマンに同意する。

「ところでこれは一体何なの？ 私の夢に勝手に現れたみたいない感じ？ 魔術か何かで？」

「それは違う。残念ながら私は魔術師ではない。況して、夢魔や魔法使いだったりもしない。ただの貴族でたかが詐欺師だ。強いて言うならこれは『最終回までセンパイに独占放送』というヤツさ。これが最終回だがね。ウツハハハハハ！」

「意味が分からないし、貴方みたいなただの貴族がいるものか。それに後輩だったらもつと奉仕精神旺盛な美少年が良いです」

「ということは、だ。君は偽物クンが好みのタイプということか！」

「……見た目だけならね。内面は正直分らないけれども。というか、あのキャスターが実は奉仕精神旺盛とか脳が蕩けるのでやめて下さい」

少女の訴えにサン・ジェルマンは愉快そうな大笑いを上げた。

「というか、私を揶揄いに来ただけというなら帰ってくれないかな？」
「おいおい、そんなに邪険に扱わないでくれたまえよ。何も私はただ遊びに来た訳じゃないぞ？ おっと、遊びに来ていたということをお白状してしまった。いけないいけない」

「熱々のシヨコラを顔にかけるよ？」

「止してくれ。君には平和主義という言葉はないのかね？」

ワザとらしく困った顔をしながらサン・ジェルマンは両手を上げた。

「一応平和主義者だよ。でも回りくどい男の人は嫌い。モテないと思う」

はつきりと切り捨てられたサン・ジェルマンは涙も出ていないのに、まるで泣いているかのように目をこすった。

「酷いなあ、君は。そうだな、仕方ない。回りくどいのは無しだ。率直に聞こう。偽物クンに——いや、キャスターに——いやいや、カルタフィルス」の内面に興味はないかね？」

「……最初からそう言ってくれないかな？ 興味ありまくり」

「欲望に忠実だな、君は。良いことだと思っぞ？」

そう言うとは彼はパチンと指を鳴らした。

すると、彼の隣に突然四角い光が現れた。まるでプロジェクターの映像を暗い部屋の壁に映したような光であった。ただ、映写機の類はどこにも無かった。

「『カルタフィルス劇場』、始まり始まりい。今まで偽物クンが歩いた軌跡のダイジェスト版だ。どうか最後まで楽しんでくれたまえ！」

少女はポカンと口を半開いた。・

「……貴方にプライバシーという言葉はないの？ 最近そういうの五月蠅いから。下手したら捕まるかも」

「私にとってのプライバシーは、ボナパルトの辞書に於ける不可能と同義だと考えてくれ！ 否、そんなことボナパルトは言っていないかっただか？ どうでも良いな。それより重要なのは捕まる云々の話を君が語る資格はないという点だ。だって私の知識が間違っていないければこの時代のジャポンでは未成年者の喫煙も援助交際も違法行為だからね」

「私のプライバシーも筒抜けかあ……一人エッチとか見てないよね？」

「心配するな、興味はない」

「それは心外だね。私がオナつてるところ見ながら、おちん○んゴシゴシしてくれてたら嬉しかったのに」

心底残念だという顔をする少女を見て、サン・ジェルマンは満足気な表情をする。

「さて、ではそろそろ開演といこうじゃないか！ 準備は良いかい？」
「待って。ポップコーンは何処で売ってるの？ あと劇場内での喫煙はOK？」

「残念、ポップコーンもホットドッグも売り切れだ！ それと煙草はご自由に！ いざ開演！ 3、2、1キュー！」

自分で逸る気持ちを抑えられないのかサンジェルマンは映像をスタートさせた。

はあとため息を吐きながら、少女は煙草に火を点け、まず一息。

——さて、一体どんな話なんだろう？